
IS ~ インフィニット・ストラトス ~ -くらげんdays-

貴仁辺人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（インフィニット・ストラトス） - くらげndays -

【Nコード】

N3683V

【作者名】

貴仁辺人

【あらすじ】

「町内会で有名な操縦みっちゃんとは、何を隠そうこの俺のことである！」

世界で2人目の男性IS操縦者《戸鉄 海月》。何故かは知らぬが一夏の後にISを起動できてしまった彼は、やはりIS学園へ無理矢理入学させられることとなった。一夏と何も接点を持たないように見えた彼だが、実は……。週2更新、更新されていないように見えて実際は更新されています。

1 動いちゃったのである(前書き)

初投稿です。

ある程度文章の容量とページの長さを比較したい意図もあり、かなり短く作っております。

1 動いちゃったのである

周りを見渡せば女子、女子、女子。この位置から見える限り、男子は俺こと戸鉄海月とてつみつきただ1人である。

精神的にかなりきつい。眠いことも一因に合わせて、感情のコントロールができない。体が力チコチで、今なら体でクギが打てるかもしれないだなんて妄想までしてしまう。

何か、現実逃避はできないだろうか？ 例えば……そう。

これは夢かもしれない。

密かに頬を抓ると、明確な刺激が伝わってきた。痛いぞ畜生。

……自分が此処にいるのは何かの手違いかもしれない、この考え方は名案かもしれないぞ！ 少し頭を整理して思い出してみよう。手違いであってくれば、今すぐにでも逃げ出す所存だ。

事の発端は、織斑一夏という一人の少年だった。彼が『あの意味で特別な人間だった』という事象が、現状へと連なる。

特別とは言ったが、彼がドライ・ラマの転生した姿とか、オルゴデミーラの第何形態とか、決してそういった意味での『特別』ではない。

本性を隠しているだけで実際はそうなのかもしれないけど、少なくとも見た目では普通の人間である。

では、多分本性は普通の人間である彼の何が特別だったか？

それは彼が女性にしか扱えない筈のワードスーツ、通称『IS』を動かしてしまった、という一点に尽きる。

高校受験の受験会場に置いてあったISを何故か動かせたらしいのだが、その話は一気に広まり彼は名前と共に世界的に有名になった。

困ったことに、動かせた理由は未だに不明らしい。

そもそも男ならISに触る機会すらなかっただろうと思うのだが、何故彼こと織斑一夏にはIS学園の試験会場にあったISに接触する機会が生まれたのだろうか？

そんな事も考えたが、勿論分かるわけがないので「健全な男子中学生のことだ、女の着替えでも見たかったに違いない」と無理矢理結論づけた。

まったくもってスケベな奴め、俺だって見れるもんなら見たいぞ。
閑話休題。

さて、ここで1つ問題がある。それまで女性にしか扱えないというのが一般論だったISを男性が動かしたとなったら、その次に社会ではどういふ現象が起こるだろう？

60秒待つから考えて欲しい。某クイズ番組と違って1問正解すれば終わりだし、ハズレでも罰ゲームがないから随分良心的だろう。

簡単だ。「もしかしたら、他の男にも扱えるかもしれない」と大抵の人は考える。

勿論、我が日本もそれを考えた国のひとつだった。

以上の経緯から彼と似た条件に当てはまる男性　簡単に言えば
中学から高校ぐらいの年齢の男性　が、一斉にテストを受ける事になった。

それはテストと言っても「とりあえずISに触って起動するかどうかを調べるだけ」という、1人につき1分と待たずに終わるテストだった。

……失礼、語弊があったので訂正させてもらおう。『一般的な男性であれば1人1分で終わるテスト』である。

何が語弊だったか？　男なら動かないんだから一緒に意味だろうか？　ああ、そうだよ普通はな。

動いちゃったのである。俺が触った時にだけ動いちゃったのであ

る。俺が興奮して動いたとかじゃなく、ISがである。確かその時も頬を抓った気がするが、痛かったのである。仰天である。である固めである。

それからは大変だった。2ヶタを越す何箇所もの研究所に移動させられて、何度も体を調べられる物質問攻めに会うわの数日間となった。研究所は昔からお世話になってたけど、その比じゃない。もうお婿に行けないと本気で覚悟した。くすん。

俺という第2の異端が発生したことから、世間では「やはり男でも扱えるのでは!？」と考えられるようになり更に試験は拡大化された。3月の間で、小学生から30歳までの男性は全世界的に調べられたらしい。

その結果、残念なことに俺以降には1人も出なかったそうだけど。

さて、つまり世界でISを動かせる男子はたった2人ということになる。そんな重要な2人を国が放っておくだろうか? ……ありえない。俺ですらありえないと確信できる。

以上の理由を以って、俺は国の管轄下にある国立女子高校、『IS学園』に編入することになったわけだ。

……綺麗に整理することに現実に直面させられた。要するに、手違いじゃなかったという残念な事実を突きつけられた結果となるだけ。畜生。

そうだよ、ISは普通は女にしか扱えないんだから、周りは全員女に決まってるさ。

さて。少し話は変わるが、諸事情あり俺は今途轍もなく眠い、先程も考えた。諸事情に関して後は後で説明するとして、流石にこれ以上女子に見続けられると機嫌だつて悪くなってくるのだ。

さっさと入学式が終われば教室に行けるんだ。きつと、もう1人

の男子も同じような境遇で胃に穴が開きそうなストレスを煩っていることだろう。

いつもは横に流すだけだった新入生の言葉が、非常にじれったく感じられた。

5秒で終わらせる。3秒でもいいぞ。『分』じゃなくて『秒』だ、早く俺を教室に行かせてくれ。

だがしかし、そんなことを考えていた俺をあざ笑うかのように、新入生の言葉はそれから2分は続いた。

こういつのをイジメって言うんだと思う。

1 動いちゃったのである(後書き)

まだ機能全てを把握しきれれてません(と言うより初投稿以降の操作はまだ一度も練習できてないので把握のしようが無いのですが)ので、様々な対応が遅くなってしまうかもしれませんが、今後ともよろしく願います。

2 御御御織斑様様様様

「げえっ、関羽!？」

その声と、まるで巨大なハリセンで石を叩いたかのような大きな音で目を覚ました。

ちなみに今は教室である。入学式後教室に直行した俺は、すぐに指定された席に着いて寝てしまったのだ。

視線を無視したいなら寝るに限る。あと単純に眠い。平時であれば学校に行く前には生活サイクルをきちんとするのだが、今日だけは特別だった。

さて、状況を確認してみるに今は自己紹介の時間だったらしい。

……んだけどそれより関羽はどこだろうか? もしかしてもう赤兎馬に跨って去って いや、これ以上は言つまい。誰かと同じ事を考えている気がする。

どっちにせよまだ俺の番じゃないから寝ることにしよう。担任が自己紹介しているらしいが、残念ながら知らなかったことではなかった。

俺の眠りを邪魔する奴は万死に値するとは、中国史に出てきたかもしれない(出てくるわけがない)ミツキト・テツの台詞。

「それと ……」

パァンッ!

頭を机に押しつけたところで、いきなり硬いものに頭を叩かれた。十秒後にはタンコブができていそうな素晴らしいクリーンヒットである。

どうということかと言うと、単純に凄く痛い。

「教師の話は無視して眠るとは良い度胸だ。そんな度胸のあるお前に、プレゼントをしてやろう。校庭10周だ、どうだ嬉しいか?」

何やら怒られた気がするが、その時には既に意識が数割寝ていたのでいまいち聞きとれなかった。

ハッキリしない脳内でプレゼントがどうこうという単語を拾った

が、今のところプレゼントよりは安眠のほうが重要度が高かった。枕だったら貰いますよ、程度である。

また寝始めた所で再びパンツ！ という音と、それに伴う強烈な痛みが襲ってきた。しかし流石に無反応が続くと担任も諦めたらしく、それ以上パンツ！ の音は続かなかった。

そして、多分それから数分後に、SHRが終わるチャイムらしきものが聞こえた……気がする。眠っていたのでいまいちよく判断はできないが、チャイムということは何かと何かの時間の区切りだったということだろう。

「あー……」

参った。これはマズイ。ダメだ。死亡フラグが成立している。

何がマズいって、この雰囲気だよ。

今は1時間目のIS基礎理論が終わった直後。流石に授業中に寝るわけにはいかないし、休憩時間はもう一人の男子である織斑一夏に話しかける予定だったので起きていたんだが、

その織斑さんは、ポニーテールのかわゆい女の子に連れられて教室から出て行っちゃいました。

そうしてその織斑様が歩いて行かれた廊下の方を見てみると、そこにはこちらに視線を向ける女子、女子、女子。入学式と違ってチラッと見るでもなくガン見だから、威力は先程の数倍である。

色違いのリボンも見えるから、2年3年もいるらしい。俺は客寄せパンダか？ 一応言っておくが模様は白黒じゃなく肌色だぞ。纏った新品の制服も合わせたら凄く色鮮やか。この学校の制服、かなり白っぽいけどさ。

何で今まで気付かなかったのか。……織斑様様に話しかける予定で、廊下側を見ていなかったからだ。後、窓側最後列の俺と違って御織斑様様の方への視線の方が大きかったのだろう。

始業式と同じ緊張感が場を包む。母さん、俺は視線で人が殺せるかの実験台になれそうだよ。

寝ていてもいいのだが、御御織斑様様様が帰ってきたら出来るだけ早く話しかけたいから寝れない。

人付き合いつてのは最初の印象が良い方がいいんだ。挨拶は早い程良いはずである。

それに 「ちょっと、よろしくて？」 考え事している最中にいきなり声を掛けられた。

人が何か考えてそうな雰囲気醸し出している時に急に話しかけてくるのは、できる限り止めて欲しいものだ。

というわけで、相手の顔も見ず、つい反射的に「よろしくない」と答えてしまった。

ここで相手も引いてくれれば嬉しかったのだが、よくよく考えてみれば初対面の相手に真っ向から拒絶する発言だなんて、無礼千万である。失礼極まりない。

それがスイッチになっただらしく、目の前に立っているその女子は声を荒げて罵声を浴びせてきた。

「まあっ！ 何ですの、その態度！ 折角イギリス代表候補生にして入試主席のこのわたくしが声を掛けているというのに！」

ところが罵声の内容を聞いてみれば、何とまあ高飛車な態度である。

こういう高慢ちきな態度の奴は、不細工と相場が決まってる。声がした方を振り向いて……

そこには、どこか上品な雰囲気纏った、金髪の女子生徒がいた。残念なことに、予想は外れて結構可愛かった。金髪ロールはお嬢様と相場が決まっている。誰が決めたか、など知らないが、ので、きつと彼女はどこそのお嬢様なのだろう。

だが。

「うるせえな……」

やはりプレッシャーと眠気で随分参っていた俺はその時、既に十分油が注がれている火に更に酸素を吹き込んでしまった。

口は禍の元って言うけど、俺は口自体が禍みだ。

今日のことを、後日の俺はそう伝えるだろう。

途端に彼女は顔を、というか全身の白い肌を真っ赤に染めあげた。見れば、目をヒクヒクさせている。……追記すると、体がプルプル震えている。

次に来る言葉を待つも、どうやら彼女は怒りが先行し過ぎて二の句が出てこないらしい。

流石に失言だった気もするが、売り言葉に買い言葉のうち買い言葉が相容れなさすぎる。

単純に関わりたくない相手と感じたので、二度と話しかけんなど俺が続けると、ちようどそこでチャイムが鳴った。

「お、覚えてらっしゃい……」

彼女は言葉を（捨て台詞を、とも取れる）吐きながら、どすどすと聞こえそうな足取りで自身の席へと戻っていく。

「覚えてらっしゃい」っていう発言は、忘れていいよというフラグと受け取っていいのだろうか？

御御織斑様様様とは結局、その休憩時間中に話すことはできなかつた。

その次の授業中もう一人の男子、織斑一夏がとんだへマを自白した事は割愛しよう。

唯一言えるのは、織斑一夏への評価が阿呆に変わった、ということのみである。

……流石に教本を電話帳と間違えて捨てるのは、ないだろ。

「ちよつと、よろしくて？」

休み時間。さつき「覚えていろ」なんて言われたもんだから、つきりあの金髪ロールは俺の方に文句を言いに来るものだと思っていたが、金髪ロールは織斑の方へ話しかけていた。

折角セオリーを無視して忘れずに覚えていたと言うに、なんて忘れっぽい奴だ。別に面倒事が減るだけだし一向に構わんけど。

なんて思っていた俺が甘かつたんです。

全然面倒事が減るなんてもんじゃなかった。

結局、織斑はあの金髪ロールに独占されているわけだから、話しかけようという生徒からの視線は全て俺に集まる。

しかも、最初の1人が話しかけて来たせいで先程までの牽制の空気が薄れ、殆どの生徒はタイミングを窺うような状態だ。

ほら、もうこっちに歩いて来てる。しかも5人も6人も。……決めた。俺は今から石像だ。話は無視しよう、耳を傾けちゃダメだ。

「ねーねー戸鉄君、今大丈夫？」

……俺は石像ですよ？ だから何も答えませんよ。

「戸鉄君戸鉄君、どこ中だったの？」

……だから石像ですよ、俺は何も聞こえませんよ。

「あーもう、今私が話しかけてるんだから押さないでよ！」
……いらつ。

「戸鉄ミツキ君、だっけ？ どういう字を書くのか……」

リミット限界。RPGなら『うごく』せきぞうは うごくだした！
『なんていう表示がされるだろう。』

流石に、苛立つ内容が立て続けに起きすぎだった。

「うるせええええええええええ！ 俺に話しかけんな！」

その俺の声に、何やら先程からヒートアップしていたらしい織斑とセシリアまで口を止めてこちらを見ている。

が、頭に血が昇っていた為、俺は口調を荒げたまま続けた。

「大体な、こっちは女ばつかの学園にたった数人の男で朝からずつとプレッシャー感じてんだ、察せよ！　ここは人の機嫌も気にしない我俣しかいねえのかよ！」

周りにいた女子達の顔が、好奇の顔から嫌悪や困惑へと移っていく。

……ああ、これはマズった。

女子と言うのは、噂好きで集団意識が高い生き物である。当然、最初の印象が悪いと一気にそれは噂として広まる。

多分、今のでキレやすい人間とか、そういう噂が流れるのだろう。噂というのは脚色され膨張するものだ。友達、出来なくなったらどうしよう。噂が広まる前に一人でも出来ればいいんだけどな。

できれば、友達と言える人は100人は欲しかった。富士山で、100人でおにぎりを食べられるぐらいな。……あれ？100人友達が出来たら101人じゃねえの？　一人だけサンドイッチなのか、可哀相に。あ、それが俺か。ぐすん。

閑話休題。

想像した嫌な方の未来、友達1人もできないよルートを暗示するかのように、気分を害した女子達はチャイムをBGMにして俺の前から霧散していった。

……あ。

再度気付く、織斑とまた話せなかったことを。ずっとさっきの金髪ロールさんと話してたから、仕方ないといえば仕方ないが。

「それでは、この時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

3時間目。1、2時間目と違い、今回は担任が授業を行うらしい。……この先生の名前、なんだっけ？　寝てたからまともに聞いてな

いんだよな。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦の代表者を決めないといけないな」

担任の言うクラス代表を簡単に纏めると、要するにクラスの代表だ。そのまんまだ。学級委員みたいなもん……かな？　そういうもの。面倒臭すぎて絶対に避けたい職。

勿論俺は立候補しない。するわけがない。俺は別に、仕事を押し付けられて喜ぶようなマゾじゃない。あ、だからってサドでもないよ？　ノーマルノーマル。平凡な人間。

「はい、織斑君を推薦します！」

真っ先にあがるのは、そんな他薦の声。

「私もそれがいいと思います」

そりゃあ、普通に考えてそうだろう。現状殆ど周りの実力が知れていない以上、注目され易い織斑に票が集まるのは当然と言える。

当の織斑本人も首を縦に振ってうんうんと頷いているし、本人もやりたいんじゃないか？　織斑はスケベでマゾか、覚えたぞ。

ちなみに俺はさつきぶつんと堪忍袋の緒を切ったせいとか、注目度はガクつと落ちているらしい。

何故あんなキレたのか今度聞かれたら、代表に選ばれない為だったとウソを吐くといいかもしれない。本当は眠くて歯止めが効かなかったただだが、それを説明するというのも癪だ。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないのか？　自薦他薦は問わんぞ」

「ちよつと待った！　俺！？」

いきなり織斑が反論し出した。いやお前、つい数秒前まで首を縦に振ってただろうに。

俺は見てたぞ、「それで決まるなら俺は文句はない」とでも言わんばかりの優雅な首つきを。首つきって何だ。要するに首つきだ。

「織斑。席に着け、邪魔だ。他にいないのか？　いないなら無投票当選だぞ」

織斑の顔に絶望が見えてきた。個人的にはそういう顔を見ているのも面白いんだが、残念ながら俺は人が悲しむ顔を見続けるほどサドではない。さっきも言ったがノーマルだ。

誰かがSMプレイでもやっていようものなら、できる限り隣でお茶でも啜ってたい系統の人間なのだ。

というわけで、同じ男子のよしみで助け舟を出すことにする。手を挙げて発言するというのはどうも苦手だが、この際仕方ない。

「先生、入試で一番成績が良かったのって、確かあの金髪ロール子ですよ？ 名前は知らないけどあいつを推薦します」

「なっ、貴方は人の名前も満足に覚えられないんですの!？」

さっきの言動的に余程自信があったみたいだから他薦してやったのに、酷いじゃないか。と、自分の勝手な理論を押し付けてみた。

そもそも俺はまだ名前を聞いてないんだから、覚えられるわけがない。

こほん、と一つ咳払いをして、金髪ロールは教師に向き直る。

「ま、まあいいですわ。貴方に他薦されなくても、このまま極東の猿に決まりそうだったら自薦する予定でしたし」

なんだ。やっぱり自信満々じゃないか。流石は主席だぜ。

人に面と向かって極東の猿なんて言える辺り、凄い度胸だなと褒めてやりたい。高飛車でも、そういう人間を俺は嫌いではない。

と、ふと織斑の方に目を移すと、今にも噛み付きそうな顔で金髪ロールを見ている。あ、ほら口を開いた。

「おい、なんだよ極東の猿って」

………うきっ？

さて、そこからはお互いの罵倒からお国柄の罵倒にまで発展、最終的に織斑vs金髪ロールで一週間後に決闘を行うことになった。

料理が美味いか不味いかとかを個人の争いで引き出すのはどうかと思うのだが、売り言葉に買い言葉って奴だろう。

その後は特に何事もなく授業は進んで行ったが、結局どの休憩時

間でも織斑に話しかけることができなかった。

これもイジメっていつやつだと俺は認識している。

3 愛すべきmy mother

幾重もの話しかけられない休憩時間を連ね、現在は放課後。

続々と女子生徒が併設された寮へ移ってゆく中、俺は担任 織

斑千冬先生 から罰掃除を喰らっていた。

理由は簡単、SHRで寝てたから。

本当なら未だに眠いのだが、罰則を無視すると後で怖そうなので掃除をするしかない。

初日から罰掃除なんてとんだ不良生徒だよな。誰だよ。……ごめんなさい。

そうそう、何故俺がこんなに眠いのか。それはと言うと、単純にここ4日間は徹夜だったからである。

俺がISを動かせたのは、丁度IS学園が入学者人数を確定させた翌日だった。それゆえに必読テキストが送られてくるのが、異常に遅くなったのが原因である。

どのぐらい遅かったかというと、入学1週間ちよつと前だ。そして実を言うと、その時は家族と旅行に行ってたんだ。おかげで読み始めたのが4日前。

一応、内容はこの4日間で頭に叩き込んだのだが、何せ織斑一夏が電話帳と間違えて捨てるぐらいの本だ。あの時、どれだけ瞬間記憶能力が欲しいと思っただことか。

……む？ 4日間徹夜を繰り返してようやくと覚えられたってことは、もしかして1週間半前から読んでもすっげえ大変だったんじゃないか？

「ところで海月。さっきは随分声を荒げてたけど、どうしてあんな怒ってたんだ？」

一夏が尋ねてくる。おっと、何でこんな親しいか話し方なのかって？ 簡単さ、放課後に話しかけようとしたらあっちから話しかけてきてくれた。

「どうやら、やはり一夏も女子ばかりの環境で相当参っていたらしい。」

俺がキレた後には勿論一夏に女子が集中したわけだから、それはもう滝に打たれてる石ころみたいに精神が削られたんだとか。

数回の会話でお互い警戒心を解き、気付いたら海月、一夏と名前呼び合って違和感がないまでになっていた。親近感の存在に感謝したい。

「いや何、あそこで嫌われておけばクラス代表に選ばれないだろ？ それに」

と、そこまで言った時点で一夏は凄い視線で睨み付けてきた。背中に汗が吹き出る。蛇と眼力勝負できるんじゃないか、少し動物園に行ってきたらどうだろう。そういえばさつきは猿って比喻表現を使われていたしな。

お薦めだ。言ったら怒られそうだから黙っておく。

「お前、クラス代表のこと知ってたのか？」

「ああ、知らないけど学級委員かそれに似たような役職があることぐらいは予想できるだろ」

嘘。真っ赤な嘘。

「それと 後は、4日間寝てなくて気分が悪かったのさ」

こっちが本当。というか、実際は100%こっちの理由だ。

自分で言うのも何だが、徹夜明けのテンションじゃない俺は無茶苦茶優しい。それはもう菩薩の如き優しさだ。多分聖母にすら勝るはずだ。町内会で有名な天使みっちゃんとは俺のことである。

「くっそお、俺はまんまと策略に絡め取られたわけかよ」

一夏が悔しそうに言う。違っぞ一夏。お前が絡め取られたのは運命の悪戯だ。もしくは俺の気分。

他愛もない話をしていると、副担任の先生が何やらこっちに駆けて来た。

「よかった、まだ2人とも教室にいましたね」

「あれ、もしかして掃除の監督ですか？　すみません、もう終わっちゃいました」

振り返りながらそう言うと、先生は書類を片手に立っている。名前なんだっけ。山……山岡？　山までは間違いない。

「違いますよ。えっとです、ね、寮の部屋が決まりました」

返されたその言葉に、疑問を覚える。

確か、一週間は自宅からの登校だったはずだ。だって、いきなり寮とか準備できねーじゃん普通は。

一夏も同じ疑問を持ったらしく説明を要求すると、事情が事情、で返された。何でも狙われやすい立場だからとかそういう話らしい。一応は納得。

「でも先生、俺、日用品何一つ持ってきてないんですけれども」
続けて俺も尋ねると、扉の方から声がした。多少ハスキー掛かったこの声は多分、担任の織斑先生だろう。

「それについては両名、私が手配しておいた。ありがたく思え」
手配？　待った待った、手配ってどういうことだ。確かうちの親、昨日から家に帰ってきていないはずだぞ。

「着替えと携帯の充電器があればとりあえず大丈夫だろう。戸鉄は家に母親は居なかったが、いつでも寮に入れられるようにと既に家族から荷物が届けられていたぞ」

そういうことか、うーん。さっすが俺のママン。そんなに俺を家から弾き出したいのか。母性愛に涙が出てくるぜ。

誰だよ、旅行の時「行きたくないなら行かなくてもいいのよ」とか言ってたのは。夢だったのか。畜生。IS動かせるのも夢ならいいのに。

「荷物は既に部屋に届けられている。ほら、これが鍵だ」
そう言いながら鍵を2つ渡してくる。……2つ？　1つじゃなくて？

「あの、すみません。一夏と俺は同じ部屋じゃないんですか？」
普通に考えてみれば、男女を同室に入れるのは気がひける筈であ

る。それなのに鍵は2つ。

つまり、お互いに同室に住むもう1人は女子、となってしまう。精神力を試しているのだろうか？ くそうサドめ。

「馬鹿者。身の安全を守る為の措置と言っただろう。お前達は狙われやすい存在なんだ、一緒の場所に置いておけるはずがない」

「一箇所に狙われやすい存在を固めておいた方が、守る場合も守りやすい気がしますけども……」

尚も詮索する俺に対し、織斑先生は軽く溜息を吐きながら返す。

「負いさせたくなかったので本当は言いたくなかったんだがな。

戸鉄、政府はお前を良い目で見ていない。というか、織斑さえ助ければ戸鉄はどうなるかと構わないといった風にさえ見える」

少しばかり、思い出したくないことを思い出した。

その言葉に一夏は絶句する。……周りの人間が俺の顔を見たら、多分相当沈んでいるんだろう。

次の言葉を紡ごうにも、言い返すことが出来ない。『政府がいい目で見ていない』には、非常に非情な心当たりがある。吹っ切ったつもりでいて、どうやらいまだ吹っ切れてなかったらしい。

「……何だよ、それ。俺も戸鉄もモノ扱いかよ。ふざけんな、俺も、戸鉄も、血が通った人間だ。差別されていいわけないだろ！」

一夏が怒りを露にするが、俺は何も言えない。いや、違う。言いたくないだけなんだよな、多分。

……俺の存在は、人間未満のモノ以下だ、と。

結局、一夏と俺は別室になった。いくら文句を垂れようと既に女子たちは各々の部屋に行ってしまったんだから、しょうがないだろう。

それでも男と同室が良いと続ける一夏に対し、状況を飲み込めて

いない副担任の先生が何やら変な妄想をしていた。陰鬱な空気が一発で吹き飛ぶ辺り、あの先生には感心せざるを得ない。

俺の部屋と一夏の部屋は離れていた。近い部屋では同室と余り変わらなから、当然と言えば当然だろう。

……さて、この部屋だな。

着替え中だったらマズいし、軽く扉をノックする。

どうぞ、とどこかで聞いたことがある気がする声が返ってきたので部屋に入ると、そこにいたのは。

『戸鉄ミツキ君、だっけ？ どういう字を書くのか……』

あの、俺がキレル直前に話しかけてきた子だった。やっぱり、俺ピーンチ

4 ロールパンとロツケンロール(前書き)

やっぱりオリキャラ1人じゃダメだったみたいだ。くすん。

4 ロールパンとロックンロール

「げっ」

その女子の、俺に対する第一声はそれだった。酷いな、俺泣いちやうよ？

……と、視界にベッドが映る。途端に眠気が一気に襲ってきた。

ああ、そういえば4日連続徹夜だったよ。

「えっとー……、同室になった戸鉄海月です、とりあえずベッドはどっちを使いたい？」

「お、奥側で……」

よし、君は奥側だな、俺が入り口に近い方だ。そうと決まれば寝る。

眠い。

寝たい。

歩くのも気だるい。

よくさつきまで精神を保っていたものだ、と自分に感心する。所々小さな眠りを挟んでいて、実際の徹夜とは少し違ったのが幸いしたかもしれない。

ベッドの方に俺は近付き……そして、倒れた。ベッドの方に倒れることができたかどうかは分からない。

目を開ければ見れるかもしれないが、残念ながら意識の糸はもうぷつん、と切れた後。

倒れてすぐに、俺は死んだかのように身体機能を手放したのだった。

「……知らない天井だな」

目を開け、むくりと起き上がる。デジタル時計を見ると18時30分。4日分には到底足りない時間しか寝てないのに、妙に眠気が取れている。

「ああ戸鉄君、起きたの？ 昨日は大変だったんだよ、使うベッドだけ決めたと思ったたらいきなり床に倒れこんで」

目の前の女子はからからと笑いながらそう言ってくる。なんだ、結局ベッドの方向には倒れられなかったのか。

……ん？ 待て待て待てよ俺。今の会話に、少し違和感がなかったか？

「つてことは、ベッドには君が寝かしてくれたの？」

いやそれより！

「今、昨日つて言ったよな？ 昨日つてまさか……」

「ベッドにはそうだよ、実際は先生に手伝ってもらったけど。それで、戸鉄君は昨日の夕方から、丸一日寝てたよ。本当に昨日は大変だったんだからね？ ゆすつても叩いても反応しないから慌てて保健室まで行ったんだから」

前言撤回、である。4日分に相当する時間俺は寝てたらしい。というか二日目から欠席かよ、俺の無遅刻無欠席皆勤賞ライフは早速崩れたわけだ。ぬかった。

「それで」

続けようとして言葉を止めた。何故なら、俺の腹に住む虫が大音量の鳴き声をあげたからだ。

腹に殺虫剤を撒けばもう少し音は小さくできたんだろうか？ 今度研究して学会に発表しよう。

目の前の女子はクスクス笑っている。さっきから色んな笑い方だな、笑い顔だけで百面相が出来そうだな。

赤面。

「とりあえず、ご飯食べに行こうか？」

目の前の女子はそう言ってきた。

……まだ、何か違和感がある。そうだな、彼女は俺に直接キレられ

た相手のはずだ。反応があまりにも違う、これは何か臭うな。
いや違う、この臭いは汗の臭いだ。しかも俺のじゃないか、これ？
何でこんな所でコントしなくちゃいけないんだよ。
「ごめん、軽くシャワー浴びるから、俺を気にせず行っていいよ」
よおく考えてみたら、確かに昨日はシャワーを浴びてなかった。
彼女の態度も気になるけど、とりあえず不快の元は消さないとな。
そんなわけで先に行ってもらおうと思ったのだが、
「先生からまた倒れないか見てろって言われたから、待ってるよ」
と彼女に言われたので、俺は急いでシャワーを浴びるのだった。
IS第二世代の疾風の再誕、ラファール・リヴァイヴとは俺のス
ピードに敬意を表して付けられた名前に違いない。

学生食堂に行くと、いきなり女子が詰め寄ってきた。どうい
うことだろうか。人生2回目のモテ期なのか？

ちなみに1回目は幼稚園の年中の時だ。組で一番走るのが速か
たから、かけつこの時にワーキヤー騒がれていた。

「倒れたって聞いたけど大丈夫？ 痛い場所とかないの？」

「織斑君から聞いたんだけど昨日怒ったのは演技だったって本当？

こわくない？」

「ご飯一緒に食べよ？」

……ああ、成程。2つ目の質問曰く、一夏經由で別に俺がキレや
すい人間じゃないって聞いたわけか。

道理で昨日より反応が柔らかくなってたわけだ、が。

「ええっと、ごめん。知ってるかもしれないけど、丸一日何にも食
べてないんだよね。とりあえず注文させてくれないかな？」

正直、この空腹で軍団の相手をするのはキツイ。残機なしで初見
のステージボスに挑むようなものだ。回復しないと死ぬ。

木の幹に雷が落ちたみたいのパックリと道が割れたおかげで、な

んとか俺は食事にありつけるのだった。

「改めて、戸鉄海月です。網戸の戸に金属の鉄で戸鉄、名前は……クラゲって漢字分かる？ 海に月。それでミツキって読むんだ」
昨日、途切れてしまっただけで済むことが出来なかった自己紹介を受けた為、こちらでも自己紹介を返す。

同室の子は転寝麗うたたねつひらさんと言うようだ。

「じゃあ、ニツクネームはくらげだね」

語尾をそう伸ばしながらそう言うてくるのは布のほとけほんね本音さん。ゆっくりした口調だが、不快感を感じさせなかった。

くらげん、は実は中学の頃も呼ばれていたニツクネームだ。漢字を見たらクラゲになってしまっただから仕方ない。せめて海に星でミホシとかさ。あ、ヒトデか。

「おっと、そうだ言い忘れてた。昨日は驚かせちゃってゴメンな？ 別に話しかけられたくないわけでも、お喋り好きな人が嫌いなわけでもないから、そんな気にしないでな」

むしろ、お喋りは大好きな類だ。町内会で有名な話屋みっちゃんとは俺のことである。

そんな他愛もない話をしている俺と大勢女子を、転寝さんは横目で見ながら微笑んでいたとかいかなかったとか。

それから2回のおかわりを重ね、食事は無事終了。

転寝さん以下数名で寮まで行き、そこから各個人分かれて部屋へ戻ろうとしている時のことだった。

「あつ、金髪ロール」

そう。目に入ったのは金髪ロールである。名前は知らない。印象から言うとイニシャルは多分Nだ。その金髪ロールケーキが目の前を歩いていたのである。

俺が声をかけると、金髪ロールパンはキッとこちらを睨む。一夏よりは怖くないな。

「まだわたくしの名前を覚えていませんか？」

覚えていないのも何も、俺はこの金髪ロールプレイングゲームから一度も名前を聞いていない。

というか、俺が話しかけるなって言っただ、聞けるわけがない。

……んだけども、あの時気が立っていたのは俺だ。

多分俺にも非はあるんだろうから、少々高圧的な態度でも受け入れようじゃないか。俺は懐が広いんだ。

「悪い悪い、覚えてないんじゃないかとまだ聞いてないんだよ。謝るからさ、教えてくれない？」

にこりと笑って頭を下げる。世の中、自分に非があると思った時は謝れば大体は上手くいく。

当の金髪ロックンロールは腰に手を当ててしたり顔でこちらを向いてきた。どうやら自分が優位に立ったと思ったらしい。

「まあ、わたくしは優しいですからね。いいでしょう、教えて差し上げましょう」

そうか。それは優しい態度か。

半分が優しさで出来ている薬は胃に負担を掛ける薬の負担を抑える制酸薬が半分で出来てるから本当に半分は優しさなわけだが、彼女も半分ぐらいは負担を抑える成分で出来てるんだろうか？

なんてことを考えていたら名前を教えられる。セシリア・オルコット。

……おい、名字も名前もイニシャルNじゃねーじゃんか、騙された。誰に騙されたかは知らない。

「じゃあオルコットさん、か。初日はキツく当たりすぎた、悪かったよ。宜しく頼む」

言いながら右手を差し出す。……なんだよそのきよとんとした顔は。可愛い顔が台なしだぞ、握手だよ握手。イツァクシユ。英語で握手がわかんなかった。

「昨日と随分印象が違いますか……まあ、いいですね。あのもう一人の男子より随分礼儀を弁えた態度です。よろしくお願いします」

わ

やっと出した手の意味が分かったらしい金髪ロールスロイス……
もといオルコット嬢は、優雅に微笑みながら握手を了承してきた。
悪口を言った相手ともすぐ打ち解ける、流石俺だ。町内会で有名な世渡りみっちゃんとは俺のことである。

高飛車は苦手だが、これでこのオルコット嬢とも険悪な仲にはならないだろう。よく見なくても可愛いし。

いや、この学園の女子は何故だか大抵可愛いんだけどな。

「そうそう戸鉄君。君が寝ていた時にしきりに口にしていた、ラウラっていうのは誰？」

部屋に戻って開口一番、転寝さんはニヤニヤと笑いながらそんなことを俺に聞いてきた。

……実を言うと、あんまり聞かれたくなかった話だったりする。

「昔一度だけ見たことがある女の子の名前だよ。銀髪でちっちゃくて凄く可愛くてさ。一目惚れっていうの？ そんなん」

「見たことがある？ どこで？」

そこまで言われて、俺は彼女の方を向く。興味津々、といった顔つきの転寝さんに、俺は告げる。

「……秘密。過去が分からない男の方がミステリアスでいいだろ？」

「うーん、私は隠し事しない男の子の方が格好良いと思うんだけどなあ。あ、でも言いたくないのなら無理には聞かないよ」

別に隠すことでもないんだけど、人によっては暗い気分させる話だからな。

どこで地雷を踏むか分からないし、こういう話は隠しておくに限る。俺って優しい。

「今度、気が変わったら話すさ。3時間は覚悟しておいてくれよな」
「うっ……それはちょっと気がひけるかもしれない……ね」

ちなみに嘘だ。3時間も話せる自信はない。町内会で有名な嘘吐

きみっちゃんとは、何を隠そう俺のことだ。

俺は彼女に対してニッコと笑うと、彼女は鼻を掻きながらあはは……と笑い返してくる。反応を見るに、どうやら嘘だというのはバ
してないみたいだ。

その後、部屋の中の使い分けの話をした。シャワー使いたい時間
がダブルブッキングしちゃったら大変だしな、見せたいって言われ
たら見せてもらうけど。

おっと、こんな発言勿論本人には言っていないよ。

話が終わった辺りで転寝さんが大きな欠伸をしたので、その日は
寝ることにした。今日は5時間も起きてないよ、俺。さっきまで寝
てたから眠くないし。

そんなことを考えていた俺だが、目を瞑ると特に問題なく眠りに
就くことが出来た。

5 ブレード三段活用（前書き）

IS二次創作はたくさんあっても、セシリア戦の時点ですでに学園にいたにもかかわらずただ観客席から見ているだけ、というキャラはまだ見たことがないです。

つまり、この話のオリ主は序盤すぐく地味ってことですね

5 ブレード三段活用

日にちは過ぎて、月曜日。

「さて、今日がクラス代表決定戦か」

俺こと戸鉄海月は、予想以上にワクワクしていた。自分が戦うでもないのに、心臓が高鳴るのが抑えられない。

要するにどんちゃん騒ぎが好きなのだ。町内会で有名な祭司みっちゃんとは俺のことである。

「くっそー、勝負が出来るんだったら、俺もクラス代表に立候補すべきだったか」

クラス代表になるつもりは、ないんだけども。

既にアリーナの観客席は人でいっぱいだ。流石に女子に挟まれるのは精神的に辛いので、隅っこの方の席だが。

「それにしても、一夏はやけに遅いな……」

現時点、オルコット嬢が空に姿を現してから、既に5分は経過している。専用機がまだ届いていない、とかならうか？ ……まさかね。

当日の試合開始時間になっても届かないなんて、普通の企業であればそんなことはしないだろう。どうせ、一夏が緊張で腹でも下したんだらう。未熟者め。

そういえば、男子は護身の意味を兼ねて専用機が与えられることが確定しているのだが、すぐ決まった一夏と違って俺の機体の作成者は未だに決まっていない。

これだから日本人は優柔不断と言われるんだ。いや、揉めてる企業のうち大多数は国外企業なだけどさ。

国とかはいいから、出来ればオルコット嬢と似たカラーリングがいい。俺は青色が落ち着いていて好きだ。

本当は一夏の機体を作成した所がいいんだけど、流石にこの短期間で2台も専用ISを作れというのは酷だろう。

閑話休題。

オルコット嬢の機体は、一言で表せば「蒼」だった。

手には巨大なライフルを携え、どこか優雅な印象を与える姿で宙に浮いている。

さっき誰かが話しているのを聞いたが、機体は「ブルー・ティアーズ」と言い、一対多を想定した中距離射撃型のISらしい。

BT、簡単に説明すると機体から離れて動く兵器、をいくつか装備しているらしい。らしい尽くしなのは誰かから聞いた話の情報しか持っていないからだ。

さて、俺が今できる暇つぶしの一人説明会は終了したぞ。一夏、早く出て来い。皆がお前を待っている。多分。

それから3分後、ようやく一夏が姿を現した。

一夏の機体は「白」だった。武器は見えないので予測は出来ないが、あいつの一本筋が通った性格を考えると多分ブレード主体の機体だろう。

というか、篝さん 何故か知らないが篠ノ之さんと苗字で呼ぶときつい眼で睨まれた と放課後毎日3時間ぐらい剣の稽古しかしてなかったから、これでもし射撃系の機体だったら一同爆笑ものだ。

……あれ、今更ながらここ1週間、一夏って1回もIS関連の練習してなかったような？ 大丈夫なのか？

「あら、逃げずに来ましたのね」

オルコット嬢の声が響く。歓声の沸く空に目を移してみると、彼女は腰に手を当てていた。なんとというか、やけに、そのポーズが自然体を感じる。腰に手を当てる訓練でもしたんだろうか、非常にどうでもいい。

よく考えたら、既に試合は開始している。つまり、いつ一夏が武

器を展開して切りかかろうと、いつオルコット嬢が手にしたライフルで一夏を打ち抜こうという状況だ。

「最後のチャンスをあげますわ」

オルコット嬢はそう言うと、ぴしりと人差し指を一夏に対して向ける。隅っこの席だから本当に人差し指かは分からないが、多分あのポーズは人差し指だろう。

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふのなら、許してあげないこともなくつてよ」

機体スペックも分からないのに大した自信である。が、油断をしているようには見えない。

きつと、代表候補生になるまでの壮絶な努力と、それに裏づけされた自信の表れなんだろう。

「そういうのはチャンスとは言わない」

「そう？ 戸鉄さんと違って貴方はあまり賢くないのですね。それなら」

オルコット嬢はライフルを構え、そして撃ち出す。確かに熟練の動きが見て取れる。熟練の動きがどういふものかだなんて分からないが、明らかに手馴れていることぐらいは理解可能だ。

「お別れですわね！」

次の瞬間、一夏の左肩が吹き飛ぶ。釣られて一夏の身体も捻じ曲がるような動きをとるが、ISの姿勢制御のおかげですぐ元の体勢に戻る。

簡単に言えば、今で一夏の機体……名前は分からないのでWとしよう。Wはダメージを喰らったことになる。

IS戦闘は、相手のシールドエネルギーを先に0にした者が勝利となる。

セシリアの機体……ブルー・ティアーズと一々呼ぶのは面倒なのでBとしよう。白いからホワイトのW、青いからブルーのBだ。黒

い機体が出てきたらイニシャルBが被るじゃないか。

閑話休題。Bの攻撃がWに当たったが、この時Wの左肩の装甲が文字通り吹き飛んだ。つまり、その部分は生身である。

ISには「絶対防御」という機能が備わっている。シールドエネルギーを大幅に消費する代わりに操縦者を文字通り絶対を守る機能だ。

これは生身の部分を狙えば強制的に発動される。つまり、今、生身の一部を晒してしまった一夏は、ダメージレースでも破壊レースでも一歩負けている状態、というわけだ。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

台詞と共にオルコット嬢の射撃の嵐が吹き荒れ始める。一夏を寸分の狂いもなく捉えているそれは、回避しきれない一夏のシールドエネルギーを着実に減らしていた。

一夏が武器を展開した。ここは流石に近接武器で勝ちを狙っているのは難しい。セオリーであれば多少苦手でも射撃系の武器を

ブレード。

ブレードだった。

ブレードである。

そこで一夏が出したのは、近接武器のブレードであった。

そして突っ込んでいく一夏。まさか、ブレード以外装備がないのか？ ……いやいやそんなまさか。そこまでピーキーな兵装があるとは、流石に思えないぞ。

それから。

「これで約30分ぐらいか……？」

結局、一夏はブレード以外の武器を一切出さない。どうやら、本当に一夏のIS、仮称Wの武器はブレードのみのようだ。

状態は、「満身創痍」という言葉がまさにしっくり来る。

装甲は所々吹き飛ばされ、次に生身の部分を狙われたら絶対防御のせいで確実に一夏は負けるだろう。

岡目八目という言葉の通りなのか、それとも観察力に優れているのかは分からないが、海月は10分経過した辺りから一夏のとれる打開策を思いついていた。

（あのブルー・ティアーズを動かしてる間、オルコット嬢は動いてない。しかも、攻撃は全て死角からの物。だったら　　）

セオリー通りなら、本体を高機動で狙うことによるある程度の別角度からの射撃を牽制、それをブラフにしたビットの破壊、が最初に思いついた策だった。

（しかし、オルコット嬢はまだ何か隠していそうだ、何と云うか、そういう雰囲気を感じる。単純なブルー・ティアーズのビットの破壊だけで倒しきれるとは思えない。それなら　　）

海月は一週間前の自分を少し攻めていた。あの場所に俺が立つことが出来たら、あの状況から相手を圧倒することが出来たら。そんな考えて頭が一杯だった。

一夏は、海月の第一策と同じ考えを以って、セオリー通りにビットのほうのブルー・ティアーズを撃墜して行った。

そして、見える全てのブルー・ティアーズを落とし、オルコット嬢に突撃する。

「ダメだ、そこでそんな角度で突っ込んだら　　ゲームセット 試合終了だ」

海月の声も届かず、一夏は突撃し　　ミサイルの爆煙に包まれた。

オルコット嬢の機体は、先程からあのライフルとビット兵器以外見えてない。

基本が中距離以上を想定した機体だ、近距離の兵器はあまり使用出来ないだろう。

更に、片手にはライフルを握っている。一度も引っ込めていない所を見る限り、あれは基本的に出しておいた方が好ましい武器、ということだ。

つまり、「もしオルコット嬢がまだ装備を隠していた場合、それはライフルより威力が低い武器か、まだ使っていないビット」だったということである。

それならば、4機のブルー・ティアーズを落とした後に突撃するのは得策ではない。

持たれていたのが致命傷を与えにくい武器ならともかく、丁度今のように威力も十分な兵器だった場合、喰らったらゲームオーバー！ リスキー過ぎる。

だから、例え動き回る4機の雫を落としても不用意に突撃するべきじゃなかった

兵器を落とすことが可能であると判断できた以上、必要だったのは相手スベックの把握、つまり様子見だった。

「何にせよ終わりだな。あれを喰らった以上」

試合の興奮により火照った身体でアリーナから出ようとして、そこで違和感に気付く。

そう、試合終了の鐘は未だに鳴っていないなかったのである。

まさか、と思い再び視線を煙に向けると、いきなり煙が霧散する。そこにあったのは、先程までの一夏の機体よりも純白であったが、それでも一夏が使用していた機体Wであった。

5 ブレード三段活用（後書き）

主人公の戦闘はもう少し先で、専用機入手はもっと先です；

6 裏切りって、蜜の味

「あれって、一次移行かよ！ このタイミングで！？ くらっ、見せるじゃないか一夏！」

そりゃあもう凄い興奮ですさ。終わったと思った試合で、真の力を解放。逆転勝利！ 純粹な男子なら一度は体験してみたい、憧れる場面。ちなみに俺は勿論純粹な男子に当てはまる。

幼稚園の頃はヒーロー物の特撮を病的とまで言えるほど大量に見て、技の名前や繰り出し方を覚えたものである。町内会で有名なヒーローみっちゃんとは俺のことである。

そして一夏は一筋の光となり、オルコット嬢に切りかかり、そのままドメの……

『試合終了。勝者 セシリア・オルコット』

……………。

は？

その日の夕食。一夏に敗因を聞いた俺は、一人大笑いしていた。

「ぎゃはははは！ 馬鹿じゃねえの、シールドエネルギー喰う攻撃でシールドエネルギー見てなかったとか。はははははは、腹痛え！」
「……そろそろやめてくれよ、俺だってあの時は勝った！と思ったんだからさ……」

つまり、そういうことだ。

一夏の最後の攻撃 零落白夜と言うそうだし、は、シールドエネルギーと引き換えに膨大なダメージをたたき出す、いうなれば諸刃の剣だったそうだし。

一夏は相手を倒すことに必死で、自分の心臓にもう片方の刃を刺したまま相手に突撃しに行った、ということらしいのだ。

まったくもってバカな奴め、もう少し発動を遅めるとか、いくらでも方法はあるだろうに。節約は大事なんだぞ？ エコだエコ。金を溜める時だって節約が重要。

「そ、それにしても今日の試合は面白そうだったな、こんなことから、俺も代表に立候補しておけばよかったよ」

多少笑いの余韻を残し、どもりながらそう感想を告げると、一夏は多少不機嫌そうな顔でこちらを見てくる。

「嘘吐け。どうせいたぶられてる俺を見て笑ってたんだろ、策略家の海月様様は」

いやいや、本心。試合を見ている最中ずっと、自分なら如何に攻め如何に避けるかを考えていたぐらいだしな。実は俺、戦闘狂なのかも？

「まあ、何はともあれ代表はオルコットさんだ。負けたのは残念だったけど、一夏は代表にならなくて済んだのはホッとしてるんじゃないか？」

そう返すと、一夏はポカンとした顔で振り向いてくる。

「……ああ、そういえばこれ代表決定戦だったのか。すっかり忘れてたよ」

その瞬間、同席していた5人 俺、篝さん、その他1組の3人がまるでシンクロしたかのように溜息を吐いたのは言うまでもない。

こいつ、そんな重要なことも忘れてたのか。

「では、1年1組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね！」

副担任の山田先生が笑顔で話す。それに合わせてクラスの一同も

歓喜の声を上げる。……沈んだ顔をしている一夏と、何が起きたのか分かっていない俺を除いて。

「先生、質問です」

一夏が手を挙げ質問する。そうだな、質問はちゃんと質問したいって意思表示をしないと。

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？」

「それは」

山田先生が説明を始める前に、颯爽と誰かが立ち上がる。そしてその誰かは腰に手を当てる。というか、オルコット嬢だ。

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

やけに上機嫌といった具合で答えるオルコット嬢。なんだ、良いことでもあつたんだろうか？

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですわ」

一夏が大ポカをしなければ負けてたんだし、当然と言えたことでもない気がするのだが。とは言え彼女の熱弁は止まりそうにない。

「それで、まあ、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして、そうかそうか、反省するのはいいことだ。それで？」

「一夏さん」にクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりIS操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」

うーん、これは一夏を気遣ってるっていう方面に入るのか？ やけに、先日と態度が違うように感じる。

「いやあ、セシリアわかつてるね！」

「そうそう、世界にたった2人の操縦者なんだから、ここは持ち上げないとダメだよー」

「戸鉄君の情報は手に入らないけど、織斑君の情報はこれで手に入

れ放題も同然。やったね！」

おいおい、誰だ今勝手に情報を売ろうと口走った女子は。先生怒らないから出て来い。

「そ、それでですわね」

そう言つてオルコット嬢は顎に手を当てる。このポーズは初めてだ。織斑よりオルコット嬢をフィギュアにして売った方が一般受けは良い気がするぜ、主に男に。

「わたくしのように優秀かつエレガント、華霊にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに成長を遂げ」

……ああ、そういうことか。

大体は、把握してしまった。

つまり、何か理由を付けて一夏の傍にいたいわけだ、このオルコット嬢は。

初々しいねえ。

と、そこで強烈な音が響く。……誰かが立ち上がる。そしてオルコット嬢をその誰かはギロリと睨みつける。というか、箒さんだ。

やばい、一夏の睨みつけより怖いかも。一夏が普通の蛇なら箒さんはキングゴブラだ。殺気立ってるぞ。オーラみたいなのが見える気がする。

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたからな」

おおつとこつちもか。面白そうな争奪戦が発生してるねえ。ま、どつちも可愛い分一夏には爆ぜると言っておくしかない。

当の一夏はわけも分からず困惑しているらしい。この朴念仁め、土に埋まって星を見る。

オルコット嬢と箒さんは何やら言い合っている。いや、周りの女子も観戦してないで止めるよ。喧嘩は止めるのが良い解決法だよ？

というか、そろそろ止めないと打撃悪魔こと織斑先生が来て

「座れ、馬鹿ども」

パンツッ！ パンツッ！ バシィッ！

とまあ、こんな風に頭を叩かれることになるよ、と。何故一夏まで叩いたのかは知らんが。

むしろ、一夏の時だけバシィって言ったぞ、バシィって。一番痛そうにしてるじゃないか。一夏、ご愁傷様。

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣をつけようとするな」

強烈な一言。流石のオルコット嬢も黙るしかなかったらしい。そうそう、静かにしていれば竜巻は過ぎていくんだよ、うんうん。

触らぬ神に祟りなし、つてな。おっと、神じゃなくて鬼か？

バシィッ！

いきなり叩かれた。ひどい。

「戸鉄。お前今失礼なことを考えていただろう。それと」
「バシィン！」

一夏も頭を叩かれる。出席簿つてのは鈍器だ。軍隊に売りつけたら多分高値で売れるはずである。今度素材を調べてみよう。否、

この場合の脅威は織斑先生か。読心術なんてどこで覚えたんだろう。

……それで、何で一夏は何も言っていないのに叩かれ続けているんだらうか。頭にちょこまか逃げ回る蚊でもいるのか？ それなら仕方ない。

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

クラスが一丸となって肯定の返事を出す。俺も俺じゃなければいいんだから、もちろん肯定の返事である。

一夏に「裏切ったな！」とでも言わんばかりの顔を向けられたが、気付かぬふりして目線を逸らすことにした。

放課後。織斑先生に呼び出された俺は、教室で向かい合って話していた。

「さて、お前を呼んだのは他でもない、お前専用のISSについてだ」
「やっつだ。」

一夏に随分先行されたが、これで俺もようやく自分専用のISSが
手に入る。頭の中は想像と妄想で一杯一杯である。

「自分でも分かっていると思うが、お前は世界中から注目されてい
ると同時に狙われており、それなのに日本政府からの関心は薄いと
いう状態だ。つまり、お前が専用ISSを手に入れるというのは、ど
こか一つの国を覇権する、ということになる」

これは想定していたことし、その時に優先したい国ももう決まっ
ている。

日本政府からの心象が悪い？ そんなの部屋割りの時に一旦落ち
込んだら、それ以降気にしたら負けだろうに。

「俺は大丈夫ですよ。別にモルモットになれって言われてるわけ
もないですし、データの提供ぐらい気にしません」

「……そうか。では、最終的に残った国だが、お前に専用ISSを提
供しようとして最後まで名乗りを挙げた国は4ヶ国。アメリカ、ドイツ、
フランス、イギリスだ」

最優先順位の国があった。一切の迷いも持たずに、俺の口はひと
つの国を選択していた。

「じゃあ ドイツ。俺は、ドイツがいいです」

7 出したきや出すし、撃ちたきや撃つ（前書き）

オリ展開話です。ドイツに行きますが、まだラウラは出てきません。

7 出したきや出すし、撃ちたきや撃つ

4月の下旬、日本の一般的な学校ではそろそろ冬服から夏服にチェンジするであろうというこの時期。俺は学校を休んでドイツに来ていた。

国外への行動はかなり危険が伴う為、学園からはあまり薦められなかったのだが、自分の為に動いてくれている人達に挨拶をしないのは何となく気分が良くないのだ。

ドイツの方々に学園に来て貰うことも出来たのだが、それだと準備が色々と重なる為、俺専用のISが貰えるのが夏休みの中盤というところでもなく遅い時期になってしまいうらいのでやめておいた。

ちなみに、俺がドイツに来て色々な検査に快く協力した場合、6月末の学年別トーナメントに合うぐらいには完成するそうだ。

ドイツを観光する時間もあればいいなあ。だなんて、決して思っていない。決して思っていないぞ。

「戸鉄海月です。今回は僕の専用機の作成を快く受けて下さり、真にありがとうございます」

研究所に着いた俺は、研究員の方々に向かって挨拶する。

ちなみにドイツ内なのに日本語だが、これはISの開発者である篠ノ乃束博士が日本語しか使用しない為に、IS関係者は日本語が標準語になっていることが原因。

ドイツ語を話せない俺にとっては嬉しい誤算だった。ドイツに来たのは初めてじゃないんだけどね。

研究員の方々に予定を聞いた所、どうやら観光の時間なんて全然ないらしい。

学業に支障が出ないようにとのことで滞在期間はたったの3日間、

その間に俺のデータを出せるだけ搾り出してしまおう、ということだそう。

体の隅々まで調べられるなら調べたいと言われたのに対しては流石に丁重にお断りしたけどもね。女性が男に対して貴方の体を調べたいとか、言うもんじゃないだろフツーは。えっちな。

その日のドイツの時間夜。来賓の扱いを受け高級そうなホテルの一室に来た俺は、ベッドにドツと倒れこんだ。

なんだよあの重労働。学校の訓練の比じゃないぞ。自分としては体力はこれらの男子以上にあると自負していたつもりなんだが、これらの男子以上の一部の男子以上のごく少数の男子がこなすんじゃないか、ぐらいのハードワークだった。

ISは兵器であり、最新技術の塊である。即ち、一つ作るにも莫大なコストがかかる。

専用機は、量産型の汎用機より更に高い。個人個人に合わせた通常とは違う装備を作成していく必要があるのだから、それもまあ当然である。

更にその国の新技術の実験等の目的もある、たとえば、汎用機と専用機の価格の違いは分かるだろう。寿司の赤身と大トロのようなものだ。俺は赤身の方が好きだ。

そして勿論であるが、「搭乗者の能力に合った性能」を持っていないという意味がない。

例えば一夏の機体が射撃主体だったとしたら、オルコット嬢相手にチャンスの一つもなく敗北していただろう。

一夏は剣術の心得があつたからこそ、オルコット嬢を後一步で勝利できる所まで追い詰めることが出来たのだ。

こう言えば、「自分に適合する性能、性質」が如何に重要かは分

かるはずだ。

つまり、今日の俺は嫌っちゅうほど身体能力を調べられたわけだ。基礎的な体力や柔軟性、運動神経の調査に始まり、さあ休憩だと休もうとするとその休憩時間は質問攻めでとても休憩なんてできたもんじゃない。休ませる気がないんじゃないかと思っただけだ。いや、休ませる気はなかったに決まってる。

普通は機体で作られてそれに人が合わせるんだけど、「俺」としてのデータを採りたい以上それが通用しないわけだから、入念に俺のことを調べ上げてるわけだね。

それで1日目の予定が終わったから、このホテルに送られてきた。ちなみにドイツ軍の方の護衛が付いている。女性がいるから、少なくとも1人はIS操縦者なのだろう。

IS操縦者ということは、簡単に言えばIS以外の強襲には対応できるということである。かなり安心というわけだ。

自分で言うのも何だが、一応俺は世界中から狙われている。これが世界中の美女から結婚を迫られるハーレム状態とかならないのかもしれないが、世界が狙っているのは俺という「特異ケース」だ。

ドイツとしては、自国でその狙われた存在が何かしらの被害を受けた場合国の名誉に関わる。そこまで考えてのIS操縦者による護衛だろう。

……問題としては、この張り詰めた空気だろう。殺気が自分に向けられているわけでもないのに息が詰まりそうになる。実は俺、護衛と見せかけて暗殺されるんじゃないだろうか。そのぐらい空気が重い。

このまんまだと死んじゃう。ダメだ、こういう時は現実逃避だ。眠るに限る。

明日の検査が今日より少し楽になることを祈って、俺は枕に顔を埋めた。プレッシャー成分配合の空気のせいか、目を瞑ってもなかなか眠れなかった。

入学初日も確か、重圧に負けて寝たんだよな俺。

祈りと言うのは、現実的にあまり叶わなさそうだから行つものなのだ。

何が言いたいかってつまりそういうこと。俺の祈りは天には届かなかった。

今は滞在2日目の午後1時頃なのだが、今日は朝から訓練機のISに乗りっぱなしだ。

機動のクセ、射撃装備や近接装備の扱い、得意な距離、その他小難しい内容を挙げていけばキリがないが、今日は一日中ISに乗りっぱなしでそういうものを細かく調べていくらしい。

一日目と違ったのは研究員の反応だろうか。

やはり、男がISを操縦しているというのは非常に興味深い光景みたいで、明らかに昨日より見てる人数が多い。IS学園入学初日の再現のような数多の視線だった。俺はどこでも客寄せパンダらしい……ん、この場合客寄せじゃなくて研究員寄せか？

研究所みたいな機関に行く時には気をつけると、帰ったら一夏に教えてやるう。

途中でやつと銃の扱い方を理解的を撃ち続けると、なんとなく見てた人達の目つきが変わっていったのが分かった。やっぱり、動きがド素人だと変に映るのだろうか。

そして、今は昼飯。欲求を満たす、邪魔されたくない食事タイム……なのだが、なんだこれは。

研究員とか、軍人っぽい人とかから質問攻めを喰らって、飯が喰えない。やめてやめて。俺は質問攻めより肉が喰いたいよ。

何だよ、「どういう方法で射撃してる」とか「武器はどんなイメージで出してる」とか。普通に的に向かって引き金を引けば射撃で

きるしイメージすれば武器は出るだろうに、まさか質問して来てるのは初心者なのか。

俺も初心者だけど。

時は多少遡り、日付変更から10時間と半分が過ぎた頃。

「彼、IS搭乗時間は現時点で1時間にも満たないって言ってたけど、本当なんだろうか……？」

見える的の、中心を寸分変わらず打ち抜く世界で2番目の男性IS操縦者を見ながら、彼女　クラリツサ・ハルフォーフ　はそう呟いた。

最初の数分こそ、彼は照準の合わせ方すら分からずしどろもどろしていた。その場面だけ見れば初心者というのも頷けるだろう。

昨日の結果を見る限りでは「身体能力は平均値と比べかなり高いが、異常なほどではない」という評価しかなかった。

ところが、5分を過ぎ、彼が「銃の撃ち方を理解した」直後に「それ」は起きた。

『目標、全て被弾を確認。命中率100%』

『目標、全て被弾を確認。命中率100%』

『目標、全て中心に被弾を確認。命中率100%』

『目標、全て中心に被弾を確認。命中率100%』

結果に、啞然とするしかなかった。

今彼が行っている射撃テストは、決してゲームセンターに置かれるちやちやな物などではない。

ターゲットはランダムに出現した上で不規則移動、5秒以内に打ち抜けないと失敗。それが複数出てくる。彼女が知っている限りでは、初心者ならばギリギリ2箇所掠らせられれば上出来のレベルぐ

らしいものなのだ。

それを、彼は先程から全て被弾させている。常識外れと言ってもおかしくはないレベルである。

今日の最後に行われるテストが、彼女は少しだけ楽しみになった。

8 世間、それを常識知らずと言う(前書き)

勇者ヨシヒコと魔王の城が面白すぎて腹がよじれています

8 世間、それを常識知らずと言う

「ドイツ軍のIS操縦者と模擬戦？」

「はい、これが最終テストとなります」

午後のテストをほぼ終了させ、現在は現地時間で夕刻5時頃。最後のテストの内容を聞いて、思わず素っ頓狂な声を上げた。

ISを使った初の対戦。それは良いのだが、相手が軍人と聞いてしまうと鳥肌が立ってしまう。

何せ、昨日までの俺のIS搭乗時間は30分程度。今日で一気に増えたが、それでも8時間程度だ。

搭乗時間が多分数百、場合によっては4ケタを突破しているかもしれない相手と、本当に模擬戦なんかできるのか？

もしかしたらドイツのお偉いさんの方々は、無理を言っただけで来た俺に大層お怒りなのかもしれない。だから俺を徹底的にいたぶるつもりなんだ。……だとしたら、泣けるね。

「流石に専用機対汎用機では勝負にならないので、そこは調整してお互い同一の汎用機を使用します。ああそれと、非常に申し訳ないのですがこちらのパイロットの情報は伏せさせて頂きます」

……まあ、情報を伏せるのは仕方ない処置だろう。漏らすつもりはないが、「ドイツの　さんは××使うとき　するクセがあるんだよお」なんて、知られて困るのはドイツ軍だけだ。

問題はお互い同一の汎用機を使用する、ってトコロだろうか？ 簡単に言えば実力差が最も顕著に現れる試合形式、ということになる。

模擬戦と言っても、勝負である以上は勝ちたい。だが、相手と自分とではどう考えても力量に差がある。刀の振り方だけ教えてもらって幕さんと対戦するようなものだ。

「ふふつ、大丈夫ですよ。誰も貴方が勝つとは思ってませんから」
かちん。

深刻そうな顔をしてる俺を氣遣って言った悪気のない台詞だといふことは分かるのだが、何故だろう。無性に腹が立った。……これは、一矢報いないと。

30分後。

俺は、ラファール・リヴァイヴに乗り相手と対峙していた。

この機体を選ばれた理由は「IS学園で行う模擬戦と可能な限り近い条件で行う為」だそうだ。

搭乗者との経験差が酷すぎる時点で近い条件もへったくれもない気がするのだが、今日一日ずっとこの機体を利用していた俺としては非常にありがたい。

何せ、さっきまでの感覚と同じ感覚で機体が動いてくれるんだ。別の機体だったら、感覚を掴んでいる間に試合が終了してもおかしくはない。

気持ちを切り替え、相手を見る。

相手から、独特の緊張感が伝わってくる。顔を隠しているの誰だか分からないが、どうやら手加減はしてくれなさそうだ。

足が震える。武者震いだと信じたい。

汗がつくと顔の輪郭を伝い、床に落ちる。

喉を生唾の通る音がゆっくりと聞こえる。

体の芯から指の先まで、全てを使って相手を見る。

そして　　鐘は鳴った。

くそっ、避けられた!?

先手必勝とばかりに俺が撃ったアサルトライフルの弾は、敵がい

る場所へしつかりと飛んで行き、……そして、虚しく空を切った。
続けてこちらにも移動しつつ相手を狙い打つが、その全てを相手に
かわされる。

アサルトライフルを一度仕舞い、ショットガンを取り出し撃つて
みるが、やはり同様にかわされてしまう。

機動が読まれている？

手加減なのか、相手からはまだ一度も攻撃が来ていない。

来ていないから撃つ、撃つ、撃つ。

そして全てが回避される、回避される、回避される。

駄目だ、やはり読まれている！ このままじゃじり貧だ！

撃てば撃つほど弾の数が減ってゆく。弾がなくなった時、相手か
らの猛攻を自分は避けられるか？

……無理、だな。

相手の動きを見れば、熟練のものであることは分かる。今でこそ
回避しかしていないが、攻撃に転じられたら自分には避けきれない
だろう。

オルコット嬢が対一夏戦で使用したような「撃ちつくしたブラフ」
も一瞬だけ考えたが、汎用機である以上それも難しそうだ。相手は
多分、装備を把握し切っているだろう。

つまり、単純に狙っては撃ちまた狙いを続ける今の状況が続いた
ら、確実に負ける。

そこまで判断できれば話は早い。とりあえず銃を仕舞い近接ブレ
ードを呼び出すことにする。

ドイツ某所。

とある少女が、これまたとある研究員と通信していた。

「クラリツサが、まだ一度も攻撃をしていない？」

『はい。ある程度戦闘データを出したら攻撃に転嫁、機動のデータ

も取り終了というプランで進める予定だったのですが」

「模擬戦の開始と、クラリツサの被ダメージ量は」

『開始が15分前、被ダメージ量は73です』

少女は、何か悪い夢を見ている気分になる。

クラリツサ……クラリツサ・ハルフォーフは、自分の隊では2位の実力を誇る。自分でさえ、確実に勝てと言われて実行できる自信はない。

それを、クラリツサ側が多少の手加減をしているとは言え、相手は優位に戦闘を進めているのだ。

しかも、その対戦相手はIS搭乗時間10時間にも満たない初心者だと聞いている。普通であれば、15分もすれば勝敗が決しこそすれ互角以上の戦いなどはないのだ。

「……映像をこちらに繋げるか？」

『少々お待ちください……大丈夫です、繋がりますね』

画面の向こうで研究員の側がガサゴソと準備し、所持していた端末に映像が鮮明に表示される。

「ふむ……む、んな、何だこれはっ!？」

そんな素っ頓狂な声を出したのは、映像を見始めて10秒も経たない時だった。

戦闘開始から20分。

彼は剣を投げ、ショットガンの弾を10分で撃ちつくし、その後ショットガンで相手を殴っている。

相手は表情こそ変えていないが、確実に焦っていることが分かる。それはそうだ、ブレードは近接して切るものであるし、銃は中距離以上から撃つものなのだ。

セオリーの、真逆。

普通に銃を乱射しても何一つ変わらないことを悟った彼が考えた

のは「相手の意表を突き続けられればいい」ということだった。

しかし、特殊な武装がある専用機ならともかく、汎用機では武器そのものに意外性を持たせることが出来ない。

ならどうするか。武器自体が普通なら、武器の使い方を変えてやればいいのか。

例えば、使い方を逆にしたり。

殴って曲がって撃てなくなっちゃうと勿体ないから、ショットガンは撃ちつくしたけどね

ブレードを投げた時そこに誘導するようにショットガンを打ち込んでいくと、ブレード側に誘導されるがブレードには当たりたくない為、先程までより相手は大きく回避行動をとる。

そこで残りの弾を撃ちながら距離を縮めてゆき、近接に成功したら銃身で相手を殴りつける。

10分で武器を2つも無駄にしたが、自分より先に相手にダメージを与えることに彼は成功した。

そして、開始から30分が経過。

流石に、相手も軍人である。一度意表を突かれ多少冷静さを欠きこそしたが、再度距離を取られ現時点では防戦一方となっていた。

そもそも、武器を無駄にするということは、即ち相手に警戒すべき攻撃パターンを減らさせることと同義。

簡単に言えば、相手はもう「ショットガンと近接ブレードを警戒する必要」がないわけだから、先程より随分行動がしやすくなったのと変わらない。

「くっ！」

相手は、今の自分にはもう使えないショットガンで自分を狙ってくる。避けられるものは避けているとはいえ、着実に被弾しダメージを被る。

既にシールドエネルギーは半分を切っていた。

「何かないか!? 逆転を狙えるような強烈なやつ!

試合前に選択した後付装備を含め、武装は全て試した。数発当たりこそしたが、多分相手のシールドエネルギーはまだ3/4は残っている。

相手が攻撃に集中している時に弾を撃てば相手にダメージが入るが、相手の攻撃を避けながら撃つことにまだ慣れておらず、結果として自分の喰らうダメージの方が大きい。

作戦を浮かべては切り捨て、切り捨てては浮かべまた切り捨てる。瞬時加速から接近戦を仕掛けるか? 否、近接ブレードはさつき投げた。殴ってもいいが、何度も奇襲が成功する相手ではないはずだ。

策がないのなら、とりあえずライフル片手に乱射を試してみるか? 否、高速で狙い続けても避けられたんだ。適当に撃って当たるとは思えない。

「くそっ! 何かないのか? くそおっ!」

何度も武装を確認し、頭の中でシミュレーションを反芻。

一夏がセシリア戦で見せた時のように、一次移行を終えていきなり強化されることもない。

専用機対戦のように、武装や機動の差から攻撃を繰り出すこともできない。

そういえば、まだ両手に銃を持った攻撃はしてないな

一瞬、そんな考えが脳によぎる。

馬鹿か、一丁で照準を合わせて撃つのがやっとだったんだぞでも、オルコット嬢は片手にライフルを持ってしっかり一夏を狙っていた

オルコット嬢は両手持ちはしてない

頭の中で自問自答。肯定要素を挙げては否定要素で潰していく。

してないだけで、できなかつたかどうかは分からないじゃないか

あくまでオルコット嬢の話だ。俺が出来るかどうかは別問題なら、出来るかもしれないってことだ

出来ないかもしれない

やる価値は、ゼロか？

最終的に出た脳内の肯定意見は、反対意見を脳に生み出させなかった。

「ゼロじゃあ……ないな！」

叫ぶと共に、両手に武装をコールした。

良く言えば規格外、予想外、悪く言えば無茶苦茶。

少女が画面越しに見る少年の戦闘スタイルは、まさにそういうものだった。

セオリーを無視し、発想で実力の差を覆す。先程は銃身を槌として扱ったかと思ったら、2丁のライフルで相手を撃ち相手より自分の与ダメージ量が上回るように立ち回る。

勿論、普通なら卓越した射撃センスがなければ出来ないことのはずだが、先程から段々と命中率が上昇しているように見える。

射撃、射撃、射撃。全弾撃ちつくす勢い。

明らかに、それはIS初心者のおっかなびっくりした動きだとは思えないものだった。

これは、学園に行く目的が一つ増えたな。

画面の向こうの少女は、多少。ほんの多少だが、口元に獰猛な笑みを見せた。

9 第2回全国きよとん選手権

『模擬戦終了。ISを解除し、出口までお願いします』

結局、迷っている間の被ダメージの差を覆すことが出来ず、相手のシールドエネルギーを2/5程度まで削った所で俺のシールドエネルギーが尽きた。

実力の差を覆そうと奮戦したつもりだったが、最後にはそのシールドエネルギーにすら気が回らなかった完敗である。

火照った顔を手ではたばた仰ぎながら、俺は出口まで歩いていった。

「な、なんだこれ……？」

訓練所を出た俺を待っていたのは、耳を裂くような大歓声だった。それはもうスーパースターが来日した時の空港みたいな感じ。ごめんちよつと盛った。

朝から付きっ切りで俺を調べていた、落ち着いた風に見えた研究員の人も、何故だかおおはしゃぎしている。狂乱するキノコでも喰わされたんだらうか。それはご愁傷様だな。

というか俺、負けたんだよな？

主役が出口より登場した。

研究員一同はもうおおはしゃぎである。

何せ、初戦闘であのクラリッサ大尉相手にここまで善戦を繰り広げたのだ。これがテンションを上げずにいられるだらうか。

当初の予定では、模擬戦は大体20分以内で終了する予定だった。彼の攻撃データ、好む戦法、機動。それらを引き出してもらった上で終了。誤算のないように、大尉には越界の瞳まで発動して貰っていた。

その上で彼は序盤クラリツサ大尉相手に回避行動しか取らせず、先手を打ち、最終的にシールドエネルギーを半分以下にまで削ったのだ。

彼が今後有名になることはまず間違いないだろう。現時点でも男性IS操縦者として有名だがその比ではない。

言うなれば、特出した才能だ。

その時、ドイツは確実に一歩有利な立ち位置から交渉できる。

今更ながら、彼がドイツに専用機の作成を依頼してくれた事に感謝した。

上層部からは既に、軍に引き入れられるなら引き入れると通知が来ている。IS学園所属なので現時点では無理だが、3年後彼には積極的なアプローチをする必要がある。

彼の詳細データを纏めながら、私は漠然と彼の専用機について考えていた。

戦闘スタイルは射撃軸の奇襲。苦手距離はなく全方位全距離に対応可能。

さあ、今日から徹夜だ。

「私が昨日対戦相手を務めさせて頂いた、クラリツサ・ハルフォーフです」

「……はい？」

翌日、渡独より3日目、空港。ホテルからずっと護衛してもらっていた女の人にそんなことを言われても、俺はきよんとする以外

何も出来ない。

「ええっと……、確か個人情報には伏せての対戦だったはずなんですけども」

そう。昨日戦闘前に研究員の人に言われていたことだ。

「情報保護の為、相手の情報は伏せさせていただく」と。

「上層部の意見が変わったんですよ。貴方を、ドイツ軍に引き入れるように動けて」

ちよつと宇宙語が聞こえた。いくら町内会で有名な翻訳家みつちやんである俺にも、いまいちよくわからない発言だった。

「男の操縦者っていうのは、もしかして初心者でも珍しければ軍隊に入れるんですか？」

冗談っぽく言うと、今度は相手がきよとんとする。何だ、俺は全きよとん選手権にでもエントリーしてたのだからか。優勝商品は何だ？

にしてもハルフォーフさん、流石第一回優勝者のきよとん具合だ。言葉が出てきてない。

言葉を返さないハルフォーフさんに、俺は言葉を続ける。

「だって昨日の戦闘、俺は手加減された上で最終的に半分ちよつと削った所で負けちゃいましたよね。目をつけられる要因が見当たりません」

「それは本気で仰ってるんですか？」

本気も何も、事実じゃないか。何でそんなにおかしな顔をするんだろう。

「ふつう、初心者っていうのは剣を相手に投げつけながら銃で誘導したり、銃身で相手を殴ったり、2丁の銃で相手を撃ちぬいたりはしませんよ」

そう言っただけハルフォーフさんは苦笑する。つられて俺も、何故だか苦笑してしまった。

「つまり貴方は将来性を期待されているんですよ。入隊の話、もしよかったら考えておいて下さいね？」

将来性。そんな大層なモノが俺にあるのかどうかは分からないが、どうやらハルフォーフさんは冗談を言っているわけではないらしい。自分が期待されている。初めての事に少し重荷を感じつつも、どこか妙に小恥ずかしい。

「分かりました、考えておきます」

多分類を少し赤く染めながらそう答えると、ハルフォーフさんはくすりと笑った。

なんだろう？ くすり、と笑われただけなのに少し怖い。身の危険を感じる気がする。このままだと襲われるような気がするんだ。

「そ、それじゃあそろそろ時間なんで。失礼しますね」

「あ、最後に一つだけいいですか？」

良く分からない危険から逃れようとすると、それを見越してかハルフォーフさんは思い出したかのように尋ねてくる。

「今回、専用機を製作するにあたり、貴方はドイツに依頼すると即答したと聞いています。よければその理由をお聞かせ頂けませんか？」

「えっと、そのー……黙秘権は？」

「ありません」

即答かよ。

少し恥ずかしいんだけど、言わなくちゃ駄目なんだろう？ ハルフォーフさんの顔を見る限りだと興味本位に見えるけど、もしかしたら軍からの命令なのかもしれないし。

「……簡単な話ですよ。ドイツに初恋の相手がいまして、色々ドイツと繋がりが出来たらその子に会えるかもしれない、って思っただけなんです。恥ずかしい話ですよね」

言ってしまった。顔一面真っ赤っ赤な気がする。というか顔が熱いし、本当にとても赤いのだろう。

「成程、してその名前は？」

「ひ、秘密です！」

「あら、いいんですか？ 軍の情報網を使えば、もしかしたらその相手を調べることができるかもしれませんよ」

ぐっ。なんちゆう人だ、この人は。悪魔か。悪魔なら天使はどこにいるんだ。どこにもいないぞ。職権乱用悪魔めっ。

駄目だ、これは悪魔の囁きだ。負けちゃダメだ、秘密を突き通さないで駄目だ、飛行機に逃げ込め

「心配しなくても、恩を売って無理矢理軍隊に引き入れようなどとは考えていませんよ？」

うん、逃げるとか無理

「……ラ」

「ラ？」

「ラウラっていう名前の子です。銀髪で、少し小さくて、後俺と同じ年だったはずで、赤目で やばい、もう離陸時間だ！ し、失礼します！」

結局、最後まで顔を紅潮させたまま、ハルフォーフさんの顔も直視できずに走り去る。

彼女の顔がその日一番きよとんとして それはもう、ここで本当に全国きよとん選手権が本当に開催されていたのであれば余裕の優勝が出来るぐらいに いたことなんて、それと反対方向を向いていた俺が知ることなど、できるはずもなかった。

「それで、彼は軍へ引き入れられそうか？」

「ええ、ある人を説得できれば、とてもスムーズに彼は入隊してくれると思いますよ」

基地のとある一室。クラリツサは少女と話していた。

「ふむ、お前がそう言うのであればそうなのだろう」

クラリツサのことを少女はとても信用していた。信用というより、少女が軍の中で唯一心を許している相手がクラリツサだった。

「それで、何故そう考えた？」
少女は尋ねる。

昨日の戦闘の映像。彼は初心者らしく動きこそ未熟であったが、鍛え上げれば確実に心強い戦力になる。

出来ることであれば、自分が隊長を務めるIS部隊　シユヴァルツェ・ハーゼに引き込みたい人材だった。

「まず1つが、彼をドイツ軍へ勧誘した時の反応ですね、満更でもないといった表情をしていたので、悪印象は持っていないと思われ
ます。もう1つが　」

「もう1つが？」

「彼はドイツに初恋の相手がいるらしいのですが、その人物の特徴を聞いた所、どうもドイツ軍のある人物とぴったり当てはまるので
す」

聞いて多少呆れたが、それと同時に「説得すべきある人」も理解
した。

好意を寄せる相手を探し出して、その人物にドイツ軍から離れる
つもりがないことを明言させればよい。

「ふん、軟弱な……。それで、その相手とは誰だ？」

軍隊である以上色恋沙汰のようなものは避けたい。少女はそう考
えている。

誰か1人に感情移入してしまうと、その1人に気をとられ力を出
せなくなってしまうからだ。

自分の尊敬している　いや、今は関係ないか。

「まず、体格は少し小さめです」

「ふむ」

「それで、彼とは同い年です」

大体絞れた。15、16歳で少し小さめの女性と言えば多分IS
関係者だろう、彼が男色家なら別として。

しかし、不審に思うことが1つある。何故クラリツサは、すぐに
誰であるかを言わないのか。

「そして、銀髪と赤目です」

「銀髪に赤目か……それで？」

銀髪赤目なんていただろうか？ 眼帯をつけた少女は、首を傾げる。

「で、名前はラウラと言うそうです」

「成程。銀髪で、赤目で、体格が小さく、15歳もしくは16歳で、名前はラウラ　はあっ!？」

そこにいた銀髪の小柄な少女　ラウラ・ボーデヴィッツは、クラリッサの言ったことを全て理解した瞬間、昨日の模擬戦映像を見始めた10秒後よりも数段大きく、素っ頓狂な声を出したのだった。

9 第2回全国きよとん選手権（後書き）

やっとラウラの名前が登場。まだ1巻半分ぐらいしか進んでない、というところ少し遅い気もしますね。

10 極東の猿、襲来

うつむ。流石に今日ぐらいは休ませて貰うべきだったかもしれない。

ドイツを出たのが午前10時、日本とは7 8時間差があるからその時日本は午後5 6時ぐらい。

ドイツから日本へは大体11時間の航空時間があるので、日本に到着したら4 5時。

空港からIS学園まではそれほど時間を取らない為、その日からすぐ授業に参加できると豪語していたのだが……

ドイツでの疲れが、今になってドツとのしかかってきたのである。肩に頭に足に腕に、今まで知覚を忘れていたかのごとく急激に。

機内で寝ていた為時差ボケはないし、目もしっかり覚めているのだが、逆にそれ故自分の体に来る疲労をすっかり認識してしまう。

「ああ、俺疲れてるな」なんていう、バリバリ働いてるおじさんみたいな小言を口にしてしまう程だ。

でも、約束を破るわけにも行かないしなあ……。

母さん、俺は約束をきちんと守るいい子に育ったよ、だから褒めてくれ。

「ちょっとそこのアンタ。コンビニで水買ってきてよ」

「は？」

7時頃。IS学園まであと少しという場所で、俺は知らない女に声を掛けられていた。何この不細工。

「は？ じゃないでしょ。すぐそこにコンビニがあるから、ペットボトルの水を買ってきなさいって言うてんのよ」

「すぐそこなら自分で買いに行けばいいだろ、バカじゃねえの？」

別段気にせず先に進もうとするが

「はあ！？ 何、アンタ男なのに私に逆らうわけ！？」

ああ、コイツはそういう女ってことか。

世界の現状として、ISを使えるのが女だけであった為、女尊男卑が常識として浸透しつつある。

国としては優秀な女性を育てることが即ち国力となるわけで、女性には男性より立場が上の存在、という認識が今や当たり前。

映画のレディースデーの増加、女性限定割引券、エトセトラだから、こういう馬鹿みたいな女も当然出てくる。

つまり、男をただの小間使いとしか思っていないような女だ。

俺は、本来の所ある程度の女尊男卑は普通だと思っている。ISが出来るまでが男尊女卑過ぎた、とさえ思っている。

が、これは別だ。男はあくまで自分が守りたい相手を守るべきであつて、決して男だからイコール女の手下となるような存在ではないはずだ。

というか、女性の社会的立場向上を促進させているのはISに乗っている女性であつて、こういう厚顔無恥な女じゃないだろ。

更に言うなら、ISに乗れるから偉い構図になるのであれば俺はこの女より偉い構図になる。道端ですれ違った女なんぞに、パシリをさせられるつもりは到底ない。

「こっちは今から学校なんだよ、勝手に自分の立場が上がったと思いきんでるアホな女の相手してる暇はねーの。太ってるからって面倒臭がつてないで自分で買いに行けや」

「何コイツ！？ ふざけんじゃないわよ！ 女は男より偉いの、アンタそんなことも知ら」

言葉を遮る。

「ああ知ってるさ。女性はISに乗れて、男性はISに乗れないから、その差で女性は男性より優遇されてるんだよな。で、アンタはISに乗れるのか？」

「はあ？ 何言ってるの？」

顔をしかめる。自分の言うことが全て正しいと思ってるかの如き態度。ああ、もうイライラするな、酒持って来い酒！ あ、俺未成年じゃん。

「だから、女性が優遇されている理由のISにアンタは乗れるのか、って聞いてんだよ」

「アンタにISの何が分かるって言うのよ！ 絶対乗れないアンタと違って、私なら適正はともかく乗れるんだから！」

お前にISの何が分かるって言うんだ。乗りこなせるかどうか分からないアンタと違って、俺なら確実に一定以上は乗りこなせるんだ。言うのはやめておいた。

自分の学生手帳でも見せれば一発で黙るんだろうが、それでは駄目な気がする。

そもそも、それでは自分の特権みたいなものを振りかざして相手を黙らせようとすると、目の前の女と変わらないように思う。

「じゃあまずはISに乗れるようになって、自分が優遇を受けるに見合う努力をしてから男に威張るんだな。ああ、ちなみにISは太ってる奴には乗れないから気をつけるよ」

「はあ！？ 自分に出来ないことを人に言ってるんじゃないわよ！ 男がISに乗れない以上女が偉くなるのは当然じゃないの！」

……いや、俺出来るんだけどね。笑いを堪えるので精一杯だ。

「うぜえな、人に威張れるのは、人に威張れる立場に上り詰めるまで努力した人間だけだ。お前みたいな、体を絞る努力すらしてねえ奴に言われることなんて何一つないんだよ、とつとと消える」

言うつと、さつきから赤かった相手の顔が更に赤くなって行く。流石に面倒になったから無視して歩き出したが、あいつには日本語が通じないらしい。

「待ちなさいよ！」

待つわけがない。俺と話してる間に、コンビニとこの地点から2往復は出来ただろうに。

「待ってって言うてるでしょ！」

キイキイ五月蠅い。オルコツト嬢が俺と一夏のことを極東の猿と表現していたが、本当の極東の猿は多分コイツだ。

「五月蠅え、見世物小屋に帰ってる」
「パシャッ。」

振り返りざま罵声を浴びせると、それを言い終わる前に、いきなり携帯で写真を撮られた。

「アンタの写真と情報、全部ネットに流してやる！」
目の前にいる女の無知ぶりに、今度こそあきれた。

……いやあ、散々ニュースになったんだし、俺の顔ぐらいもうネットに流れまくってるんじゃないの？

気にせず俺は、ちゃっっちゃか歩いていくことにした。

「つてなことが今朝あったんだ」

「そりゃあ、またとんだ災難だったねえ」

久々の寮。帰ってきた俺が異常に疲れている理由を聞いてきた転寝さんに、俺は今朝あった出来事を伝える。

本来この疲れはドイツでの疲れが殆どを占めるのだが、それを伝えると必要以上に心配されそうだから伝えないことにした。

「全くだ。折角ドイツでISも操縦して上機嫌で帰ってきたっていうのに、一気に興が削がれちまったよ」

手を広げてやれやれというようなポーズを取る俺に、転寝さんは手を合わせてご愁傷様、と言ってくる。いや、まだ俺は死んでないぞ。

「おお、海月じゃん。いつ帰ってきたんだ？」

飯を喰おうと久々の食堂へ行くと、一夏、オルコツト嬢、篝さん

が既に食事を摂っていた。相変わらず早起きだな。

別に一夏が早起きというわけではないんだが、篤さんが早起き。それに合わせて一夏が起きて、更にそれにくっ付こうとオルコット嬢が早起きしただけなんだろう。原因なんてどうでもいいさ、早起きはいいいことだ。

「今朝の4時頃日本に到着して、直で今朝帰ってきた」

バシッ！

「帰ってきたのならまず最初に私に一報入れんか、馬鹿者」

織斑先生が出席簿で俺を叩きながら言ってくる。相変わらず素晴らしい角度からの丁度良い速度のクリーンヒットですね。

毎回毎回人の頭をバシバシ叩くのは止めて欲しいものである。俺は初めて知った無駄知識の判定に使われるへえへえ言ってるボタンとでも思われているのだろうか。

バシッ！

「戸鉄、今お前非常に馬鹿みたいなことを考えていただろう」

「いえぜんぜんかんがえてませんでしたよ」

「ほう……」

バシッ！ バシッ！ バシッ！

「すいませんでした僕が悪かったです許してください」

「それでいい。今後もお前は国外へ行くことが多くなる可能性は十分あるんだ、以後気をつけるように」

くおお……頭が痛い。勿論病氣的な意味ではなく外傷的な意味で。「それで、お前授業はいつから参加する予定だ？ 疲労が溜まっていくようであれば今日一日ぐらいは休ませてやるが」

今日一日は休んでもいい、というのは結構魅力的な響きだ。織斑先生、一体いつからそんなに優しい先生になったんですか。

さつきから何度も言っているように、体の疲れが取れてないから休めるなら休みたい。朝だつて休めばよかったと思つたし。

「いえ、流石にそう何日も個人的な理由で休むわけにはいきませんし、今日からは出席しようと思います」

けど、もう合計で3日間も授業を受けていないわけだし、別段どこかが痛むとかいうわけでもない（勿論、今叩かれた頭が酷く痛いのは対象外である）。

このまま休んだら「ちょっと気だるいからサボるわー」と言っているも同然だしな。

「そうか」

それだけ聞くと織斑先生は去っていった。結果論だが俺は頭を叩かれただけな気がするぞ、おお痛え。

転寝さんもさ、去ってから大丈夫か聞くぐらいなら織斑先生を止めてくれればよかったのに。……無理か。俺も止められると思えないや。

余談だが、今朝俺をパシろうとした女がネットに本気で俺の写真を公開し、俺を俺だと知っている人間から思い切りバッシングを喰らった上に、IS学園から個人特定されてちよーっと怖い目に会った、ってというのは後日知ったことである。

11 仏の顔も1度まで

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット。試しに飛んでみせる」

ドイツから帰ってきたその日の授業。基本的な飛行操縦はあつちでやったなあ、なんてしみじみ思い出す。

よく考えたら、専用機持ちはこういう所で一般生徒より面倒になるのか。現時点で専用機を持っていなくてよかった。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで1秒とかからないぞ」
今、一夏は確実にどうでもいいこと考えてたよな。

いつも一夏を見ていると思うのだが、こいつはいつも考えていることが丸々筒抜け。表情に「今俺はバカなこと考えてますよ」とか「俺は今心配してるんですよ」とかそのまんま書いてある。

裏表の無い真っ直ぐな性格は別にいいんだが、少しぐらいは隠す努力をしないのだろうか。

一夏の体の周辺を輝く粒子が包み込み、IS『白式』が展開される。そして、一夏の体が宙に軽く浮く。……いつも思うが、ISを展開する所って綺麗なんだよな。

オルコット嬢は一夏がどうでもいいことを考えている間にIS『ブルー・ティアーズ』を装備し終わっていた、ここらへんは流石代表候補生と言っべきか。

「よし、飛べ」

織斑先生が言うのと2人の体が空へと舞い上がっていく。オルコット嬢が一足早く、一夏がそれに続く形で。オルコット嬢の方が早い。「何をやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」

うわあ怖い。経験の差でスペック差がひっくり返る以上現時点ではオルコット嬢の方が早いのは当たり前だと言っに。弟にもう少し優しい言葉をこの人は掛けられないのだろうか。

いや、急上昇はドイツでやってみたら以外とすんなり出来たけど

ね。『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』でと研究員に言われたが、個人的には『自分の前方の空気の膜を割き進むイメージ』だと感じた。

細かいイメージは個人個人で違いがあるらしいので、本人に合っ
てれば別にどんなイメージでも問題ないらしい。

それにしても、空の上にいる2人は楽しそうだ。詳しくは見えないが、どこことなくイチャついていているようにも見える。

あ、今オルコット嬢が笑った。……ように見える。
くそ、青春を謳歌しやがって。

「織斑先生、この出てるラファール・リヴァイヴ使ってもいいですか」

「いきなり何だ」

「いえ、今無償に一夏のことを撃ちたくなってる」

ニコリと笑って答えると、織斑先生はニヤリと笑う。ちょっと怖い。

「許可しよう。だべってばかりで降りてこないあいつらに灸を据えてやれ」

言われると同時に、俺はラファール・リヴァイヴに乗り込み、ライフルを両手に0.2秒ほどで展開。照準を合わせ2発撃つ。勿論当たる。

他のことに気をとられている人間に当たらないわけがない。

『のあつ!?!』

聞こえる一夏の声。予想外の急な攻撃に対応できなかったらしい。
プライベート・チャンネル
個人間秘密通信はまだ使い慣れていないので、こちらも急上昇して一夏と同じ位置まで上がる。

「何空中ですつと話しこんでるんだよ、授業が進まないだろ」
言って銃を構える。と同時に

「一夏っ！ いつまでそんなところにいる！ 早く降りて来い！」
通信回線から篝さんの怒鳴り声が聞こえる。ハイパーセンサーで

確認すると、篝さんが山田先生のインカムをひったくって、特徴のポニーテールを逆立てんばかりの形相で怒鳴っていた。

篝さん篝さん、いくら怒っても教師の持ち物を勝手に取っちゃいけないと思うんですよ。あ、やっぱり織斑先生に叩かれてる。

「ほら、授業が進まないといライラしてああいうことになる」

篝さんは授業が進まないから怒っているんじゃないんだろっけどね、と心で付け足しておく。どうせ言ってもこの男は理解しないだろうし。

「織斑、オルコット。あと通信が苦手だからと勝手に急上昇した戸鉄もついでだ。急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から10センチだ」

「了解です。ではお二方、お先に」

そう一言掛けて、オルコット嬢は高速で地表まで到達する。地表に傷跡が付いていないところを見ると、どうやら完全停止も成功したらしい。お手本のような動きに、思わず口笛を吹いた。

「うまいもんだなあ」

「流石代表候補生って所か。じゃあ一夏、俺も先に行。おい!？」

一夏は、俺に声も掛けず既に急降下を始めていた。とんでもないスピードで、あっという間に地上へたどり着く。そして

ズドンッ!!

大きな衝突音が辺りに響く。一夏はグラウンドに、まるで宇宙人が付けて行ったミステリーサークルのような穴を作っていた。つまり墜落していた。

周りの女子が、吹き出すのを堪えてるぞ、一夏。なんとかしろよ。あ、転寝さんが最初に決壊して声をあげて笑い出した。あーあー、折角綺麗にウェーブがかかったセミロングをバラバラにしちゃってるし。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

失敗したから当然と言えば当然か、それでもやっぱり織斑先生は

一夏に容赦が無い。愛の鞭を通り越してあれは愛のハンマーである。あんな穴ぼこ開ける一夏も一夏なんだけどね。

おっと、俺も降りなければ。イメージはマニュアル通りロケットブースターを付ける感じで　　バカ、一夏そこは俺の着陸目標地点だ！

一夏がいたので、俺は途中で急停止せざるを得なかった。そして、その結果

「お前はお前で何をやっている。地上に激突しなければいいと言うものではない」

俺が停止した位置は、地表2メートル50センチの地点だった。ちょうど一夏の真上である。

「し、しかし一夏が……」

「織斑が着陸目標地点にいたと言うのなら、瞬時に目標地点を変えるぐらいやってのける」

「……はい」

そんな高度な動きをすぐにやれと言われても勿論殆どの生徒はできないと思うが、流石織斑先生。恐ろしいぐらいのスパルタだ。

「結局成功させたのはセシリアだけか。失敗した2人は授業終了後、グラウンドの片付けをやっておくように」

俺が再び一夏を狙い撃ちしたのは、言うまでもなかった。

「織斑、武装展開をしろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」

「は、はあ」

何とも気の抜けた返事である。グラウンドの片付けがよっぽどシヨックだったのだろうか。俺の方がシヨックだというのに。

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし、でははじめろ」

一夏がこちらを向いたので、俺はその場を退く。多分、一夏のイメージは正面への武装展開なんだろう。

1秒かかるか掛からないかといった所で、一夏の唯一の武装《雪片式型》が表れた。そんなに時間が掛かるものなのか？

「遅い。0.5秒で出せるようになれ」

うん、やっぱり遅いんだろう。一夏は不本意そうな顔をしているが、展開に時間を使いすぎていたら相手に隙を突かれてしまう。

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

オルコット嬢がかなりの早さで《スターライトMk-?》を展開する。

個人的には参考になりそうな部分があったので見ていたかったのだが、一夏が「なあ」と横槍を入れてきた為そちらに集中できなかった。

「何だよ？」

「海月、さっきから俺を撃つ時の武装展開むちゃくちゃ早かったよな。あれ、どういうイメージで出してるんだ？」

こいつは、何を言っているんだろうか。

ドイツで2日目の休憩時間にされたのと同じような質問に、首を傾げる。

「どういうイメージも何も、銃を構えるイメージ以外に銃を出すイメージなんてないだろ。それに、オルコットさんと違って俺は弾まです装填するのにもう少し掛かるし」

「いや、日常的に剣を握ったり銃を構えたりすることなんて無いだろ、どうイメージしてるんだよ？ ほら、セシリアだって」

見ると、オルコット嬢は近接ブレードの展開にかなりもたついていて拳句、武器名を叫んでの展開。

「日常で使わないものを、何であんなに簡単にイメージして展開できたんだ？」

何でって言われてもなあ。

日常で使わないっていうのは確かだが、イメージすればできただけだし。正直、コツも何も無い。

「全く……戸鉄！ 武装を展開しろ！」

織斑先生にいきなり呼ばれて、俺は焦って右手に近接ブレード、左手にアサルトライフルを同時に展開してしまった。

そして更に、両手の武装を消して今度はショットガンマシンガンを再び同時展開。

「イメージさえ掴めばこのような高速展開が可能になる。要は慣れだ、覚えておくように！」

あり？ 失敗したかと思っただけ、今ので良かったのかな。なんかオルコット嬢も啞然としてるし。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。先程行った両名は迅速にグラウンドを片付けろよ」

うげ、そうだった。俺は一夏とグラウンドの片付けがあるんじゃないか。言われるまで気を取られて忘れてたぜ。

誰か手伝ってくれないだろうか。一夏が振り向くとパイと横を向いた篤さんは無理そうだし、布仏さんとオルコット嬢はもう姿が見えない。こんな時に限って何で布仏さんは素早いんだ。後は……

「戸鉄君？ ISに乗る時のコツとか教えてくれないかな？」

ナイスタイミング！ そこには爛々と目を輝かせている転寝さんが。

本来なら力仕事は男がやるべき作業だが、疲れている俺に選択肢など無い！

「そうだな、そのクレーターを埋めるのを手伝ってくれたらいいよ」

「おいおい、女に力仕事させるなって。乗る時のコツぐらいタダで教えてあげればいいじゃん」

……この横槍である。

全く、一夏ってやつは。俺が今朝帰りで疲れているってことを覚

えていないのか。今度、お前が疲れたってぼやいても気にせず倒れるまで訓練を続けてやるうか。

俺が一夏を三度狙い撃ちしたのは、勿論言うまでもなかった。

11 仏の顔も1度まで（後書き）

ちなみに海月の展開スピードはシャルよりは遅いです

12 早口風に、神出鬼没出席簿（前書き）

しんしゅつきぼちゅしゅっちえきぼー！

ズザっとしてパっとする感じです。

12 早口風に、神出鬼没出席簿

放課後。訓練場にて訓練機『打鉄』を1台借り、転寝さんにISの自分なりのイメージを説明していた時の話。

「なあ海月。俺にもそのイメージの仕方教えてくれないかな」

向こうの方で篝さんと訓練していたらしい一夏が、通信回線で俺に話しかけてきた。なんだか分からないがほとほと困り果てているといった風な印象を受けたので、とりあえず転寝さんと一緒にそっちの方へ行ってみたんだよな。

で、篝さんの説明を聞いていたわけだが。

「あ、あはは……戸鉄君、今の説明分かった？」

「い、いや全く分からん」

俺は転寝さんと苦笑していた。篝さんの説明は説明になっていなかったのだ。何だよ『シュツ、』といった要領でだな『つて。』

「何故分からんのだ！」

分かるかアホウ。

「いやあ、流石に篠ノ乃さんの説明は感覚的過ぎると思うよ。例えば人によって『くいっ』のイメージは釣竿みたいな物だったり手招きに近いイメージだったり、変わってくるんだからさ」

転寝さんがナイスフォローを入れる。ちなみに俺の『くいっ』のイメージは、ポーカーで掛け金を引き上げる時のイメージだ。うわーお、見事にISと何も関係が無い。

「そうそう、篝の説明は抽象的過ぎるんだって。先週から『ぐっ』とか『どんっ』とか、俺がイメージを掴むのがどれだけ大変だったか」

ああ、それはご愁傷様と言うほか無い。道理で一夏のイメージが余り上手くないわけだ。

本当なら一夏にもイメージを教えてやればいいのだが、篝さんの『邪魔するな私がやる私が教える』と言うオーラに押されて教えよ

うと進言できない。なので、

「まあ、俺は転寝さんと練習してるし、教え慣れてるわけでも無いから一夏は箒さんと頑張つてよ。箒さんも1つの擬音じゃなく、もうちょっと具体的な説明をすればいいと思うよ」

とだけ言つてその場を去ろうとする。転寝さんも空気を察知したのか何も言わず一緒に戻ろうとしたのだが

「……ではな一夏。具体的に言つと、ぐぐつとした後バツとする感じだ」

思い切りずっこけたのは、どうやら俺の隣も一緒みたいだ。

「なあ、君誰？」

一夏のクラス代表就任パーティーを行うという一夏、箒さん、転寝さんと別れて部屋に戻ろうとした俺は、異様に大きなポストンバッグを持った少女にその声をかけた。訂正、ポストンバッグがやけに大きいんじゃないか、少女が小さいんだ。

生徒を影からこっそりと覗いたり、辺りをキョロキョロ見回したり、何度もなくしゃくしゃの紙を広げたり。その少女の挙動が、やけに不審だったので、興味を持ってしまったのだ。

「誰、アンタ……って、アイツ以外に男子は1人しかいないか。ねえ、さつき一夏と話してた女って誰？」

いやに不機嫌そうに聞いてくる。先に質問したのは俺なんだけだな。

「一夏と話してた女って言われても……髪型とか、特徴はどんなだった？ で、君誰？」

「髪型はポニーテールで一夏を呼び捨てにしてた女」

どうやらこの子は非常に一夏にご執心らしい。知り合いだろうか？ そして君は誰だ。

「ああ、それなら箒さんかな。一夏と小1から小4だかまで同じ学

校だった幼馴染だよ。で、君誰？」

「ふうん……ねえ、総合事務受付ってどこ分かる？」

そろそろ名前を覚えてくれてもいいと思う。

「総合事務受付ならそのアリーナの後ろっ側。で、君誰？」

「アリーナの後ろ側ね、ありがと。それじゃ」

言って少女は去って行く。

結局誰だか教えてくれなかったが、会話で大体の予想は付いた。

少女は人の話を最後まで聞かない大雑把なタイプで、多分転校生で、そして一夏の知り合い。

女のことを不満そうに聞いてきたってことは、あいつも多分一夏狙いだろ。俺を恋愛的な意味で狙ってる人間も出てきてくれればいいのに。一夏は爆散しろ。

まあ、転校生ってことは明日にも噂になってるだろうから、その時にも聞けばいいか。

俺はそのまま部屋に戻るつもりで

何故か、食堂に足を運んでいた。結局一夏のパーティーが気になってしまったのだ。町内会で有名な野次馬みっちゃんとは、悲しくも俺のことである。

食堂ではオルコット嬢と一夏が握手をしていた。状況を見るに、どうやら写真撮影らしい。こういうのは、後ろに勝手に突入するに限るよな。

しかしちよつと待て、やけに人数多くないか？ 40人は突破してるように見えるぞ、確かうちのクラスは30人だったはずだ。

「それじゃ撮るよー。35×51÷24はー？」

一夏が2と答える。50÷25が2なんだから、そこに35を掛ける以上2は無いだろ。いや、状況から言って普通は2って言わせなきゃ部分なだけだよ。

「大体35×2で70ぐらいだな」

「アバウトだねー、正解は74・375でしたー」

パシャリ。俺は一夏とオルコツト嬢の写真に割り込む。というか、1組のメンバーは全員写真に入り込んでいた。この決断力を授業中にも生かして欲しいものである。

「なんで全員……というか海月!? 疲れたから部屋で休むって言うてたじゃないか」

ええいー夏黙れ。楽しそうな雰囲気醸し出していた貴様らが悪いんだ。俺は悪くない。

「あ、あなたたちねえっ!」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

そっだそっだ。せっかく写真を撮るなら俺は中央に写りたいタイプだ。嗚呼素晴らしいかなエゴイズム。

「お、貴方はもう一人のIS操縦者、戸鉄海月君じゃない! 何かコメント貰える?」

写真を撮った人がボイスレコーダーを出しながら聞いてくる。誰だかは知らないが、どうせ新聞部かそこらへんだろっ。

どうせ長つたらしいコメントなんて勝手に省かれるんだから、一言でビシッと決めるか。

「盛り上がるコメントの方がいいですよね? ……じゃあ、来年のクラス代表は俺が貰うから、一夏には覚悟しておいて貰います」

「お、いいねいいね! 2人より分かりやすくって私も記事が書きやすいよ! あ、私は2年の黛薫子。新聞部副部長ね。はい、名刺どうぞ」

「黛」でまゆずみって読むのか。俺はてっきりまゆずみなんて読み方させるなら眉墨っていう字しかないと思ってたぜ。

傍で一夏が「変わるのなら変わってくれ」と言わんばかりの情けない顔をしていたが、そっちに関しては完全にスルーさせて頂いた。

だって、俺まだ専用機持ってないし。

「さあ、取材も終わったんだしパーティーやろうぜえええ！」

テンションをハイにしていた俺は勿論、この後疲労で泥のようにもとい底なし沼のように眠るようになるのだが、勿論そんなことは意識の外に追いやっていた。

「戸鉄君、寝不足？」

「いや、8時間は寝た。……但し床でな」

翌日の朝。クラスに来てすぐ机に突っ伏した俺を心配して、クラスメイトが声を掛けてきた。心配してくれる人がいるというのは、ありがたいものであると再確認。

床で寝たっていうのは布団を敷いてとかじゃなく、学園初日と同じように床に倒れこんでつてことだ。

転寝さん曰く、

『そりや多少驚いたけど死んでるわけでもないし、今日は私もはしやいで疲れちゃったから』

との理由で布団に運んだり誰かを呼んだりはしてくれなかったらしい。そのうち、床で寝ても気付かず踏まれたりするんじゃないだろうか。怖いな。

普通に倒れて寝ても体の節々が痛いと言っのに、そこに踏まれたりしたら……考えたくもない。俺はマゾじゃないからな。

「ふーん、これで2回目じゃない？ 床で寝るなんて面白い趣味だね」

「ユカネリストと呼んでくれ」

勿論趣味じゃないが、ジョークだと分かっているので受け流しておく。

「そつえばさ、昨日の夜に転校生っぽい子と会ったんだが、何か知ってるか？」

「あつ、そうそうその話。確か中国の代表候補生らしいよ」

なるほど、昨日のは中国の代表候補生か。確かに、モンゴロイドの肌の色にしては少し日本人と雰囲気が違うと思っただが、納得だ。

「へえー、転入してこれるってことは結構強いんだろうな。ちなみに特徴は小柄でせっかちで一夏に興味を持っていた感じだったぞ」

結論から言うと……すまなかった。特徴はあくまでついでのつもりで、この後はどのくらい強いんだろう、みたいな話に傾くと思っていたんだが、一夏の名前にここまで過剰反応するとは思わなかった。

つまり。

「えっ！ えっ！ 織斑君狙いの転入生！？」

「知り合いかな？ それともテレビで見て一目惚れしちゃったとか！」

「これは織斑君が来たら早急に割り出さないと！」

こういうことである。今更ながら自分の軽い口を呪うよ、一夏本当に申し訳ない。

「おはよう。俺がどうしたんだ？」

「あつ、織斑君！ 今日転校生が1年のどこかのクラスに来るらしいんだけど、織斑君の知り合いかもしれないだつて。誰なのか知ってたりする？」

1人のクラスメイトが聞いた所で一齐に織斑に視線を集中砲火させる。あ、一緒に登校してきた篝さんとオルコット嬢は凄い形相だ。

全員が注目する中、一夏の口が出たのは

「いや知らん。この時期に転校生とは珍しいな。海月、知ってたか？」

拍子抜けな、こういう台詞だった。篝さんとオルコット嬢から安堵の息が漏れる。

「ああ、俺は昨日の夜受付までの道を聞かれたから、存在は知ってたさ。最後まで人の話を聞かずさっさと退散されたから、名前を聞けてないがね」

「ふーん」

「で、どうやら中国の代表候補生らしいぞ」

代表候補生。考えてみればうちのクラスに1人いたな。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

そう、この腰に手を当てるポーズが非常によく似合う、『ブルー・ティアーズ』の操縦者セシリア・オルコット。もうちょっとポーズにバリエーションをつけてもいいと思う。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろうか？ 騒ぐほどのことでもあるまい」

そんな興味が無いような素振りを見せたって知ってるんだぞ箒さん。貴方が、噂が気になってわざわざこっちの席に近付いてきたことを。海月は昨日会ったんだろ？ どんなやつだったか教えてくれよ」

嗚呼、女心の読めない奴め。お前が他の女子に興味を持ちたりしたら箒さんの機嫌が悪くなることにも気付かないのか ほら、どんだん顔が不機嫌になっていく。

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？ 来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そう！ そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが勤めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持っているのはまだクラスでわたくしと一夏さんだけなのですから」

クラス対抗戦、呼んで字のごとくこないだ決めたクラス代表同士によるリーグ戦。

何でも、優勝したクラスの生徒には学食デザート半年フリーパスが与えられるとかで、一夏への期待度は今凄く高いのだ。前からも勿論高かったけど。

俺は自分で作れるから別にいらんものだけど、クラスの団結が高まっているのにわざわざ水を差す必要も無い。

「俺はもう訓練機貸し出しを許可して貰ってるから、中距離以外の戦闘訓練はもうできるけどな」

勿論俺が一夏の訓練を手伝ったらオルコット嬢の恋路の邪魔をすることにになるが、これもフリーパスへの道のである。許してくれ。「あら、戸鉄さんはわたくしが一夏の訓練をするより、自分が訓練した方がよいと仰いますの？」

「そうとは言わないけど、オルコットさんの機体とばかり訓練するのもな。相手が中距離戦用の装備を余り持っていないなら、正直回避の訓練にしなければならないだろ」

「なっ……!!」

オルコット嬢から溢れんばかりの鬼気が伝わってくる。俺は当然のことを言っただつもりなだけだな。恋は人を盲目にするらしいが、一夏を絡めた恋は人を阿修羅にするみたいだ。

「宜しいでしょう、なら貴方とわたくしの、どちらが一夏の訓練を行うに相応しいか決めようじゃありませんか」

「決闘でもするの？」

「ええ、決闘ですわ！　今から織斑先生にアーリーナの使用許可を頂

きに――」

バシン！　バシンバシンバシン！
「もう来ている。チャイムはとづくに鳴っているぞ。クラス対抗戦のことで熱くなるのはいいが、語るのは休憩時間にしておけ」

非常にお痛い一撃を喰らって、オルコット嬢、俺、一夏、箒、その他興味津々と言った具合で俺達の周りを取り囲んでいた女子は涙目になりながら席に付くのだった。

クラスの扉の前に、一夏に挨拶しようとしながらもクラス内の熱い空気に気圧されて声を出せなかった転校生の少女がいたことなどもちろん誰一人として知らなかった。但し、織斑先生を除くが。

12 早口風に、神出鬼没出席簿（後書き）

鈴の登場イベントが…

13 ガールズネットワーク(前書き)

何で新種の付け睫毛の話とか誰誰が付き合ってる話とか一瞬で広がるんでしょね。怖いです。

13 ガールズネットワーク

「さて、放課後アリーナを使用したいという話だったな」

昼休み。オルコット嬢と俺は朝の件で織斑先生に呼び出され職員室に来ていた。ちなみに飯は喰ってないから、すごく腹が減っている。

「確認したところ第3アリーナであれば問題なく使用できるところとだ。戸鉄はドイツでの試験機と同じ『ラファール・リヴァイヴ』でいいな？」

織斑先生の問いに肯定の意志を見せる。ラファール・リヴァイヴ。後付装備イコノイサの要領がある程度あり、自分好みに遠近両方対応できる汎用機。

第二世代だが性能は初期型の第三世代を上回る。

「後付装備は、学園にあるものから適当に選んでおいて下さい」

勿論オルコット嬢はラファール・リヴァイヴの基本兵装ぐらいは全て知っているだろう。しかし、後付装備に何が付くかは知らないはずである。

となると、俺がオルコット嬢に有利な装備を選んでしまつては、確実に俺が有利になってしまう。俺はハンデ戦がしたいわけじゃないし、オルコット嬢だってそれは望んでいないだろう。

「うむ、適当に見繕っておこう。それでは話は以上だ」

織斑先生はそう言つて職員室へと去つて行く。同時に俺の腹が鳴つたので、オルコット嬢を見ながら廊下を軽く指差し、食堂に行くこと合図をする。

「何故、一夏さんの訓練相手に立候補しましたの？」

オルコット嬢は、歩きながら俺に尋ねてくる。少々言い方に少々トゲがあるのは、俺の気のせいではないだろう。

「クラス全員のフリーパス入手とオルコットさんの恋路を天秤に掛

けた結果さ」

言うとおルコットさんはいきなりボンツ！と顔を赤くさせる、反応が初心で可愛いね。一夏も何故こんな近くにある好意を気付いてやれないんだらうか。

「別にオルコットさんの恋路を邪魔したいわけじゃないし、オルコットさんの指導を受けさせたくないわけでもないけどさ、何事も効率っていうのは大事だぜ？」

育成ゲームで、スピードばかり上げててもパワーを上げないと敵は倒せない。恋愛ゲームで、1人との友好関係を築いてもハーレムエンドは見れない、みたいにな。

リアルでハーレムエンドなんかすると絶対どこかの男に刺されるけどな。

「それにしても、一夏の鈍感には困ったもんだよな。性格いいし顔いいし大抵のことはこなすし周りへの気遣いも出来るのに、何で恋愛感情にだけ疎いんだらうな」

何やら赤面でぶつぶつ言っているオルコット嬢を気にせず、1人でぺらぺら喋り続ける。正確には聞き取れないが、言葉の端々を纏めて要約すると、一夏のことしか言っていなかった。

やれ篝さんがライバル云々、やれデートに誘ってみようか云々。ああ、お嬢様だけあって、かどろかは分からないがこういうことには不慣れなんだらうな。

「そんなに押し寄せればっかりだと、ああゆう鈍感はきつとこう思うぜ。『最近やけに突っ掛かって来られて疲れる、何でだらう』ってさ。本人だけじゃなく同じ友人を持つとか、そういう外堀から地道に埋めていくのも重要だよ、オルコットさん」

……ああ、やっとこつちの世界に戻ってきた。何やら興味津々といった目つきでこつちを見てくる。髪の毛にゴミでも乗ってるんだらうか？

「随分、そういった事にお詳しいのですね」

「俺は昔一度見たことがあるだけの子に10年間片思い中だからね。」

もし次会えたら、その時には絶対自分の物にしたいから、色々勉強してるのさ」

ちなみに講師は中学の時の学校の先輩である。信頼関係の築き方や色々な行動への対処の仕方、心の掴み方とか。流石に『実践！キスの仕方』みたいなのは全部断ったが。

今思うと、積極的に教えてくれていた先輩のうち女性数人は俺の事を好いていてくれたのかもしれない。

「ああ、ラウラさん、でしたっけ？」

「何で知ってるの!？」

いや、何でも何も無い。ハルフォーフさんから情報が漏れてきたとは考えにくいので、転寝さんだろう。

オルコット嬢はこちらの顔を見てくすくす笑っている。多分、耳の先までニンジンみたいな色をしてると思う。思わず手でパタパタと仰いじゃうぐらいに。

「女子の噂の伝達力を、海月さんは舐めすぎですわ」

非常に、してやられた、と思う。

そもそも、俺はその「ラウラ」を知っているが「ラウラ」の方は俺を見たことは無いんだ。

もし学園の誰かが「ラウラ」を見つけたとして、俺のことを話してしまったでしょう。「ラウラ」はただただ意味不明な恋愛感情を持つ俺をどう思うだろうか。

変な男と思われるかもしれない。

会ったことも無いのに一方的に好かれてるんだ、もしかしたらストーカーと思われるかもしれない。

俺にどんな印象を持たれるかなんて、分かったもんじゃ無い。

やばい、涙出てきそう。勿論不安で。

「だ、大丈夫ですよ海月さん。ここES学園の生徒は一応優秀な方ばかりですし、よっぽどの事が無い限り口を滑らせたりしませんわ」

オルコット嬢がおろおろしながら弁解をしてくる。多分、本当に

泣きそうに見えたんだろう。

「よっぼどの事って……？」

「ほら、大勢の前いきなりそのラウラさんが現れたとか……そうですね、いきなり転校して来たりとか。この学園内は友人が多いから皆様口が滑りやすくなるというだけで、流石にプライベートルームで他人の話を掘り返したりしませんわよ」

「本当に、大丈夫かな……？」

「ああもうっ！ 海月さんは人の恋愛には的確にアドバイスができるのに、自分の恋愛には奥手なのですか！？」

はっ。

そうだ、そうだよな。誰がどんなことをしようと、俺は俺が思った方法で、思った道を行けばいいだけだ。

「ごめん、弱気になってた。有難う、オルコットさん」

「セシリアですわ」

「へ？」

俺が疑問の声を上げると、オルコットさんは腰に手を当て、一旦立ち止まってこちらを見てくる。相変わらず似合ったポーズだが、今採ったそのポーズはどこかしら威厳を感じる。

「共通の友人のような外堀をゆくり埋めていくのも方法の一つなのでしょう？ 今までが友人じゃなかったとは言いませんが、わたしは貴方と違って接点を持ちたいですわ」

つまり、俺が言ったことを実行できると証明するために、まずは俺との距離を縮めよう、ってことか。

「分かったよ、オル……セシリア。今更だが、これからもよろしくな」

初めの呼び方は金髪ロール、さっきまでがオルコットさん、そして今はセシリア。

一夏と違って随分掛かったが、その時やっと俺はこのイギリス代表候補生と、そういつた壁の無い友人になることが出来たんだと思う。

食堂。

セシリアは早速外堀を埋めることも忘れ城に飛びこもつとしていた。と言つのも……

「一夏さん？ そちらでラーメンを啜っている小柄な方はどちら様で？」

「ああ、紹介するよセシリア。こいつは鳳鈴音^{ファン・リンイン}、俺の知り合い」

「こーゆーことである。分からないって？ じゃあ分かりやすく説明しよう。」

昨日俺が道を教えたけど相手からは一切何も教えてくれなかった小柄ツインテールの女の子はやっぱり一夏の知り合いで篝さんの態度を見るにやっぱり一夏に好意があつて今は何かちよっかいを掛けた上で同席してるからつまりセシリアはやつと行動を起こそうとした所でいきなり一夏と距離を縮めている恋敵が1人生まれたというわけ。嗚呼、セシリアと篝さんから負のオーラが見えるよ。

多分セシリアと篝さんは頭の中で、もしこの鳳さんが一夏と付き合っていたら、という疑念に駆られているのだろう。

「一夏、色々と言葉が曖昧だから、とりあえず俺にも分かるように詳しく、本当に分かりやすいように詳しく、出来るだけ詳しく鳳さんとの関係性を教えてくれないか？」

出来るだけ『詳しく』を強調する。言つてはなんだが、一夏はいつも言葉で誤解を与えて面倒を引き起こしまくっている。

「おう、篝が引越して行ったのが小4の終わりっていうのは前も説明しただろ？ 鈴はそのすぐ後、小5の初っ端に俺と同じ学校に転校して来たんだ。篝がファースト幼馴染だとすれば、鈴はセカンド幼馴染だな」

「へえ。もしかして恋人とか？」

「そ、そそ、そういう仲じゃなくて……」

「海月は何言ってるんだか。今説明しただろ、幼馴染だって。どうしてそういう発想になるんだよ」

安堵が見て取れるポニーテールと金髪ロール。ツインテールは…
「一夏を恨めしそうに睨んでいる。」

「？ 何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよっ！」

うむ、こうして一夏はハーレムを築いていくわけだな。くたばね。

「それで、えっと……鳳さん？」

「一夏と同じ呼び方でいいわよ。何？」

「ラーメン……伸びちゃっうよ？」

「あっ！」

こうして事前に食って掛かりそうな篤さんを牽制しておく。何で俺が一夏の代わりに気を回さなきゃならんだ、刺される。

一夏の場合、本当に誰か勘違い女を引っ掛けて刺されちゃいそうだから怖いけどな。

って、折角レンゲがあるのに器を持ってスープを飲み干すっていうのもどうなんだ。豪快だけど、一夏にがさつな人間って思われちゃっぞ。

「それでさ、セシリアと海月は本当に決闘するのか？」

「ああ、今日の16時からだな。終わったら結果はすぐ伝えるから、それまで篤さんに稽古でもつけて貰ってよ」

言っと、鈴ちゃんが横入りしてくる。あ、いつもみたいにさん付けじゃなくちゃん付けなのはそっちの方が雰囲気合ってるからだ。
「決闘といえは一夏、アンタってクラス代表なんでしょ？ ISの操縦なら、あたしが見てあげてもいいけど？」

うわ、ちよっと待った。俺とセシリアが勝負する意味がなくなるじゃないかそれ。

「おお、それは心強いかも」

ダンッ！ 思わずテーブルを叩いて立ち上がると、同じタイミングで篤さんとセシリアも立ち上がった。

「おい一夏！ てめえ自分の稽古つける為に対戦する人間が目の前にいるつてのに、他のクラスの奴の誘いを普通に承諾しようとしてんじゃないよ！」

「一夏の稽古を見る人間は既に足りている。お前が出る幕は無い」「あなたは2組でしょう！？ 敵の施しは受けませんわ」

主に怒りの矛先が違うらしいが、鈴ちゃんを一夏の稽古相手にさせないという意見は一致したようだ。一夏に女を近づけさせたくない2人と違い、俺の場合は情報漏れを防ぐ理由が一番大きいが。

「あたしは一夏に言ってるの。関係ない人は引っ込んでよ」

「俺は1組の問題として発言してんだ。関係ない2組は引っ込んでるよ」

「はあ？ そもそもアンタ一夏と別に付き合いが長いわけでも早いわけでもないわよね？」

今の発言で、正直に言うときれた。人の意見を聞こうともしないで自分の意見を押し通そうとするような人間は、俺は大っ嫌いだ。人の捕獲を気にしないで逃げ出そうとする鰻は残念ながら好物だけだ。

「最初から思ってたけど俺、君のこと嫌いだわ。自分の意見ばかりで周りを見ちゃいない。我俣なんだよ」

「奇遇じゃない、私もアンタのことを鬱陶しいと思ってた所よ」

「そうかよ。学年別個人トーナメントで当たったらボコボコにしてやるから覚えとけよ」

険悪なムードのまま、自分の食べかけの飯を持って別の席へ移動した。あんな空気で喰ってられるか。

その後遠目で見ると、やはり一夏達の間でひと悶着あったようだが、残念ながら読唇術などは会得していないし読心術も持っていないので、どういう会話だったかは分からなかった。

一夏のこととひと悶着、は間違いないんだがな。

14 菓子への愛、人の恋を破るか

放課後。『ラファール・リヴァイヴ』に身を包んだ俺は、後付装備のチエックをしていた。

「どうだよ海月、勝てそうか？」

「私としては、是非とも戸鉄に勝って欲しいところだ」

「さあ、後付装備は全距離に満遍なく対応できるような装備だからな……って、何で一夏も篝さんもこっちのピットにいるんだよ」

個人的な感情で一夏に女と一緒にいる時間を減らして欲しい篝さんが俺の側にいるのは何となく分かるが、一夏までこっちに来ているのである。何故だ。お前はもしかしてホモか。

「何だよ、俺が此処にいちゃいけないのか？」

「篝さんとはもかく、お前がいると場の空気が緩んで緊張感が無くなる。さっさとどっか行け」

「流星にそれは酷いぞ!？」

自然体で女性を酷い扱いしている人間にそーゆーことを言われたくは無い。キングゴブラに「お前の毒って怖いな」と言われても信用できないのと一緒にだ。

「いいからさっさと出てけえ！ 大体だな、俺は決着が付くまで篝さんと稽古でもしてろって言ったんだぞ？ 何呑気に観戦に来てんだ!」

渋々といった感じでようやく一夏はピットを出て行く。勿論篝さんも後ろについていく。あーあ、これじゃセシリアの応援には行かせられないな。

……と言うか、よく見たらもうセシリアはアリーナに出てきてるじゃないか。一夏達に気を取られて、出てくるのを見逃した。

さて、装備を呼び出すイメージも大体掴めたし、そろそろピット・ゲートに行くか。

「お待たせ。《スターライト・Mk-?》が出てないってことは、まだ鐘は鳴ってないよな?」

「ええ、まだ15時59分37秒ですからね」

「そりゃよかった。……何で観客がいるんだ?」

ハイパーセンサーで見回してみると90人はいた。1組の生徒が観客席にいるのは分かるが、全員いたとしても数十人多い。

「さつきも言いましたが、海月さんは女子の噂の伝達スピードを甘く見すぎなのですわ」

おいおい、対戦する時間をクラスメイトが知ったのって確か20分ぐらい前だぞ。何をしたらそんなに早く広まるんだ。

「今更ながら、自分が男に産まれてきて少し残念に思うよ」

「女も色々大変ですわよ? ……後10秒ですわ」

「女も大変、ねえ。一夏に惚れたりすると殊更ね。後8秒」

「なっ!?!」

「大丈夫、これは個人間秘匿通話。後6秒」

「もう、驚かせないで下さい! ……後4秒ですわね」

そして、会話が途切れる。

高揚感と緊張感が場を包む。体の震えは、恐怖でなく武者震いだ。すう、はあと一度深呼吸をする。ドイツの模擬戦と違って、鐘が鳴るまでの時間もどかしい。もしかしたら俺は戦闘^{バトルマニア}狂かもしれない。

観客席にまで緊張が伝わったのか、耳障りにも思えた喚声は鳴り止む。

……そして、鐘が鳴った。

「予想通りっ!」

開始早々に右方向へ瞬間加速。《スターライト・Mk-?》からの初撃を回避する。

話しながら、俺はある程度セシリアとの距離を詰めていた。その、近距離と中距離の間のような地点でBT兵器を使い出したら本体がから空きになるし、セシリアは近接戦闘が苦手。そこまで考えれば、初撃が牽制の攻撃ということは何となく読めた。

逆に言えば、この読みさえ当たって最小限で回避さえ出来れば、一気に近接戦へ持っていけるということ。

右手にブレードを呼び出し。そういえば、一ブレードをブレードとして使う(.....)のはこれが初めてだ。
「さあ、行くぜ！」

二度目の瞬間加速でセシリアとの距離を詰める。体が多少Gでグラつくが、PICが制御しているので気にならない範囲だ。

セシリアの顔を見ると、その顔はひきつって.....ない。笑っている。.....笑っている？

「くっ！」

嫌な予感かして機体を停止から後退させる。目の前をレーザーが通り抜けた。

周りには、いつの間にか展開されたBT兵器があった。

「今のがかわせますの!？」

「セシリアは顔に出すぎだよ！ポーカーフェイスしないと、相手に不審に思われるぞ？」

戦闘において相手の心理を探るといのは非常に重要な行動である。相手の攻撃を読めれば、回避するのも攻撃を当てるのも格段に楽になるからだ。

この試合のようにお互いが多少なりとも相手の癖や特徴を知っているのであれば、特に相手に行動が読まれやすいのは当然だ。

ハイパーセンサーを無駄なく使用し、4機のBT兵器。長ったらしいから以降ビット。の間をすり抜けて行く。

「一夏の時みたいに全部死角から狙ってくれば、回避も楽だった

「ただけどな！」

おまけにそれなら位置の把握もし易いから、ビットの破壊もある程度簡単だった。前回の反省を踏まえてか、セシリアのビットの扱いはワンパターンではなくなっていた。

自分から隙を作っても、そこを絶対には狙ってこない。適度に隙を狙いつつ、死角にはなっていない側で牽制をしてくる。

「同じ失敗を何度もするようでは、代表候補生失格ですわ！」

開始5分程で、一夏対オルコット戦の序盤を彷彿とさせる射撃の嵐が始まった。

円舞曲ワルツが好きなのに射撃はビット4つとレーザーライフル1つで合計5拍子なのな。そんなことは非常にどうでもいい話である。

「じゃあ、別の失敗をさせるまでだ」

右腕にショットガンを呼び出し、左腕にマシンガンを呼び出す。

そして相手の意表を突くなら　こんなのは如何だろう。

セシリアに一発、弾が被弾した。

「あ、足い！？　海月さん、貴方足でライフルを撃てますの！？」

「まだ一発しか撃ててないから感覚は掴みにくいけど、ギリギリいけるだろ。飛ぶのに足は使わないわけだし、ある程度の反動はPICが抑えてくれるしな」

ちなみに、左足でトリガーを引っ掛け、右足で銃身を何とか持ち上げ、腹に銃を押し付け固定しているその姿勢は結構不恰好である。華麗なスポーツの姿なんて一欠けも見えない。

対するセシリアは優雅な出で立ちを崩さない為、観客席から見たら美女と野獣だ。

「まだ俺の射撃武器は2つほど足りないけど、そっちはビットを操ってる最中制限が付くんだからこれでイーブンだろ。いくぜ！」

マシンガンを乱射し行動を制限しつつ、ショットガンとレーザーライフルでの確に対象を狙ってゆく。

「うわぁ……。戸鉄君みたいな戦い方、初めて見ましたよ」
ピットで山田真耶が、リアルタイムモニターを前にして感嘆の声を出す。

重要な戦闘というわけでもないが、一応学園での戦闘記録は全て保存する必要があるし、何より貴重な男性IS操縦者のデータである。

そのため千冬と真耶はピットにいた。

「なんてことはない、『相手に対処されない攻撃を続ければ、相手より手数で上回れる』という理念の延長線上の行動だ」

「それでも、ですよ。わたしだとあんな戦闘スタイルは思いつけません。これで、武器を呼び出す時に一々名前を言わなければいいんですけどね」

確かに先程から、海月は武器を持ち帰るとき必ず装備の名称を叫んでいる。それが無ければ、武器を相手に悟られることが無いのだからもつと隙は減るはずだ。

しかし、千冬は先程から違和感を感じていた。先日の授業で、海月は装備を呼び出すのに名称を叫んでいなかった為である。

『ちっ！ ショットガン！』

また戸鉄の近接攻撃が失敗して遠距離戦に戻った。先程から、遠距離戦の隙について海月がブレードを呼び出し、それに即対応したセシリアが手前に射撃照準をずらすという繰り返しである。

「初心者ゆえに対戦中のイメージを掴みにくい、というだけか……？」

「はい？ どうしたんですか織斑先生？」

「いや、何でもない」

そこで会話は途切れ、再び2人は画面へと集中対象を戻した。

「来い、ブレード！」

「もうそれは読めていますわよ！」

「くそ、レーザーライフル！」

7回目の近接失敗。遠距離での戦闘はやはりセシリアに分があり、海月はシールドの半分を既に削られている。

「段々移行が早くなるとか、勘弁してくれよな」

ブレードを呼び出してからセシリアがビットを手前側に向けるまでのタイミングは、徐々に徐々に早くなっていた。

手を変え品を変え、足で持つ装備も変えながら続けていたが、そろそろブレードの呼び出しは限界のようだ。

「これが最後の呼び出しだ、ブレード！」

俺は右手のレーザーライフルを仕舞いブレードと叫ぶ。セシリアはその瞬間にビットの角度を調整し、近接してきた俺を迎え撃つ体制にしていた。

その瞬間、セシリアのビットは全て銃撃を2発ずつ受け、破損した。

「なっ……！ 何故ブレードを持っていませんの！？」

セシリアが海月を驚愕の目で見る。海月は足にショットガンを、左手にアサルトライフルを、そして右手には「レーザーライフルを」握っていた。どこにもブレードなんて握っていないし、どこかに落ちてもない。

だが、セシリアが聞いたのは幻聴でも何でもない。海月は確かにブレードと叫んでいた。

「ブレードって叫んだらブレードを出すなんてルールは無いだろ、言いながらレーザーライフルをイメージした」

「はあっ！？ ……まさか、海月さん、武器を呼び出したのは全部これのために？」

「あ、うん。頭がいいセシリアなら俺の呼び出しにすぐ反応してくれるようになるって信用してたよ。さて、これでお互い同じタイミングで使用できる射撃武器は3つまで。本格的な円舞曲フルツといこうか

「！」
ネタは割れている為、セシリアは隠すことも無く残り2つのビツトを出す。

さっきまでより標的の数は減った、これで少しは戦いやすくなるだろう。

そして、再び銃撃戦が開始された。

「44分、次の一撃で決まるか？」

お互い、所々装甲がハゲている。装着部分がない部位が多いという事は、絶対防御がそれだけ発動しやすいということである。

現時点セシリアのビツトは破壊し尽くしたが、こちらの弾も切れていた。

後はブレードを呼び出し、セシリアの射撃を避け切って攻撃を当てるかセシリアの射撃が俺に当たるかのどちらかしかない。

「いくぜ！」

「落としますわ！」

セシリアの一撃をなんとか左にかわし突撃。続いている攻撃も右に、左に、上にとかわしてゆく。近付けば近づく程弾は当たりやすくなる。

これだけの時間対戦を続けたのにまだ集中を維持させているセシリアを言い表すなら見事の一言に尽きる。俺が負けても、この実力なら一夏の訓練相手ぐらいこなせるはずだろう。

「けど、俺も負けっぱなしは嫌だからな！」

セシリアの懐に飛び込み、切りつける。試合は……まだ終わっていない。

もう一度切り付けなければ。

ブレードを再度振るう。まるでスロー再生かのように思えるその時間で、ブレードをセシリアに当て、相手のシールドエネルギーを

減らし、そこで……

『試合終了。勝者 なし。ドローです』

敗北も勝利もない。そんなコールが、アリーナに響き渡った。

「そつだよな、中距離以上での封殺を得意としてる『ブルー・ティーズ』とはいえ、近接装備はあったんだ」

一夏達が特訓しているはずの道場に向かう途中で、俺はセシリアと話していた。

セシリアは最後、苦手なはずの近接装備、『インターセプター』を俺に振るっていた。銃撃をかわし切り、勝ったつもりの最後の最後でしてやられたわけだ。

「にしても海月さんは強かったですわ。本当にこれが3回目の起動ですか？」

「ああ、時間に見れば10時間ぐらいは乗ってるけどな。後、『ラファール・リヴァイヴ』は性能が高くて第三世代とも十分にやりあえる機体っていうのは大きかったよ。……さて、一夏の訓練相手はどうするか」

そつなのだ。勝者が一夏の訓練相手になる予定の試合でまさかの引き分けが発生してしまった、つまり決闘なのに決着がついていない。

「俺としては、近接装備まできっちり使うようになったわけだしセシリアに任せてもいいかな、とは思ってるんだけども」

「それを言うなら、第二世代で第三世代を攻略した海月さんの技術だって大したものですよ」

素直に褒められると照れる。攻略って言っても勝てなかったけどね。

「……じゃあさ、みっちり2人で見てやるっていうのでどうよ？」

「ふふ、それが一番良いかもしれませんわね」

一夏にしてみれば訓練の内容がどんどん濃密になっていく地獄のような会話なわけだが、勿論そんなことはお構い無しに一夏の育成プランを楽しく話すのだった。

もしかしたら、もうすぐ町内会でサディストみっちゃんとして有名になってしまいかもしれない。

15 CMは1回まで

剣道場に到着すると、ヘトヘトになって倒れている一夏がいた。

篤さんまで汗を掻きながら肩で息をしている所を見るに、どうやら一夏は完璧に振り回されたらしい。

「セシリア。俺たちって、試合後にお互いシャワー浴びてから少し休憩して、合流したのが17時半頃だったよな？」

「ええ、わたくしの目と感覚が間違っていないければ、確かに合流は17時半頃でそれからここまで10分ぐらいでしたわ」

たった1時間半程度で、一夏はどれだけオーバーワークをさせられたんだろう。つーか、篤さんもやりすぎな気がする。

そして、篤さんからは心なしか殺気が漂っている気がする。とうか肌がピリピリするから、これは確実に殺気を漂わせている。

事情聴取をしなければなるまい。

「おい一夏、篤さんなんか怒ってないか？」

「ああ……、海月のピットを出た後、セシリアの方を見に行こうっていったら急に怒り出してさ」

成程事情は理解したこいつは俺の言った事も聞かず更に篤さんの目の前で恋敵の方のピット見に行こうとか言い出したわけか

万死に値する。鈍感も此処まで来れば知能障害だろ。

「なあ海月、お前今酷いこと考えてなかったか？」

寝転がったまま睨みつけてくる一夏は無視。ようやく息が整ってきた篤さんへ近付く。

「篤さん」

「な、なんだ」

「一夏にやらせてた稽古を教えてよ、もう1回通して同じことやらせる」

「おい海月！？ どういうこゲホゴホッ！」

凄く疲れている時に思いつきり息を吸い込むとムせるよな、分か

るよ。でも知ったこつちやねえ。篤さんからやっていたことを聞き出し、クルリと振り返って一夏を見やる。

「知ってるか一夏、筋力つてのは、筋肉を痛めつけた後の回復の過程で昔よりちよつと多く回復しようとすることで生まれるんだ。さあ筋肉を、もつと。もつと！ 痛めつけよう。セシリア、鍵閉めて」

「は、はあ……。海月さん、ちよつと怖いですわよ？」

「知るか。おらさつさと立て一夏、稽古をやめたかったら俺を倒して鍵を開けて逃げてみる」

朴念仁な男子の、断末魔に似た悲鳴が道場から木霊した。

「さあ終わったな、じゃあほらスポーツドリンクだ。そしてタオルだ。冷たくは無いが、確か一夏はぬるめのヤツのが好きだろ？」

「お　おう……」

あれから更に1時間後、つまり6時40分。篤さんと違って試合形式の稽古はつけられなかったので予定より早く終わったが、一夏は再び地に伏していた。

逆に試合形式がなかったので、俺は特に問題なく立っているわけだが。

ゴク、ゴク、ゴクという音が聞こえる。とんでもない勢いでスポーツドリンクが減っていった。

「んぐ……ぷはあ。ああ、生き返る」

あつという間に500mlを飲み干した一夏に、もう1本いるか？というジェスチャーをする。手を伸ばしてきたので渡すと、そちらもすぐに飲み干された。

「さて、そろそろ立てるか？」

「おう、大丈夫だ。……にしても、何で海月はあんなスパルタを仕掛けてきたんだ？」

駄目だコイツ。どうせ女子に目の前で顔を赤くされた時、熱でも

あるのかとか言いながらいきなり自分の額を相手の額に当てて更に相手の顔を赤くさせた上でやっぱちょっと熱いとか言うタイプの人間だ。

「自分の胸に手を当てて考えろ。それか、もう一回今の稽古を通してやったら教えてやるよ」

「……稽古は遠慮します」

「よろしい。セシリアと箒さんは先に帰ってるから、とりあえず部屋棟の方のシャワーを借りるぞ」

言って歩き出す。一夏は多少ふらついているが、付いてこれてはいるので問題ないだろう。

「なあ、部屋棟のシャワーって女子しか使えないんじゃない」

「さっきセシリアに連絡を頼んでおいた。7時までなら使えるが、逆に言えば7時を過ぎれば俺らは変態扱いだ。急ぐぞ」

「一夏っ！ お疲れ。はい、これタオルと……」

「邪魔」

扉を開けた途端小さな生き物が飛び出して一夏の目の前に立とうとしたが、先程も言った通りシャワーは7時までしか使えないので頭をガツチリ押さえて引き離す。

「いたたたたっ！ ちよつと、何すんのよ!!」

「五月蠅い、黙れ。せつかく7時まで部屋棟のシャワーを使えるようにしてもらったのに遅れたら意味が無いだろ」

「は？ 何それ、そんなん自室ですればいいじゃない」

鈴ちゃんは言っていることの意味が分からないらしく、首を傾げる。疑問を持つのはいいが、こつちとしてはさっさとどいて欲しい。どこかに歩き出すスイッチとか付いてないだろうか？ 鼻とか押せばいいのかな。

「あー、鈴？ 俺さ、箒と同じ部屋なんだ。多分今は箒が使ってる

だろうから、シャワー浴びるには別の場所を使わないといけないんだよ」

「……は？」

「いや、学園側の理由で俺と海月は同じ部屋じゃないからさ、部屋はそれぞれ男女1人ずつになってるんだ。だから、今はふたり部屋で」

「ま、待って。っていうことは、アンタ達女子と寝食一緒なの!？」

「まあ、そういうことだな。初対面だったらしい海月はともかく、俺は篤で助かったよ。俺は海月ほどメンタルが強くないからな、その日顔合わせした相手だったら多分寝不足だった」

む。俺はメンタルが強い方だったのか。いや、初日は俺は寝不足から床に倒れこんだ上で寝言吐きながら爆睡したけどな。ナマケモノも顔負けの睡眠をしたぞ。

「……ら、問題ないのね……」

「は？」

視線を地面に向けている鈴ちゃんが何を言っているかが良く分からない。正直さつさと目の前をどいて欲しいのだが。

「だから! 面識がある相手が同室なら問題ないのね!？」

「うわっ!？」

突然ぐいっつと顔を上げてわけのわからんことを言う。俺がさつき鈴ちゃんを素直に一夏の前に立たせていたら、多分一夏の顎に鈴ちゃんの頭が直撃していたであろう。危ない。

「そう。わかったわ。とてもよく理解しました、それはもうホントに」

何を理解したのか良く分からない。とりあえずシャワーを早く浴びたい。

「一夏っ!」

「お、おう」

「あたしだってアンタと入学前から面識あったのよ、そこんところ忘れないでよね」

「そんなこと、誰に覚えると命令されずとも覚えてるつもりだが……」

「じゃあ、後でね！」

そして鈴ちゃんも猛ダツシユで去ってゆく。時計を見ると、既に6時55分を示していた。くそ、邪魔されたせいで折角の部室棟シヤワーが使えなくなった。セシリアに骨折り損をさせるとは、酷い奴だ。

「……仕方ない、転寝さんに連絡取って、俺の部屋のシャワーが使えないか聞いてみるよ」

「悪い、頼む」

「さて、稽古のせいで言いそびれたが、今日の試合の結果を教えるぞ」

一夏と篝さんの部屋、時刻は8時ぴったし。つい先程夕食を終えやっとなこさゆっくり話す時間が出来た。

「試合の結果だが……」

「おう」

「最終的に俺のISのシールドエネルギーが0になった」

「ってことは、セシリアが俺の稽古を見ることになるわけか？」

篝さんの眉がぴくりと上がる。

「まだ話は終わってない。実は、俺のシールドエネルギーと同時にセシリアのシールドエネルギーも0になった」

「え？ ってことはつまり……」

少し溜める。テレビ番組とかでもそうだが、結果ってというのは溜める時間が重要だ。短すぎると緊張感が無いし、長すぎるとダレる。最近のクイズ番組は溜めが長すぎだ。

「引き分けだ。というわけで2人とも稽古に参加することになった」「引き分けか、珍しいな」

うんうん。俺も今までIS戦で引き分けなんて見たこと無かったよ。自分が体験するなんて夢にも思わなかった。

「珍しいだろ。というわけで一夏の訓練内容は予定の2倍だ」

「そうか分かつ……ちよつと待て!? 何で2人で分けるんじゃないく予定を倍にするんだよ!」

またこいつは早とちりをする。何も訓練時間を2倍にするわけでもないんだから、そんな大声を出さないで欲しい。

「だって、セシリアは理論と中距離戦相手の、俺はイメージと広範囲及び近距離戦相手の仮想敵を務めるんだから範囲が違うだろ。お前は国語の授業に数学も同時に教えられたいのか?」

「それは分かるけど、もつと俺に優しい内容でもいいだろ!?!」

「バカめ、優しい訓練が訓練になるものか。あ、勿論基礎体力が必要だから箒さんとの剣術も続けてもらおうよ」

後ろで眉を吊り上げていた箒さんも、自分がお役御免ではないと理解して多少ホツとしていた。というか、フォローを入れておかないと多分俺は斬られてた。この歳では死にたくないからな。

「お前らは鬼畜か!」

「何とも言う方がいい。これもフリーパスの為だ。予定に関しては明日の放課後にでも渡すよ。それじゃまた明日」

「畜生、神は不公平だあー!」

一夏と箒さんの部屋を出ると、何やら大きなボストンバッグが近付いてくる。訂正、俺の行動をとことん妨害する奴が近付いてくる。多分、一夏に用事があるんだろう。

仕方ない、俺も彼女の行動を妨害してみよう。まだ閉めていないドアに向かって「鍵はきちんと閉めておけよ」と伝える。町内会で有名な3倍返しのみつちゃんとは、俺のことだったはずだ。

サイドアップが到着する前に鍵が閉まる音が聞こえたことに俺は

満足し、1人で部屋に戻っていった。

扉をドンドンと乱暴に叩いている所を見ると結局一夏は扉を開けてしまいそうだが、そこまで来ると俺の知ったことではない。

16 俺のフリーパスうう（前書き）

1年分のデザートが消えるって、結構大きいですよ

16 俺のフリーパスうう

5月。

セシリアと俺が対戦したあの日から、鈴ちゃんは一夏を露骨に避けていた。

一夏に聞いても分からないというので篝さんに聞いてみると、どうやら昔告白したのを間違って受け止めていた為、だとか。

あれかな。遊園地で「ずっと一緒に居て欲しい」って約束をしたけど、一夏はそれを「はぐれないように、遊園地の中でずっと一緒にいて欲しい」って勘違いしたとかそういう類か？

しかし、一夏に遠まわしな告白なんかして、勘違いされないう方がおかしい。一夏の場合ストレートに付き合っつてと言っつても昼飯か何かと勘違いしそつうだが。

こいつに告白するのなら「女性として男性である一夏さんのことが好きです！ 恋愛的な意味で付き合っつてください！」ぐらいストレートに言う必要があるだろう。

別に、俺は鈴ちゃんと一夏が絶縁しようが知つたこつちやないんだけど、露骨に避けるとその後一夏が多少なりともへこむから、少なくとも俺の前では2人は出会わないで欲しい。

話は変わつてその一夏だが、最初の方はへばつていた訓練も今ではなんとか付いてこれるようになっていた。今日もついさつき稽古を終わらせて、今はピットにいる。

実を言つと、篝さんの超感覚的指導に続きセシリアの超理論的指導はこれまた一夏には理解しにくい物で、本当に稽古内容を一夏が飲み込めるのか少々不安だったのだが、ある程度要領の良い一夏はその対極に位置する2つの指導の中でもある程度技術を飲み込んでいくことが出来ていた。

セシリアの『そこで斜め左後ろに20センチ、体は3度ほど傾けて』とか篝さんの『来たらこつちに入つとしろ』とかをの対極理論

を、俺が『だから、相手が右の頭の方に撃ち込んで来てるんだから左側に避けて。頭を狙ってるってことはある程度意識をそちらに集中させる狙いがあるかもしれないだろ、だから後退して相手をしっかり見るんだよ』みたいに噛み砕いて説明してるのも一因かもしれないけれど。

ただ、セシリアの理論的指導は内容さえ分かっていたら非常にためになる。実を言うと、俺も訓練機に乗っている時はセシリアの話を聞いて可能な限り機動の無駄を無くそうとしているのだ。

一夏も勉強すればこの理論的指導の素晴らしさが分かるはずだ。

……多分。

「にしても今日の一夏はいつもより動きが鈍かったな。平時は普通だと思っただが、放課後アリーナに来るまでに何かあったのか？」
決してこれは独り言ではない。一夏と篤さんが反対側のAピットにいて、俺とセシリアはBピットにいるのだ。

「一夏さんが凰さんを本気で怒らせた、ぐらいですわね」

「またあいつは……何をしたんだ？」

「謝れ謝らないの喧嘩になった上で、気になされていたらしい胸のサイズのことをぼろっ……」

ぷっ。流石に吹き出すのを堪えられなかった。一夏、流石にそれはデリカシー無さすぎだろ。俺はお前をそんな子に育てた覚えはないぞ。いや、そもそも育てた覚えが無いが。

成程ねえ、少し先生に呼び出されて遅れて行ったから分からなかったが、そういうことだったのか。

「さて、こじれた関係は仲直りまで結びつくのかな？俺の予想だと、結局試合後には仲直りした上で、普通に訓練に参入してくる気がするが」

「そんな気はしますわね。一夏さんのことですし」

そうなのだ。一夏の怖い所は、自然体で人を魅了してゆく所だと思っ。

これが結婚詐欺師みたいに狙って落としたりしているのならまだ

対処の方法はありそうなのだが、あいつは天然なのだ。そこが魅力かもしれないが、逆に言えばそのせいで人からの恋慕に気付かない。

「……けど、セシリアはそれだから一夏を諦める、とかはしないだろ？」

「当然ですわ！ 今までわたくしは手に入れられるものは全て自分の力で手に入れてきましたし、一夏さんだって誰にも譲る気はありません！」

「セシリアの向上心って、本当に高いよな」

「今のわたくしがあるのは全て努力のおかげ、と自負していますもの。人よりも努力すれば人よりも上に行ける、これは道理ですわ」

「それで、最終的に一夏とは結婚、と」

「そうですね、結婚式の際には……って、な、ななな何を言わせるんですの！？」

からかうとセシリア可愛いよなあ。

篤さんにしても鈴ちゃんにしてもどうも性格が押し寄せだから、セシリアはそういう恥じらいみたいな面を押し出していくといいんじゃないだろうか。

単純に、俺はセシリアをからかえて満足だけど。

「さあ、そろそろ一夏も小休憩は終わっただろ。この後飯喰いに行くんだから、迎えに行こうぜ」

慌てた顔を戻そうと、セシリアは軽く1回コホン、と咳払いをする。

「そ、そうですね。いつまでも篤さんと一緒にいられては堪りませんわ」

自分の好きな人が、別のその好きな人を狙っている女と同じ場所で仲睦まじくしているというのは、結構精神的に嫌なんだろうな。

一夏と篤さんは同室でチャンスも多いから、セシリアとしては気が抜けないんだろう。……ん？

「なあ」

「なんですの？」

「何で、一夏と同じピットから出ないんだ？」

セシリアのハツとした顔を見ると、どうやら今の今まで考えてすらいなかったらしい。蚊帳の外だったのか。男好きな男のこと？
それはただの水モだ。

試合当日、第2アリーナ第1試合。組み合わせは一夏と鈴ちゃん。俺がトイレに行っている間に一夏はもう準備を終わらせてしまっていて、しかも観客席も通路も一杯だった。トイレの場所が少ない上に遠いんだよバカ。くそつくそつこれだから女子校ってやつは。というわけで、実は俺は今自室に引き籠っている。拗ねるなどか言わないでくれ、俺は祭りに参加できないと怒るタイプだ。

多分、そろそろアリーナでの戦闘は始まっているだろう。一夏には是非ともフリーパスを入手して欲しいが、正直に言ってしまうと勝率は40%ギリギリあるかないか程度じゃないかな。

ちよつとだけ画面で見えたら、流石代表候補生といった具合の雰囲気が見て取れたし、流れてきた噂によると中距離兵装を持ちつつも近距離戦用の機体らしいし。

何だかんだ言って一番の実力者はセシリアなわけだから、一夏が一番戦闘経験が多いのは中距離から遠距離の相手なのだ。

そりゃあ俺とも対戦はしてある程度近接戦も頑張ったけど、俺だって初心者だしさ。つまり、近距離戦闘は一夏のセンスに頼る面が大きいわけである。

ピリリリリリリ……

携帯が鳴る、ちなみに着信音は特に設定していない。こつこつのは変にこだわると電車の中とかでいきなり鳴ったりしたら恥ずかしいじゃん？

閑話休題。受信ボタンを押し込む。

「もしもし、転寝さん？」

『あ、もしもし戸鉄君？もう、一体どこにいるの？ 観客席も通路も探したのにどこにもいないじゃない』

「そりゃあな。トイレ行つてて戻ってきたらどっちも超満員だったし」

『馬鹿、何でトイレなんか行つてたの！？』

……トイレに行きたかったからです。

『それで結局どこで見てるの？』

「部屋で寝てる」

『ええっ！？ 折角今雰囲気が変わつて、織斑君が凰さんに突撃して行つた……きゃあああああああ！？』

携帯から響く、まるで大きな鉄球が落ちてきたかのような轟音と転寝さん……いや、沢山の生徒の悲鳴。何か嫌な予感、というより確実に良くないことが起きている。

「転寝さん？ 今何があつたの！？」

『何か変な……ザザツ……ザツ……いSがアリー……ザツ……落ち

……ザツザ、ザアアアアアアアア……』

そこで携帯が途切れるが、正体不明機のISがアリーナに乱入した、ということまでは理解できた。それだけの情報である程度は推測できる。

正体不明機がアリーナの、ISと同素材を利用したバリアを破つて乱入したということは、簡単に言えばIS装甲を突破するほどの威力を備えた兵装を持つ機体ということだ。

ガチャツ、バタン。

さて、この正体不明機はどのような目的で飛来したのか？

IS学園の破壊という可能性。

他の場所でも飛来しているならともかく、どうも携帯からの飛来音は1つだけだった。

たった1つだけではまあ、教師に簡単に鎮圧されるだろう。なんと言つてもここは世界中の優秀な人材を集めているわけだし。で、

複数機あるなら同時投入したほうが対応に手間取るはずだ。

つまり、犯人の目的がIS学園の破壊であるとは思えない。

たったったったった…

混乱に乗じた侵入という可能性。

ISがたった1機の理由もコスト削減を考えればありえるが、鎮圧にはものの数時間しか掛からないはずだ。そんな短時間で出来ることはたかがしれている。

重要人物の誘拐のセンは、わざわざ人が大量に集まっている上に教師の監視が厳しくなるこつという行事では行う可能性は低い。そういうのは学園祭とかの、警戒が薄れる時に行うものだ。

つまり、犯人の目的が侵入であることも考え難い。

犯人は愉快犯という可能性。

愉快にIS装甲を壊せるようなISを作る人間なんていてたまるかバカ。

たったったった…

破壊活動、誘導活動、そのどちらも消えたということは、残る要素はあまりない。

多分「諜報活動」が一番考えられる可能性だろう。主に、教師が到着するまでに専用機持ち、というか多分一夏のデータをISから入手し続ける。

しかし、ISには人が乗っていないければ動かないはずだ。

ISからの情報を送り続け、捕らえられた後は舌でも噛み切つて自殺するのだろうか？教師に取り押さえられるまでの数時間の間のデータだけの為に、世界に467しかないISコアとISに乗れる人材1人を無駄にするものなのか？

ISコアをそんなに簡単に捨てられる人間がいるとは思えないし、人材を無駄にするというのも馬鹿な行為だろう。

逆に考えよう。ISコアを簡単に捨てられる人間は、この世界にいるか？

てく、てく、てく

1人、いる。

誰か？

ISコアの開発者、唯一ISコアの作成方法を知っている人間。また一夏のISの開発に関わっていて、一夏とは古い知り合いの可能性も高い人物。

……ああ、大体理解した。

「なんだ、全然危険じゃないじゃねえかよ」

勝手にアリーナに向かって動いていた足を、ぴたりと止めて俺は自室に再び戻っていった。

……あれ。この対抗戦、もしかして中止になるんじゃないのか。中止になっちゃったら、フリーパスって手に入らないよな。

もし会う機会があったら、一発打ち抜いてやることにしよう。30人分の食べ物の恨みは、多分人1人分ぐらい重いから大丈夫だろう。

16 俺のフリーパスうう（後書き）

一夏vs鈴をサボって考えて終わらせるあつさり風味。
2巻からは戦闘もちやんとします。 たぶん。

17 クッキングラゲ

クラス対抗戦後、今は夕方。

一夏が保健室にいるという情報をポニーテールの凜々しい姫様から仕入れた俺は、その一夏のファースト幼馴染と共に保健室に向かっていた。

「一夏は、大丈夫だろうか…」

篝さんのいつものぴしりとした表情は崩れ、顔一面、いや体中で不安を醸し出していた。

一夏はどうやら、対正体不明機戦でとんだ無茶をしたのだそうだ。詳しくは見ていないので知らないが、死んでこそいないものの保健室で未だ目を覚ましていないというほどなのだ、かなり大きなダメージを負ったのだろう。

ISには絶対防御があるはずなので、それを越して肉体に多大なダメージが残る程というと、大型の爆弾を目の前で無防備に爆発させられたとかそのぐらいだろうか。

とにかく、相当無鉄砲な行動をしたのだと推測するのに、それほど時間はかからなかった。

「さあ、分からないけど大丈夫だろ」

そんなものは知ったことではないといった、随分と気楽な口調で俺が返答をすると、篝さんはギリギリという歯軋りをしながら憎々しそうにこちらを睨んで来る。やっぱ怖い。

「大丈夫だという確証が……一体どこにあるのだ!? どうしてお前はそこまで気楽にしていられる!」

確証は、目的が目的だっただろうから殺すことは無いだろうってというのが大きいけど。

が、今日の出来事を話すことは禁止との指令、つまり緘口令が既に出されているため、それについては何も言わない。というよりは言えない。

しかし、それよりも大きな、謎めいた、それでも自信を持って言える確証がある。それは

「何より、一夏は一夏だからね」

見るもの全てに強烈な視線を与えていた篤さんは、何やら奇怪なものでも見るような目つきにそれを変える。まるで「は？」と、呆けた声をあげんばかりに。ただ、眉間の皺は今もまだ取れていないので、やはり怖いことに変わりはない。

「篤さんは、一夏に再起不能になって欲しいと思っている？」

「思っているわけないだろう！」

「じゃあ織斑先生……千冬さんは、そうなって欲しいと思ってると思っかな？」

「さつきから何を馬鹿なことを……!!」

「誰も思っていないなら、きつと一夏は戻ってくるさ。あいつはそういう奴だ」

「だから、その確証がどこにあると……!! ……!!」

なおも篤さんは食って掛かろうとしてくるが、そこでぴたりと口を止める。……もう目の前と言えるまでに近付いていた保健室から、織斑先生が出てきたからだ。

「織斑先生！一夏は大丈夫ですか？」

「ふん、あいつがこの程度のことです駄目になってしまっわけが無いだろう。何せ……」

そこで言葉を遮る。今日は一夏ばかり活躍したんだ、俺にも少しぐらい格好付けさせる。

「織斑先生の弟、ですからね。……少し顔が緩んでますよ？」

「ばしーん。織斑先生、その出席簿どこから取り出したんですか。量子変換でもしてるんですかね。」

格好付けたいって思った瞬間にこれだから、俺は多分三枚目が一番似合っているんだろう。一枚目と二枚目は一夏だ。あれ、よくボケてるから三枚目も一夏なのかもしれない。くそっ、俺はどうせ端役だよ。

「一夏ならもう起きている。全身に軽い打撲があるが話す程度なら問題ないだろう。私は仕事がある、それではな」

そしてつかつかと歩いて行ってしまふ。少し聞きたいことがあったのだが、多分はぐらかされて終わりだろうと思っていたことだしいいや。

「あー、ゴホンゴホン！」

篤さん、その咳払い凄くわざとっぽいから止めたほうがいいですよ。というか、先に1人で保健室に入られたら、どう考えても俺が邪魔者になっちゃうじゃないか。

これは、俺は見舞いは諦めた方がいいな。俺の思いも通じずもう一夏と話し始めているみたいだし。

俺は、俺が出来ることをするか。

「あ、もしもし転寝さん？ ちょっと手伝って欲しいことがあるんだけど、今から大丈夫？ あ、うん。沢山人を呼んで大丈夫だよ、それで」

「遅い！」

怒らせてしまった鈴と仲直りして、そこに来たセシリアと鈴が喧嘩しているのを聞き続けてげんなりしている俺がその後やっと自室に帰ってきて、一番最初にそれだ。幼馴染というのは活火山の名称のひとつなんだろうか。

「何をしていたのだ、まったく……私は空腹を我慢して待っていたのだぞ」

「待っていたって え、なに？ まだ晩飯くってないのか？」

「だから、待っていたと言っている。ほら、食堂に行くぞ」

急かすぐらいなら先に行ってくれてよかったんだが……。なんて

口にしたら、いつもの調子でいけば怒られるのだから声には出さない。

「じゃあ、走って行くか。時間ギリギリだもんな」

食堂は8時で閉まってしまふ。別に食堂を使うのは問題ないのだが、時間を過ぎると料理どころか塩胡椒すら舐めさせてももらえない。

「あ、いや、そんなに急がなくてもだな……」

「へ？ 早く行かないと間に合わないんじゃない？ あ、俺のことを心配してくれてるなら大丈夫だぞ、走るぐらいなら余り痛くない」

「べ、別に一夏の心配をしているわけではない！ さっさと行くぞ！」

えー、心配してくれてないのか。ちょっとぐらいしてくれてもいいのに、薄情な奴め。

しかしのんびりしている時間は無い。空腹で喰いっぱぐれるのは嫌だし、早く行くことにしよう。

「な、何だこれ……？」

現在の状況。俺が入り口で立ちすくんでいる、以上。入出口で立ち止まってるのと邪魔になっちゃうけど、もう誰も来ないだろうしどうも誰も出る気配は無いだろうから大丈夫だろう。

「だ、だから私は急がなくてもいいと言ったのだ！」

なんだ、筈がちゃんと説明してくれてなかっただけで、元々予定されていたことなのか。なら一種のサプライズだな。

100人を越す女子がいて、男子も俺を含め2人いて、そこには大量の料理が並べられていた。

さて筈。サプライズも終わったことだし説明してもらおうぞ。

「これは一体、どういう状況なんだ？」

「遅いぞ一夏、ほら早く座れ、腹減ってるだろ」

俺は一夏を特別席へ連れて行く。特別席って言うのは、まあ単純に言ってしまうえばセシリアと篝さんと鈴ちゃんの手伝ってくれた料理が載ってる机の席だ。

転寝さんに連絡した後、俺は食堂に来て料理を作り出した。最初は一夏がもし8時までには復帰できなかった時のために2、3品料理を作るだけの予定だったんだけど、俺が料理を作ることを聞きつけた女子が大量にやってきて、このパーティーみたいな状況になっている。

既に夕食を取ってしまった女子は凄く悔しがっていた。珍しいから騒ぐのは分かるが俺に対して騒ぐが一夏に対して騒ぐかぐらい統一してみたらどうだろうか。

そういうわけで、冷めてもあまり味が落ちない料理を大量に作っている間に、篝さんがやってきた。

一夏の為に料理を作りたかったとかで、篝さんには「保険医の先生と連絡をとり、直前で一夏の料理を作ってもらい、先回りで食堂につれてきてもらう」という役割をもらった。重要な役割だ、シンデレラで言えば魔女ぐらい重要だぞ。

……そしたら、保健室に連絡を取った時にセシリアと鈴ちゃんに料理を作っていることがバレて、結局直前に3人分の料理を見ることになった。

鈴ちゃんは何やら経験者らしいしまだ仲違いは続いていたので特に見る気はなかったのだが、篝さんとセシリアは大変だったよ。

調味料を入れずに炒飯を作り始めるだけの篝さんはまだギリギリ納得できるのだが、パスタを茹でる時に片栗粉をお湯に入れようとしたり、ポロネーゼソースに大量のチョコレート（板状のまま）をぶち込もうとしていた時はギャグかと思った。

「お、この机の料理は出来立てなんだな、いいのか？」

一夏は席について料理を見る。どうやら非常に空腹なようで、無意識に腹をさすっている。本当に分かりやすい奴だよな。

「さあ、作った3人に聞いてみれば？」

「え、料理は全部海月が作ったんじゃないのか？ 歩いてくる時にそんな話を小耳に挟んだんだけど」

それはこの机以外の料理だ。いや、この机に載っている4品のうちの1品も俺が作ったやつなんだけどな。

「その炒飯は篝さん、スパゲティがセシリア、酢豚が鈴ちゃん。俺が作ったのはサラダだけだよ。他の机は全部俺だけどな」

これで察しが良い奴なら3つの料理が特別に作られたものだと気付くんだろうが、勿論そこは一夏である。鈍感と書いていちかど読むという新事実はテストに出るから、覚えておいて欲しい。

「そうなのか。3人ともありがとな！」

屈託の無い笑顔を向けられて顔を赤くしている女子がいるx3。

この後一夏が食べる順番と評価によって、彼女たちは更に一喜一憂するだろう。手伝ったから凄く不味いってことは無いと思うが…。

「さて、メインも来たわけだし皆食べようぜ！ 食べる時間が遅すぎると体にも悪いからな。さあ一夏、お前が挨拶だ」

「お、俺!？」

「全員お前を待ってたんだぞ、主賓が音頭を取るのは当然のことだ」「それじゃあ……いただきます！」

直後、全員のいただきますが重なる。「いただきます百重唱」って、なんか映画のタイトルでありそうだよな。

……一夏。サラダから取るな。出来立ての料理から取れ、馬鹿者。

「今日はおいしかったよ、海月君料理なんかできたんだね」

「まあね、親が仕事で帰ってくるのが遅いから、妹に喰わせるために母さんに色々教えてもらった」

パーティーもどきも終わり、今は自室でゆっくり転寝さんと会話

している。そういえば、最近名前で呼ぶことが多いのに転寝さんは転寝さんのまんまだな。愛称でも考えようか。

漢字が転がって寝るって書くから、コロネとかどうだろう。微妙だな。

「へえ、妹さんがいるんだ。どんな名前のどういう子？」

「兄妹における兄から見た妹の印象なんて、一部のシスコンを除けば殆どは生意気な奴って印象を言うと思うよ？ 名前は言ったら噂で広まるからパス」

この間の前例があるから、ここは慎重に行きたい。明日に俺の妹の情報が出回ってしまったら、うちの妹は噂のせいでクシャミを1日中続けることになってしまう。

「えー、いいじゃんいいじゃん、教えないからさあー」

「だーめ。転寝さんの教えないはちよつとしか教えないの教えないだろ？」

「そんなこと」
会話を遮り、コン、コンというノックの音がする。こんな時間に誰だろう。

「あー、戸鉄くんはいますかー？」

うちの副担任だ。このぼけぼけした声は、確実にそうだ。ドアの鍵を開けると、がちゃつと音を立てて入ってくる。

「こんな夜にどうしたんですか？」

急用だろうか。それにしても山田先生は焦っていないように見える。もしかしたら本人は惚けられる急用なのかもしれないが、他人の急用をのんびり伝えられる人なんてそうはいないだろ。

「あ、えつとですね、そこまで急用というわけでもないのですが、戸鉄さんの専用ISのこと。6月頭の月曜日に届けられる、との連絡が先程入りましたので」

そうか、時差の関係でドイツの時間は今昼頃なんだな。だからこの時間に連絡が来た、と。

「……そりゃまた随分早いですね、確か予定では学年別個人トーナ

メントにギリギリ届くぐらい、と聞いてましたけど」

ちなみに、学年別個人トーナメントは6月の末だ。予定と比べて大体3週間前後早いということになるわけだな。作るのを急いでくれたのなら嬉しいが、それでどこか欠陥が生まれたら困る。武器を呼び出してもハリセンしか出ないとかね。……流石にないわな。

「何やら凄いテンションで『完成しました！ 我がドイツ軍最高の出来栄です！』とかなんとか仰ってましたよ」

「それはそれで怖いような……まあ、連絡ありがとうございます」

しかし、何故6月頭の月曜日、まで断定されているのだろうか。

やっぱりドイツの方は時間に厳しいのか、それとも月曜日になんかあるのか。

俺にしてみれば、別にどっちでもいいんだけど、ね。

18 水面のミナモ (前書き)

サブタイ全部に番号を振るようになりました

18 水面のミナモ

翌日には俺の専用機がドイツから届くという日曜日のことだった。昼食を摂りに数人のクラスメイトと食堂へ来ていた俺は、本来このIS学園にいないはずの人間を前に

「…、なんでお前ここにいんの？」

「ん、試験とお菓子要求」

軽く眩暈を覚えていた。

「紹介するよ、こいつは戸鉄水母^{とてつみなも}、短気で生意気な俺の妹だ」

ああ、畜生。こないだ転寝さんに秘密って言ったばかりなのにもうバレちゃった。俺は秘密を隠せない命運の星を背負っているのか。

「初めまして。いつも神経質で女々しい兄がお世話になっています、妹の水母です。漢字は水に母、と書きます」

おい、兄に向かって女々しいとは何だ。これでも身長は169cmあるし運動だって人一倍は出来るんだぞ。

睨んだら目を逸らしやがった。くそ生意気な奴め。

「あれ？」

「どうしたの、転寝さん」

「水に母って、クラゲって読むんじゃないかってっけ？」

何で知ってるんだそんなこと。海月でクラゲは有名だと思うが、水母でクラゲはあんま有名じゃないぞ。俺だって初めて聞いた時は驚いたもんだ。

「あう、どっちをくらげんって呼べばいいのかな？」

とは布仏さんの言葉。普通にみなちゃんとか、そういう無難な呼び方をするという選択肢は無いのだろうか。織斑もおりむーで固定らしいし、いまいちよくわからん。というか最初の質問がまだ返ってきてないぞ。

「…で、お前は どうしてここに いるんだ？ IS 学園は普通、関係者以外の入場を全面禁止してるはずなんだが」

と言うと水母はぴらっ、と2枚紙を見せてくる。なにになに…

1枚目。『IS簡易適正試験案内状』。

ああ、希望者が受けれるっていう政府公認の。しかし、試験の時期ってもう少し早くなかったっけ。

2枚目。『希望者拡大に伴う試験会場及び日程変更』。

「2枚目、音読してみて」

「なにになに…今回、試験の受験希望者が例年の3倍まで増加した為、数回に分けて試験を行います。手持ちの登録番号を確認し、指定さ

れた日時、試験会場を確認下さいますよう…ああ、そういうこと」

例年の3倍、というのはISが再度注目され始めたからだろう。何せ、発表から数年経ってようやく落ち着いてきた、という所に「男」という例外が産まれてしまったのだから、そりゃあ関心も持たれるようになるさね。

で、会場もいつもどおりに使えなかったから、それならということ
で設備が整っているここIS学園にも試験者が回ってきた、と。

「よく見ればお前以外にも学園の生徒じゃない奴がいるしな。食後
すぐ運動させるとは思えないし、もう試験自体は終わったんだな？」

「そうそう。それでここで兄さんを待つてたというわけ。学園の先
生に聞いたたら、別に今日は出かけてないから食堂に行けば会えるつ
て言われたからさ」

先生。人の個人情報を他人に勝手に公開してしまうのは、例え近し
い人であっても如何かと思えます。

「で、お前飯は」

「優しい優しい兄さんの、太っ腹な奢りを期待してます」

こう言うてはなんだが予想通りだ。

妹というのは生意気な奴である。兄から見ればそれ以外のものはな
い。パソコンなんて幻想だ、仮初の妄想から産まれた哀れな存在で
あつて、實在なんかしない。

「俺は金が無い、飯の金ぐらい母さんから貰ってるだろ、自分で

」

そこまで言つと途端にヨヨヨ…と泣き崩れる。…何だこの周りからの痛い視線は。おいやめろ、水母は演劇部で主役はるぐらいなんだ、泣いてるのも演技なんだぞ。

「自分で買え。残念ながら俺は今自分が最低限食つ定食の代金しか持つてきていない。いつも通り観客を味方につけて搾り取ろうとしても無駄だ」

「あつそ、ならいいわ」

コイツ、途端にけろつとしゃがんで。まあ、実際はもう2回定食を買つぐらいの代金は緊急時の為に持ち合わせているから、俺も嘔吐いたんだがな。
さて、飯を喰おう。

「…で、何で俺の部屋に来てるんだ？」

「会った時言ったでしょ、お菓子要求しに来たって。時間なら、7時まで許可を貰ってるわ」

いや時間とかそういうことでなくてだな。7時まで許可を貰ってるっていうのもES学園としてはかなり珍しい扱いだが。

「…材料がないから諦」

「さつき冷蔵庫見てみたけど、やっぱり趣味だから買いためはしてるみたいね。お菓子作りの基本的な材料ぐらいはあつたじゃない」

「…はあ」

どうしてこうこいつは動きが機敏なんだ。俺の誕生日の時だって、ケーキの中で一番苺が多かった奴を瞬時に判断して取ってたし、借り物競争だって某有名シンガーのCDなんていう無茶な条件を速攻で見つけ出して1位を取ってたし。何で運動会にCD持ってくる人間がいたのだ。

「ねえ、戸鉄君と戸鉄ちゃん、一体何の話をしてるの？」

「あら、兄さんは自分の趣味が料理、特に菓子作りだっていうことまだ言ってなかったの？うちではあんな楽しそうに料理してたのに」
人の個人情報を以下同文。これだから毎年のように情報漏洩がどうたらこうたらと騒がれるんだ。お兄さんは日本の将来に一抹の不安を感じます。

「へー、デザートフリーパスが手に入らないのを悔しがってたから、お菓子作りはできないと思ってたよ、作ってみてくれると嬉しいな」
「ほら、可愛い女の子2人も期待を裏切るなんて男として恥ずかしいわよ」

…はあ。相変わらず人心掌握の上手い奴め。おかげで作らなければいけない空気になってしまったじゃないか。溜息でどんどん幸せが逃げていくぞ、そろそろ貯蓄0だ。

「分かったよ、今から材料を買いに行くのは面倒だから、プリンとかでいいよな」

結局、自分で買った物を妹のために使わされたわけだ。これが趣味ではなく嫌々のものであったら流石にぶつんとキレてただろう。畜生、顔を緩ませやがって。覚えてろよ。

「で、何で転寝さんは携帯を出してるの？」

「…あつ、いや、その…皆にも教えてあげようかと思って」

人の個人情報を以下同文。仕方ないから多めに作っておこう、はあ。

6時半過ぎ、やっと水母は帰っていった。IS学園に来年入学するかも、なんていうとんでもない爆弾を置いていったよ。もう本当にどうしよう。

しかも1年、つまり来年2年になる人達としっかりパイプまで作りやがって。もうマジで本当にどうしよう。

明日は俺が初めて専用機に乗る日だというのに、胃に穴を開けるようなプレッシャーを掛けないで欲しい。胃酸過多になって倒れそう。

ちなみに、プリンは合計50個作った。好評だったのが唯一の救いだ。

明日に備えて、晩飯を食べたら出来るだけ早く寝ることにしよう。

「水母ちゃん、可愛かったねー」

「どーがー!？」

18 水面のミナモ (後書き)

こんな所でキャラ3人目登場。

19 遅刻者特権

「やばい、寝坊した」

昨日は早く寝たつもりだったが、逆にそれが駄目だったらしい。生活リズムを崩して早めに寝ても体はついてこないってことだな。何事も自分の中できちんと計画を立てることは重要なわけだ、うん。教訓として心に刻み付けておこう。

「なんて感傷に浸ってる暇はねえよ！くそお、朝飯を抜いてギリギリか!？」

慌ててベッドから跳ね起き、既に隣で寝てはいない転寝さんに起こしてくれても良いじゃないかと軽く呪詛を吐きながら着替え始めるが、着替えの手は途中で止められてしまう。何故なら……

ピリリリリリ……

いつもと同じ、無愛想な携帯が鳴ったからである。この急いでいる時に誰だ、急用じゃないなら怒るぞ。急用だとしても多分怒るぞ。ピッ。

「はい、こちら戸鉄海月」

『戸鉄か？織斑だ』

勿論これは一夏ではなく担任の方の織斑姓である。一夏であれば「もしもし、一夏だけど海月か？」みたいに聞いてくるはずである。というか、声が違うな。

『お前の専用ISは朝のうちに届くことになっている。色々書類記入の関係があるので、今日は届くまで自室待機だ』

おおう、怒れない急用だった。寝坊した日にちようと自室待機でOKとは、俺もツイてるな。

「分かりました、届いた時の連絡はどのように？」

『再度携帯で指定をする。用事が終わったらすぐ授業に参加できるように、準備をしっかりとっておけ。それと…』

それと？

『着替えと朝食は迅速に済ませるように』

寝坊はバレてた。なぜだ。なぜ見てもいないのに着替えが終わっていないことや食事がまだなことを判断できるのだ、この人は。

『声が多少寝惚けているからな、そのぐらいはすぐに分かる。今日はISに乗った訓練を午前中いっぱい行うからな、こちらとしても倒れられては困る』

そしてこの携帯越しの読心術。この人には人間の常識は通用しないのかもしれないと、今更ながら痛感してしまった。

一方同日同時刻、1年1組の教室。

「やっぱりハツキ社製のがいいなあ」

「え？そう？ハツキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私はデュノア社のがいいかな。ラファールを作ったのと同じ会社だから相性もいいはずだし」

「試着とかできたらすぐ決まるのにね」

クラス中でカタログを持った女子がきやいきやい意見を出し合っていた。クラス中と言うか、実際は1学年全体が似たような状態だったのだが。

「そういえば男子のISスーツってどこが作ったやつなの？織斑君のスーツも戸鉄君のスーツも見たことない型だけだ」

「うーん、海月のスーツは知らないけど、俺は男性用の特注スーツだったから海月のも特注なのかな。俺のはもとはイングリッド社のストリートアームモデルだったと思う。海月は…あれ？珍しくまだ来てないな」

いつもは早起きして、あまり人がいない食堂で「貸切で特別待遇されてる気分だよな」なんて言うような奴だから、もうすぐチャイムが鳴るのに着席していないのは珍しい。

「今日は朝から戸鉄さんの専用機が届くので、そちらが届くまで海月さんは自室待機ですよ。それよりISスーツについてですが、大まかに特性を説明しましょうか？」

「山ちゃん説明できるんだ、すごい！」

「そりゃあ先生ですから。ISスーツは肌表面の…って、や、山ちゃん？」

「続けてよ山ぴー！」

「えーっと、微弱な電位差を感知することによって、操縦者の動きをダイレクトに…って、や、山ぴー？」

入学から2ヶ月が経過し、山田先生にはうちのクラスで聞くだけで最低8つものニックネームがついていた。俺が適当に数えたものなので、実際はもっと多いんじゃないかと思う。そして今後も増えていくんじゃないかと思う。

「あー、教師をあだ名で呼ぶのはちょっと…」

なんて言っているが押しの弱い山田先生のことだ、結局諦めてあだ名で呼ばれることになるだろう。前、ヤマヤと呼ばれていた時はなんとなく悲しそうな顔をしたので、その呼び方はしないように気をつけよう。

俺は何て呼ぶことにしようか、マヤヤンとか？マリリンと語感が似ているな。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

尚も続いていたカタログつきのお話はその一瞬で済み、全員が纏まって軍を成す。状況的にはスイミーみたいだ。小学校の教科書で読

んだ話だけど懐かしいな。

だが、スイミーであれば巨大な魚を追い払えたが俺達では目の前の人物　織斑千冬、俺の姉には傷1つ付けることはできないだろう。勢力図的には、小魚30匹で鯨に挑むようなものである。1度口を開けられたら飲みこまれて終了だ。

折角だから攻撃力に加えて他のパラメータも海の生物で例えると、その威圧感は鮫並み、判断力は鯨並み。あれ、知能が高いのは海豚だったか？

勿論こんなことを言ったら翌日にはクラス全員が柩に入った俺を涙で見送ることになるから、絶対に言わない。後、この人に対して山田先生と同じ扱い、例えばチフユンとか呼んでしまったら、同じくもう日の出を拝むことができなくなってしまうだろう。目の前の脅威がどれほど脅威なのか解説終了。

（お、出しておいした夏物のスーツ、ちゃんと使ってくれてるのか）

昨日自宅に久々に帰ったとき、掃除のついでにふと思い出して持ってきたんだが、ちゃんと使ってくれているようでありがたい。俺の苦勞も報われるというものだ。

そういえば昨日は海月も自宅に…もとい五反田食堂に後で行く予定で誘ったんだが、疲れるのは御免だとか言って断られたんだよな。帰ってきたら何故か海月は疲れていて疑問に思ったものだが、結局疲れるのなら来てもよかったのにな。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。現時点専用機持ちとはかなり差が開いているが、怠けず真剣に訓練をすれば追いつくことも可能だ、各人鍛錬を怠らないように。ISスーツに関しては届く

まで学校指定のもの、忘れた場合は水着を着て訓練を受けてもらう。それもないなら、まあ下着でも構わないが　まあ、深いことは言わん」

今、最後に喉の辺りで言葉を止めたよな。妙に不安を煽る物言いはやめて欲しい。いや、俺とか海月とかの男子がいるわけだから流石に下着姿はまずいと思うし、それを躊躇させる為にそういう物言いをしてくれたのなら感謝するけどさ。

そういえば、男子がISスーツを忘れた場合どうすればいいんだろ。うか。男子だから水着も下着も短パンとかだし、ISスーツっぽさが無いよな。それを言ってしまうえば女子が下着姿でやるとしてもスーツっぽさは無いけど。

まあ、男子は専用機があるわけだし大丈夫だろう。

『パーソナライズ』という、IS展開とスーツ装着を同時に行ってくれる素晴らしい特権があるからな。多少エネルギーを喰ってしまったら、基本的にはISスーツ着用を普通に出来る時は普通にやるのが一番なのだが。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

どうやらくだらないことを考えている間に連絡事項は言い終わっていたらしく、HRが始まる。山田先生は拭いていた眼鏡を慌てて掛けなおすが、少し手が滑って眼鏡がずれる様子は先生の威厳なんてものを一切感じさせてくれなかった。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも2名です！」

「え……」

全員が口を揃えて叫ぼうとした時に、千冬姉の携帯に着信が入る。

「はい、こちら織斑。 了解、戸鉄に連絡します。 はい、それで

は。 ……山田先生、多少眺めの会話をするので、後の進行は任せます」

そう言っつて千冬姉は扉を出る。携帯の内容から察するに、朝に山田先生が言っつていた海月の専用機についての話だろう。

教室から出た千冬姉とすれ違いで、開いたドアからふたりの転校生が入ってくる。

「失礼します」

「……………」

クラスに入ってきた2名を見て、全員の唾を飲むような音が聞こえる。

何せ その入ってきた転校生2名のうち、1名は男子だったのだから。

『というわけで今から受け取りに行け』

「はい、了解しました」

俺の専用機が届いたらしい。

今日の予定は1日通してISの機体を利用する訓練だが、この時間
ならすぐに授業に参加することが出来るだろう。

まだ見ぬ機体にわくわくしながら、俺は自室を飛び出した。俺、戦^{バトル}
闘^{バトル}狂^{バトル}かもしれない…いや、これでこのことを考えるのは3度目ぐら
いだし、きつと確定だろう。

19 遅刻者特権（後書き）

どうやったら面白い後書きが書けるようになるのか知りたいです
切実

20 気付く金、気付かぬ銀

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」
金髪の方の転校生、シャルルは優雅に挨拶を終了させる。が、全員が気にしていたのはその言葉より容姿であろう。

「お、男…?」

シャルルが着ていた制服は、上は襟の左側が右側の前に被さり、下は足まで伸びていて　つまり、男子の制服だったのだ。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を
」

きつと誰にも不快感を与えないであろう整った笑顔、男としては小柄に見えるが、言い換えればスマートとも表現できる体つき。

「きゃ……」

「はい?」

「きゃあああああああーっ!」

クラス全体が静まっていたのは、津波の前に思い切り水が引いてゆくと同じ現象だろう。

勿論その後には大津波が待っているわけである。止めることは不可能であり、その水は予想をはるか上回るスピードで全てを飲み込む。

「男子！3人目の男子！」

「しかも全員うちのクラス！」

「織斑君戸鉄君もいいけど、織斑君デュノア君もいいかも！いや、
敢えての逆転も……」

「ああ神様！私に命を下さってありがとうございます！」

元気だね、うちのクラスの女子一同は。というか途中、何やら非常に身の毛がよだつようなことを仰っていた気がするぞ。ちよっと彼女からは距離を取るべきか。

「全く、廊下にまで大声を響かせるとはどういう見だ。騒ぐな、
静かにしろ」

扉から、電話が終わったと思われる千冬姉が入ってくる。多分、こんなに生徒を無碍に扱っても尊敬を得られ続けるのは千冬姉だけだろう。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

いや、決して無視していたのではないのだが　　というか女子達は無視できないが故の威圧感に、敢えてもう1人の転校生を思い切り持ち上げて現実逃避を行っていたのだらうが、まだ転校生は残っている。

シャルルが男子として小柄だと言うのであれば、その女子は女子として小柄。一面の雪景色を映したかのような銀色の髪は切るのが面

倒とでも言わんばかりに不揃いに腰の辺りまで伸ばされ、背の低さがまた一段とそれを長く見せている。

右目は全てを冷ややかに見据えるような赤目。何故左目を言わないかと言えば、その左目は黒い眼帯で隠されているからである。ただの装飾の1つだと言うのに、それは遺憾なく圧力を発揮してくる。

姿勢は正しいが、シャルルの物腰の柔らかいイメージとは正反対の姿勢の正しさ。直立不動のそれは、まさに軍人、もしくはそれに順ずる組織みたいなもの人間であることを容易に想像させる。

「……………教官」

先程まで黙り、このままでは口も開かないのではないかと思われたその女子は、不意に言葉を紡ぐ。

「私は教官ではなく教師で、お前もここでは一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

彼女は背筋、腕のどちらもぴっと伸ばし、かかとを合わせ返答をする。やはり軍事関係者であり、過去千冬姉が教官である理由で勤めていた唯一の場所がドイツであることから、ドイツの人間であることも想像できた。

「それで、何だ」

「は。 こちらにいる男子は、どちらですか？」

そして、ドイツの軍事関係者であるということは、俺とは関係が無

かったとしても、少なくとも海月とは今後関係があるということも示している。

「そつちは織斑だ。戸鉄はお前と一緒に送られてきたISに関する手続きで今は席を外している。それより、挨拶をしる」

「！この男が。…はい、了解しました」

何やら前半で何かを呟いていたが、いまいちよく聞き取れなかった。それよりも今は、クラス一同が自己紹介を待ち望んでいる。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………え？」

不意に、そんな声が教室内に響く。誰が上げたかも分からないその声に、一瞬教室がざわめく。残念ながら俺には何を言っているか聞こえなかったのだが。

「あ、あの、以上……………ですか？」

「以上だ」

沈黙の空気とは多少違うが、それでも先生にとっては重苦しい空気だったのだろう。溢れんばかりの慈愛の表情を浮かべラウラに問うのだが、残念ながら返事は一瞬の即答だった。

もう少し協調性と言うものをだな…お？なんだ？軍靴の音でも響かせそうな足取りでこちらにやって来るぞ。

目の前には、とぼけた顔の男がいる。

織斑一夏。自分の唯一尊敬する教官の栄光に、泥を塗った人物。こいつを私は許せない。許すわけにはいかない。

「きゃ………」

「……は？」

「きゃあああああああーっ！」

織斑一夏に近付いていったときに聞こえた小さな声はよく考えれば、先程の奇声の予兆と同じものだった。

可能な限り面倒事が無いよう、名前だけを言い興味を持たせないようにしたつもりだったが、何故このようなことになっているのだ。甚だ理解できん。

「銀髪小柄な美少女！」

「名前がラウラで、ドイツ人！」

「確実にあの寝言の彼女！奇跡、これが奇跡よっ！」

…何を言っているんだ、こいつ達は。

まさか、軍から私の情報が漏れていたとでも言うのだろうか？もしそうであれば、徹底的な内部捜査をする必要が出てくるだろう。

とにかく理解できたことは、この学園の生徒達がやかましいことと織斑一夏を張り倒すタイミングが無くなってしまった、ということ

だった。

「これで、書類への記入は全て終了ですか？」

受け取った書類に必須事項を書き、受付の相手に渡す。書類の束を、慣れた手つきで流し読みされ、その上で大丈夫、と太鼓判を頂いたかなりの数の書類を渡されたので膨大な書き込みが必要かと思っただが、名前を書き込むだけのような書類が予想以上に多く、そこまで時間を取られなかった。

4月に手に入った一夏と比べれば随分遅かったが、これでようやくと唯一無二の自分の専用機を手に入れたわけだ。

本当なら万全の準備をしてから授業参加したい。のだが……一次移行までを今から1人でやってたらいつになるか分からないし、一夏とセシリアの対戦の時のことを考えると、時間が無い時にそんなことしてたら確実に出席簿が飛んで来るよなあ。

仕方が無い、今2組と合同で授業してるはずの第2グラウンドへ行く。どうせあっちでISに乗る時間もあるだろう。

確か、今着替えるなら第2アリーナ更衣室かな。…2続きで縁起が
いい感じだ。

「のあっ!?!?」

いや、びっくりした。グラウンドに出て行ったらいきなりセシリアと鈴ちゃんが目の前に落っこちてくるんだもん、そりゃ誰だって驚

くさ。砂埃が多少目に入って痛い。

「くっ、うっ……。まさかこのわたくしが……」

「あ、アンタねえ……。何面白いように回避先読まれてんのよ……」

口喧嘩の内容を聞いた限りだと、この2人がペアで模擬戦に負けたみたいだ。曲がりなりにも代表候補生、しかも第3世代機の2人を倒すということは、相当の実力者だな。

「ぐぐぐぐっ……！」

「ぎぎぎぎっ……！」

2人とも、そんなに怖い顔を喧嘩で使つてると皆に悪印象を持たれちゃうぞ。代表候補生お断り物件急増だ。

目の前で行われる、お互いの語彙の限りを最大限無駄に活用した舌戦には、町内会で有名な縁結びのみっちゃんたる俺でも流石に呆れるしかなかった。

結局、クラスの女子達からのひそかな笑い声が風に乗って2人の耳に届くまで、2人は口喧嘩をやめないどころか俺にすら気付かなかった。

「織斑先生、受け取り終了したので今到着しました。…そこにいる金髪銀髪の女子2人は初見なんですけど、誰ですか？」

多分あのまま立ち止まっていたら脳天に秘剣シュツセキボ・ブレードを直撃していたであろうと予想した俺は、とりあえず織斑先生に

報告をしに行く。

何やら金髪と銀髪の2人の見慣れない生徒がいたので聞いてみると、どうやら転校生らしい。

「僕はシャルル・デュノア。フランス代表候補生だよ。君が戸鉄君？」

珍しく僕っ子か。女の子で僕って言う子って、何があってそういう一人称に落ち着いたのかが気になるよな。

ひょいっ。

「初めまして、戸鉄海月。権限的には一応ドイツ代表候補生と同等だけど、国籍は日本だし生まれも日本だ。よろしく頼む」

ちなみにドイツ代表候補生と同等権限ってというのは、ドイツに機体を作成して貰うための一時的な処置だ。

ひょい、ひょいひょいっ。

「うん、僕の方こそよろしく…ボーデヴィツヒさん、さっきから何やってるの?」

…うん、デュノアさんよく突っ込んでくれた。さっきから、何故か銀髪の少女　ボーデヴィツヒさん、というらしい　は、俺に手刀なり蹴りなりを連打してくるのだ。

初対面の相手に攻撃を連続して叩き込む文化なんてどっかにあったっけ?今のところそういうのは聞いた記憶がない。

「ふん、あのボンクラとは違うらしいな」

手を止めたボーデヴィツヒさんは、何やら腕を組んで少し満足げにしている。

「ボンクラって？俺の前にも誰か殴られたりしたの？」

「織斑一夏に一撃、な。実際は興が削がれて当ててはいないが、あの間抜けな面なら何の問題も無く当たっていただろうな」

なんだそれ。俺だけじゃなく一夏にもということとは、どうやら初対面男性に女性が攻撃を繰り出す文化は本当に存在するらしい。

「さて…教官。授業中ですが、少しこいつをお借りしてよろしいでしょうか」

ボーデヴィツヒさんは織斑先生に方向を翻し、そう問いかける。…教官？いくら教師といえど、なにやら非常にお堅い呼び方だな。いや、それより俺をお借りするってどういうことだ。まさか攻撃がヒットするまで徹底的に締め上げるとか。そうだったらさっき一発喰らっておくべきだったか。

「教官と呼ぶなと先程も言ったはずだぞ。ドイツ軍関係で何かあるのかも知れんが、授業に支障をきたすと面倒だ。後にしろ」

「了解しました」

…ボーデヴィツヒさんはドイツの代表候補生だったのか。

ドイツで銀髪と言えば「ラウラ」を思い出す。ちょうど目も赤目だし、ボーデヴィツヒさんの姿はちょうど昔見た彼女が成長した姿の想像とかなり近い。最初に見た時はドキっとした。

「さて、では今から実習を行ってもらおう。専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰か。では8人グループに分かれる。戸鉄も専用機持ちだが、他の者と比べて搭乗時間が短いので、今回は一般生徒と混じってもらおう。各グループ、専用機持ちがグループリーダーを務めること。では分かれる」

言われたので、俺はラウラについて考えていた思考をカットしてボーデヴィツヒさんの前に居続ける。先程話があると言っていたわけだし、ある程度機動訓練中に話すことが出来るだろう。

と、考えたが、勝手な予想というものは存外うまくいかないものである。

「この馬鹿者どもが……。出席番号順で1人ずつグループを分けていけ！順番はさっき言った通り。次もたついたら、その瞬間に実技訓練をやめ、グラウンドをISを背負って100周だ！」

うん、女子達はその10割が特定の2人の所に言ったのだ。つまり、一夏とデュノアさんの所。

ボーデヴィツヒさんは特有の凄みというか、そういうオーラがあるし、セシリアと鈴はさっき戦闘であっけなく倒されたから、結果として残りの2人に行くのは当然。

そうでなくても片や転校生、片や世界的に有名な男性IS操縦者。人を集めるのは当たり前だった。

織斑先生の掛け声と共に、女子達は自分の番号と順番を照らし合わせる。俺はデュノアさんか。

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

全くだ、おかげでボーデヴィツヒさんとの会話タイミングが非常に

遅れてしまうではないか。
注意されてすらなお女子達はおしゃべりをしているし、本当に怖いもの知らずだなと思う。

「……………やったあ。織斑君と同じ班っ。名字のおかげねっ……………」

「……………うー、セシリアかあ……………。さっきボロ負けしてたし。はあ……………」

おいおい、自分で勝てるわけでもないのにそれは流石に酷いだろ、セシリアだって生徒の中では頭一つ抜けて強いんだぞ。

唯一おしゃべりが聞こえないのはボーデヴィツヒさんのグループだ。多少吹雪のようなものが見える気がするが、あれぐらい静かだったら一々注意しなくていいから楽なんだがな。

うちの班もあれぐらい静かになってくれればいいのだが、俺が睨んでも女子達は気にすることなくおしゃべりを続けるのだった。

20 気付く金、気付かぬ銀（後書き）

名前を後になって知る、なんてよくあることです

21 イッツアドモリング

「えっ、デユノアさんが男!?!」

これが、おしゃべりを止めようと会話に耳を傾けた俺が「デユノア君」という呼称について疑問に思い、それについて女子に聞いた結果である。

「あ、えーっと…戸鉄君、気付かなかったの?」

「ああ。言っちゃ悪いかもしれないが顔は女っぽいし体格も女っぽく見えるし」

…単純に、感じる雰囲気にも男特有のものが感じられないし。感覚論だけ。

「ははは…もう少し男っぽくなれるよう努力するよ」

頭を掻いて苦笑い。うん、やっぱりこの人女なんじゃないのかな?別に女だからって特に何が変わるってわけでもないけど。

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を1班1体取りに来てください。数は『打鉄』が3機、『リヴァイヴ』が2機です。好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

山田先生からの呼びかけを受け、そちらに意識を移す。

うっん、今日の山田先生は平常時より数割増しでしゃきつとしてる。何でだ?いつもどおりのなよつとした、すぐからかわれる姿はどこにも見えない。

「さて、じゃありヴァイヴを取ってくるよ。実習を始めようか」

「あ、うんお願い」

一夏曰く、こういう力仕事は男がやるものらしいから、とりあえず『ラファール・リヴァイヴ』を取りに行かないとな。

これ、乗って運べば楽なんだけど駄目かなあ。

「それにしても、デュノア君と戸鉄君2人ともいる班なんてラツキーよね」

「優しい一夏君も格好いいけど、紳士なデュノア君と一途な戸鉄君も素晴らしいわ……」

…なんていう会話は無視する。私語ばかり続けると痛い目喰らうからな。体罰は虐待だという世間の考え方に逆行する一撃は、出来れば喰らいたくない。

『各班長は訓練機の装着を手伝ってあげてください。全員にやってもらうので、設定でフィッティングとパーソナライズは切っておりません。とりあえず午前中は動かす所までやってくださいね』

オープン・チャネルから山田先生の声が響く。乗って動かすなんて1人10分も掛からないんじゃないのか？ 転寝さんだって歩く程度なら5分ぐらいできてたはずだし。

「ええっと、それではISの装着と機動をして、歩行まではやっちゃおう。順番はどうしようか」

「じゃあ最初に俺が実演するよ。基本動作を見せて軽く歩くから、その間に順番を決めちゃって」

「あ、うん、ありがとう」

言っただけの行動は迅速に、とりあえず乗り込んでステータス確認。よし、異常は特に無いな。先生方が準備をしたんだから無いとは思うが、それでも確認は重要だ。

「とりあえずISはイメージが重要だから、何よりも自分の身体を動かす感覚でやってみてね。じゃあ軽く歩いてくる」

「それじゃあ戸鉄君が戻ってくるまでに順番を決めようか。…と、その前に。今日一日はよろしくお願いね？」

…え？何で彼女達は皆、右手を差し出しているの？重なったお願ひしますもやけに気合が入ってたけど…

しかも、よく見たら全員1列に並んでこっちを見てるし。

「え、えっと……？」

よく見てみれば傍でやっている織斑班も同じように困っていた。どうすればいいんだろう。

スパーン！

グラウンドに妖刀　その名を朱赤母しゅせきぼと言う　の音が響き、その後ハモって女子の悲鳴が聞こえる。全くどこの班だよ、…っっておい

俺の班じゃないか。
とりあえず歩行から低空飛行に切り替えて近付くと、そこには般若の女性がいた。

「人の手本も見ず順序も決めないと余程自信があると見た。それならば私が直接見てやろう。最初は誰だ？」

「あ、いえ、その……」

「わ、私たちはデュノア君と海月君に教えてもらえればいいかな？
……なんて」

「2人とも、操縦上手そうですし……」

馬鹿共め。そんな言い訳で、心を見透かす織斑先生から逃げられるわけが無いことぐらいわかりきっているのに。南無。

「なに、遠慮するな。ちょうどデュノアも持て余していたようだし、お前達の自信を存分に見てやる。さて、出席番号順に並べ。それと戸鉄」

「はい？」

「ボーデヴィツヒの班の進行が遅れている。手伝いに行つてやれ。
……ああ、多少の会話ぐらいなら見逃してやる」

これは粹な計らい、と思つていいのだろうか。いつもこつ優しいなら俺は万々歳なんだけどなあ。

「じゃあ、後はよろしくお願いします」

かくしてボーデヴィツヒさんの所へ行く権利及び義務を俺は手に入れたわけだ。さて、行くか。

「あ、戸鉄君来たの？」

来て早々だが困った。これは予想以上に場の空気が冷え込んでいる。ボーデヴィツヒさんの出す凍て付くような波動みたいなものが場の空気を支配している。

女子が話しかけてくるのも100%が俺に対してだ。

「ここに来たってことは、ボーデヴィツヒさん目当て？」

「へ？織斑先生に、こっちはいいから進行が遅れてるボーデヴィツヒさんの所を見に行つてこいって言われただけだよ」

目当てとは一体どういうことだろうか。もしかして俺は銀髪小柄なら誰でもいいと思われているのか？

確かにボーデヴィツヒさんの姿は過去見た「ラウラ」の姿とぴったりに重なるし雰囲気もかなり近いが、しかし彼女は別人だろうに。

「えー、そうなんだ。私はてつきりラ」

そこで女子に手刀が入り、意識が刈り取られた。てつきりの後は何て言おうとしてたんだ？

「無駄口を叩くな。操縦方法は既に習っているはずだろう。お前達が初心者なことは知っている、別に動きが鈍くて癩癩など起こしたりはしないからさっさとしろ」

手刀を入れた張本人、ボーデヴィツヒさんが喋る。いや、そこで喋っても意識が無い本人には聞こえないと存じますよ。それに、雰囲気は萎縮してしまつては生徒たちも思つたとおり動かせないだろうに。ここは一肌脱ぐしかない。

「じゃあ、お手本で俺が動かすから、とりあえず復習してみて」

人間、誰かが動けばそれを皮切りに少しずつ行動を起こすものだ。こういう些細なことでも、きっと誰かは続いてくれる。というか続いてくれないと織斑先生の気遣いが意味を成さない。

…しかし、折角専用機を手に入れたつて言うのに機動の機会が未だに一度も無い。

グラウンドを1周して戻ってきたら、とりあえず女子は乗り込む気になっていた。変わらないのはボーデヴィツヒさんの無口さだけ。

あ、手刀で気絶した子もちゃんと復帰してるな。

「降りる前にちゃんとしゃがまないと、次の人が乗れないから注意してね。生憎俺はあつちにいる一夏と違って、自力でISを横に倒してでも乗ってもらつつもりだから」

女子達からブーイングが上がるが、知つたことではない。俺は一夏みたいに神経が図太いわけじゃないんだ、水着も同然な女子を抱いて持ち上げるなんてできるか。

…さて、基本動作ぐらいはもう女子全員習っているはずだから、後は少しずつ乗らせてアドバイスして、でいいだろう。

というわけでこちら、先程も言つた無口な銀小像さん。ごめんなさい嘘です、ボーデヴィツヒさんです。

「ボーデヴィツヒさん？」

「訓練中の私語は厳禁だ」

「織斑先生曰く、『授業妨害にならない程度の会話なら見逃す』だつてよ？」

一字一句あつてるわけじゃないが、先程の言い方だところこういうことを揶揄してるんだろう。比喩表現がばつちし日常会話で出てくるなんて、ニホンゴムスカシーネ。

「……！そうか、なら手短かに話す。まず、今日の放課後にフィッティングとパーソナライズ、一次移行まで済ませるので空けておけ」
ファースト・シフト

「放課後ね、了解。アリーナの使用許可と模擬戦の相手は？」

「アリーナの使用許可については既に取つてあるので問題ない。模擬戦の相手は私が勤める。次に、その機体のデータの扱いだが」

「定期的にドイツに送信、間は大体2週間くらい、もしくは大型戦闘の後可能な限り迅速に、つて所かな。後国家機密も多大に含まれてるから、当然注意を払うようにか。ドイツ軍関係者つていうことは、定時報告もあるよね？その時一緒に送ってもらえば大丈夫？」

「ああ、それで問題ない」

まあ、予想通りと言えば予想通りの会話内容だな。もう少し、例えば一目惚れしました！お付き合ひして下さい！みたいな会話だったらよかったのだが。

「そして、最後にだが」

あら、まだ終わってなかったのか。さっきので大体の話は終わったものだと思ってた。

予想以上。目の前の男に対しての直で見ての感想はそれだ。

ISの機動に関しては何も問題は無かったし、人を動かすのも下手ではないが、何よりその判断力。

会話の中で疑問部分を明確にし、ある程度の情報から残りの内容を想定する。一瞬の判断で状況が覆る戦闘に置いて最も重要な能力を持っている。

身体能力も悪くは無い。軍人と比べれば足元にも及ばないが、あちらであたふたとしている織斑一夏と違い急の攻撃にも対応し回避するだけの能力はある。

この間見たISのセンスに加え、これだけの能力があれば素質は十二分にあるだろう。磨けば更に輝く、まさに宝石の原石を見つけたようなものだ。

後は最後の問題だが

「まだ名前を言っていないかったので言っておく。私の名はラウラ
ラウラ・ボーデヴィツヒだ、呼び捨てで構わない」

「うん、分かった。よろしくなラウ…え？いい、いい、今なんて？ラウラって言った？」

「ああ、確かにそう言った。何か問題でもあるか？」

「い、いや何でもなし。戸鉄海月だ、よろしくな、ラウラ」

明らかに今、心拍数が上がった。そして瞬きの回数の上昇も見える。

そう、最後の問題とは……この男、戸鉄海月が何故か私に抱いている恋愛感情をどうするか、だ。

22 オクジョー・ウォーズ

ラウラ。

どことなく自分の初恋の相手の容姿と重なりつつも、まさかそんな奇跡まがいのことがあるわけ無いと思っていた。

こんな場所で会うことになるなんて、予想外にも程がある。苦労して解いていたダンジョン攻略中にいきなり抜け穴を見つけてしまったようなものだ。

初めて会話した時に言おうとずっと前から考えていた言葉は一瞬で頭から吹き飛んだ。

悪印象を持たせず、押しすぎも引きすぎもしない、これぞ完璧だとしても言わんばかりの完成度を誇ったつもりだったその言葉は、刹那で消え去ってしまった。

そのために口から出てきた言葉は、

「い、いや何でもなし。戸鉄海月だ、よろしくな、ラウラ」

なんていう、ただの挨拶だけ。

おかしい。

先程までは多少似ている可愛い女の子という認識しか無かったはずなのに、彼女がラウラだと明かしたその瞬間から一種の高揚感が頭から離れない。

IS戦闘で感じた、武者震いとは違う感動。恐怖を感じた時とは違う意味で出て来そうになる涙。

学園に来た当初のように夢ではないか確認する為、こっそりと手の甲に爪を突き立てる。但し、考えていることは学園に来た時の『夢であってくれ』とは真逆。…痛い。よっしや。

彼女の『ラウラ・ボーデヴィツヒだ』という台詞が、何度も頭の中で反芻される。

はっ。

彼女は、俺が好いているという事実を知っているのだろうか。もし知っているとしたら、それに対してどのような感情を持っているのだろうか。

何かしら良くない感情を持っているとしたら、どのように接すればいいのだろうか。

逆に何か良い感情を持っているとすれば、もし知っていないのならば　　うわあ、女々しいな俺。

「…っ君、戸鉄君！」

はっ。

気付いたら棒立ちになって頭の中だけ別世界へダイブしていた。いかにいかに、今は授業中だよ。

「あ、えーっとごめん。何かかな？」

「いや、歩行してた時に多少ブレがあった気がしたんだけど、ちょっと確認を手伝ってくれないかなあって。もしかして考え事の邪魔しちゃった？」

「べ、別にそんなことないよ！ブレの確認ね、分かったやろう、すぐやろう、うん早くやろう」

周りから見たら、その授業が終わるまでの俺はぜんまい仕掛けのよ
うなぎこちない動きだったそうだ。

さて、さっきは天パってるくにあの後会話ができなかったが、ラウ
ラにどうやって話しかければいいか。

「海月、ちょっといいか？」

とりあえず放課後には確実に対話が必要なわけだから、それまでに
少なくとも普通に会話できるようにならなければいけないよな。
下手にラウラだと意識せずに話しかけてたときは大丈夫だったんだ
し、一度ラウラだということを通して頭からはじき出して会話するよう
にしようか。

「おーい、海月、聞いてるか？」

しかし、相手を見てしまうともう印象が頭から離れない。相手の目
を見て話さないというのは失礼だし、どうやってぎこちない会話を
スムーズに持つて行けばいいんだらうか。

「み、つ、き！」

はっ。

いきなり耳元で大きな声が響き、運んでいたISを思わずひっくり

返してしまっ。

「のわあっ!?!?…あ、一夏か。何だ?」

「何だじゃねえよ、さっきから話しかけてるのにどうしたんだ? 今日
日の海月はどことなく変だぞ?」

何言ってるんだ。俺は至って正常で限りなく普通だぞ。そして誓っ
て変な人ではない。

「それでさ、今日の昼飯なんだけど、屋上で喰わないか?」

「ん?何でまた?」

確かに天気は良いが、この後整備の講習があり移動距離が長いわけ
だから、少し面倒だぞ。

「いや、筈に屋上で喰わないかって誘われてさ。皆で喰った方が飯
も美味いだろっし、行かないか?」

なるほど。多分筈さんは凄く勇気を出して2人きりの昼食を楽しも
うとしたんだろうに、そこに人を誘うとは。

全国のお暇なお方は、筈さんの決断と行動に拍手を送ると共に織斑
一夏という人間に不幸が来るように祈ってください。

「いや、専用機のことですら有事があるかもしれないから、悪いけど遠
慮しておくよ」

本来は現時点で用事は無いのだが、筈さんを一夏と2人きりにさせ
てあげもしたい俺は、勿論断る。

「そっか、なら仕方ない。シャルルを誘って食べるよ」

手遅れだった。

2人で食事というささやかな思いをさせた願いが叶わぬことをまだ知らない篝さんに頭の中で慰めの言葉をかけると、俺は再びラウラのことに思考をダイブさせていった。

「何故、近寄ってくる」

銀髪眼帯の少女は不機嫌そうに問う。

「いやなに、折角来たって言うなら大人数で喰ったほうが美味しいだろ」

黒髪黒目の少年は当然のように返す。

ここは屋上。時間は実習後の昼、ちょうど飯の時間である。

目の前にいるのは一夏、篝さん、セシリア、鈴ちゃん、デュノアさん、そしてラウラ。

篝さんは表面上取り繕ってはいるが、明らかに落胆している。雰囲気でも少分かる。

対照的にラウラは不快感を隠そうともせず一夏を見据えている。こっちは雰囲気どころか表情で分かる。

「海月さん、どうしてこのような状況に…?」

セシリアがひそりと聞いてくるが、俺としては『偶然』としか答え

ようが無い。

事の始まりは一夏に昼食を誘われた直後。

俺がどうやってラウラに話しかけるかを考えていると、またもや自分を呼ぶ声が飛んできた。

『戸鉄海月。話がある、ついて来い』

声を掛けてきていたのはラウラ。勿論、それまでどうやって話せばよいのかを真剣に考察していた俺にとって、断る理由は一切無かったので承諾。

多分、人前で話してはいけない可能性がある内容だったのだろう。

ラウラは、フライベート・チャネルどんどん人がいない方向へと進んでいった。

ISを展開して個人間秘匿通話を使えばそんな手間も無いんだが、残念なことに許可なしでのIS展開は校則違反になってしまう。

そうして、ラウラは人ごみをどんどん避けてゆき、最終的にたどり着いた場所がこの

ヒュンッ！

何かが風を切る音を立てて一夏に向かってゆく。何だろう、この音は確かうちの妹が俺に対して打撃を…

バシンッ！

咄嗟に一夏を押しして、位置が変わった俺に平手打ちがヒットした。うわぁ、綺麗に痛みが通る素晴らしい角度だよ。

追撃が無いように手を掴んでそちらを見ると、平手打ちの主はラウラだった。

「…っ！何故邪魔をする！」

少し憎らしそうに目をこちらに向け、そう叫ばれる。まだ掴んだ手を離していないので、ラウラは行動に制限が掛かっている。

「いや、友人が攻撃を喰らいそうだと思ったら体が勝手に。それより、何で一夏を平手打ちしようとしたの？」

「私は、この男があの人のお教官の弟であるなど絶対に認めない！こんな、非力で、流される人生を享受しているだけのような奴など、認めるものか！」

一夏のIS戦闘が弱くて、人に流されやすいつていうのは完全に同意できるもののだが、どうやらこの怒りようを見る限りでは何か深い理由があるらしい。

しかし、今から楽しくお弁当というこんな時にいきなりそんな方向へ話題を振っても、明らかに空気は沈むわけで。

「ラウラ、とりあえず飯を喰おう」

だから、とりあえず空気の正常化を促す。あれ、清浄化が正しいのか？

「…は？」

予想外の一言が浴びせられ、ドイツ代表候補生は盛大に戸惑う。疑問に首を少し傾げる仕草が可愛い。

「いや、だって用事って言ってもこの時間に飯喰わないといけない以上、手短に済ませる用事だったんだよね？でもその手短は、今の一夏とのいざこざで時間切れだ」

今から食堂に行くのでも問題ないが、移動の手間を考えるとそれは多少迷い所である。万歩計の歩数でも稼ぐのなら遠回りもいいんだが、生憎そついうのは持ってない。

「それに　ここで一夏を攻撃しようとしたことについて理由を言っておかないと、そこにいる3人の女子は確実に憎悪対象として今後ラウラを見ると思うよ」

「ふん、たかが1人の挙動に一喜一憂する軟弱者共に憎悪されようが、私は一向にかまわん」

あああ駄目だつて話題を戻したら。しかもただでさえこの3人は気性が少し激しいんだ、プライドを傷つけるような発言をしたらどうなるか、結果は火を見るより明らかだ。

どういうことかって、今にもつっかかりそつなセシリアを密かに牽制し、篝さんと鈴ちゃんは一夏の後ろにいるから何とか手を出さない、ギリギリセーフとギリギリアウトの境界線。

「それよりも手を離せ。既に身構えている人間に手を出そつなどという気はない」

え？手？…あ、そついえばさつき追撃を止めようと思つた腕がそのままだ。攻撃しようとしたのがラウラだからこの手は勿論…
勿論ラウラの手じゃないか。

「あ、ご、ごめん！」

慌てて手を離す。爪食い込んだりしていないだろうか。内部出血とかは大丈夫か？

「…興が削がれた。話は放課後の模擬戦の後でも特に問題は無い、失礼する」

食べるなら一緒に、なんていう声を掛けるまでもなく、ラウラはスタ歩いて行ってしまった。

屋上に残ったのは未だに不機嫌そうな箒さんとセシリアと鈴ちゃん、何やら状況が飲み込めないデュノアさん、考え込んでいる一夏。

そして、手に残ったラウラの腕のおぼろげな感触を必死で思い返している俺だった。

…腕、白くて柔らかかったな。

22 オクジョー・ウォーズ（後書き）

お気に入り登録がいつの間にか200突破、ありがとうございます！

23 作者は党無所属

「とりあえず、堅苦しい話は後だ後。さっさと飯喰おうぜ」

？ならぬ一夏の一声で、ようやく場の空気が深刻なものから和やかなものへと変化してゆく。

ラウラが去っていったドアを不満げに見ていた3人娘は慌てて弁当を出し、全員席へと着く。

「おい海月、まだ席開いてるぜ？座らないのか？」

「ん、俺は別にいいよ」

今日はいつどんな予定が入るか分からなかったし朝も時間が無かったので、食事は適当に立って喰えるものを持ってきていた。

座って食べてもいいんだけど、一夏への3人娘のアタックチャンスを考えれば座らないのが妥当だろう。

「そんなこと言わずにほら、大勢で喰った方が飯は美味いぜ？立っただまま喰ったら行儀も悪いし」

食べ歩きができるからこそその料理も俺は悪くないと思うぞ、ファーストフードなんか手軽に喰えるからこそそのファーストフードだ。

第一見てみる、女子から座るなという無言のオーラが……あれ、出てない。いや、1人筹さんは出してるけどセシリアと鈴ちゃんからは感じられない。

「そうですね、マナーをしっかりと守らないと紳士失格ですよ？」

「そうそう。アンタさあ、人に気を使うのはいいことかもしんないけど、料理は礼儀を守って食べるものよ」

「…それじゃ、お言葉に甘えて」

開いていた席のうち、一夏から一番遠い所へ座る。篝さんはやつぱり睨んでくる。シールドエネルギーが一睨みで50ぐらい持っているかれそうだ。

「はい一夏、アンタの分」

食事が始まると鈴ちゃんが一夏にタッパーを投げ渡す。危ないな、落つこちたらどうするんだ。

「おお、酢豚だ！」

「そ。今朝作ったのよ。アンタこないだも美味しいって言ってたじゃない」

こないだと言うと、あの保健室の後の時か。空腹もあったんだろうが、確かに美味しい美味しいながら喰ってたよな。

喰ってる一夏を嬉しそうな顔で見てた鈴ちゃんに一夏が『にやけるけど、顔に何か付いてるか?』なんて言って純情を踏みにじっていた。

「料理が得意な女性が嫁って、男の理想だよなあ」

「はっ!? ちょっとアンタ、何言ってるのよ!？」

あ、考えてるだけだったつもりがついぼろっと。鈴ちゃんのあたふた具合が凄い。
ちなみに俺は自分で料理を作れるからそこまで懂れてるわけでもないが、それでも好きな相手の料理を食べてみたいと思うのは至極道理。

「そつだよな。鈴と結婚できる奴は幸せだぜ」

…一夏がその台詞を言ってしまったせいで、場の空気が凍る。その発言は確実に禁句だったのではないだろうか。
当の一夏のみが首をかしげているのがまた何とも酷い。好きな相手の料理を一生懸命作ってきたその健気さを理解しろ。

「ん、コホンコホン。その、一夏さん、実はわたくしも今朝は不思議と何故だか予想外に早く目が覚めまして、こんなものを作ってみたのですわ。おひとついかがでしょう」

空気を一新させようとバスケットを開くセシリア。見た目とても綺麗なサンドイッチだ。……けど。

「お、おう。あとでもらうよ」

一夏も遠慮気味ということを知っているのだろう。

俺も料理の時に知ったんだが、セシリアの料理の技術はIS適正っぽく言うところ以下だ。見てくれからアウトなものではないのだが、どう考えても調味料がおかしい。

あの日の後、いつもどんな作り方をしているのか気になったので一度料理を作ってもらったのだが、その時俺はただ苦いだけのコーンポタージュを初めて飲んだ。

「？　どうかしまして？」

「いや！どうもしていない！」

鈴ちゃんはうわあ……って顔をしてる。俺も多分似たような顔。

彼女に掛ければ、毒を入れずに犯罪を犯すことでさえ可能だ。セシリアが客を招いたパーティーで、セシリアの料理で複数名死亡。毒物検出が無い。うん、これが新手法の推理ドラマの手口だ。

しかも彼女の料理、「本と同じになればいいのでは？」という考え方のもと、見てくれだけはまともな料理を作るから手に負えない。あれだよな、綺麗な植物に擬態して獲物を狩る虫みたいだ。名前忘れちゃったよ。

「はつきり言わないからずるずるいつちやうのよ。バーカ」

いやあ鈴ちゃん、一生懸命作った料理を不味いってばかり言われるのも結構シヨクだと思うぜ？しかもセシリアの場合、美味しいですわよねと言わんばかりの無言の圧力を掛けてくるし。

それでも、どこかで美味しくないとということ伝えてやらないと料理は旨くはならないんだけどな。

「セシリアはさ、自分で味見とかしないの？」

「へ？人に振舞うものを自分で先に食べてしまうというのは、どうも気が引けてしまっ……」

「駄目だよ、例えば子供の誕生日にケーキを作るとして、甘くしよと砂糖を入れたらそれが塩だったりしたら誕生日会は台無しだろ？失敗してないかどうかの確認のためにも、味見は凄く重要なんだ」

言ってしまったえば当然のことだが、具体的に例を出した上で説得すればきつと改善してくれるはずだ。

勿論、小声で『一夏の誕生日に同じ事をして、もし一夏に嫌われちゃったら泣きたくなるだろ?』と少し脅しながら、サンドイッチの一欠けをさつとセシリアの口に放り込んでおくのも忘れない。

セシリアはリアルな想像をしてしまったのか、それともサンドイッチのあまりの味のおかしさには分からないが、顔から血の気が引いている。

「? なあ海月、今何かセシリアに言っただけじゃなかったか?」

「いや別に、何も言っただけだよ。なあ、セシリア?」

多少涙目になりながら、セシリアは口に手をあて無言でコクコクと頷く。きつとこれで、味見の大切さを分かってくれただろう。

「まあ、次から頑張ろうぜ。大丈夫、料理を最初から美味しく作れる人間なんていないさ」

かく言う俺も最初のころは酷かった。

カレールウの量を間違っただけで倍入れちゃって味が濃すぎるカレー（お湯で薄めながら喰った）とか作る時あまり赤くならずトマト缶を入れようとしたら間違えてタバスコを真っ赤になるまで入れちゃったミートソーススパゲティ（水で洗いながら喰った）とか。

「う、うーん、僕、同席してて本当に邪魔じゃないのかな?」

一夏の隣のデュノアさんが呟く。一夏好きの3人が良い意味でクセ

が強くて、少し肩身が狭そうだ。
とは言え同席しなくても多分彼は不自由な目にあうと思う。多分、
今食堂に行けばシャルル君奪取競争とでも言わんばかりの勢いで女
子の大群が押し寄せるだろう。

実際はデュノアさんの優雅と紳士を極振りしたような態度で女子は
強引には出にくいだろうが、それでもその対応をするぐらいであれ
ばこちらで食べた方がまだ自由度は高いと思われる。

というか、一夏は最初デュノアさんを誘うとしか言っていなかったし、
もしかしたらそういう面倒を知ってるから最初はデュノアさんだけ
誘う予定だったのかもしれないな。

「いやいや、男子同士仲良くしようぜ。色々不便もあるだろうが、
まあ協力してやっていこう。多分、俺より海月の方が頼りがい
があると思うが」

「アンタも自分を頼れって言うぐらいになりなさいよ」

女子だけなら勉強期間の違いがどうこうで言い訳も出来たのだろう
が、俺が一夏より後に勉強を始めたのに一夏より授業についていけ
るからそんな言い訳もできないのだろう。

しかも模擬戦での戦績も一夏は最下位の5位だ。ちなみに鈴ちゃん
が1位でセシリアが2位、俺が3位で篤さんが4位。代表候補生つ
て、やっぱり凄いことなんだよな。

「まあとりあえずさ、学園に男子は3人しかいないわけなんだし。
持ちつ持たれつ頑張りようぜ」

「うん、ありがとう。2人とも優しいんだね」

デユノアさんは言いながら不意にニコリと笑顔になる。嫌味の無い笑い方だが、どこか寂しげな感じが漂う。何でだろうな。

寂しげな、たとえば話はデユノアさんから移るが、篤さんが会話に参加せず1人寂しそうにしている。表情は相変わらず怖いけど、さつきから弁当を出すに出せず、会話に参加しようにも参加できずといった状態だ。

そして、実を言うと篤さんが弁当箱を出さない間に俺は自分の飯を全て食べ終わってしまった。ある程度遅くはしたつもりなんだけど、最初がさつさと食べ歩きで終わらせられるものだったから仕方ないよね。

「なあ篤、作ってくれたらしい俺の弁当を、もうそろそろくると嬉しいんだけど」

一夏に言われて、仏頂面で弁当箱を差し出す篤さん。多分、最初の予定からズレにズレ過ぎて怒ってしまったてるんだろう。

しかし、篤さんの料理も大丈夫なんだろうか。この間見た時は調味料を忘れるっていう大ポカをしてたしなあ。

一夏が空けた弁当箱を見た所見た目は凄く美味そうだが、見た目だけ美味そうなセシリアの例もあるから何とも言えない。

「これはすごいな！どれも手が込んでそうだ」

「つ、ついでだついで。あくまで私が自分で食べるために時間をかけたただけだ」

「おやおやあゝ？自分のものついでにしては一夏の弁当の方が綺麗に作ってうげあー！」

言い終わる前に何か、剣の鞘みたいなものが頭にクリーンヒット。意識が沈んでいく中最後に見たのは、怒りと照れとが混じった複雑な表情をする篝さんの顔だった。

「じゃ、はいあーん」

「あ、あーん」

目覚めたのは、丁度一夏が唐揚げを箸でつまみ、篝さんの口へ運んでいる場面だった。篝さんはなれない動きで目を瞑りながら口をあけ、はむ、と唐揚げを口に入れる。

一瞬、この俺がのびていた数分でまさか篝さんと一夏が結ばれたのかという錯覚を覚えたが、どうやら一夏のいつもと変わらない反応を見るとそんなことはなかったらしい。

「一夏！はい、酢豚食べなさいよ酢豚！」

鈴ちゃんが必死で一夏にあーんのポーズを取る。セシリアは…どうやら参加はしたいようだが、さっきのサンドイッチを一夏に渡すのは気が引けてしまったのだろう。

「なあ、セシリア」

「うっ…なんですか？」

「昼飯足りなかったからさ、そのサンドイッチ貰っちゃおうよ？」

セシリアの返答を聞く前にサンドイッチを1つひょいっ、と持ち上げそのまま口まで持つてくる。…うおお、甘い。殺人的な甘さだ。

これは多分バニラビーンズと、レタスに塗りつけてある蜂蜜と、このガリッって音は角砂糖の欠片か？とにかくデザート顔負けの甘味である。おまけに口の中に異様に味が残る。

…が、

「うん、俺が最初に作った野菜炒めと比べれば全然美味しいじゃん」
これは嘘偽りなく、本当にそうなのだ。レシピを見ないで俺が最初に作った野菜炒めは…いや、思い出したくない。倍濃度カレーやタバスコパスタが甘つちよろく思えるレベルだった。

「まあ、レシピを見ようとせず料理を作ろうとしたらこうなるさ。
…次は一夏にあーんして、美味しいって言ってもらえるものを作れるように頑張ろうぜ」

後半は一夏に聞こえないように、ひそりと耳打ちする。

実を言ってしまうと、現時点俺は一夏の恋人一押しなのはセシリアだったりする。篤さんは基本的にあんまり人を頼ろうとしないし、鈴ちゃんとはそもそも転校してきた翌日から未だ面と向かって話さない冷戦状態だからだ。

そして何より、セシリアが一番からかい甲斐があるし反応が…々分かりやすく可愛い。町内会で有名な冷やかしみっちゃんとは俺のことであるが、つまりそういうわけで俺がセシリア推しなのは当然と言えば当然だろう。

「さて、俺は先に行かせて貰うよ。まだESが待機状態になってなくて、整備するには運ばないといけないからな。のんびり飯もいいが遅れるなよ？」

「ん、ああ分かってるよ。流石に千冬姉の出席簿を喰らいたくは無

いからな」

サンドイッチを頬張った後お互い言葉を交わし、俺はその場を後にした。

扉を閉めた辺りで『やっぱり男同士っていいよな』という一夏の声
が聞こえて、明日からちよっと距離を置こうかと軽く考えたのは、
とてもどうでもいい話である。

24 AICとCIAは似てるけど別物(前書き)

PCの関係で投稿が日付をまたぐことに…
初めて穴を開けてしまった。

24 A I CとC I Aは似てるけど別物

『準備は出来ているか』

放課後、アリーナ。目の前にはラウラ、纏っているのは黒を基調としたI S、『シュヴァルツエア・レーゲン』という名前らしい。意味は「黒い雨」なんだとか。

「うん、問題ない」

そして俺が纏っているのも黒が基調のデザイン。個人的には青のデザインが良かったが真っ白けっけとか橙色とかの派手な色よりは落ち着いているしいだろう。

…今、誰かに喧嘩を売ってしまった気がする。

『それでは一次移行まで体を動かして、その後模擬戦闘という流れで行うぞ』

「了解」

今回は一夏対セシリアの時と違って時間的余裕が多少はあるみたいだ。

とりあえずさっさと一次移行して、模擬戦まで持っていかないと軽く歩いた後に飛行をしてみると、これがまた早い早い。一夏の『白式』よりは確実に遅いだろうけど、今まで乗ってた『ラファール・リヴァイヴ』とは比べ物にならないぐらいのスピードだ。

調子に乗ってもっとスピードを上げてもいいが、それやるとこの後の対戦でエネルギー消費した所から始まるしなあ…。

仕方ない、戦闘まで高速機動は我慢しよう。

『一次移行まで終了したようだな』

25分後。

俺のISは先程までの状態と比べても少しだけ外見がすっきりしたようで、さつきよりも動かしやすいことまで踏まえればこれが自分専用の機体となったことは簡単に分かる。

「それじゃあ次は模擬戦かな」

『初心者で初乗りだろうと手加減はしない、本気で来い』

本気は勿論。相手が初恋の人だろうと、勝負で手加減なんてしたら男が廢る。

「開始タイミングは？」

『このコインを今から空に投げる、地面に付いたと同時に開始だ』

ラウラはポケットからコインを出していた。あんな通貨見たこと無いけど、どこかのカジノからでも持ってきたんだらうか？

『では、いくぞ』

ぴん、とコインが跳ね上がる。

そしてそれは鉛直投げ上げの軌道を通り、そして

「いくぜ、俺の専用機……シュヴァルツェア・ヴェレ！」

コインはカラン、と音を立てて地面へ落ちた。

まず必要なのは装備の把握。

一覧を検索してみると、いくつかの項目が出てくる。どうやら一夏みたいに武装は1つなんてことは無いらしく、少しホっとする。

(ワイヤーブレードに大口徑レールカノン、アサルトライフルが2丁、ショットガンマシンガンが1丁ずつ、ブレード1本と…このAICってのと2丁の多目的ライフルってのは何だ?)

こいつ、ごく丁寧なS仕様のようで兵装の説明が殆ど無い。分かるのは兵装の名前だけだ。

とりあえず中距離以上向けの兵装ということは分かったので、後方に移動しつつアサルトライフル《クロイゼリング》を右手に、アサルトライフル《フィー》を左手に呼び出す。

(…何これ、なんかトリガー部分の形状が変だな)

そのトリガー部位は少し歪に曲がっており、通常のものとは形が違う。

もう一つ、「《クロイゼリング》と《フィー》の形状が全く同じ」という点も気になる。

(何か意味があるのか…いや、今はそれより攻撃だ)

攻撃しようとラウラに意識を移すが、そこで違和感を感じる。

ラウラの『レーゲン』は全範囲に対応可能な万能機と聞いていたが、どちらかといえば近接戦闘が得意な機体と聞いた。

ワイヤーブレードの数はこっちの『ヴェレ』の3倍もあるようだし、近接での手数は確実にこちらが劣るだろう。

というか、近接時の装備がこちらには2つのワイヤーブレードと1つのプラズマブレードしかないんだから、勝負にすらならないかもしれない。

しかし、ラウラは俺が距離を取った後に近付いてこようとしない。わざわざ遠距離戦闘が得意な俺の機体相手に接近する素振りすら見せないというのは、何かおかしい気がする。

「さっきから違和感ばっかりだな……。まあいいさ、とりあえず撃つていけばどうにかなるだろう！」

《クロイゼリング》を発砲。その速度はかなり速く、装甲の一部に被弾。…が、あまりダメージは無いらしい。

(こっちで致命傷は望めない、と…次はどうだ?)

《フィー》を発砲。…遅い。いや、『リヴァイヴ』の時のアサルトライフルと同じぐらいの速度みたいだが、《クロイゼリング》と比べると遅い。70%ぐらいだろうか。こちらは回避される。

(完全劣化の武装を搭載するとは思えないし、こちらの方は《クロイゼリング》より威力が高いのか?)

もしそうであれば、とりあえず考えるべきは如何に効率よく《フィ

―を当てていくかということだ。

しかし、そもそも衝突した時のダメージは弾のスピードに比例するはずだし、もし《フィー》の威力が《クロイゼリング》より低かった場合このアサルトライフルはある程度の牽制装備になる。

(初使用の機体ってのは、まあ何とも扱いにくいもんだな)

兵装の説明書ぐらいあればいいのに、と続けて悪態を吐きながら、とりあえず装備の特性把握をと装備の変更。

右手左手にショットガン、マシンガンを展開する。

(ん、こっちは普通の形らしいぞ…?)

普通の形というのは、つまり今までに使い慣れた装備と同じ使い方が出来るということだ。

とりあえず攻撃してみても、これは前まで使ってたものとあまり変わらないようだった。

「さっきの形状の理由は…うおっ！」

口で言い終わる前に、高速で砲弾が飛んで来る。慌てて緊急回避するが、少しタイミングが遅かったらしく一部装甲が持っていないかたってしまった。

『どうした、動きが鈍いぞ』

鈍いって言われても、装備をまだ把握しきってないんだから仕方ない。俺はゲームでも説明書を読み込んでからやる派だ。

「そんなこと言って、ラウラも有利なはずの近接戦闘を採ろうとし

てないじゃないか」

『停止結界を搭載した機体に、簡単に近付くわけがないだろう』

はて、停止結界？この機体、そんなもの装備されていたっけ。そもそも停止結界って何だ。

「ま、詰めさせないだけだ」

機体に搭載されているレールカノンを撃つ。どうやら、これも『レーゲン』のものと同じ兵装らしい。

後使用してないのはワイヤーブレード、プラズマブレード、AIC、多目的ライフル。ワイヤーブレードとプラズマブレードは近距離戦用の兵装だし、残りの選択肢は多目的ライフル。

(何がどう多目的なんだろうな…来い、《リュフトフェン》)

両腕に1丁ずつ、多目的ライフル《リュフトフェン》を呼び出す。

出てきたのは、先端に3つの銃口がありそれらが回転することで多種の射撃が可能となるライフル

みたいなものを予想していた海月の予想とは違い、セシリアの《スターライト・Mk-?》より小さめのビームライフルだった。

「うーん、これも持ち手が変な形して…のわっ！」

口で言い終わる前に以下同文。戦闘で相手に待ってくれなんて甘っちょろいことを言うつもりは更々無いが、さっきからの確に隙を突かれて攻撃されると多少は腹が立ってくるものだ。

しかし、俺はまだ大量の攻撃の中から《クロイゼリング》での一撃

しか当ててないというのに、ラウラには2回の攻撃で2回とも装甲を持っていかれたわけだ。

とりあえず《リユフトフェン》を撃つがこれも回避される。これは、またトリガーハッピーで当てていく戦法に頼るべきなのか…？
考えていると回線からラウラの声が響いてくる。

『貴様、さっきから舐めているのか』

「へっ？」

『武装の扱いは散々で回避もデータで見た時より遅い。さっさと本気を出せ』

「本気を出せって言われても、まだ装備のスペックが把握し切れてない」

『は？武装についての説明は…』

「何一つ聞いてないし、ISにも表示されてない。一夏も戦闘中に理解してみたいだしてつきり初戦はそういうものかと思ってたけど」

何故かラウラに固まられた。どうしてなのかは分からないが、とりあえずチャンスと言うことは間違いない。だまし討ちだけど。

『ということは貴様、まさかAICが何かも…』

「ああ、全然分からん」

ビームライフルに1発被弾しながらも聞いてくる。

『はあ…まあいい、教えてやるっ』

会話からラウラはいきなり戦闘態勢に入り、こちらに突っ込んでくる。後方に瞬時加速したが既に遅く、ラウラは目の前に迫っていた。

「危ねえ！」

相手のプラズマ手刀を、ギリギリでプラズマブレードを出して凌ぐ。そして右手を引っ込めて…は？

「右手が動かない…？」

『これがA I C、アクティブ・イナーシャル・キャンセラーだ』

言いながら、ラウラは6本のワイヤーブレードともう一本のプラズマ手刀で追撃してくる。

まずいぞ、これだけでシールドエネルギーが一気にすり減らされる。

「イナーシャル…キャンセラー…ん、P I Cを相手に掛けるようなものってことか？」

『理解したようだな、ドイツ開発のイメージインターフェースで相手の行動を停止させるのがこのA I Cだ』

追撃の手が緩まない。1 v s 1の勝負において、このA I Cは不用意に捕らえられたらその瞬間にワンサイドゲームで試合終了が確定してしまう、というわけか。

「ってことは、俺もイメージを掴めば攻撃を止められるってことだよな？」

『…ああ、この短時間で掴めればな』

そうと決まればすることは決まった。とりあえずこのAICの使い心地を覚えてしまわないと、この機体を十全に扱うことはできない。相手の攻撃をワイヤーブレードで少しずつ抑えながら、頭の中での猛烈なイメージへの慣らしを始めた。

『ふん、ようやく覚えたか』

お互いが近距離で制止。つまり、ある程度俺もラウラを押さえつけることに成功したわけだ。

問題としては、既にシールドエネルギーが1/3まで減ってしまった所だが。

「それにしても凄い集中力が要るな、これは」

今の時点、俺は止めるので精一杯だ。ラウラみたいに止めた上でワイヤーブレードを利用しながらの攻撃なんて出来そうにない。

…後、お互いが相手を完全停止させちゃつと試合が進まないのも問題ではあると思う。

「これ、ドローゲームになるの？」

『なるわけがないだろう』

いきなりラウラがワイヤーブレードを1つ動かす。なんと、こちら

のAICのエネルギー線を読みきって使えるようにしていたらしい。止めようとするが間に合わず、足に巻きついたそれは俺を体ごと投げ飛ばす。

遠距離に飛ばされた為に集中はかき乱され、結果としてAICは解除されてしまう。

「くうっ！」

『AIC同士の睨み合いが発生する状況で、その対策を講じていないわけがないだろう』

「…しかし、これで俺も動けるようになったわけだ」

それも、どちらかといえばこちらが有利な遠距離。すぐさま両手に《リュフトフェン》を展開し連射を始める。

次に距離を詰められたら確実に負けてしまうことは簡単に想定できたため、自分に相手が寄ってこれないように攻撃を続ける。

『甘いぞ』

しかしラウラは、ある程度回避を続けて距離を詰めると瞬時加速で一気に距離を詰めてくる。

多少ダメージを喰らっても懐に入れば勝てるという絶対の自信があつての、思い切った動きにAICの発動も遅れる。

『これで終了だ』

「くそっ！」

AICのエネルギー線が外れ、プラズマブレードの展開も間に合わ

ない。

ラウラの呼び出したプラズマ手刀を現時点防御する術は、未だ両手に持っている《リユフトフェン》以外に無くなった。

「壊れるなよ、《リユフトフェン》！」

銃と手刀が当たる。

何やら、予想していたより反動が少ない。

相手の手刀を受けた右手のライフルを見ると、そこには…

展開した記憶すらない、プラズマブレードが握られていた。

25 流れの読めないそよ風

『なっ…!?!?』

ラウラが驚いているが、正直に言ってしまつと俺もわけが分からない。

俺が出していた装備は多目的ライフルであり、決してプラズマ手刀じゃな…

いや、右手に持っているのはプラズマこそ出しているものの、確実に先程まで持っていた不思議な形の多目的ライフルだ。

「多目的って、こつこつ…?」

右手と左手で持ち方を冷静に確認してみると、右手は先程の一瞬で無意識に持ち方を変えていた。

ということは、左手も同じ持ち方をする…

ヒュン、という音と共に刃が現れる。どうやら、このライフルは手刀兼用のライフルというところでもない兵器らしい。

「近接装備がピーキーなものばっかだと思ったら、こつこつわけだつたのか…よし、行くぜ!」

どう考えてもその装備もピーキーだと誰かに突っ込まれた気がするが、そんなこと気にしている暇はない。

とりあえずワイヤーブレードを先程のラウラのように使い、距離を離す。

同時に右手の手刀の持ち方を戻し、ライフルで射撃、射撃、射撃。

『ぐっ…』

吹っ飛ばされて体勢を崩していたラウラに射撃が直撃し、右足の装甲を持っていく。このビームライフル、手刀になるだけでなく威力も十分に備えているらしい。

今の突撃は意表を突かれたラウラをうまく剥がすことができたから何とか再度距離を置くことができただけで、実際は再び距離を詰められたらきついわけだが、

何にせよ近接戦もある程度戦えると分かったのだ、近接をいなしなから遠距離でダメージを入れていけば勝機は十分にある。

「さて、こっから逆襲だ！」

『やれるものならやってみろ！』

左手にアサルトライフル《クロイゼリング》を呼び出し、ラウラへと狙いを定める。

俺が既に多大なダメージを負っていることを知っているラウラは、ある程度射撃戦をこなしながら近接する機会を窺っているようだ。

本来射撃戦の手数ではこちらが勝っているはずなのだが、相手の攻撃を直撃させられたらそのまま試合終了に繋がってしまう為どうしてもこちらの攻撃は慎重になってしまう。

少し弱音を吐くと、集中力的にもかなりきつい。

変則的な攻撃を続ける為、左手の《クロイゼリング》を消して《リュフトフェン》を手刀状態から…あれ？

左手で、何の問題も無く《クロイゼリング》と《リュフトフェン》

を同時に持っていた。何やら特別形状同士がかつちり噛み合っていて、2つを片手で持つことに一切負荷を感じなかったのだ。

確認の為、少し距離を取りながら左手の射撃で牽制しつつ、右手の《リユフトフェン》を手刀状態にして右手に《フィー》を呼び出してみる。

やはり、違和感なく綺麗に噛み合う。

考えてみれば当然だ、《フィー》と《クロイゼルング》は同一の形状とさつき理解したばかりなのだから、片方が噛み合うのならもう片方も噛み合う。

ということは、《リユフトフェン》と《フィー》、《クロイゼルング》は同時展開を想定した装備、と考えてまず間違いないだろう。

同時展開が可能ということは、つまりビームライフルの呼び出しの際の隙がほぼ全く産まれないことを示す。

慣れれば高速での呼び出しが可能となるが、そもそもその呼び出しの必要性をなくしてしまうということである。

まさに状況が刻一刻と変わるような戦闘にぴったり、というわけだ。

「多目的にも程があるだ…のあつ！」

と、やはり装備に感心していた間にラウラが近付いてくる。口で言い終わる前に以下同文、瞬時加速が途轍もなく早い。

3たび近接してきたラウラと、《リユフトフェン》を手刀状にしなから言葉を交わす。

「なあ、ラウラ」

『何だ』

「ドイツって、色々に変な部分で凄いな」

手刀を持ったままプラズマブレードを呼び出す。ショットガンとマシンガンは後付装備なので同時展開は無理そうだが、初期装備のこれなら多分…

予想通り、特殊形状でぴったり形の合ったブレードが展開される。プラズマが手刀と合わさり、刃渡りが肘の辺りから2m程度の大きな刀になる。

右手の大型プラズマブレードと2本のワイヤーブレードを併用し、ラウラに切りかかる。

『弁解させてもらうが、その機体の変な機体であったとしても変なのは研究者だけだ』

一応、装備やらに共通点があるわけだしラウラの機体を作った人達も一部変と認めているわけのだが、しかし変な人がいるということには間違いないだろう。

ラウラにプラズマブレードが直撃、かなりの装甲を削ぎ取る。…が、そこから追撃をすることができなかった。

『詰めが甘いな、私の停止結界に捕まっているぞ』

あ、やばい。そういえば、機体を停止させる手段のAICがあったんだっけ。

そう思ったときにはもう遅く、ラウラのプラズマ手刀が俺に叩き込まれ、シールドエネルギーが0になった。

「ああー、負けちゃったよ」

試合後ラウラに聞いた所、シールドエネルギーは2/5ほどだったらしい。確かハルフオーフさんの時も2/5ぐらいで負けたよな。

「ドイツ人相手には2/5まで削って負ける呪い」でも掛かっているのだろうか。解呪方法は何か。

そういえば別の話だが、ISを解除した時に待機状態になったのは感動したな。ああ、ちゃんとアクセサリになるんだってびっくりした。ちなみに右足首のフィタになったよ。

「貴様は隙を見せすぎなんだ、馬鹿者め」

「ごめんなさい」

確かに、何度も何度も装備を確認する為に隙を作ったのは間違いない。AICの時なんて、それで半分以上エネルギーを持っていかれたわけだし。

把握が出来ていなかった、というのも勿論一因ではあるが、裏を返せば自分が武器の特性を把握するまでに時間が掛かったということ。武器の特性を理解し切れなかったのが敗因である、となると、何やら一夏と同じものを感じる。

「しかしまあ、相手だった私でも予想外の兵装だったんだ。最初でこれならまずまずと言った所だろう」

これは慰めてくれているんだろう。こいつが俗に言う飴と鞭ってやつなのか。威力絶大だ、惚れちゃいそう。っていかもう惚れてるんだけどさ。

「ありがとう、ラウラは優しいんだな」

「あくまで今日はまずまずと言っただけだ。次回からも同じように隙を作っただけであり、最悪機体を返してもらっただけ？」

これは本気で言われてるのだろうか。こいつが俗に言う、いや言わないけど飴と鞭からの鞭ってやつか？うーん、ジャンルも色々できてるんだな。

「大丈夫、もう装備の特性は大体覚えたから次からあんな隙は作らない」

「それならいい。しかし、本当に武装についての説明などは一切無かったのか？」

「うん、連絡もないしISの中を検索しても見つからなかった。もしかしたら別項目で検索すれば見つかるかもしれないけど、戦闘中に探すのは無理そうだった」

少なくとも武器を呼び出してもすぐにデータが見れるなんてことは全然なかった、と続けると、何やらラウラは唸っていた。

もしかして、ラウラの方では俺にデータが伝わっていると聞かされていたのだろうか。もしそうなのであれば連絡がしっかり行ってないという証拠だ。

「とりあえず、それに関しては後でドイツに連絡を取る。さて、話を変えるが」

「昼間の話？」

「そうだ」

昼間の話と言えば、結局何の話をするつもりだったかすら聞いていない。

ドイツ軍の話だろうか、それとも学園内での補足で、生徒の前では言えない話だったのか。

いずれにせよ、人前で話しにくかった話題だったはずだ。

「それでは聞かせてもらうが お前が知っているラウラは、本当に私なのか？私だとすれば、お前はいつ私に会ったことがある？」

はい…え？

いや、確かに人前じゃ話しにくいことかもしれないけどさ、え？うん。うーん。…え？

「何で、そのことを？」

「クラリッサから全て聞いている。一応言っておくが、私はクラリッサのいる隊の隊長だ」

クラリッサ。クラリッサさんって…まさか。

「ハルフォーフさんと、同じ隊？」

「だからそうだとやっているではないか」

なんと。

俺はあの時空港で、『あなたの隊の隊長さんに昔会った時に一目惚れしました！』なんていうとんでもない発言と変わらないことを言

ったわけだ。

なんちゆうこつちゃ。つまり、俺がどういふ感情を持っているかとか、全部筒抜けだったわけか。

「しかし、私は生憎だが過去にお前と会った記憶が無い。その、なんだ。勘違いで惚れ続けられてもなんだしな」

「だから、俺が昔ラウラと会った時の話をしろ、…ってことね。そつだな、あれは俺がちようど」

26 水底の記憶

「ねえ、父さん」

隣にいる父親に問いかける。

「なんだい？」

「父さんは、どんな研究をしてるの？」

「ううん、そうだな…」

父親は、急に黙りこくってしまふ。もしかして聞いてはいけないことだったのだろうか？子供に教えちゃ駄目なことなのか？

今まで何度も父親と一緒に研究所に行っているのだが、そういえば父親が研究の成果を話したりすることは今まで一切なかった。

「父さん？僕に言っちゃいけないことだったら、言わなくても僕は平気だからね？」

「お、おうそうか。悪いな」

あからさまに安堵した父親を見て、やはり聞くべきではなかったのかと多少後悔する。

本当は好奇心に任せて聞いてみたいのだが、自分の状況からしたらそんな我侷なことは言っていられない。

「それじゃあ、今日もおとなしくしてろよ、海月」

そう言って、父は部屋を出ていった。

凭海月^{もたれ}。現在8歳の子供ライフ真つ最中だが、自分の生活はそう子供っぽいと呼べるようなものではなかった。

自分には母親がいない。死んだわけではないのだが、現状で自分は母が存在しなかった。

というのも原因は、自分の名字である「凭」。

父である凭^{もたれ}皆徒^{みなと}は江戸時代より続く(らしい)名家の長男坊で、母である戸^と鉄海^{てつみ}辺は俗に言う中流家庭の出身だった。

つまり、良く小説の題材等に取り上げられる「身分違いの恋」というもので、2人は大学で恋に落ち、周囲の反対を押し切り結婚したんだ、と幼稚園の頃から何度も惚気話を聞かされていた。

しかし、自分が小学校に上がる前に「それ」は起きた。

いつもなら帰ってきてからよく話す父が、日を重ねることにだんだんと無口になっていったのだ。

母に理由を聞いても少し仕事が増えて疲れているだけと言われるばかりだったのだが、それが正しい理由ではないことに母の態度から気付いてしまった自分は、夜密かに親の会話を盗み聞きするという行動に出た。

優秀な大学を出て尚も研究を続ける父の、その好奇心の深さを譲り受けたのかもしれない。

それで、夜の会話を数日に渡って聞いてみた所、酷い事実を知ってしまった。

「凭の家が研究に圧力を掛けて、資金がいつまで経っても下りてこない。優秀な研究員もほとんど引き抜かれてゆく」

「凭の家の跡継ぎ、つまり長兄である父が母と別れ、家を継ぐことで資金提供を再開する」

「凭の家の血を持つ長男である自分まで、凭の中に引き込まれている」

まだ小学校にも上がっていないが、それが何を意味するかはおぼろげながら理解できた。

それでも、と耐えていた父の精神が少しずつ、確実に衰弱していくのは、外見だけでも分かることだった。

目の下のくまは少しずつ増えてゆく。

帰宅時間も遅くなり、食事量が確実に減ってゆく。

1ヶ月前であれば気軽にしていた家族の楽しい会話も、最後の方は「ただいま」と「おやすみ」だけ。

これで弱っていると分からないほうがおかしい。

そんな父を見続け、先に耐えられなくなってしまったのは母だった。自分以上に相手を気遣ってしまう母は凭の家へと出向き、父への圧力を消してもらおう代わりに二度と父の前には表れないという約束をしてしまったのだ。

そうして、母は妹を連れて姿を消してしまった。

そのおかげで父の研究は再び右肩上がりになっていったのだが、その時の父を表現するのなら、まさに「心にすっぽりと穴が開いてしまった」状態だった。

父は必死で母を捜そうとしたのだが、裏からやはり凭の圧力が掛かっていたのだろう、どれだけ探しても行方は掴めなかつたらしい。

ある日のことだった。

「なあ海月。お前は、この凭の家で人生を過ごしたいと思うか？」

父が、そんなことを聞いてきた。

自分は、この凭という家が父と母の人生を狂わせたことを知っている。

この凭という家が、父と母妹を、自分と母妹を引き離したと知っている。

勿論、出した答えはNOだった。

「そうか　なあ、海月。実は父さんな、ある研究の成果が認められて、とある国から『我が国で研究を続けてみないか』ってお誘いが来たんだ」

脈絡が無い文章に聞こえたが、そこに何か父の決心のようなものを感じた。

なので、口は挟まずに言葉を続けて咀嚼することにした。

「それでな、今の僕らの状況を説明してさ。匿ってくれた上で、母さんを探してくれないか聞いてみたんだよ。そしたらさ　」

肯定の返事が来た。と、そう父の口から言葉は続いた。

「だからさ、もし海月がいいと言うなら、父さんはこの家を飛び出してその国で研究をしようと思っっているんだ。…海月、一緒に来てくれるかい？」

そうして父と自分は、この国、ドイツへとやって来たのだった。

ドイツの生活は、比較的快適だった。

朝、父親と一緒にドイツ軍に提供された家を出て、研究所まで行く。現地の言葉が話せない俺の為に、日本語が分かる研究員の人に勉強を教えてもらう。

そして、研究所の中で見てもいいと言われた場所を自由に見たり、研究員の人と話をしたりして、父が戻ってくるのを待つ。その繰り返しだ。

正直な所画面を見てもちんぷんかんぷんだった自分の最近の楽しみは、もっぱら体を動かすことにあった。

研究所に併設された訓練場へ行き、体を動かす。時々ガラス越しに見える射撃訓練を覗いて楽しみ、また体を動かす。

その日も、自分は研究員の多少ハードな授業を終えて、さて今日も運動するかと訓練場へ来ていた。

少し重い扉を開けると、銃の音が耳に入ってくる。ああ、今日も射撃訓練をやっているんだな、とガラス越しに訓練を見てみる。

「へえ、今日はいつもよりのよく当たってる。誰がやっているのか

な？」

的の方だけを見て、今日訓練をしているのはかなり上手い人だな、と確信する。着弾数が多いだけでなく、発砲と発砲のスキマも短かった。

となると、興味が沸くのは的から狙撃手に移るのも道理だ。いつもより上手く的を狙う、その人は誰なのだろうと。

そして、絶句することとなった。

何故なら、そこで銃を撃っていた人間は、眩しい銀を放つ髪を纏った、自分よりも身長の小さい女の子だったのだから。

ガラスの向こうで、少女は鉄砲を変えては撃ち、変えては撃ち、そのどれもがいつも見るより精密な射撃だった。

自分と多分年も余り変わらないであろう、そんな少女が目の前で繰り広げる光景は、自分を魅了していた。

気付かぬうちに、自分は体を動かすことすら忘れてその訓練に魅入っていた。

何十分、もしかしたら何時間かもしれない時間が経過した。

訓練が終了したのか、少女はその場所から出てゆく。

後を追いかけて話そうとして、自分はその場で足を止めた。

そう、自分はドイツ語が話せないのだ。

日本語で話しかけようとしても、お互いそれこそ宇宙語での会話となってしまう。

この時ほど、過去の自分を恨んだことは無かった。
怠けずにドイツ語もちゃんと習っていたら、もしかすれば話せたかもしれないのに。

結果、その時の自分に出来たことは、近くにいた研究員にその少女について尋ねることと、「格好良かった」と伝えてもらうことだけだった。

凜とした気取らないその雰囲気、子供とは思えないその大人びた態度に、惚れ込んだというよりは憧れのようなものを抱いてしまったのだろう。

それから、もう1回その少女が見たいと訓練場に毎日訪れるのが、自分の日課となった。

…ドイツを離れることになるまでだが、その後その少女　　ラウラの姿を見ることは、一度も無かった。

しかし、これもドイツを離れるまでだが、その後その少女　　ラウラより射撃が上手い人間を見ることも、一度も無かった。

「！ ……そうか、あの時いきなり研究員に言われた伝言とはお前のものだったのか」

話し終わったところでラウラが呟く。

お互いの共通認識は、つまり「会った場所」と「間を通して伝わった言葉」だけだが、間を通して伝わった言葉を目の前のラウラが知っているということは、つまりこのラウラはあの時のラウラで間違いない、ということだろう。

「しかしだな、戸鉄」

「…な、何かな」

「残念ながら、私はお前のことをまだ『ISを動かす、ある程度の才能と技術量を持った人間』としか見ていない。それは分かるな？」

「あ、ああ」

当然だ。私も一目見て好きになっちゃいました！なんてご都合主義、普通に考えてあるわけがない。むしろ、いきなり好きという事実を伝えられて気味悪がられなかっただけまだマシだ。

「更に言わせて貰うが、私は残念ながら『他人に惚れる』なんていう感情は持ったことが無い。何故か分かるか？」

「…いや、分からない」

「私はな、戸鉄。…戦闘をすることのみを目的として作られた、ただの人形だからだ」

「？ どのどついついことだよ…」

戸惑う俺に対して、ラウラは語り出した。

「ドイツではな、より強固な軍事力を手にするため、人を合成された遺伝子で作り返すことがある」

「…え？」

「人工的に合成された遺伝子によって、人工的に作成された子宮から生まれ、ただただ戦闘をするためのだけの知識を覚えさせられる。私もそんな1人、ラウラ・ボーデヴィツヒなどはただの識別コードでしかない」

ラウラがゆっくりと、自嘲気味に語ったその内容は、にわかには信じられないものだった。

人によつては、その存在を認められず忌み嫌ってしまつかもしれない。人によつては、それは神の教えに反することだと拒絶をすることかもしれない。

「…ふざけんなよ」

「ふん、失望しただろう。残念ながら私はそういうモノだ、諦めるんだな」

「だけど違う。俺が言いたいのはその、モノに対する拒絶の言葉なんかではない。

許せなかったのはそんな存在ではなく。訂正したかったのは自分からのラウラという存在への認識などではない。

「失望？間違ってる。諦めるだって？何言ってるんだよ、諦めるわけないだろ」

「…は？何を言って…」

「何もかもあるか！」

声を張り上げると、ラウラは初めて萎縮する。

…許せなかったのは、「ラウラからの」「ラウラという存在への認識」だった。

「人工物から産まれた？戦うための知識だけ頭に詰め込まれて育った？だから、自分は人間じゃない？そんなわけあるかよ！…なあ、ラウラ。誰が何と言おうと、ラウラはラウラ以外の何者でもない。名前が識別コード？そんなの誰だって一緒さ。俺だって戸鉄海月っていう名前がなければ、そこら辺にいるただの学生Aさんだ。

だけど、それが何だって言うんだ？名前が無かったって、顔だって性格だって、誰も完璧に一緒なものなんてない。そんな識別コードが無かったって、俺の目の前にいるのは赤目で小柄で銀髪で俺と同じ年の、俺が好きな女の子だ！」

目の前の少女にいつも感じられた、年不相応にも思えた凜々しさは今は見えなかった。

代わりに見えたのは年相応の不安定な精神を持つ、1人の少女だけで。

言葉が紡げない彼女の、その今にも足元が崩れそうな姿を見てしまつて。

不意に、肩を震わせるその目の前の少女を両腕で抱き寄せてしまった。

26 水底の記憶（後書き）

1 文消し忘れていたので修正入れました。

27 変な寝床フェチ、海月（前書き）

ここ数日のユニークが異常に伸びてて何かと思ったら、いつの間
やらIS虹創作の週間ユニークアクセスが20位以内に入ってまし
た。

ありがとうございます！

27 変な寝床フェチ、海月

数分、経っただろうか。

「……せ」

「…へ？」

ラウラがぼつりと呟いたが、何と言ったか聞き取れなかった。

「だから」

その声に、数刻前のような怯えはなく、まさに自分の憧れとしたラウラそのものの凜とした声だった。

…がつん！

「離せと言っている！何をいつまでも女に抱きついているのだ！」

ISを展開されて思いつきり吹っ飛ばされた。非常に痛い、と思ったら続けて殴ってくる。ISを展開してなきゃ死んでたと思うぞ、これ。

がつん！

「大体なんだ！？私は他の何でもない？そんなこと分かっている！」

がつん！

「貴様に言われずとも私はラウラ！ラウラ・ボーデヴィッツだ！」
がつん！

「ああ、言つてやろうとも。私は名前が無かるうと、長髪で眼帯をしているドイツ軍IS部隊シュヴァルツェ・ハーゼ隊長で、貴様が惚れている女だ！」

最後に喰らった強烈な一撃で、俺の意識は昏睡していった。

「…勿論、お前は私を惚れさせるつもりなのだろう？精々、本気で私を惚れさせるように頑張ることだな」

…なんて、頬を朱に染めたラウラがそんなことを呟いたというのも、勿論聞き取ることは出来なかった。

翌日。

俺はアリーナで目を覚ました。時刻は…午前4時。まだ外は薄暗く、6月に入ったばかりの夜は、夏の陽気を微妙に感じさせつつもどこかピリピリと肌寒い。

「うー、うーむ…」

身体中が上げる悲鳴を無視して起き上がると、全身がズキズキ痛む。昨日、ラウラに何度も殴られたことまでは覚えているのだが。

…あれ、何で俺、殴られたんだっけ？確か、俺がラウラについての昔話をして、その後ラウラが自分のことを話してくれて、それで

首の辺りから、耳までかあつと熱が昇ってきた。思い出した、俺、ラウラを抱き締めたんだつたよ。
男と違ってしなやかでふにふにとした、って違うそんなことじゃない。なにを考えてんだ俺は、感触フェチとか変態か、変態なのか？
って違うまた話がずれてる。
問題なのは現状まで俺はアリーナで気絶してた、ってことだ。つまりラウラは倒れてた俺をそのまま放置してたってことで、つまりラウラは相当ご立腹ってことで。

…現実逃避してもう一度寝るのも考えたが、残念ながら俺はアリーナの砂の上で寝る趣味は無い。
そもそも、この時間まで部屋に戻ってないわけだから多分、織斑先生にまで連絡は届いているはずだ。

「うああ…、ダルい…」

ダルいと言っても仕方が無く、空気に流された自分の軽率な行動が原因なのは百どころか二百を飛び越え千も承知のだが、それでもダルいものはダルい。

「仕方ない、織斑先生に電話するか…」

こんな時間に電話するのも如何かと思うが、頭の良い織斑先生のことだ。きっと、今の俺の大体の状況も推測しているに違いない。
第一朝起きているであろう時間まで待っているには、今の自分は泥まみれで汗臭すぎる。こんな姿で女子の前に出たら、冗談じゃなく翌日からニツクネームは土色魔人だ。

ぴりりりり…ぴっ。

織斑先生が出る。どうやら既に起床していたらしいので、手短に話

を済ます。

今自分が寝ている場所とその理由 勿論ラウラとの話やらその後
の云々かんぬんは省いてだが を伝えると、なんとか部屋に戻ら
なかった罰則は週末のグラウンド5周だけで済ましてもらった上で、
どうやら朝早くからシャワーを浴びることまで許可をもらえたらし
い。

グラウンド5周も結構辛いんだけど、文句を言ったらあの人どんど
ん回数を増やしていきそうだからな。

「うむ…。いつもだったら海月がいるから、もう少し分かりやす
いんだけどな」

「あはは、いつも解説役は海月がしてるんだね」

シャルルが転校してきてから5日が経過し、本日は土曜日。午前の
理論学習を終わらせ、午後の自由時間に解放されているアリーナで
実習をしているわけだが…

いつもなら箒やセシリア、鈴の新人類言語を翻訳してくれる海月が
今日は何やら用事があるとかで、今は専らシャルルからのありがた
い講義に耳を傾けている。

「一夏は、海月に『射撃武器が苦手なら、その特性を理解すれば？』
って言われたんだよね？」

「そうなんだよ。自分としてはある程度理解しているつもりだった
んだけどな」

「うん、多分知識として頭の中に射撃武器の特性を入れておくのはもう十分だと思う。けども、一夏の機体には射撃武器が積まれてないわけだし、多分一夏は知識以上の、例えば状況と相手のスペックを考えた特性とかが把握できてないんじゃないかな。さっき僕と対戦した時も、僕が武器を呼び出してから対応してて間に合わなかったことが何度もあったでしょ？」

「ああ……、つまり、相手がどういう装備を出そうとするかを先に読んでおけば、ある程度自分のペースで動けるってことか？」

「そういうこと。瞬時加速は身体に無理な負荷を掛けないために直線的な軌道ばかりになっちゃうから、自分も先読みしてある程度早く動かないと、相手に軌道予測で弾を当てられるし軌道と別方向に移動されて結局距離は縮まらないしで散々だからね」

「……なるほど」

シャルルの解説は非常に分かりやすい。海月の解説はあくまで箒達の言葉の翻訳にちよつと加味されただけのものであり、そもそもIS戦闘の知識としては海月は俺と同じぐらい（勉強量からすれば海月の方が上かもしれないが）だから結果としてある程度咀嚼された内容しか聞けなかったのだが、シャルルは戦闘知識も解説も上手だから知りたいことをどんどん教えてくれる。

箒の感覚講義、セシリアの理論講義、海月の翻訳講義、鈴のこれまた感覚講義と来て、やっと1人で分かりやすく教えてくれる親切講義が来たってわけだ。凄くありがたい。

「でも、一夏の瞬時加速はたった2ヶ月とは思えないぐらい上手いと思うよ」

「ああ…、それは多分、海月に散々瞬時加速で追い掛け回された後必死で練習したからだな」

「へ？海月も瞬時加速ができるの？」

「そうなんだよ。『いや別に、早く動こうとイメージして動いたらできた』とか言ってるさ。試しに瞬時加速だけを移動手段にした模擬戦をやってみたらどれだけ引き離そうとしてもぴったり同じ距離を保ち続けてくんの」

しかもそれならこっちから仕掛けようと近付いたら、それさえも読まれて結局一定距離を保たれたまま射撃で封殺されたのだから手加減も何もあつたもんじゃない。一種のトラウマみたいなものである。

「海月って、凄く器用なんだね」

「本人は『特徴が無くてつまらない』って言ってたけどな。そういえば、海月の専用機ってどんなのなんだろ？」

確かこないだの月曜日に届いたって言ってたはずなんだが、何故かその後の放課後も大抵海月は訓練機に乗って参加しており、未だに一度もその姿を拝めていない。

「…まあ流石に、俺の『白式』みたいな特化しすぎ型のISなんかじゃないと思うが」

もう誰もが知っていると思うが、俺の専用機『白式』は出力こそ高いが装備がブレード1本しか無い。千冬姉曰く『欠陥機』なんだそうで、言われた時にはガクつときた。

海月の場合、事前にデータを取ってから機体作成に入ってもらった

らしく、基本ある程度なんでもこなす海月の専用機ならば多分ある程度どの距離にも対応できるものだと思う。

「一夏の『白式』は本当に極端だよ。後付武装イコライザもつけられないんでしょ？」

「ああ、何度調べてもらっても拡張領域パススロットが開いてなくて量子変換インストールができないんだとき。海月と一緒に教科書読み漁って原因を調べたんだけど、どう考えてもブレード1本だけで容量を食い潰すとは思えないから、多分ワンオフ・アビリティーが原因じゃないかなって結論になったよ」

ワンオフ・アビリティー。ISx操縦者の相性が最高になったとき発生する、いわば唯一の特技のようなもので、俺の場合『零落白夜』が当てはまるらしい。

「うん、多分それが原因だろうね。それにしても、普通は第2形態から発生するかもしれない、っていうぐらいのものなのに第1形態からアビリティーがあるんだから、すごく珍しい事例だと思うよ」

しかしまあ、シャルルは本当に優秀だと思う。俺としてはかなり時間をかけてようやく導き出した答えだったというのに、こつも簡単にその話に参加できるのは凄い。

「だけどもあ、一夏が現時点射撃武器を使えないってことは変わらないわけだし、とりあえず特性を理解するために射撃武器の練習をしてみようか」

そう言っつて、俺にアサルトライフル《ヴェント》を手渡してくる。確か、さっきの手合わせでも使っていたものだったはずだ。

「あれ？ISって自分自身の装備以外は使えないんじゃない？」

「基本はそうだけど、その自分自身が使用許諾すればその人は使えるようになるんだ。うん、今使用許諾を発行したから、とりあえず撃つてみてよ」

「お、おう」

「ふいー…、やっと終わったよ」

自室、シャワールーム。こないだの罰則であるグラウンド5周を終えた俺は、汗を軽く流すためにシャワーを頭から浴びていた。

この後の予定は、とりあえず土曜日だから解放されているアリーナに行つていつも通り実習訓練への参加。もうすぐ学年別個人トーナメントなので実習にも気合が入る。

…実は、手の内をギリギリまで晒したくないから昨日まで訓練機を使つてただけど、ラウラが『報告の時、戸鉄はまだ最初の戦闘以外で専用ISを使用していません』と言つたら研究員が泣きそうな声になつていたぞ』と言つていたから今日からは使つつもりだ。

そうそう、ラウラとは別に険悪な仲などにはなつてない。

アリーナで寝たあの日の後教室で顔を合わせる時は結構本気で心配したのだが、普通に会話して普通に過ごせた。

ついでに一夏を何であんなに敵視してるのかも教えてもらったが、『敬愛する教官の歴史に泥を塗つた人物』だからだとか。こちらに關しては、一応止めはしたのだがとりあえず叩きのめさないと気が済まないらしいので、ここは最大限どちらも怪我をしないように介

入する。

「…ふう。さて、行くか」

シャワーを浴び終えた俺はその場でISスーツを下に着込み、アリーナへ少しゆっくりと歩いていった。…早くしろとか言わないでくれ、一応とんでもない距離を走った後なんだから。

28 言っているのは俺の悪口だけ

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソツ、ドイツの第3世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……」

アリーナに着くと、何やら内部がざわついていた。…ドイツの、という単語が聞こえた気がするが、俺のことだろうか？

しかし、どうやら生徒たちの注目は俺には向いてない。ということは、生徒たちの視線の先には……やっぱり、ラウラがいた。

「おい」

ラウラの開放オープン・チャネル回線による声が響く。どうやら一夏に話しかけているらしいが、その一夏はいた。アサルトライフルを持っているということは射撃訓練でもしていたのだろう、現時点一夏の『白式』では射撃は出来ないはずなんだがな。

「……なんだよ」

非常に面倒臭そうに、一夏はラウラへ返事をする。そりゃあ、自分を攻撃しようとしてきた人間に良い印象は持てないかもしれないが、自分の好きな人間が同じく自分の友人に嫌われてるのを見る、というのは複雑な気持ちだ。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

一夏の方へと飛翔しながら、ラウラは会話を続ける。
あれ、これってもしかして、一度は叩きのめさないと気が済まない、
の「一度」なんじゃないのか？戦闘が始まるようだったら止めないと駄目だな。

「イヤだ、理由がねえよ」

「貴様にはなくても私にはある。それに　今ならあいつがない」

「？ あいつ？」

「……貴様とは関係ないことだ、それよりさつさと剣を構えろ」

そろそろ戦闘を始めそうだから、人影ならぬIS影に隠れて『シユ
ヴァルツエア・ヴェレ』を展開する。この距離であればAICは届
くはずだが、ラウラの初手を上手く予測しないと初撃は一夏に確実
に当たってしまうだろう。

ワイヤーブレードだろうか、それともプラズマ手刀？まさか徹甲弾
じゃないだろうな。

「また今度な」

「ふん。ならば　戦わざるを得ないようにしてやる！」

刹那、ラウラは肩についた実弾砲から弾を発砲する。　実弾だか
ら、勿論AICで止められる。一番リスクが高そうな動きを牽制し
ておいて正解だった。

実は、人の隙間を縫って実弾にだけAICを掛けるといのはかな
り集中が必要になる。澄ました顔して人ごみを掻き分けて一夏たち
に近付くのも結構大変だ。

「……いたのか」

「ん、まあね。予想以上にグラウンド5周が早く終わったからさ」

打ち出された弾が拡散弾などではないかを確認。もしもある程度の衝撃を受けたら拡散する弾とかだったら、折角AICを使って止めたのに地面に落としたら再度攻撃が飛んで来る、なんてことになっちゃうからな。

どうやら違ったようなのでAICを解除すると、弾が少し重めの音を立てて落ちる。

弾の処理が終了したのでラウラの方を向くと、予想通りの鋭い目つきでこちらを睨みつけていた。

「何故止めた」

「友人と友人が喧嘩をしようとしてたら、止めるのが当然だろ？模倣戦だつて言うなら止めないけどさ、ラウラは熱くなりすぎだと思っぜ」

これは余談だが、世の中には友人と友人が喧嘩しようとしてたら煽つてもつと争いを広げようとする物好きな奴もいるらしい。IS学園でそんなことしたら最悪だと軍隊ですら止められない喧嘩になつてしまうからパスだ。

「どうせ月末には学年別個人トーナメントがあるんだ。専用機持ちが圧倒的なアドバンテージがあるし、そうでなくてもラウラは誰にも負けるつもりは無いんだろ？対戦ならそこでやればいいじゃないか」

「私に、そんな長い期間待てと言っのか？」

「不完全燃焼なら俺が模擬戦の相手になるさ」

勿論怒りの矛先を一夏から俺に変えるだけなのだが、体を動かしてストレス発散なんて言葉がある通り、それでラウラの気が紛れるなら安いものである。

「やってみる！」

満更でもない、といった獰猛な笑みを浮かべてラウラは攻撃を開始してきた。

ラウラは即AICで動きを止めに来るが、右手を突き出した所で瞬時加速を利用し離れる。まさか、このタイミングですぐ模擬戦を始めるとは思わなかった。結構危なかったぞ。

右手にショットガンを呼び出し、ラウラを狙　　がいん！

ショットガンに弾が一発当たる。こんな時に誰が…

「全く、こんな密集地帯で他者への警告も無しにそんなアクロバティックな模擬戦始めないでよ。もしかしてドイツの機体は、乗ったら勝手に戦闘しちゃう欠陥機なのかな？」

声が出したのはラウラと同じ方向、一夏の近くにいたデュノアさんからだ。さつきまで何も持っていなかったはずなのに、一体いつの間にライフルを呼び出したのだろうか？

しかしまあ、今重要なのはそんなことではない。それより問題なのは　　機体を小馬鹿にされたことだ。

「なあ、デュノアさん」

「…何？」

俺の発した声に少しだけ怒りが混じっていたのを感じ取ったらしく、返事も同じく少しだけ緊張した物になる。

「今さ、ドイツの機体が欠陥どころ言ったそれ、…俺には機体を侮辱してるように聞こえたんだけど、未だ第2世代までしか作れないフランスにそれを言われたくは無かったなあ…」

「別に侮辱なんかしてないけど、量産化の目処も立ってない作りたての第3世代よりはマシだと思ってるかな」

「コストをメリットが上回りさえすれば量産なんざ不要だってこと、その身を持って体験してみたいのか？」

言葉の端々に冷気の籠った言い合いが続く。デュノアさんは先程呼び出したアサルトカノンを、俺も先程呼び出したショットガンを向け合う。

確かに先程のシャルルの不自然な呼び出しスピードは警戒すべきものだが、不思議と負ける気は全くしない。怒ってはいるが、頭は至って冷静だった。

『その生徒！何をやっている！学年とクラス、出せき』

不意にスピーカーから声が木霊する。多分騒ぎを聞いて飛んできた担当の教師だと思うが、別に誰も怪我はしてないし処罰対象のことは何もしていない。

こういう時は、さっさと本当のことを話してしまったほうが事は済むだろう。そしてさっさとシャルルとの戦闘を始めるとしよう。

『1年1組の戸鉄海月、単純に模擬戦を行うだけです』

『なら何故こんなに生徒達が騒いでいるんだ』

『さあ、単純に男子生徒が珍しいだけなんじゃないですかね？』

『…とりあえず詳しい話を聞く。戸鉄、こっちまで来い。模擬戦は中止しろ』

は？

何この教師、禁則事項は何一つ破ってないのに何で説明なんかせにやならんのだ。もしかして刑事ドラマとかの事情聴取に憧れてるクチか。

…破ったらまた、反省文とかグラウンド何周かとかさせられるんだろうな、面倒臭い。

「決着は学年別個人トーナメントで付けさせてもらおう」

デユノアさん、もといシャルルにそう捨て台詞を残して、俺は先生がいるゲートまで飛翔して行った。

「あれ、1人？」

生徒指導室での非常に面倒な事情聴取も終わり（本当に教師は刑事に憧れている風のものだったのが正直に言っと笑いを誘った）、夕方となったので転寝さんと食堂に来た俺は、そこでラウラを見つけた。

「お前こそ何だ、女連れで食事とは大胆なものだな」

「一夏以外は全員女なんだから、女連れみたいになるのは仕方ないじゃないか。隣、大丈夫？」

「…好きにしる」

許可が出たので隣に座ると、ラウラは再び食事へと戻る。何やら不機嫌そうに見えるが、もし焼餅を焼いてくれたなら嬉しいかもしれない。自意識過剰だろうか。

軍の関係で高速の食事摂取に慣れてしまったのだろうか、かなりの速度でラウラは料理を消化してゆく。

隣で転寝さんがうわぁ不健康だよ、と呟く程度のスピードだ。俺も同意見。

「ねえ、戸鉄君。戸鉄君が言ってたラウラさんって、やっぱりボーデヴィツヒさんだったの？」

そこで場の空気が止まる。何かと思えば、周りの人達全員が食事を止めてこっちを好奇の眼で見つめるのだ。当の転寝さんはにしし、と小悪党な笑みを浮かべている。

「転寝さん、それ普通ここで言うかよ？」

「だって、最近の戸鉄君、訓練してその後織斑君達と食事して軽く勉強して寝て、の繰り返しで話す機会が無いんだもん」

しかし、せめて人がいない場所にして貰いたかったものだ。

だって本人が目の前ってことは、俺がラウラを好いているっていう

ことが学校全体の認識になるってことだろ。俺はともかく、がやがや騒ぐのが苦手そんなラウラを話題の先端にするのはどうなのか。

「それじゃあ ノーコメントで」

差し障り無い言葉で濁しておく。多少卑怯だが、これで引き下がってくれれば

「そうだ、戸鉄が昔惚れたという相手は私だ」

え？

その場にいた人間の思考回路が一斉停止する。聞いてきた転寝さんですら停止したぐらいだ。何故って、今発言したのが勿論ラウラだからだ。

そりゃあ、誰とも話さない冷徹な人間と思われて敬遠されてた人間がいきなり自分から色恋沙汰の話題に入ってくれば、誰でも驚愕はするだろう。

「…何だ、その顔は」

「え、い、いや、ボーデヴィツヒさんがそつという話題に自分から首を突っ込むとは考えてなかったもんで」

「何の話だ？私は『昔こいつが惚れた相手が昔の自分である』としか言っていないぞ」

「そ、それじゃあまだ、戸鉄君から告白とかは…」

「一切無い」

ちよつと待て、話したら話したでそりゃあ酷いよラウラ。いや何一つ間違つたことは言つてないんだけども。

そして周りの女子のあからさまにホツとしてるその態度は何なんだ。そんなに俺に彼女が居ない状況が嬉しいのか、くそう。ヘタレとか思われてるんだろうな。

「さて、私は食事が終わったので失礼させてもらう」

この状況の空気をどうにかする前に、ラウラはスタスタと去つてしまった。

勿論言わなくても分かることだと思つが、この後俺は女子から散々の質問攻めに会つた。

正直、一夏が篤さんとセシリアに引つ張られて登場してくれなかつたら、俺の体力が持ったかどうかも怪しい。

28 言っているのは俺の悪口だけ（後書き）

代表候補生とは基本喧嘩方針で（）

29 空マワル信念、逸レル心情

「なあ、海月もシャルルも仲直りしようぜ」

朝。教室へ続く廊下で、間に一夏を挟んで男子3人が歩いていた。

「やだね、絶対に捻り潰してやるから首を洗って待ってる。ってシャルルに伝えておいてくれ」

「仲直り？嫌だなあ、僕は揉め事を止めただけなのに勝手に恨まれているだけなんだから、仲直りも何も無いよ」

両端の男子は、もう片方の端の男子をいないかのように扱っ

中央の男子はその為に必要の無い伝言ゲームを何度も往復させており、傍から見ればある意味滑稽なものだった。

「自分の悪口ならともかく、それ以外の人間の努力に対する悪口は許さない、それも俺の為に努力してくれた人に対しての悪口はな。ってシャルルに伝えておいてくれ」

「軽いジョークに過激に反応するなんて大人らしくないよね」

「言っつていいジョークと悪いジョークも理解できないお子様に言われたくない。ってシャルルに伝えておいてくれ」

「そもそも自分もフランスの悪口を言っつておいてどの口が悪口を許さないなんて言えるんだろうっね」

単純計算で一夏は2人の倍の量を喋っている上に、むき出しの敵意

を中央で受けているわけだから、既に一夏の喉はカラカラである。その緊張ゆえに、普通に廊下を歩いていたら本来は聞こえたであろう、自分を話題の中心とした噂話を聞けなかったのは、仕方ないことだと言える。

そもそも、昨晩にシャルルが女性だと分かった一夏は、ただでさえ気苦労が1つ増えた状態なのだ。もし胃薬を持っている人がいれば、今の一夏に渡すだけで好感度は鰻登りだろう。

「お、おはよう…」

「シャルル以外の皆、おはー」

「皆さん、おはようございます」

クラス内で何やら女子達は噂話をしていたらしいが、その尋常ならざる空気を察知して口を紡ぐ…いや。尋常ならざる空気を察知したわけではないようだ。視線に呆れの色が窺える。

多分、昨日のアーリーナの話全て筒抜けなのだろう。IS学園の女子通信網は音より早いと誰かが言っていた記憶がある。

しかし、本当にこの2人はなんとかしてくれないだろうか？今も目すら合わせずにお互い自分の席まで行っちゃったし。

海月は海月で頑固な性格だし、シャルルはシャルルで物腰が柔らかそうに見えて芯が通った性格だし、こうなったらとことんまで自分の意見を通すんじゃないだろうか。

解決まですっと伝言仲介役をするのかと思うと、再び胃がキリキリしてくる気がする。

その後、その光景を見ていた生徒達は揃って『初めて織斑先生を超えるプレッシャーを感じた』と語ったらしい。

「さて、前は中断喰らったし今度こそアリーナで練習しますかね…ん？」

歩を進めていると、いつもよく見る女子2人組が目に入る。1人が小柄なサイドアップで、もう1人が金髪ロールの中くらいの身長と言えはもうお分かりだろう。

なにやらお互いを敵視し合っているようだが、険悪なムードは見えないので多分模擬戦を行おうとしてるんだろう。

「よ、セシリア」

「あら、海月さんじゃありませんか。どうなさいました？」

「アリーナに向かってたら見かけたからさ。今から模擬戦とかするんだろ？」

「その通りですわ。ここで一度、鈴さんとの実力の差をハッキリさせておこうかと思ひまして」

「ちょっと、何2人で会話進めてんのよ」

俺とセシリアだけの会話に痺れを切らした鈴ちゃんが無理矢理会話を乱入してくる。

言っではなんだが、現時点も鈴ちゃんと冷戦状態にある俺はあまり

話すことが無い。いや、シャルルみたいに相手の存在すら認めないような激戦状態ってわけでもないから、多少話すことには話すけど、あくまでそれも知り合いが同席してる場合の日常会話程度だ。

「五月蠅いな、俺が声を掛けたのはセシリアなのに何で鈴ちゃんが入ってくるんだよ」

「今からあたしとセシリアで対戦するのに、そのあたしをハブにする必要は無いでしょ」

よって、面と向かって話す場合は必然的にこのような喧嘩腰になる。

「今から俺やセシリア、箒さんと一夏が特訓するって時に、その俺達をハブにして一夏に無理矢理特訓を押し付けようとしてた人間の台詞とは思えないな」

「ああ、確かアンタあるとき、トーナメントで私を倒すとか言ってたわね。そんなこと無理だろうけど」

「ああまあな、鈴ちゃんが俺と当たる前に負けるかもしれないし。それならわざわざトーナメントまで待たずに決着をつけてもいいかもな?」

「はあ?あたしがそんなに簡単に負けるわけないじゃない、心配なのはアンタが負けることですよ」

「ぐぐぐぐつ……!」

「おおおおおお……!」

「…こほん！ まあまあ、海月さんも鈴さんも落ち着いてください。戦闘前に熱くなつては戦闘中に集中力が切れてしまいますわ」

「…けっ！」

「ふんっ！」

正直な所クラス代表戦は終わったからもういがみ合う理由は無いのだが、ここまで来ると意地である。一夏曰く鈴ちゃんは怒りが継続しやすいタイプだそうだし。

実は今までも何度かこのような喧嘩体勢になり、そのたびに近くにいる知人が止めに来るから穏便に済んでいるのだ。もしいなければ余裕で決闘ルートへと突入する。分岐ルートは勿論なしだ。セーブ？できるか馬鹿鹿野郎。

「しかし、今回はわたくしが先約を入れておりますので、海月さんは対戦するとしてもわたくしの後にお問い合わせしますわ」

腰に手を当てながら優雅にそう言い鈴ちゃんを引き連れてセシリアは更衣室へと入ってゆく。

扉がバタンと音を立てて閉まった後に残ったのは、嵐の前のような静寂さだけだった。

アリーナへと続く廊下。なんだか平時より明らかに人数の少ない面子で俺は歩いていた。

いつもなら海月もシャルルも誘って実習をしに行くのだが、今日はシャルルを誘った後に海月を誘ったら「俺はパス」と言っただけで行かれてしまった。その上に何故か今日は、箒もセシリアも鈴も見当

たらないのだ。

海月のあれは多分、相当怒ってる。基本的に人との関わりを大事にする海月が用事も無いのに実習訓練をパスするなんて今まで1回も無かったからよくわかる。

しかし、予想外なのはシャルルの方だ。

「なあ、いつもシャルルってそんなに怒らないイメージがあるけど、今回は妙に怒ってるよな」

「そうかな？」

「そうだよ。そもそも止めるためとは言え、いきなり発砲したことだって俺は驚きなんだぜ？」

そうなのだ。シャルルはラウラが発砲した時も、気付いたら目の前で弾丸を防ぐ体勢になっていた。

海月の攻撃だつて反応して発砲から止めることができたのなら同じように攻撃を中断させることも出来たはずだ。

「一夏。あの時、海月の方を見てた？」

不意に立ち止まったシャルルは、そんなことを口に出した。

「ああ、確か後ろに移動しながらライフルを展開して、ラウラに照準を合わせてたな」

「そうだね。それじゃ、海月の『後ろ』は見てた？」

「え、後ろ？」

うーん。後ろは見てない…と言うか、ラウラと海月の2人に意識が集中してた。

「海月の後ろではね、別の2人組が模擬戦してたんだよ。しかもお互い集中力が切れかけてたから、多分終盤ぐらい」

「へえ、よく見てるんだなシャルルは。それで？」

「…まだわかんない？もうすぐどつちかのシールドエネルギーが切れるって所へ、最悪海月は衝突しに行く所だったんだよ」

「あっ！」

そういうことか。

シャルは何も、戦闘を吹っ掛けようと発砲したわけじゃなく、意識を別のほうに向けて移動を止めようとしていたのだ。

状況次第で起こりうる、大怪我にまで発展するかもしれない事故を防ぐために。

「海月はね、一夏。意識が戦闘に向きすぎてるんだ。いや、戦闘だけじゃなくてどんなことにも本気でのめり込みすぎる。1人で何かをやるならそれは良いことかもしれないけど、それが理由で他人を巻き込んでしまうなんて、僕は絶対認めない」

シャルルの瞳から、はっきりとした信念が伝わってきた。

自分が父親に、企業に、そして俺に、自分の意思も関係なしに巻き込まれてきた、だから人が人を巻き込む、そんなことは許せなかったのだ。

「…分かったよ。けどさ、それなら喧嘩を続けようとなんかせずに、しっかり海月に話すべきだったんじゃないか？」

「だから言ってるじゃない、僕は喧嘩してるつもりなんて無い、海月が僕と話そうとしないだけだつて。一夏は気付いてなかったかもしれないけど、今日ずっと海月は僕が話そうとするとそれに重ねて何か言うんだもん、言う機会が」

シャルルの言葉が最後まで続くことは無かった。

何故なら。…アリーナから、体を振動させるほどの衝撃が体に伝わってきた為である。

アリーナ内。俺こと戸鉄海月は、現在必死でラウラからの攻撃を避けている。それはもう死に物狂いという表現がぴったり来る必死さで。

『ラウラ、ストップ！マジで止まったら！』

『断る』

『何であつ！』

事は数分前に遡る。

俺は先程の予定通り次に鈴ちゃんと模擬戦を行う予定で、それなら機動の1つでも覚えたほうがいだろう、と攻撃が当たらないギリギリぐらいの位置で戦闘を見ていた。

すると突然、いや本当に何の前触れも無く本当に急に砲撃が飛んできたのだ。俺にピンポイントで。

1発目は回避したのだが、なんとこの砲撃、続けて正確に俺をピンポイントで狙ってくるのである。初撃だけなら誰か訓練してる間の流れ弾の可能性もありえたんだが、流石に何度も執拗に狙ってくる俺狙いなことは分かる。

全く、せっかく人の戦闘を観戦しているのに誰だこんな迷惑なことをしているのは、と砲撃が飛んできた方向をよく見てみると…

何故か、ぶすつとした表情でこちらを睨んでくるラウラがいて、それから俺は攻撃され続けているのである。以上事の解説終わり。

『おい海月、どうしたんだよ?』

個人間秘匿通話から一夏の声が入ってくる。どうやら今、このアリーナで俺を見ているらしい。

『知らねーよ!セシリアと鈴ちゃんの模擬戦を観戦してたらいきなりラウラが俺に攻撃を仕掛けてきて現状!』

『? 良く分からんけど…俺は止めに入るべきなのか?』

『入ってくんな!回避を続けるだけでも大変なのに、ラウラに嫌われてるお前が来たらもっと捌くのが面倒になるだろうが!』

こんな日に限って雨のせいで、空まで昇ることができない。昨日みたいに、直後に急上昇して人を避けるなんて行動がうまく取れない。いやまあ、昨日はいきなりシャルルに撃たれたからその行動自体してないんだけどさ。

そもそもラウラが何故俺を攻撃してきているのかが一切理解できないのだ。一夏への攻撃とか、一夏を怒らせるためにセシリアや鈴ちゃんを威嚇するとかなら分かるのだが、俺である意味が全然分からない。

『ラウラ！ほんとに、止まってくれ！止まって説明を要求するっ！』

『断る』

『断る以外にも何か言えっ！っ！かせめて、周りに当たらないように攻撃してくれ、適時AICで止めるの大変だから！本当に大変だから！』

『断る、貴様が当たって止めれば問題ない』

『だあーっ！ちくしょーっ！』

もう腹を括るしかないらしい。人間、諦めが肝心だ。とりあえず出来るだけラウラの攻撃を避けて、理由は後で聞くとしよう。

∴現時点で何発も被弾してるから、もしかしたら回避終了後は意識が残ってないかもしれないけど。

30 (恋愛的な意味で) (前書き)

日刊ランキングで初めて20位以内に入ったみたいですよ。やったぜ！これが俺の実りよk(ry

…皆さん本当にありがとうございます。

30 (恋愛的な意味で)

その日のアリーナ閉鎖後。

前回の晩飯の時と同じく、ラウラはやるだけやって後はスタスタと去ってしまった。

部屋まで出向いても開けてくれないし、何か俺が悪いことしたんだつたら謝りたいのにそれもできない。

ただ問題は、何か俺が悪いことをしていたんだとしても

(死ぬかと、思った：！)

ラウラは、本当に俺のシールドエネルギーを0まで削ってきたのだ。あれは本気で俺を虐めてきてた。

怪我したらどうするんだよ。流石にベッドの上でラウラによる介護生活なんて：ちょっといいかも？いや良くない。決して良くないぞ。俺はアクティブな人間だ。

閑話休題。推測を立てられないものを考えても仕方が無い。飯喰いに行こう、飯。

そういった経緯から食堂に来たわけだが、一夏。俺はたまに、お前の無神経さに驚くことがあるよ。

言うまでも無いだろう、一夏が隣の席にやって来たのだ。：喧嘩中のシャルルを引き連れて。

しかもご丁寧に、俺が離れるべく席を立とうとしたら腕を掴んで阻

止してきやがった。おかげで豚汁が少し零れてしまった。

仕方なく席に着くと、ようやく一夏は腕を放して口を開いた。

「海月、1回シャルルとしっかり話してみろよ」

そしてこれである。まあ、一夏の性格からして不仲が嫌だっというのは分かるんだけどさ。どっちかと言うと傍目勝手に怒ってるのは俺だし。

「別に話すことなんて無えよ」

「海月に話すことが無くても、シャルルからは話すことがあるからさ。今日の海月、ずっとシャルルの会話をわざと途切れさせてたんだろ？」

……。何でいつもは鈍いのにこういう所は鋭いのだろうか。

「ほら、シャルルも黙ってないでせ」

「う、うん…ねえ、海月？」

それまで黙っていたシャルルは、一夏に促されて初めて口を開いた。

「何だよ」

「少し、話したいことがあって」

「へえ、ISの情報とかの話なら俺も口止めされてるから、フランスにドイツの技術を垂れ流したりはできないぜ？」

言いながら鯖味噌を口に放り込んだら、ダンッ！と一夏が思い切り机を叩いて立ち上がる。

「海月！いくらなんでも言っていないことと悪いことがあるだろ！」

「ん、ゲホ…その、言って悪いことを先に言ったのはそこにいるシャルルなだけだな」

思わず誤嚥するところだった鯖を、軽く咳き込んで飲み込む。空気が濁ってて飯がいつもより美味しく感じない。

「俺が今言ったのはジョークだ。朝、シャルルは言ってたよな？軽いジョークに反応しすぎだって。見るよ、人間なんてジョークだろうと簡単に怒る」

一夏もシャルルも、非常にばつが悪そうな顔をする。まさか自分達の行動で、その前の自分達の発言を皮肉られるなんて考えもしなかったのだらう。

「シャルルが俺に対して怒ってるのがどこかなんて知らないし、シャルルだって俺に何か正論を言うべく怒ってるんだとは思うさ。けどな、俺が怒ってるのは『人を馬鹿にするな』っていうこれだけで、それをしたのはシャルルだ。そこへの言及が無い限り、俺はシャルルと話すつもりは一切」

ドドドドドドドッ……！！

何だこのコメディ色の強い地響きは。なにやら入り口の方から聞こえてくるが、非難警告でも出たのか！？

ズザアツ！という急ブレーキ音が食堂に響く。……砂も無いのにズザアツ！だ。靴に廊下であればキュツ！ぐらいじゃないのか、普通は？

「織斑君！」

「デユノア君！」

「戸鉄君！」

ブレーキ音の正体は数名の……いや数十名規模の女子生徒だ。早い時間だったからさっきまでがらがらだった食堂が、あつという間に埋められてゆく。訂正、俺たちの周りだけ埋められてゆく。何かのB級映画かこれ？

「おい、一体何が起きてるんだ！？」

「ど、どうしたの、みんな……ちよ、ちよつと落ち着いて」

「何でもいいが食堂で暴れるな、後静かにしろ、飯に埃が入る。」

俺の一言で女子は慌てて慌てるのをやめる。文章がおかしい気がするが、実際そんな感じなのだから仕方ない。

「……それで、そこで未だにあたふたしてる転寝さん。これは一体どういうこと？」

「あ、え、えつとその！こ、これ！」

状況を把握するために目に入った知り合いに聞いてみると、転寝さんが見せてきたのは学内緊急告知文が記載された何かの申込書だった。

「うーんと、『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、ふたり組みでの参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする』へえ」

つまりこういうことだ。

緊急で学年別トーナメントの仕様変更があったから、とりあえず専用機持ち、そうでなくても学園中の話題である男子生徒とペアになるうと全女子必死なわけだ。

なるほど、良く見ればリボンの色が全員1年生カラーだ。しかも良く見ればセシリアと鈴ちゃんまでいるし。

しかし、2人組であると決まった以上俺がすることは決まっている。何かって？嫌だなあ、ラウラを誘うに決まってるじゃないですか。

ペア同士での訓練を行う場合、お互い相手を知っていることが好ましい。俺の場合特によく関わるのは一夏、篝さん、セシリア、鈴ちゃん、シャルル、ラウラ、転寝さん、布仏さんぐらい。

そのうち、現時点鈴ちゃんとシャルルの2人とは組むつもりが無いので、一夏、篝さん、セシリア、ラウラの誰か。

ここまで来てしまったらぶっちゃけるけど、個人的な感情でラウラと組みたい。もし今ラウラが俺に何か怒ってるのなら、無理かもしれないけど。

「俺は多分ラウラと組むからパス。一夏かシャルルを誘ってくれ」

しーん……。今あからさまに女子の気持ちが一段階ダウンした。

「ちえっ、戸鉄君はぞっこんラブか……」

「でも、まだシャルル君と織斑君がいるじゃない！」

「そつよ！織斑君、私とペア組もっ！」

興味対象から抜け出した俺は、座って再び飯を掻っ込む。ふと一夏を見てみると困った顔で苦笑しているらしいので、多分食事中にさっきのシャルルとの会話は続かないだろう。

「悪いな。俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

一夏は少し声を張り上げてそう宣言した。再び沈黙が訪れ、女子達の気持ちが一段階ダウンした。

「まあ、そついうことなら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「男同士っていうのも絵になるし……ごほんごほん」

女子達は納得したようだとほとほと食堂を去ってゆく。…一夏に見つからないように、こっそりその中に混じって食堂を抜け出す。廊下では既にペア探しが始まっているらしく、どたどたと音が響いてきた。

「さて、ラウラのことは誘えるかな？」

数分後、ラウラ室。

怒っているであろうラウラ室へ数分前に訪ね、経緯を説明して出場をお願いしてみた。

当然、俺を狙い撃ちしていたぶるぐらいなのだから拒絶の返事が返ってくると思っていたのだけでも

「別に構わないぞ」

返答は、あっさりと許諾。こうして何の問題も無く俺とラウラはペア参加が決定した。ちなみに…

「それでさ、ラウラ」

「何だ」

「何で、さっきは俺のことあんなに狙い撃ちにしたのか、そろそろ教えてくれると」

「断る、用事が済んだならさっさと出て行け」

もう一方への返事は当然のように断られた上に出て行けとまで言われた。ペアを承諾してくれるぐらいだから嫌われてはいないはずだが、と思う、んだけどやっぱり心配になる。

「…とりあえず、何か分からないけどごめん」

少なくともこれ以上ラウラの心象を悪くするのも嫌なので、さっさと部屋を出ることにした。

出来れば早く、俺が虐められた理由を教えて欲しいな。

「もうすぐ、もうすぐだ…」

とある研究所。研究員の1人が、ぶつぶつと呟いていた。彼女が研究しているのは、とあるISのシステム。現在では違法として作成が禁止されたものであり、つまり非合法品。

「我々が開発したVTシステムが、もうすぐ発動を…」

「それは、もしかして隊長の機体にくっついてたあのゲテモノシステムのことですか？」

呟いていた彼女は、聞き覚えの無い声にハッと後ろを振り返る。

「あのシステムなら、既に取り除いてありますよ。残念でしたね、隊長1人だけが行くのであればあんな入念なチェックは無かったですしょうから」

聞き覚えの無い声は、見たことの無い人物からではなく、見たことのある人物から発せられていた。いや、見たことある程度ではない。ドイツ軍に行ったことがあり、ISに携わる人間だったら誰でも知っている。

「クラリツサ…ハルフォーフ…」

「大尉、を付けた方がよろしいのでは？…まあ、今から付けたとしてもどうせ貴方は逮捕されるんですが」

研究員は唇をきつく噛む。

彼女が、この最奥のルームにいるということは、既に研究所はドイツ軍によって制圧されているだろう。

「さて、抵抗はせず付いてきてもらいましょうか？」

研究員は、諦めて軍人に投降する。

「まあしかし、あのシステムの発動条件を見る限り、どちらにせよ発動はしなかったと思いますけど、ね」

なんて言っただって、隊長は、自分を愛している人間に守られているのだから。

彼女のその言葉を研究員が理解することは、勿論できなかった。

31 超高速消化試合トーナメント(前書き)

学校が、学校があ…！

更新テンポがおくれr

31 超高速消化試合トーナメント

6月も最終週に入り、IS学園は月曜から1週間、学年別トーナメントによる大会特有の空気を帯びる。

もうすぐ生徒達も試合だと言つのに、その殆ど全員が雑務や会場の整理、来賓の誘導に追われている。

それが終わったら急いで着替えの時間である。

本来俺は広い更衣室を合計3人で使うことができるのだが、今回俺はクラスメイトに予想以上に仕事を押し付けられると予想していたので、吸汗性の良いISスーツを最初から着込んでいた。

そのため、実際の所俺はラウラの着替えが終わるまで雑務を続けていた。

「えっと、今の状況は…うわお、こりやすげえ」

俺がギリギリまで雑務をこなす旨を教師陣に伝えた所、試合開始がすぐ把握できるようにと携帯にモニター情報が送られるようにしてくれた。

モニターの先に見える観客席には、テレビで見たことがある政府関係者、研究所員、エトセトラエトセトラ。国外から来た人もいるみたいだ。

「国外から来てる人もいるってことは、多分自国代表候補生の実力を監査しに来てる人もいるんだろうなあ」

そうになると、ドイツ代表候補生チームとでも言うべきうちのチームは手が抜けない。すぐ負けたらドイツが笑いもののルートに突入だ。逆にここで好成绩を収めれば、他国から見てもドイツの実力が一歩

抜きん出ているとアピールできるわけだから、頑張らないとな。

「…まあ、俺達のチームはそれより重要なことがあるんだけど、な」
重要なこと、と言うのは勿論一夏シャルルペアとの対戦である。ラウラは一夏を、俺はシャルルを叩き潰す予定なのだから当然だ。たまーにアリーナで訓練している彼らを見てみた所連携もそこそこできており、2人とも専用機持ちなこと関係して多分そう簡単には負けないだろう。

それと、もう1つがセシリア鈴ちゃんペアか。個人的な予想では、一夏シャルルペアが俺達以外で唯一負ける可能性があるペア。勿論俺達と当たった場合、鈴ちゃんは俺が倒す。

そういえば、学年の女子達がどのペアが優勝するかでお菓子を賭けているらしい。俺とラウラのペア、一夏とシャルルのペアはほぼ同人数が賭けているんだとか。

セシリア鈴ちゃんのペアは、こないだの授業で1vs2で圧倒的に負けたのが原因か伸び悩んでいるが、それでも3位なんだとか。大体99%その3ペアに分かれて、残りは自分に入れる遊び票とかそんなのだった。

「おっと、そろそろ組み合わせが決まるな」

いつもなら昨日の時点で完成しているはずのトーナメント表だが、なにやら急にペア戦に変更したせいで誤動作が発生したので、今回はいつものデータ表ではなく手作りの表を使用するのだとか。

朝から生徒手作りのクジを引いて決めるなんていうのは、今までだと初めてのことみたいだ。ちなみに俺は1回戦、最後の最後。

モニターが、トーナメント表に切り替わる。

「さて、一夏のこととセシリアのことは…うわお、一夏とは一番離れてるじゃないか」

一番右端に俺とラウラの名前が、一番左端に一夏とシャルルの名前が映し出される。つまり、決勝まで行かないと出会わない。

セシリアと鈴ちゃんの名前は…こっちも凄いな、準決勝までは出会わないらしい。

「さて、お互い負けないようにしないと、な！」

雑務を終わらせた俺は、意気込みながらアリーナへと走っていった。途中で「試合が最後だし」と雑務を押し付けられたのは、俺がヘタレだからだろうか。

うん。そうだな。

結果から言ってしまうおう。ラウラが酷い。

今回は何戦もあり、後半に対策を取られないように試合であまり情報を出さなくしたい、とラウラにもちかけ、ある程度お互い機能制限をして1回戦に臨んだのだが、それでもラウラは強すぎた。

俺が攻撃を当てる前に2機を相手取って戦闘を始めてしまい、それから3分とかからずに試合を終わらせてしまった。多分本日最速だろう。

しかも「俺が対戦できなかった」って言ったら、「お前の機体情報を漏洩せずに勝ったんだ、文句を言うな」だぜ？普通機能制限を掛けないから言う台詞じゃないだろう、それ。

頼もしいといえは頼もしいのだが、逆に自分が頼られてないような気がして悲しくなる。

そういうわけで、俺達のペアの対戦スタンスは「機能制限を続けながらラウラが敵を薙ぎ払い、俺は隅っこで見ている」という何とも俺が活躍できない上に地味なものに決まってしまった。

勿論ラウラが危なくなったら俺だって参加するし、相手があからさまに俺を狙ってくるならそれを振り払うぐらいはいいとのことだけどさ。俺、逃げ回ってるだけの弱腰じゃないか。

なので俺は「チームとしては勝ちを願いつつ、ラウラにはちょっとかピンチになってもらいたい」という複雑な心持をしているわけだ。以上、うちのペアの報告終わり。

一夏のところとセシリアのところも順当に1回戦を突破したらしい。見させてもらったが、セシリアと鈴ちゃんはこのないだバチバチ火花を飛ばしあっていたとは思えないぐらい連携が上手になっていた。それと、よく見たら筍さんと転寝さんはペアを組んで、そっちも上がったらしい。よく考えたらこの2人はかなり長時間専用機持ちとの訓練をしてるわけだから、確実にほかの訓練機ペアより一歩抜きん出ている。

というか、筍さんの模擬戦での戦績は覚えている限りだと一夏より上だったと思うし、もし一夏達と当たったら筍さんは勝っちゃう可能性だってある。

ともかく、当たりたい相手は皆無事1回戦を突破できたわけだ。この調子で頑張りたいものである。

そういえばギリギリになって初めて知ったのだが、月曜日は1回戦だけで終わってしまうらしい。

考えてみれば、各学年平均100人いると仮定して合計300人150ペア75試合を1回戦で行うわけだから、そりゃあ当然だったかもしれない。途中の食事休憩や長丁場を考えれば、1、2回戦は両方1日かけて行うだろう。日程によると、変な長丁場が無い限り水曜日に全ての試合が終了することのことだ。

しかし俺としては、ただ試合を3分眺めるためだけに今日ISSスーツを着たっということだ。悲しい。

：昨日、俺は「しかし俺としては、ただ試合を3分眺めるためだけに今日ISSスーツを着たっということだ。悲しい。」と俺はぼやいたな、あれは嘘だ。

いや嘘じゃないんだけど、それは「今日」だけじゃなく火曜日もそうだったのだ。つまりラウラが機能制限をしたまま2人をぶち抜いた。

流石に2日連続でそうだと、「ドイツの女の側が強い」「織斑じゃない男がボンクラ」みたいな噂が流れてきて、俺のガラスハートはズタズタだ。修繕費はラウラに出して欲しい。

補足するけど、一夏セシリア篝さんも順当に勝ち上がって来てる。明日の準決勝のカードは「一夏ペアvs篝さんペア・俺のペアvsセシリアペア」となりそう。

それはいいが、せめて1試合ぐらいまともに活躍させて欲しい。

勿論準々決勝でも俺の活躍の場面は殆ど無かった。

強いて言えば、ラウラに当たりそうだった弾丸を遠くからA I C使
つてぴたぴた止めるぐらい。

ペアを組むことが決まってからラウラとある程度訓練を（勿論、俺
が色々と教えてもらう前提で）行ったのだが、どうやら俺の機体に
積まれているA I Cはラウラのものより有効範囲が広い代わりに発
動までのラグがラウラのものより大きい、ということが分かった。
後、エネルギー波が細い。

発動が早くてある程度近距離を止めるラウラのA I Cを『停止結界』
と呼称するのであれば、俺のA I Cは遅い代わりに中距離ぐらいま
でギリギリ停止を狙える『絡め糸』みたいなものだ。結界と糸つて、
なんかインパクトに違いがあるなあ。

後は昨日一昨日の結果を見て「実は俺が弱いのでは？」と睨んで突
撃してきた敵機をいなして逃げる。それだけ。

結局、1機も倒すことなく俺は準決勝、つまりセシリア・鈴ちゃん
ペアとの対戦をすることになってしまった。

とても重要なイベントのはずなのに俺はいつもの模擬戦とやること
が変わっていない気がする。

「さて、次は準決勝だ。流石にそろそろ情報封鎖は止めても問題な
いだろう」

既に人が減っているピットで、ラウラは呟く。

「あれ、ラウラの性格だったら次も私1人で勝てるとか言いそうな
のに、珍しいな」

「…さっき連絡があつてな。また研究員が涙声でヴェレに戦績を作

ってやってくれ、と」

ラウラが何と言おうと次の試合は参戦する予定だった海月にとって、これはかなりの朗報だった。今までに闘争心が燻っていたのもあって、目がキラリと光る。

「よし、つまり本気で対戦していいんだな？」

「そういうことだ」

32 セミファイナルのいちっ！

最初はお祭り騒ぎだったトーナメントも、準決勝ともなれば包まれる空気は緊張へと変わってくる。

現時点で残っているペアは各学年4ペア、合計12ペア。人数にして24人。

『試合終了　勝者、織斑一夏、シャルル・デュノアペア！』

訂正、今しがた合計は11ペア22人になった。

観客席からの歓声が響く声の中には、何やら告白の言葉のようなものがあったように聞こえる。

（そりゃ試合中の一夏は格好良かったかもしれないし、だから素敵とかの歓声は分かるけど、何で付き合ってたかが聞こえてくるのよ！）

サイドアップの少女こと凰鈴音は、心の中で悪態を吐いていた。いや、鈴音「も」悪態を吐いていたと言う方が正しいかもしれない。というのも、彼女の隣に座ってモニターを見ていた英国少女も、彼女と同じように不機嫌そうな顔をしていたからである。

「ねえ、セシリア」

鈴音は自分のパートナーである金髪の彼女　セシリア・オルコットに声を掛ける。

「なんででしょうか？」

「次の試合勝つたらさあ、決勝では一夏を重点的に狙おう」

「奇遇ですわね、わたくしも今ちょうど同じ事を言おうとしていたところですよ」

お互いが何やら感情を感じさせない、むしろ恐怖を煽る冷淡な口調といえいいだろうか、そういう声でそんな相談をしていた。

放たれる肌寒いオーラが、周りに雪のような幻影を映し出している…気がする。

「しかし　まずは次の試合ですよわね」

一転、少し緊張の混じった声でセシリアは意識を次の試合へと戻す。次の対戦相手ペアが決勝と同等かそれ以上の強敵となることは、今までの試合の結果から彼女達にも容易に予想できた。

まず、対戦相手のうち女子のラウラ・ボーデヴィツヒ。彼女の实力は1年生の中でも確実にトップレベルであり、何とこれまでの試合はほぼ全て彼女が単対多で仕留めている。

武装も近距離戦に寄ってこそいるが、実際は全方位全距離を対象に戦闘できるものであり、言ってしまうえば隙を突くのが非常に難しい。来賓からの評価も噂によると最高で、まさに1年生トーナメント最大の壁と言って間違いはないだろう。

しかし、セシリアにとって更に注意を払わなければならないのは対戦相手のうち男子のほう、戸鉄海月だった。

先程言ったとおり、彼はこれまでの試合で殆ど戦闘を行っていない。自分を攻撃してくる相手をひたすら避けてラウラに誘導する、という地味な役回りを持っていた。

鈴はそれを「単純に弱いから、あのラウラってやつに任せてるんじ

やないの？」と評価していたし、彼の戦闘を見たことが無い大多数もそれと似た意見だろう。

だが、実際に戦闘を行ったセシリアは違う。学園で彼と本気で戦闘をしたことがあるうち数少ない1人である彼女は、その実力と危険性を最も理解しているうちの1人だった。

そもそも、彼の戦い方には掴み所が無い。攻撃を始めたと思ったらいきなり両手に兵装を呼び出し、そうかと思えばまたもやいきなり足にまで武装を呼び出す。

更には相手の固定観念まで利用して、あらゆる手段でこちらを絡め取ってくる。

そんな人間がまだスペックを一切把握できていない機体に乗っているのだ。怖くないわけがない。

『1学年準決勝、第2試合を開始します。両者、準備をしてください』

ピットにアナウンスが響く。どうやら、そろそろ戦闘が始まるらしい。

「さあ行くわよセシリア。あたしは優勝して一夏と絶対付き合う！」

「それはこちらの台詞ですわ。必ずトーナメントで優勝し、その後1対1の鈴さんとの対戦にも勝ち、一夏さんを我が物にしてみせます！」

2人は会話の中で軽く火花を散らすと、その後笑い合いピットゲートから飛翔するのだった。

その頃。

「…何か、俺の知らない所で奇妙な取引がされてる気がする」

「一夏？凄く鳥肌が立ってるけど大丈夫!？」

「大丈夫だと思う…それより、次の試合を見よう。流石にそろそろ海月も出てくるだろうし」

鈍感な少年は、その身に迫る危険をなぜか敏感に察知し、汗をダラダラと流していた。

『あら、今回は引き籠りじゃないのね』

戦闘体勢を取った俺に鈴ちゃんが、挑発とばかりに通話を掛けてくる。

「お偉いさんにそろそろ戦えって言われちゃったから、ね」

『何だ、てつきり怖くて対戦できないから相方に任せてるのかと思っただわ』

「へえ」

挑発を軽く受け流し、お互いの距離と初手を正確に予想してゆく。鈴ちゃんとの距離、4.6738…およそ4.7m。セシリアとの距離、17.4208…およそ17.4m。近距離から中距離を得意とした鈴ちゃんを手前に、中距離から遠距離を得意としたセシリ

アを奥に配置した、前衛後衛の分かり易い陣形だ。

対して俺とラウラの距離、33・5776…およそ33・6m。つまり言ってしまうえば、無茶苦茶距離が離れているということだ。ちなみにラウラは唯一地上にいる。

何とラウラ、今回は俺が負けるまで自分から手出しはしないと云う鬼畜っぷりを見せてきた。つまり1 3回戦までと逆の状況というわけだ。

準決勝で俺に単対多戦をいきなりこなせ、と言っるのは結構酷い仕打ちじゃなからうか。俺の気のせいだろうか？いや、気のせいではない。反語。

『それでは試合を開始します、5 / 4 …』

大体の予想はついた。鈴ちゃんが俺とセシリアの対角線上にわざわざ陣取るということは、初撃は鈴ちゃんがいきなり移動してのセシリアの射撃じゃないだろうか。

体で体を隠されて、後ろ側で何かされるっていうのは結構面倒だ。

『3 / 2 …』

つまりこちらが採るべき行動は、初動で出来るだけ移動することだろう。うまく鈴ちゃんと動きが合えば射撃を止めさせられるし、それで別方向だったとしてもある程度相手の動きは鈍る。

『1 / 0 …』

ギリギリまで体を振る動作をせず、相手に行動を予測されないようにする。移動位置がバレたら結局止められるのだから一緒だ。後は、できるだけ相手の動きを見切ること。

『試合………始めっ！』

「うひゃああっ！」

試合直後に響いたのは、鈴ちゃんのそんな声だった。

『鈴さん！何故動きませんか！？』

開始早々に《スターライト・Mk-?》を早撃ちしたセシリアは、初撃をいきなり最悪の方法で失敗させたことに驚愕する。

何と、予定通りだったらすぐ右側に移動するはずだった鈴が一步も動かず、セシリアの射撃は狂いもなく海月のいる方向へと一直線に進み…鈴に当たったのだ。

『違う、動かないんじゃないって、動けないっ！』

『そりゃ、俺が止めたからな』

通信に海月が割り込んでくる。

(海月さんが、止めた…！？ということとは、まさか！)

『気付いた？俺の機体にもAIC搭載されてるんだよね。…まあ、5秒しか相手を止められないけど』

海月が最初に移動した方向、それは『セシリアの方向に一直線』だった。最初から行動を読み、それを逆手にいきなりダメージを奪い

取ったのだ。

『けど対角線上にいるってことはセシリアはBT使わないと助太刀できないだろうし、この間に攻撃させてもらおうよ』

そう言っただけ海月はプラズマブレードを呼び出し、鈴を切りつけ始めた。

確かに対角線上にいる以上続けて射撃は行えず、ある程度鈴がセシリアが移動しないと海月を狙うことはできない状況だったので、セシリアが海月を攻撃するには現状BTしかなかった。

『え、ちよつと、何よこれ！』

鈴はどんどん切りつけられ、急速にシールドエネルギーと装甲を減らしてゆく。開始僅か5秒で既に、鈴のシールドの1/3が削られてしまった。

『さて、そろそろだから俺は離れさせて貰うよ』

海月は距離を取り、右手にショットガンを呼び出す。

やっと鈴は動けるようになったらしく、こちらも少し海月から距離を取っていた。

『流石に強いですわね…けど、海月さんは今大変なミスをしましたわ』

『ミスって？』

『AICが5秒しか続かない、つまりAICをかけられてもそこで別位置からの攻撃に上手く誘導できれば、その後にAICが切れて

くれるということわざわざ教えてくれたじゃないですか』

相手のスペックが少しだけ把握できたため、急いで試合中に2人で作戦を練る。相手がラウラであればまだ兵装が分かるため対策を事前に練れたのだが、今回はそのラウラが一切出てこない所以对策が無意味なのだ。

『あっ！』

『後、A I Cが切れると共に離れたということは多分、射撃向きの装備なのでしょうね』

『そっか、近接に自信があるならわざわざ逃げたりしないもんね。じゃあとりあえず、A I Cを警戒しながら懐に上手く入り込むのが1番かしらっ。』

『ですわね…じゃあ、始めますわよ！』

ある程度即席で計画を練ると、2人は再び前衛後衛の体勢に戻った。

33 セミファイナルのつうっ！(前書き)

いちっ！の次がつうっ！

33 セミファイナルのつうつ！

「甘いよ」

再度前後に位置を展開した2人のうち、セシリアに向けてショットガンを放つ。

今回の戦闘で、俺が狙っているのは実はセシリアだったりする。

A I Cの特性上、近接が得意でレーザー兵器を持たない鈴ちゃんの『甲龍』との相性はかなり有利なので、最低でもセシリアを仕留めておくのが俺の役目なのだ。

個人的な考えとしてはやはり鈴ちゃんを倒したいのだが、そちらばかり狙って負けた場合ラウラが勝てるとは限らない。まあ、ラウラが負ける場面なんて想像できないけど。

鈴ちゃんが青竜刀：らしき装備を振り回して突撃してくる。と同時にB Tが回り込んでくるといことは、A I Cを誘って攻撃を当てる予定なんだろう。

両手に《リユフトフェン》を展開し、片方を持ち替えて青竜刀を流すと同時にB Tを狙い打つ。

「うわっ、何これ面倒臭え」

『面倒臭くしてるんだから当然でしょ』

受け流したと思った青竜刀は回転を始め、受け流しにくい角度から攻撃を乱打してくる。

片手でこんなもん捌くのは面倒だが、A I Cを使ったら多分B Tに攻撃を当てられるだろう。

「じゃ、こいつで」

鈴ちゃんの攻撃を捌いていた右手にプラズマブレードを重ね出す。鈴ちゃんから見てみれば、いきなり刀が無茶苦茶伸びたみたいに見えるだろう。

そのまま、青竜刀の隙を縫って一撃入れる。

『はあっ！？何でこんなに装甲が壊れてんの！？』

ああ、このプラズマブレード《1989・11》の効果を説明してなかったっけか。こいつ、リュフトフェンのエネルギーを流し込みながら使うと装甲にエネルギーを流し込んで破壊していく仕様になるんだよ。その性能を付加するために、同時展開時の威力はアホみたいに低くなるけど。つて説明なんかしないけどさ。

「そついう装備だから。じゃあ続けるよ」

左手を持ち替え《クロイゼリング》を重ね出す。威力は低いけど、弾足が早いこいつならBTを狙い打つにはもってこいだろう。

さつきから、攻撃を捌いているときに地味にちよこまか狙ってきて面倒だったから、さつきとBTは破壊したい。

(BTは…あそことそこと…む、鈴ちゃんの後ろに1つとは面倒な)

とりあえず最も自分に近いBTにAICをかけて、それとは別のBTを撃つてみる。当たったが、多少砲口がずれたくらいだろう。やっぱり《クロイゼリング》の威力は低いな。

目の前の鈴ちゃんからの攻撃をいなしながらBTに狙いをなんとか定めていると刹那、体にいきなり見えない衝撃が加わる。

（何だ今の、もしかして鈴ちゃんの兵器か？）

思いつきり体に衝撃が加わってきて、今のでシールドエネルギーが70ぐらい削られる。何だ今の？

『BTばかり気にしすぎなのよ！』

続けて衝撃が襲ってくる。鈴ちゃんのISで何やら動きがあった後に衝撃が伝わってくるので、これは鈴ちゃんの兵器らしい。ちゃんとのこのペアの試合も見ておくべきだった。

どうやら攻撃が見えない上に多角度から狙ってくるようで、BTまで合わせて射撃が大量に襲ってくる。

とりあえず鈴ちゃんの兵器（以下呼称R）はAICを適時発動すれば止められるらしいので、BTの高速破壊を優先したほうがいいだろう。

BTに瞬時加速しつつ左手の《クロイゼルング》を仕舞い、《1989・11》と《リュフトフェン》を使用し壊す。セシリアのBTは後5機。

（鈴ちゃんを捌きつつBTを全機壊すまでにどれだけシールドエネルギーを削られるか、って所かな）

現時点でシールドエネルギーは100と少し減っている。Rさえ喰らわなければまだ40ちよつとだったから、少なくともあの攻撃だけは集中力を裂いて避けなければ。

2機目のBT目掛けて飛んでいくと、正面に鈴ちゃんが割り込んで

くる。ええい、毎回毎回割り込んでくれるな。

しかし、ここで止まるとBTもしくはセシリアのビームライフルで狙い撃ちされるだけだ。

なら、どうするか…答えは、こいつ。

『っ！何よ、こんな装備あつたの！？』

AICで一瞬だけ鈴ちゃんを止めながら、ワイヤーブレードを足に巻きつけてBTへ投げ飛ばす。勢いがついたIS装甲とBTが衝突し、双方にダメージが通った所へかさずBTに追撃。残り、4機。瞬間、間に障害物のなくなったセシリアから射撃が飛んできて装甲を1部削ってゆく。

「ああー、くそ！単対多なんて初めてやってみたけど、面倒臭いったらありやしねえ！」

次はどうするか。BTを狙ったら鈴ちゃんが、鈴ちゃんを狙ったらセシリアが攻撃を加えてきて、そして多分セシリアに近付くとBTと衝撃砲が来るのだろう。

成程、優勝のためにとことんペアで訓練を重ねた、努力が伝わってくる。

『海月さんと本気の勝負ではまだ勝ち星を上げてませんからね。ここで勝たせていただきますわ』

「そいつは俺も同じだぜ？生憎だが負ける気は無いよ」

負ける気は無いとは言ったものの、とりあえずBTを壊しきらないと勝機は見えない。

浮いている第3のBTめがけて、鈴ちゃんにAICを掛けながら突撃してゆく。

が、既にセシリアは俺が使うAICの弱点を見抜いていたのだろう。BTを壊すことこそできたものの腹のど真ん中にビームを当てられ、一気にシールドエネルギーが急低下。後腹が痛い。

『AICを使っている間は、対象物に意識をかなり集中する必要があるのでしょう？それを保ちながら《ブルー・ティアーズ》に突撃するのなら、ほかの場所なんて見れない。違いますか？』

「…ははっ、正解なんだよなあ」

しかし、これでBTは3つ壊した。後3機残っているが残りのうち2機はミサイルのためAICで止めやすく、これでかなり優勢になったことには違いない。

…仕方がない、そろそろ種明かしと行こう。

「あら、《ブルー・ティアーズ》への攻撃は止めましたの？」

海月は瞬時加速を利用しセシリアに近付いていた。勿論セシリアはそこを逃さず、新たに展開したミサイルを含めて3点で海月を攻撃する。

しかし、海月はダメージを気にしないといった勢いを維持し続けた。

『BTのダメージを気にする必要があんまり出てこなくなったからな。それより…セシリア、止まってるぜ？』

「へっ？」

セシリアは慌てて銃を構えようとするが、右手が動かない。いや、右手だけでなくそもそも体自体が動かなかった。

「ま、まさかA I C…しかし、そんな遠距離で届くものなのですか！？それに、対象物に集中しないとA I Cは発動できないのでは…！」

『届くよ。俺のA I Cは発動が遅い代わりに、ラウラのより射程が広いんだから。後 』

右手に持った《リュフトフェン》で鈴ちゃんの方を射撃しながら、海月は続ける。

『鈴ちゃんの軌道を予測して、大体ここにいるだろうなって位置を撃てば、まあギリギリ掠るぐらいには当たるだろ』

ただ、鈴は鈴で急速に近付かないのはある程度考えての行動だった。セシリアが行動を止めているのはあくまでA I Cのせいであり、それは5秒で終了する。そうなればいくら近接が苦手なセシリアでも直線的に攻めてくる海月を止められるだろう。

なので、ここで自分が突撃してダメージ量を減らすのは得策ではない、そんな考えがあったから、鈴は銃撃を慎重に避けながら近付いたのだ。

しかし、セシリアは気付いてしまった。何故間に合うかすら微妙な距離で海月がA I Cを自分に掛けたのか。

『鈴さん！可能な限り早くこちらに戻って来てください、今すぐに』

『へ？この距離なら、A I Cの有効時間的にセシリアもギリギリ対応できる距離でしょ？動いたら』

『違いますわ！A I Cが』

海月はぐんぐんと、続けて鈴を攻撃しながらセシリアへと近付く。

『A I Cが5秒しか作動しないなんて』

ブレードがセシリアの背後に当たり、装甲が砕ける。そのまま海月は少し離れ、ISアーマー用特殊徹甲弾をカノンより発射する。セシリアの発した言葉の続きを理解した鈴が可能な限りのスピードで近付いてくるが、少し遅かったようだ。

『…後0.5秒早く気付かれてたら、多分俺が鈴ちゃんに墮とされてたよ』

弾は、動かないセシリアの絶対防御が発動する部分にぴたりと当たる。

ただでさえ最悪1発で勝敗を決しかねない破壊力の弾が、絶対防御が発動する部分を直撃したのだ。

いくらそれまでのダメージが少なかったとは言え、耐えられるものではなかった。

「はあ…海月さん、日本には嘔吐きは泥棒の始まりという諺があるらしいですわよ？」

『悪いな、嘘も方便っていう便利な言葉もあるんだ』

結果、セシリアはそこでシールドエネルギーが尽きることとなった。

「まあ、射程がラウラより長くて発動がラウラより少し遅いっていうのは本当だけどね…さて」

続けて鈴へと視線を移し、海月は会話を続ける。

「一応、A I C 装備な上に中距離戦闘が得意な俺と鈴ちゃんでは、まあ俺の方が圧倒的に有利なわけだけど　続けようか」

両手に基本状態の《リユフトフェン》を展開。

『アンタ、本当に性格悪いわね…』

「おかげで一夏に惚れたまんまでいられるだろ？」

『…は？ちよ、ちよつと何言ってるの？別にあたしは一夏が好きだとか優勝したら一夏と付き合えるって噂だから優勝を狙ってるとかそういうわけじゃなくてっ』

「…鈴ちゃん、素直なのはいい事かもしれないけど、もう少し隠す努力をした方がいいと思うぜ」

一夏と恋愛に関するワードを出しただけでここまで慌てるのだ、普通に考えてよほどの唐変木か朴念仁以外は気付く。いやどういふことかかってえと、「勿論一夏は気付かない」っていうルビを振ればいいんじゃないかなってことさ。

『ちよつと 안타！今笑つたでしょ！？何よ、何か文句でもあるの！？』

「いや何も文句はないけど…それより、止まってるぜ」

はつとして鈴は慌てて後ろへ動こうとするが、既に体は完全に固定されていた。恋が人を盲目にするとは、どうやら真実だったらしい。

『えつと…？これ、1対1になってるってことは、もうあたしは動けないってことよね…はあ、あたしの負けってことね』

「ああ、まあそういうことだな　それより、優勝したら一夏と付き合えるだとか言ってたけど、あれどういう意味だ？」

『女子の間で流れてた噂よ。何でも学年別トーナメントで優勝したら一夏と付き合うことができるって言う　まあ、決勝に残るのが男子3人と一夏に興味無さそうな女子1人だからお流れになっちゃいそうだけど』

「へえ、じゃあ俺が優勝したら適当におだてて買い物にぐらい付き合わせてやるか。付き合うの意味が違うけどな」

『え、ホントに！？』

「いやなに、一夏を独占する話で喧嘩したんだったら、その喧嘩を終わらせるのも一夏を独占する話が妥当だと、ね。…あ、今の開放オプン・チャネル回線で生徒全員に流れてたわ」

『え？い、いいいいいいまの、ぜ、ぜ、ぜぜ全部聞かれてたの！？嘘！？わーわーどうすんのよ！ちよつと何とかしなさいよ！』

そろそろ時間が圧して来そうだったので、目の前であたふたする鈴に海月は《リユフトフェン》を連射する。先程装甲が破壊された部分を的確に狙ったそれは、あつという間に鈴のシールドを削った。

「嘘、嘘」

『えう、嘘！？嘘だったのね！？あーもうアンタ本当に性格悪いわ！いい、絶対に次優勝して一夏と買物させなさいよ！じゃないと許さないんだからね！』

からからと笑いながら了解と呟くと、海月は鈴にとどめの一撃を刺した。

そして 準決勝は、海月がセシリアと鈴の2人を手玉に取り、1対2でシールドを38残して勝利した。

「な、何でかな、さっきまで感じていた寒気が消えたと思ったら別の悪寒を感じ出したぞ」

「一夏！？本当に無理してないの、具合が悪いなら棄権するよ！？」

「いや、きっと大丈夫だ。多分大丈夫、おそらく大丈夫、大丈夫だ
といいな…」

「どんどん確率が下がってるよ！？」

試合終了直前、更衣室のモニターを見ていた2人組がそんな漫才を

繰り返していたなんてことは、当たり前だが誰も知らない。

33 セミファイナルのつうっ！ (後書き)

次はとろわっ！にしようと思ったたら試合が終了してたんですね

34 ブラックマネー

「2年生、試合長引いてんなあ」

携帯で試合を見ながら呟く。

1回戦は何やら水色っぽい専用機持ちの人がいるペア（何かの作為を感じるノイズが入って名前が聞き取れなかった）が5分ほど試合に決着を付けたのだが、2試合目がとにかく長いのだ。

実力が拮抗しているとさえいいのだろうか、既に開始から50分が経過しているのに試合に決着が付かない。

予定によると、準決勝が午後4時までには全て終了しなかった場合決勝は木曜日に引き継がれるとのことらしく、現在は午後3時半。

このまま試合が長引けば確実に決勝は明日になるだろう。

欠伸を噛み殺しながら試合を観戦していると、ピリリリリ…といったもと変わらない音で携帯が鳴る。まったく、観戦中に着信が来るとアプリが強制終了されるんだから勘弁して欲しいものだ。

「はい、もしもしもしも、もしもしもし、こちら海月でいーっす」

「……………」

ハイテンションで応答した所でそのローテンション封殺はやめて欲しい。恥ずかしくなるじゃないか。

「おーい、電波繋がってるよー、戸鉄海月だよー、セシリアー」

『…海月さん、下手なキャラ付けは後で後悔するって一夏さんが仰ってましたわよ?』

「問題ない、キャラ付けなんていつでも変えられる。常に新しい自分を見つけて出すべきだって一夏に伝えておいてくれ。それで、何?」

『海月さんはいつでも一夏さんと会えるでしょうに…用件ですが、少し食堂まで来ていただけませんか?』

どうやらセシリアは極度なテンションの差があると対応できないらしい。今度弄りネタに使おう。…そういえば日本人って、テンションを「ノリ」みたいな意味で捉える人が多いけどこれ「緊張」って意味らしいぜ。

「別にいいけど…多分ここまで来ればもう無いだろうけど、もし決勝があつたらすぐ戻ることになるぜ?」

『大丈夫ですわ、手短に終わらせます…それでは』

そう言つてセシリアは電話を終了させる。

手短に終わるなら、わざわざ食堂まで行かなくてもいいじゃないか。そこら辺の廊下とかじゃできない話なのか?

しかし電話が切られてしまった以上、行かないわけにはいかないんだらうなあ。

「仕方が無い、行くか」

駆け足、駆け足、つと。

「で、この状況は何だ？」

食堂に着いた俺は今、何故か篝さんセシリア鈴ちゃんの3人に囲まれている。おまけにケーキと紅茶にも囲まれているが、物凄い圧迫感が前方から飛んできて喉を通らない。

何やら篝さんとセシリアが梅雨を思わせるジトつとした目で、鈴ちゃんが少し申し訳無さそうな目でこちらを見つめてくるのだけれど、何なのだろう。

「おい、戸鉄」

「は、はい？」

篝さんが口を開いたが、その口調は非常に恐怖を煽る。思わず生唾をゴクンと一飲みしてしまった。

「どついうことだ」

「主語をお願いします、はい」

「鈴の言っていた話についてだ」

「前提をお願いします、はい」

「だからっ！一夏との買い物が」

「俺がどうしたって？」

篝さんが要領の得ない質問を繰り返していると、素晴らしいタイミングで一夏が登場する。ちなみに勿論だけど、俺は篝さんの聞きた

いことは分かっていた。

あれ、でも一夏って確か更衣室で待機してたような。

「なあ、決勝の方はどうなったんだ？」

「おう、何か『2年生の試合において、開始40分を越える現在において両者シールドエネルギーが半分も削られておらず、この後は持久戦が予測されるため明日に延期』って連絡が入ったぞ。海月には入ってないか？」

一夏に言われた所で携帯がピロリンと鳴る。図ったかのように届いたそれは、やはり一夏から今聞いた内容と同等のメール内容だった。

「な？という訳で今日は試合が無くなったことだし、小腹が空いたから何か食べようかと思ってさ。それで、さっきは何話してたんだ？」

「いや、それがだな一夏。実は箒さんとセシリアと鈴ちゃんが今度お前むごぐっ！」

何かと思ったら、いきなり口にISの部分展開を当てて口止めされた。鈴ちゃん、それは校則違反じゃないっけ。

「別に何でもないわよー！」

「え、でも確か買い物かどうとか聞こえた気がしたんだが」

「それは気のせいですわ！それより、早く食べないと料理が冷めてしまいますわよー！」

「？ 気のせいだったかなあ…まあ、いいや」

一夏を逃れることができた鈴ちゃんはISを解除し、騙された一夏は軽食用らしいアップルパイを持って遠くの席へ歩いて…行かない。なんと、今俺達が座っているテーブルの空いてる座に座ってきた。

「一夏」

「ん、何だ？」

「何でわざわざこの席に座るんだ」

「何でって…、一人で食べるより友人と食べたほうがいいじゃないか」

いや確かに大勢で喰った方が飯が美味しいのは同感だが。一夏、こないだ屋上でも同じこととして篝さんを不機嫌にしたよな。もう少し人の思惑を読み取ったらどうだ。

しかしそんな念波も感じ取らずに一夏は食事を始めた。熱々のパイを切って口に放り込む。

周りの空気は…うむ。皆諦めて最初に置いてあったケーキを食べ始めた。こうなれば一夏と長い時間同席しようという算段だろう、全員非常に食べるペースが遅い。俺は早い。

「そう言えば」

少しはみ出た林檎を嚙下しながら、一夏が話し出す。女子達と俺はケーキをぱくついていたので返事が出来ないが、一夏はそのまま続

けた。

「試合見てたけど海月、凄かったな。何で今の今まで試合に出てなかったんだ？」

「逆だよ、逆。今の今まで試合に出てなかったからこそ勝てた」

口に放り込んでいたチョコレート生地を飲み込み答える。一夏はわけ分からん、といった風の顔だ。

「例えば俺のISSにAICが積まれているって知ってれば、最初に鈴ちゃんは俺にむっちゃ近いポジションを取るわけがなかっただろ？」

「あ、なるほど」

「他にも色々あるが、総合して俺がセシリアと鈴ちゃんの機体性能を知ってて、2人にとっては俺の機体性能は完全にブラックボックス、っていうのは非常に有利なアドバンテージだったよ」

その情報差があってもあとコンマ数秒の差があれば負けだったんだから、再度1対2で戦闘しろと言われても勝つのは困難どころか、シールドエネルギーの残量は丁度今各々が喰ってるケーキの量ぐらいいなくなってしまっただろう。ちなみに俺はもう全部喰ってて、セシリアと鈴ちゃんはまだ半分残ってる。

一夏ももう喰い終わってるかと思っただが、どうやら熱かったらしくまだ2/3ぐらいしか食べ切れていない。

「そつえば、海月って鈴と喧嘩してるんじゃないの？」

「うん？ああ、裏金取引で強引に解決した」

「何だそれ」

「いや、実は決勝で俺が勝もごがっ！」

右手にフォークを持つてるから大丈夫かと思っただが、今回も鈴ちゃんの高速IS展開に制止された。こら、行儀が悪いからやめなさい。

「余計なコトは言わなくてよろしい。分かったら首を縦に振りなさい、分からなくても縦に振りなさい」

鈴ちゃんは握る力を少しづつ強めてき痛い痛いやめてやめて凹む凹む、頭蓋骨、そこ頭蓋骨！

…勿論、俺は首を縦に振った。

「よろしい」

やっとこさ鈴ちゃんはISを解除。いやあ、最悪頭割れちゃうんじゃないかと思った。

「…さて、決勝前と同様の措置を取る為ってことで今から訓練するのは禁止されてるし、一旦部屋に戻ってシャワーでも浴びるとするよ。3人とも、さっきの話はまた後で。一夏、どうせだし晩飯は同席しようぜ」

一夏といたいであろう3人に気を使って、さっさと席を立つ。一夏はおう、と、女子達は仕方ない、今は見逃してやるといわんばかりの顔で見送ってきた。

…あ、ケーキと紅茶代、置いておくの忘れてたよ。

34 ブラックマネー（後書き）

最近、1回でいいから日刊ランキングトップ5に入ってみたいな、なんていう強欲が沸いてきました（チラッチラッ

35 決勝のいちっ！（前書き）

8・2 17:45

感想受付をユーザのみから制限なしにしてみました。

というか、設定でユーザ以外も受け付けるようにできることをつい
さっき知った情弱の僕。

35 決勝のいちっ！

「準優勝までの結果を踏まえた訓練を禁止するってのは分かるけどさ、まさかパートナーとの接触禁止までされるとは思わなかったよな」

一夏が飯を運びながら呟く。

「いや全く。食事時間まで制限されて別々に取らされるとは思ってたよ」

現在7時20分。本当は6時に会って飯に行く予定だったのだが、その前に学園側から告知があって食事時間を制限された。

一般生徒が使う分には問題ないのだが、決勝戦に上がった生徒だけは6:00 6:50に片方、7:10 8:00にそのペアと言った風に時間を分けられたのだ。

アルファベット表記した名字のイニシャルが若い方が先と規定されて、「織斑」のOと「デュノア」のDで一夏が、「戸鉄」のTと「ボーデヴィツヒ」のBで俺が7:10からの組になった。五十音なら逆なのにな。

「…まあ、シャルルと飯の時間が被らない、っていうのは良かったかもしれないけど」

「海月、まだシャルルのこと怒ってるのか？」

「当然。父親が研究者だった身としては、人の努力の産物を小馬鹿にされることだけはどうしても許さん。しかも自分のために作ってもらったものだったらね まあ、誰だって馬の合わない人間の1

人ぐらいいるもんさ。一夏だってラウラは苦手だろ？」

「…まあ、そりゃな。初会話でいきなり攻撃されそうになったら、そりゃ警戒ぐらいするさ」

「だろ？俺はラウラと一夏が仲悪いのをどうにかしたいなと思ってるけど、そこら辺の拗れは本人が解決するしかない。…お、それ美味そうだな、もらいつ」

一夏が箸を止めてこちらの話を聞いているうちに、唐揚げ定食のメインである唐揚げを1個奪う。うん、カリッとした食感がいいな。

「あつ！だったら俺はその肉団子を貰うつ！」

「させるかつ！お前はこつちの漬物でも喰ってる！」

「漬物は俺の方にもあるんだよ！俺の唐揚げ分の肉団子を出せ…あつ！プチトマト奪いやがったな！」

「ふん、ガードが甘いぞ一夏。そんなだからいつも模擬戦でワンサイドゲームを喰らうんだ」

「ISは関係ないだろ！」

行儀が悪い？百も承知だ。いや、箸と箸でぶつけてないし何も零してないから、目を瞑ってて欲しい。

「ははは、肉団子奪ってやったぜ、ざまあ見る！」

「くつ…、懐に入って奪ってくるとはぬかった…」

このときの写真がいつの間にか撮影されて、お互いが顔を引いた時にタイミング良く撮られた写真が「織斑一夏×戸鉄海月、間接キス」なんていう題名で裏取引されたことなんて、もちろん俺と一夏は知るよしもない。

同室ペアが存在する（一夏とシャルルのほかにいるかは知らないが）ため、寝るときも部屋割りを1日だけ調整され一夏と同じ部屋になった。

が、しかし、野郎2人が別々のベッドで普通に寝るシーンなんか誰が得すると言うのか。

というか得も何も、普通に軽く話した後明日に備えて寝ようぜで終わったから、一部の腐ったような女子が妄想するような絡みは一切ない。残念ながら俺にはそういう趣味も無い。∴屋上で一夏にそういう気があるような発言を聞いたことがある気がするが、知ったことではない。

「君が戸鉄海月君ですね、私はイタリアの」

「邪魔です、どいてください」

今朝から何度同じ返事をしているだろうか。

代表候補生2人相手に大立ち回りを決めたのがまずかったのかもしれない、昨日まで一切自分には掛からなかった勧誘なり自社製品のモデルどうこうなりの話が10歩に1回の割合で歩行を邪魔してく

る。

「ああ！貴方が戸鉄さんですか！？わたくし新聞記者の」

「邪魔です、どいてください」

正確に言うと、これで確か14回目だったと思う。

ホームルームが終わった後、決勝開始までに1時間弱というやたら長い時間が空くのもこれが原因なのかもしれない。

「ああ、戸鉄さん、探しましたよ！覚えてますが、ドイツで」

「邪魔です、どいてくだ…へ？」

15、とカウントしそうになった所で、話しかけて来た女性の言葉と声を反芻してどうにか立ち止まる。

目の前にいたのは自分の初のIS戦闘の相手であり、実はラウラと同じ部隊だったっていう

「ハルフォーフさん？」

「そうです。あ、お義姉さんと呼んでいただいても構いませんよ？」

ラウラ曰く、部隊を実質纏め上げている芯の通った

「ああ、それともお嬢様とか。あ、でも、確かお嬢様と執事の関係だったら大抵執事はお嬢様より年上だから…」

芯の、通った

「そうですね。やっぱりお義姉さんとか姉御とか、そういう類でしょうか？しかし名前呼び合う仲間と言つのもやっぱり…」

芯、の、通つ、た、変な人だ。

「ええっと、ハルフォーフ…お義姉様、とりあえずラウラもいるピットの方に行きましょう」

ハルフォーフさん、と言おうとしたら凄く涙っぽい目で見ってくるのは、卑怯だと思う。

どうやらクラリツサさんが来ることはラウラには既に伝わっていたらしく、既にラウラはハルフォーフさんがピットに入るための申請をしていたらしい。

今は、軽く機体のチェックをしながらハルフォーフさんに話を聞いている。

「それで決勝を見届けるために、わざわざドイツから来ていただいたんですか？」

「はい、自国のIS操縦者が2人と残り、更に全ての試合において未だ全力を出していない、というのは結構凄いことなんですよ？」

今回の試合の映像は全てドイツの方、及びかなりの企業に届いているらしく、どうやらイグニッション・プラン（欧州における第三世代開発の競争みたいなものらしい）においても、実用化の点で英国に負けていた部分を実力面でリードし返しているらしい。

つまり、最低限ドイツの機体性能をアピールするっていうのは成功

したようだ。勿論アピールはあくまで最低限の目標であって、最大の目標は優勝だが。

「しかし 隊長、やはり3試合連続1人で試合を進めたのはまずかったのではないですか？少し機体にダメージが残っているようですが」

ここに来る経緯を説明し終わったハルフォーフさんは機体へと話を移す。

ラウラの機体『シユヴァルツェア・レーゲン』は、大きなダメージこそ負っていないもののやはり少し無理をした部分があったらしく、どうやら稼動時に少し反応が遅れる部分があったらしい。

俺の機体『シユヴァルツェア・ヴェレ』の方は特に問題が無いので、やはり毎試合の負担の差だろう。

「問題ない。あいつら程度ならば、機体へ負荷を掛ける暇すらなく試合を終わらせてやる」

「隊長なら大丈夫かとは思いますが、無理はしないで下さいね。戸鉄さんも、今までのような性能縛りなんてしなくていいですから本気で戦って下さい」

もしAIC5秒まで、ワイヤーブレード2本使用禁止、徹甲弾使用数制限なんて性能縛りをせずに最初から本気で対戦していたら、もしかしたらラウラの機体は現時点でも万全だったかもしれない。そう考えると、どうしても自分のせいでラウラが本気を出せないのではないか、と思ってしまう。

「面子に掛けて以前に、ラウラを落とさせはしませんよ。絶対優勝してきます」

「それでこそ女性を守る男性というものです、期待してますよ？
隊長のことも」

最後に付け加えられたラウラに聞こえない程度の一言は、確実に狙って言ったものだろう。

全く、これじゃ何があるうと負けられないじゃないか。確かに部隊を纏めるだけの力を持った、なるほど凄い人だと感心してしまうしかない。

そう、ラウラが動きにくいなら俺がその分もカバーすればいい。何せ俺とラウラはペアなんだから。

「…クラリツサ、そろそろ試合だ。頭の固いこの教師共からは残念ながら5分前までしか許可を頂戴できなかったので、すまないが退席を頼む」

「了解しました、健闘を祈ります」

ぴっ、と敬礼をすると、ハルフォーフさんはピットから出て行った。

「健闘を祈る、で負けてしまったら情けないな。我がドイツの知恵の結晶に搭乗しているんだ、勝ち以外は認めないぞ」

「了解、…それじゃあ、勝ってくる。ラウラも勝ってくれよ？」

「勿論だ。　そろそろアナウンスが入る、行くぞ」

そう言うラウラの顔には、クラリツサさんがいた時には見せなかった、それどころか今までで1回も見たことが無かった、軽い笑みが

浮かんでいた。

『第一学年決勝戦、織斑一夏ノシャルル・デュノアペア対戸鉄海月ノラウラ・ボーデヴィツヒペアの試合を開始します。各自準備をしてください』

35 決勝のいちっ！（後書き）

うちの小説のMVPってクラリッサさんじゃないだろうか…

36 決勝のつうつ！

『よお一夏、寝坊した頭は覚めたか？』

俺とラウラがピットゲートから飛翔したそれとほぼ同時に出てきた
一夏達に、オープン・チャネル開放回線で話しかける。

『軽くランニングして朝飯食べればすぐ覚めたよ。海月こそ、朝から声掛けられっぱなしで疲れたりしてないよな？』

『ああ、合計で22回ぐらい掛けられたけど全部無視したから問題ないよ』

どうでもいい話だが、途中ミューレイ社だったつけ、とかいう企業がやたらしつこく食い下がってきた時は笑顔で絶対に二度と貴方の会社の商品は使いませんと対応してやった。
あの時の女性の真つ青な顔は忘れられない。

『1日の朝だけで22回って…凄いやつだな。俺も一昨日ぐらいから声掛けられてるけど、多分ここ数日の全部合わせても25行くか行かないかぐらいだぜ』

『うげえ、少しぐらい自重して欲しいもんだぜ。…と、そろそろ時間だな』

普通に話していたように見える俺と一夏だが、実際は場のあまり良いたとは言えない雰囲気はどうにか普通にしようという会話だった。
何せ俺とシャルル、一夏とラウラは口を開けば大方言い争いになる。そしてシャルルとラウラの仲が良いというのものないから、平静を保

つたまま話せたのは俺と一夏だけなのだ。
そんな2人が口を噤めば、再び殺伐とした空気は戻ってくる。一触即発、最前線。

お互いが相手へ気迫を放ち、そして再び気迫で相手を押し返す。試合開始は10秒後だが、4人の中での試合は既に始まっている。

『なあ、一夏。試合をするにあたって1つ言っておくぜ』

5 / 4 / 3

『気が合うのか奇遇なのか知らないけど、俺も同じだ』

2 / 1

「悪いが、俺達が勝たせてもらう！」

試合は、被った声と大歓声とに包まれて幕を開けた。

正直に言ったら、この試合は海月とラウラに非常に有利な試合だ。理由は言わずともAIC、慣性停止能力。

機体を最悪の場合完全に止めてしまうこの能力は、1対1の状況だと発動に成功された瞬間に勝敗が決してしまう可能性もある。

2対2であるため片方が捉えられても相方が攻撃して気を逸らすことである程度制圧力を抑制できる、と昨日までは考えていたのだが、その昨日にAICが海月の機体にも同様に積まれていた、と分かった。

だから、仮に1対1掛ける2の状況でお互いがAICに絡め取られ

たら、同じく負けが確定してしまうのだ。

「 だけど、そうだから負けるなんてわけじゃない。片方がAICを防げればもう片方は助かる。」

そんな、誰が見ても不利な試合でも、シャルルは一切諦めずに打開策を打ち出してきた。

ある程度距離を取った行動を繰り返し、絶対に2人同時にAICには掛からない。言葉にすれば簡単だが、近接ブレードの《雪片式型》《しか装備が無い俺がAICを使っていない片方を避けながらAICを使っているもう片方まで近づく、というのは至難の業。

逆にシャルルは遠距離武装を装備している為、俺のAICを解除するのは俺よりある程度楽。

つまり、この策はシャルルが捕まる量を可能な限り減らすのが最善策となり、結果として俺の負担よりシャルルの負担が圧倒的に高くなる。

勿論、朝の1時間という少ない時間の中で、シャルルにばかり負担を掛けるこの策以外にも様々な策を考えた。

俺が1対2の近距離戦を仕掛け、シャルルは可能な限り逃げ回りAICキャンセルと遠距離のサポートに務める策。

多少のダメージを気にせず2人で早急に相手の片方を《零落白夜》で倒し、1対2にしてAICの脅威を薄める策。

しかし、今の俺の実力では、キーマンが俺になるそのどちらの策も成功確率はシャルルの策を下回ってしまった。

自分が弱いことがもどかしく、またそのせいで負担を掛けてしまうシャルルにも申し訳ない。

それに肩を落としたが、しかしそんな俺にシャルルは笑いながらこう言った。

『大丈夫、僕と一夏なら勝てるよ。一夏が頑張ってくれるから、僕だって頑張れるんだから』

それならば、負けられない。

自分が頼りにされているのに、その本人が肩を落としていては成功するものだって成功しない。

だから、この試合は負けはしない。さつきそう決めた。

『戸鉄、停止結界がうんともすんとも言わない、悪いが先程の作戦は破棄だ。それと少し機体反応が鈍い』

試合開始と共に、ラウラから個人秘匿通話が入ってくる。先程ハルフォーフさんに言われた「機体へのダメージ」が関係しているのであろう、「AICを同時発動する」という最初の目的が崩れてしまった。

『…大丈夫、うん。ラウラが一夏に負けなければ、シャルルにラウラの妨害をさせたりはしない』

多少動揺こそしたが、しかしそれを引き摺って試合を続けければ勝てるものも勝てなくなる。

さつき、ラウラに手が届かない部分は俺が引き受けると決心したばかりなのだ。

『ふん、ならば頼らせてもらおうぞ』

『了解っ！』

そしてラウラは一夏に近付き、俺はシャルルと一夏の間を裂く射撃をする。

ラウラが勝つと言ったのだから、それを疑うつもりはない。ラウラを信じて、ラウラを見ない。

一夏にだって、譲れないものはあるだろう。きっとシャルルにだって、譲れないものはある。

けどラウラだって、俺だって譲れないものがある。

だから、この試合は負けはしない。さっきそう決めた。

「悪いなシャルル、一夏とラウラの対戦に手出しはさせない」

両手に呼び出した《クロイゼルング》《フィー》でシャルルを誘導するように撃ち続ける。誘導目的の射撃なので簡単に回避されるが、しかし一夏とシャルルを引き離すことには成功したらしい。

しかも回避中にいきなりアサルトカノンを展開し、着実にダメージを与えてくるおまけ付き。

『サポートをしつかりしないと、一夏がAICに止められた時にどうしようも無いからね。出来ればそこをどいてくれると嬉しいんだけども』

そして武装を投げ捨て、シャルルは新たに両手にショットガンとマシンガンを高速形成、こちらを狙ってくる。…前自分でやっておいで何だが、相手に同時武装展開をされるとやはり対応が難しい。

「そいつは残念、悪いが倒れるまで退く気は無いな！」

両手に加えて、足にショットガンを呼び出す。セシリアの時にやって以来の3点射撃で、先程奪われたダメージを確実に奪い返してゆく。

AICで近距離戦における圧倒的優位を確保できる以上、遠距離戦でダメージ量が上回れば、後はある程度力押しが通用することが分かる。

射撃は的確に、正確に、確実にシールドを削っていかなければならない。

『じゃあ倒れてもらおうよ！』

「させるか！」

AICが届きそうで届かないギリギリの距離を保たれつつ、シャルルとの銃撃戦が幕開けした。

ラウラのプラズマ手刀＋ワイヤーブレードによる波状攻撃を避けながら、どうにか接近戦を維持し続ける。

ブレード以外の装備を持たない機体なので、離ればレールカノンの餌食。近接戦闘を一度やめてしまえばその瞬間こちらが不利になる。

「はああああっ！」

お互いが数十センチも離れていない零距离で、しかもシャルル

がAICに絡め取られたらすぐサポートに行かねばならず、それに加えて多角度からの攻撃で圧倒的に集中力が削がれていくこの状況を、しかしその集中力は途切れないような気を持ちながら耐え続け、粘り続ける。

(いける！意地でも耐えて、食らいついて、勝つ！)

2箇所での銃撃戦ガンファイトと近接戦インファイトは、どちらも簡単に終わりそうになかった。

「うーん、ボーデヴィツヒさん、昨日までと比べて動きが鈍くありませんか？」

教師以外立入禁止の観察室で、モニターに届く映像を眺めながら、真耶は少し疑問に思う。

「1対2の発動しにくい状況ならともかく、戸鉄君がデュノア君をうまく足止めしてる状況なのにAICも発動してませんし。何かあったんですかね？」

「おおかた昨日の準々決勝の時に被弾した部位が悪かったのだろう。しかし、その状態でも織斑に簡単に負けはしないな」

身内への辛辣な千冬のコメントに、思わず真耶は一夏を応援してしまふ。画面を見れば、確かに昨日まで存分に見れた一夏とシャルルの連携を海月とラウラは許していない。

「しかし、ボーデヴィツヒは昔と比べ少し戦い方が変わったな」

「え、そうなんですか？」

千冬は身内の話で弄られるのを避けるためか、ラウラへと話題を戻す。真耶には分からないが、教官としてドイツにいた千冬が言っているのだから多分間違いないだろう。

「ああ、あいつは強さと攻撃力を同一と思っている節があったが、それが感じられない。あいつにそんな影響を与えたのは」

女をたらしこむ弟がなのか、それとも同じチームで同じ国家の代表候補の戸鉄がなのか。それは千冬の知るところではないが、画面の向こうのラウラは、学園に来た当初とは違う雰囲気を纏っていた。

「まあ、1 + 1を2以上にする織斑とデュノアの戦い方が連携ならば、味方を信じて1を1以上にさせない戦い方もまた連携、ということだな」

ワアアアッ！

会場が一気に沸いた。1回戦でのファインプレーの歓声とは比較にならないそれは、観察室の天井を揺らしているかのようにさえ錯覚させるほどだった。

「戸鉄君、デュノアさんにAICを掛けることに成功したみたいですよ！ あ、今織斑君が零落白夜を出しましたね！」

「ほう、これは面白い状況になったな。…さて、我々も観戦するか」

そして話を止め、2人は再び画面へと集中を戻した。

37 決勝のとりわっ!

「捕らえたぜ、シャルル・デュノア」

開始より12分38秒、回避を続けながらの銃撃戦によって、俺とシャルルのシールドエネルギーは1/2程度まで減少していた。…しかし、それも余り関係の無い話である。シャルルの武器呼び出しの隙を突き、足のショットガンを無理矢理シャルルに蹴りつける。彼の展開速度は異常に早く隙を狙うのになり時間が掛かったが、そうだとでも見つけ出した隙でけりつけたそれはシャルルの一瞬の判断を奪うには充分だった。

現時点、シャルルはAICで完全に固定してある。綿密に張られた蜘蛛の糸の如く絡め取られたシャルルの機体は、既に武器を出す各位が一切動かない状態だった。

「悪いがこれでゲームセットだ、行くぜ」

カノンの照準をシャルルに合わせ、対IS装甲用特殊徹甲弾を準備する。体が動かない状態で目の前に武器を突きつけられるという恐怖はラウラと対戦した時に理解しているので、今のシャルルの多少引きつった顔が演技でないのも分かる。

対象、シャルル・デュノア。ロックオン完了。

「こいつがとどめの」

しかし、その言葉は言い終わる前にかき消された。…何故なら。

『うおおおおおおおっ!』

斜め後ろの地点で、ラウラ相手に零落白夜を発動する一夏の姿が、声が、俺を圧倒してきたからだ。

『ラウラ！避けられるか！？』

『最初の一太刀は問題ないが、先程から少し機体の処理速度が遅い。二太刀目以降は厳しいかもしれん』

個人間秘匿通話で聞いても、どうやらラウラの状況は良くない。しかし、ここでシャルルを倒してしまえば、A I Cに有効打を持たない一夏の機体と1対1、必然的に有利になる。ここでの最善の一手は、目の前で止まっているシャルルを倒すこと。それだけで試合に勝てる確率はハネ上がる。

特殊徹甲弾、発弾

「うおおおおおおおっ！」

体勢が崩れたラウラに向け、零落白夜を発動する。超接近状態を保つことさえ出来ればここでラウラを倒すことが可能だ。狙うは必殺、体勢を立て直す前に切りつける。

「当たるものか！」

回線を使わずともラウラの声が聞こえてくる。それほど近い距離にいた彼女は不安定な姿勢のまま高速で距離を離し、一太刀目を回避してきた。

しかしそれは勿論更に体勢を崩すことであり、重ねて瞬時加速をす

れば二の太刀は外さない。

エネルギーはまだ、残っている。

「こいつで、とどめだあああ！」

一瞬で、零落白夜がラウラへと高速で接近してゆく。距離は後1メートル。

ラウラはPICで体勢を整えようとするがもう間に合わない。後50センチ、27センチ、11センチ、3センチ…

しかし、その3センチから先に刃は届くことはなかった。何故なら急に横から来た射撃が、俺の体を壁へ吹き飛ばしたからだ。

「ぐっ!？」

何が起きたのか、理解するのに数瞬を要した。

自分の前に立っていたのは、…先程までシャルルと銃撃戦を繰り広げていた海月そのものだったのだから。

シャルルはどうなって　いや、考える前にシャルルは俺の隣まで飛んできていた。

「一夏！」

「シャルル！大丈夫なのか!？」

「うん、僕は大丈夫、それより一夏こそ平気？」

「今ので1/3ぐらいまで削られたけど…大丈夫、まだ戦える」

シャルルが平気ということは、海月は銃撃戦を無視してこちらへ来

たということだろう。
立ち上がり、再び雪片を構える。エネルギーがあまり残っていないため、零落白夜を次に出すのはそれこそ一撃必殺を狙う一太刀となる。

「いくぜ海月！」

『何故こちらへきた！？』

ラウラから秘匿通話で叱咤が飛んで来る。

俺は徹甲弾のロックオンを外し、ラウラへのトドメを防ぐために戻ってきていた。

あのまま俺がシャルルを倒せて、一夏がラウラを倒したという状況になっていれば、俺の方が有利だったのは確実。そんなことは分かっていた、と思う。

『そもそもAICで動きを止めた以上、勝ちのルートは見えていただろう！何故あのままの状況が続けなかったのだ！』

「何でだろうな」

しかし言葉ではその、理屈を無視した俺の行動の、デメリットに上回るメリットを説明することができなかった。
考えていたことはただただ単純に、

「守んなきゃ、って思ったから、かな」

ラウラが倒される所を見たくなかった。

その後に勝つことが出来ても、それはラウラのいない1対1の戦いでしかない。それが我慢できなかった、それだけ。

『なっ…』

「ああ、それだけだよ。別の作戦があるわけでも、ラウラがここで撃墜されて試合が劣勢に傾くわけでもない。でも、ラウラが落とされるのは嫌だ」

『それで体勢を整え直されたらどうするつもりだ!』

勿論、そんなところまで頭は回ってない。助けたからといって勝てる確信も算段も一切ない。

「さあどうしよう…まあ、ラウラがいるなら何とかなる」

『は?』

その声からすると訳が分からない、といった感想なのだろう。自分で言ってもなんだが、非常にアンチサイエンスでオカルチックな考えだと思う。

(1対1)×2を主眼とした試合から、ここで1+1対1+1のあちらのテリトリーに変わってしまったのだ。普通なら経験差で不利になるのは分かる。

「ラウラが倒れそうなら、俺が守る。攻撃が失敗するのなら、俺が補佐する。足が動かないなら、俺が運ぶ。何があるかと、俺はラウラを信用する。だから 俺を一度、信用してみてください」

吹き飛ばされた煙の中から一夏が起き上がり、シャルルと合流する。そろそろ悠長に話している時間はなさそうだ。

『お前を信じて、勝てる算段と見込みは？』

「算段は無い、見込みも分からないけど　勝ってみせる」

『ふん……いいだろう戸鉄、今だけ、その自信に乗ってやる』

「有難う、ラウラ。…さあ、勝つぞ！」

煙を払った先から、一夏が《雪片式型》を手に握り突撃してくる。後ろからシャルルの援護射撃が入り、A I Cの発動も難しい。

高速で近付いてくる一夏を避けても確実に攻撃が当たるため、右手に《リュフトフェン》と《1989・11》を同時展開し受け止める。

『ラウラ、現在の機体ダメージはいくつだ？』

『シールドエネルギーは残り1/2と少し、ワイヤーブレードが1本切られているのと、さっきお前が見たとおり多少の装甲破壊はあるが軽度だ。A I Cと機体の処理速度が遅いのは変わらずといった所だな』

『近接用の武器は生きてるんだな、それだったら先にシャルル方面に集中してA I C軸に単対多戦を仕掛ける！』

ラウラにシャルルと俺の対角線上へ待機してもらい、一夏にA I Cを掛ける。一夏のA I Cを解除するためにシャルルは嫌でもこちらへの攻撃をする必要があるから、確実にラウラとの戦闘に　きた！

「一夏、悪いが少し飛んでもらうぜ！」

ワイヤーブレードを足に巻きつけ、一夏を右側へと投げ飛ばす。勿論その先にはラウラとシャルルの戦闘が展開されている。

『くっ！』

壁へと衝突した一夏が呻き声を出す。その一夏を追うことはせずシャルルへ直線的に進む。

流石に機体性能が鈍っている状態のラウラを、装甲がはがれているとは言え臨機応変な戦闘の得意なシャルルと戦わせ続けるわけにはいかない。

「いけえええええ！」

右手にはプラズマの刃を残したままで、シャルルへと切りかかる。こちらを振り向いた時には最早遅い。刃はシャルルに届く前に、右側からの射撃が身体を大きく左にぶれさせる…射撃？
咄嗟に横を確認すると、一夏がアサルトライフルを俺に向けていた。

『さっきのお返しはさせてもらったぜ、海月』

「何で射撃武器がまさか、さっきシャルルが投げ捨てたライフル！」

俺がグラウンドを走ったあの日、射撃練習でシャルルが一夏に使用許諾した武器。確かに一夏が持っていたのはそれと同じものだった。シャルルに距離を離され、入れ替わるように再度一夏が近接してくる。

「おおおおおっ!」

瞬時、一夏に向かってワイヤーブレードが横から伸びる。反応が間に合わなかった俺のものではなく、それはラウラのものだった。

『悪いが、出し惜しみはしない…!』

ラウラを見ると、その瞳に着けられていたいつもの眼帯が無い。代わりにそこには、金色に光る瞳があった。

「ラウラ、それ…」

『説明は後だ、それより戦闘を続ける!』

ワイヤーに絡め取られた一夏にレールカノンの照準を合わせる。当たれば即死のそれを、装甲が薄い部位を狙って放つ。

『させないよ』

一夏を締める2本のワイヤーを、再度近接したシャルルが切り離す。その隙に左手に《フィー》を呼び出し撃ちながら詰め寄るが、シャルルのシールドに防がれて当たらない。

「どいてくれないと一夏を攻撃できないんだけど、どいてくれる気は無いか?」

『さっきどいてって言うてもどいてくれなかったのに、ちょっと図々しいんじゃないの?』

一夏へとブレードを振り下ろすが、こちらも間に割り込んだシャルルに止められる。連携戦においての2人のコンビネーションは、なるほど練習の甲斐もありかなりのものだ。しかし、それなら別手段をとるまで。何も、2人組はシャルルと一夏だけじゃない。

『織斑一夏、貴様は私が叩く!』

ラウラが瞬時加速にて一夏へと近付く。逃げてしまつてはシャルルを単対多状況に追い込んでしまう状況なので、一夏は逃げずにブレードをラウラへと向けた。

「どいてくれないなら…別の向きから狙うまでだ!」

シャルルの間に合わない速度、つまり瞬時加速で3次元方向へと移動する。これならばシャルルがついてこれないので、確実に一夏を射撃できる…はずだった。

『狙わせない!』

シャルルは、その俺の移動へびつたりくつついてきていた。つまり瞬時加速である。

「い…瞬時加速!?!」

シャルルがそれを使えるというデータは聞いた記憶が無い。そんな馬鹿な、まさか

『データに無いのは当然だよ、なにせ今、初めてやってみたから』

「んなアホな…！」

俺だって結構早く覚えたが、それでも一応覚えるのに結構時間がかかる技術の1つのはずだぞ、これ。

「けど、一夏から距離を取ってくれたのなら…！」

近接をブラフにAICを連続作動させる。見えない位置からのエネルギー波をシャルルは必死でかわしながら射撃してくるが、しかしそれもこちらのシールドを1/3残した所で終わった。しかし、連続でAICを繰り返したためかなり雑なイメージとなった。細かく止めても、この状態では攻撃ができない。

「ラウラ、一度シャルルを頼む！」

『了解した』

一夏との近接戦をいなし、ラウラがシャルルへと近付いてゆく。絡め取られたシャルルには、それを守る術は無い。

『くっ…！』

ラウラのプラズマ手刀がシャルルの装甲を切り刻む。反撃の余地を与えず、半分未満だったシャルルのシールドエネルギーは急速に減ってゆく。

その間にイメージの線を確認たるものとし、どうにか武器を使えるところまで整えなおした。

「悪いなシャルル、これでゲームセットだ！」

右手に持っていたプラズマブレードを振り下ろし　シャルルのシールドエネルギーは、底を尽きた。

『届けえええええええ！』

その刹那に、背後から一夏が《雪片式型》で突撃…いや、ただの《雪片式型》の突撃ではない。

これは、零落白夜を発動させている！

殆ど不意打ちに近いそれは、AICを発動する暇も無く俺へと近づく。

ここで使わなければ駄目というギリギリのタイミング。一撃必殺を狙った、対戦相手ながらに賞賛に値する攻撃だった。

そもそも二度も一夏に隙を見せてしまったのが失敗だったかもしれない。シャルルを標的にしすぎて多少配分を間違えた。

そこで俺のシールドエネルギーは尽き、今度こそラウラと一夏の騎打ちに。

…ならなかった。

それは明るい暗いの判断できない、そもそも定義すらあるのか定かではない、そういう場所。

「……………」

生きてきた時間の中で、それは意味が無いものだと思っていた。ただただ深く暗い闇を見続け、漠然と自分はそのまま闇の中で終わる

ものだと考えていた。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。

前までは、教官　織斑千冬に呼ばれるときだけ、それは意味を形成した。

他と呼び方は一切違いが無いように思えるそれだけが、自分の闇を照らすもので、ゆえに教官は自分にとっての存在理由。

自分の姿をそれと重ね合わせるように生き、言わば自分のラウラ・ボーデヴィツヒたる部分は全て教官が埋め尽くしているような状態。自分の理想たる姿は織斑千冬であり、それを除いてしまえば残るのはただの人形。

それが自分だと、だからお前が惚れている相手は他人を映したただの木偶だと、真っ向から彼　戸鉄海月を否定した。

それで終わると思っていた。失望し、自分という物を追うのを諦めてくれると。

だがしかし、そんな考えは一瞬で瓦解した。真っ向からの否定を、更に真っ向から、それも根本の自分から覆されてしまった。

本人は本人以外の何者でもない、自分が好いているのは人を映しているのではない、『ラウラ・ボーデヴィツヒ』なのだ、と。

不意に、自分の世界が暖かくなった気がした。

憧れとは違い、高揚感はない。しかし、彼の言葉には、鼓動には、心のどこかをちくりと刺激する、そういう感情が籠っていた。

何かは分からない感情が心をちくちくと突付き出すと、刺激は高鳴

りとなつて心を攻め立てる。
自分を認めてくれた時も、自分をペアに誘つてくれた時も、自分を
守ると言つてくれた時も。

その言葉が他人に向けられていると、刺激は少し嫌な感情へと変わる。

思えば、彼が食堂に女と一緒に来た時も。

思えば、彼が他の女子と楽しそうに会話していた時も。

何故か沸き起こった感情を消すために、ついつい彼へと当たつてしまふ。

今更になつて気付いてしまった。なんだ、私は 気付いてしまえば単純だった。

なんてことは無い、転校初日にして自分は既に彼に恋していた、それだけのこと。

心を刺激する言葉は、今までに感じた事の無い嬉しさを理解できなかっただけで。

他人に彼の目が向けられていた時の嫌な感情は、ただの嫉妬だった。自分を包み込む暖かさを受け入れたい。外向けの皮を全て剥がした1人の人間としての感情しか、そこには無かった。だから

「海月。悪いが、これでおあいこだ」

刀の迫る彼の肩を押し、その彼がいた場所に自分が就く。

そう、彼が自分を守るといふのなら、自分だって彼を守りたい。勝ち負けなんかどうでもいい、それだけで今の自分が動く理由には充分だった。

ラウラが止まる。一夏の零落白夜を受け、先程のシャルル以上のスピードでシールド残量は減少し、あっという間に0になった。

「…ラウラ、何で…？」

『さあ何故だろうな…まあ、海月がいるなら何とかなる』

先程の自分と同じ単語を選出して、ラウラは軽く笑った。

『一方的に守らせるものか、お前が私を守ると言っなら、私にも守らせる。何、私が望むというのに、海月は試合を放棄するのか？』

はっとして後ろを見ると、一夏は再び残り少ないエネルギーを使ってこちらへと来ていた。

それはAICを使えば止められるであろう、集中力もギリギリの直線的な攻撃だったが、何故か、そんな一手で止めてはいけないものに見える。

右手には、未だプラズマブレードが残っている。

最後の一騎打ちとは、確かに決勝を飾るには相応しいかもしれない。

「これで、これが、最後の一撃だっ！」

お互いの刃が相手へと振り下ろされる。

シールドエネルギーは俺の方が多いが、攻撃力はあちらが圧倒的に上。どちらのシールドが先に消えるか、自分の刃は相手のシールドを削りきれぬのか。

賭けと言われても仕方が無いが、その賭けに不満は無い。

急速にシールドエネルギーが減ってゆくのが見える。感覚でしかないが、左の肩に当たっているブレードは腕をねじ切ってしまうそうだ。

試合が終わるまでの数瞬が、まさに永遠のように思えた。

そして 決着は付いた。

『織斑一夏、戸鉄海月、両者シールド残量0を確認。勝者 お、織斑先生!?!』

『勝者はまだ出ていない。現在割り出しているから少し待っている』
アナウンスから自分達の担任の音が響く。
とりあえずその声は、戦いで疲弊した精神を安堵させるには充分のものだった。

「織斑先生! コンマ2桁でも同時という結果が出ました、これ以上は…」

「ならコンマ3桁までスローだ、多少時間を使っても構わん」

この試合を勝者なしなどという野暮な結果で終わらせてなるものか、

と、千冬は多少強引に真耶に解析をさせていた。

「駄目です、3桁でも同じです！ああ、もう！」

「なら少し多めに、2桁ずつ飛ばして調べるんだ」

ピロロ、と機械の計算音が何度も響く。その結果は、5桁、7桁と数値を伸ばしてゆく。

「9桁もアウト…11桁も…あつ！11ケタ目、差があります！結果解析、終了しました！」

言われて千冬は両者の数値を見る。その数値の差は3。大きいように見えるが、実際は1秒の100億分の3秒であり、結果はまさに神のみぞ知る世界といった所だ。

「ではアナウンスをこちらから入れる。あ、あー…織斑！戸鉄！結果が出たぞ」

観客からの室内さえ揺らす声は今では聞こえない。誰もが固唾を呑む、といった状況だった。

「試合開始を0秒とし、織斑一夏の撃墜までの時間は3分17秒10583902743、対して戸鉄海月の撃墜までの時間は」

37 決勝のとりわっ！(後書き)

焦らします(キッ)

38 全てを溶かす微笑みで

『以上が学年別トーナメントの結果となりました。なお、明日より平常授業となります』

テレビから学園行事告知用帯は消えず、そのままの表示でバラエティ番組が始まる。どうやら告知は何度かループ再生を繰り返すらしい。

食事時間にはまだ早く生徒があまりいないためか、いつもはテレビ近くにポジショニングしないと聞こえにくい出演者の会話が今日はよく聞こえる。

「2、3年は俺らより早く終わったよな。ああごめん、ちょっとその醤油取ってくれ」

「そうだな、別に昨日試合で良かった気がするよな。ほれ」

「僕も海月もある程度長期戦の方が得意だったし、伸びちゃうのは仕方ないよ。一夏、僕も七味をお願いしていいかな？」

「俺は零落白夜があるから短期決戦の方が得意だったんだけどな。はいよ、七味。…調味料の傍に座ったのが失敗だったか」

真剣勝負とはやはり腹が減るものなのだ。しかもその後自分達の試合が終わってもすぐに観客席に移ることはできず、試合終了後の動きや機体チェック。そしてそれを聞かされていると結局「もうすぐ表彰式だから」と控え室の緊張した空気の中で待たされる。

これがまた神経をすり減らしていく上に、勿論その後の表彰式も結構緊張するのだから、肉体的にヘトヘトな上精神的にグダグダな状

態が出来上がる。
そのうえ

「いやあ、迫り来る女子の大群を誘導して逃がしながら来るのは骨が折れたね、ホント。ああいう時に自由にISを展開できたら楽なだけでな」

「本当、びっくりしたよね。目が怖かったよ…」

そう。今いる男子3人は、このやっと話題の中心から離れていったという時期にトーナメント優勝したことで、再び話題の中心に返り咲いてしまったのだ。

表彰式を終えて廊下に出ると右側に女子、左側に女子。天井にまでまさかの女子。一夏とシャルルも同じような状況に会ったらしい。大和撫子なんて既に存在しないのかもしれない。

「さあ、女子が再び来る前にさっさと食べ終わるぞ」

「おう……ん？おい海月」

「ん、何だよ」

一夏が目で合図してくるその視線の先、分かりやすく言えば食堂の入口を見ると、そこには女子が4人ほどいた。先程振り切れなかった大群の面々ではなく良く見る顔ぶれ、…右から篤さん、セシリア、鈴ちゃん、そして少し離れてラウラ。ラウラ以外の3人は少し息を荒げている。

「はあっ、はあっ……まさか本当に、食堂にいるとは…」

「ほら、あたしが言ったとおりでしょ。昨日も腹減ったとか言いながら食堂に来てたから、きっとそうだと思ったわよ。一夏!」

「お、おう何だ?」

いきなり大声になった鈴ちゃんに一夏は少したじろぐ。

「決勝、その…格好良…や、やっぱ篤、あたしより先に言いなよ」

「わ、私か?しかしだな…」

鈴ちゃんが惜しい所まで行った。今、格好良かったって言おうとして照れた。さっきの大声の勢いで続けて言ってしまういいのに。そして俺にアイアンクローを…へ?何故アイアンクローが俺に飛んで来るんだ?

「いや、凄く恥ずかしいことを考えられてた気がしたから、止めておこうかなって」

「何で頭の中で考えてることが分かるんだよ、痛い痛い、ギブギブ」

「…なんとなく」

なんとなくで超常能力を片付けられないで欲しい。後、頭がメキメキって言ってる。メキメキって。

「? とりあえず皆座ろうぜ。ここまで来たってことは話があるんだろ?」

…さっきの鈴ちゃんの眩きは一夏の耳に入ってないらしい。…こいつは恋愛沙汰の話だけ体内器官全てを以って除外するんだろつか？一夏の身体を研究するなら、そこん所も調べてもらえるよう頼まないとな。

そういえば今言ったフリーパスだが、なんと表彰式の時「優勝したペアがいる組への副賞」というサプライズで手に入った。クラス代表戦がお流れになっちゃったからもう手に入らないと思っていただけ、ここで手に入ったのは非常に嬉しいところである。

「え、ええそうですわね、話があるなら立ったままより座って落ちて着いたほうがいいですものね」

「う、うむそうだな。私も座らせてもらおうとしよう」

「い、一夏が座ろうって言うなら座ろうじゃないの」

各自が少し照れながら席へと着く。ちなみに話した順番は一番最初がセシリアで、その後が篤さん、鈴ちゃん。…ラウラは相変わらず立ったままだったので、食べていた豚骨ラーメンを置いて迎えに行く。

「ラウラ、来ないの？」

「いや、私は別に…」

何やら少しもじもじしている。トイレに行きたいのか…なんて一夏みたいな鈍感な考えを持つつもりは毛頭ない。あくまで予想だが、多分これは何か後ろめたいことがある時の行動だ。

「その、海月。私は少し話があっただけで…」

「あー…っと、もしかしてあつちでラーメン食いながら聞くような話じゃない、ってこと?」

「そついうわけでもないんだが…」

何だろう、こんなに緊張している素振りのラウラは初めて見た気がする。いつもの凜とした格好良いラウラもいいけど、こついう恥じらうラウラも可愛くて…いやいや、それより話の内容の方が重要だろ、今は多分。

「気持ちの整理がつかなくて話せないのならいいよ。夜の織斑先生に体罰を喰らう時間以外だったら、いつでも話は聞くからさ」

「いや、えつと…そのっ!あの、だな…私の左目を見たとき、どう感じた?」

ラウラはとうとう決心したかのように話した。左目?…ああ、左目か。そついえば今の今まで忘れていたけど、眼帯の奥にある金色の瞳について、説明は後と言われて以降一度も聞いていなかった。

「びっくりした」

「そついうことではなくて、だな」

「そう、言われてもな…別に目の色が違つたらウラじゃないわけでもないし」

何故色が変わつたかは知らない。瞳を晒したとき「出し惜しみはない」って言つてたから多分あまり使用できない一種の強化改造、

もしくはその名残みたいなものなんだろうが、言いたくないことであればわざわざ掘り下げる必要も無いだろう。

「変では…なかったのか？」

「だから、びつくりはしたけどその程度だよ。それとも何、その瞳は見たものを全て溶かすわけのわからない異能でも持ってるのか？」

「ふ、ふふっ…何だその発想は。しかし、そうか…別に変ではないか。ふふふ…」

口に手をあて、笑いを堪えながら突っ込まれた。笑いを堪える仕草がまた可愛くて、ついつい意識してしまうのを制御するために目を横に逸らす。

横ではさきほどのバラエティ番組が映ったテレビの中で笑いが起きていた。まさか、こっちも俺の発言で　　ないな。

「海月、ラーメン伸びちまうぞ！」

「あつ、忘れてた！…ラウラ、もう1回聞けど、一緒に喰わないか？」

「しかし、私はあいつらには悪印象を持たれているぞ」

そういればこれも今の今まで忘れていたけど、一応ラウラと一夏及びその関係者（一夏関係者、鈴が命名）は屋上の辺りから仲違いをしていたんだっけ。

「うーん、多分だけど一夏達は気にしないんじゃないかな。特に一夏なんて、どこぞの熱血漫画の主人公みたいに『拳を合わせたら仲

間』みたいな発想してる奴だし。　　あ、また頬を引つ叩こうとしたりするなよ？」

多分、一夏に女子が落とされていくのはその、人を引き込む引力みたいなものがあるからなのだろう。それ以外にも「自然体で女を口説き落とす話し方」とか「イケメン」とか色々理由はあるだろうが、最大の理由はこの一点で決まりだ。

知らず知らずのうちにシャルルと違和感なく同席して飯喰ってた俺が言っただから間違いはない。

「何を言っているんだ、海月。現時点、私があいつを叩く理由なんて無いぞ。そもそも当初の目的である『織斑一夏を倒す』という目的は達成したのだし、何より」

私は、ラウラ・ボーデヴィツヒだからな。

そう言いながら俺の前をすたすたと歩いていくラウラの顔に、学園に來た当初の暗い影なんてもうすっかり見えなくなっていた。

『決勝撃墜時間3分17秒10583902746。1年優勝、戸鉄海月/ラウラ・ボーデヴィツヒペア』

38 全てを溶かす微笑みで（後書き）

次回は学校が始まったときのあの
焦らします（チラッチラッ

39 だけと変わっては行けるから(前書き)

タイトルはおっしゃるとおりフルバOPから取ってたり…

39 だけど変わっては行けるから

「そうそうー夏」

再び席につき、少し伸びてしまった豚骨ラーメンを啜ったところで、
1つ思い出したことがあった。

「ん？何だ？」

「鈴ちゃんが買い物に付き合ってくれとさっき言ってたぜ、と」
途端に鈴ちゃんがブツと吹き出す。何も口の中に入れていなかった
から、前にいたセシリアに被害はなかったらしい。

「ちょ、ちょっと！？いきなり何言ってるのよ！」

「いきなり言わないと鈴ちゃん止めるじゃん」

実際の所、昨日は散々止められたしな。大体、一夏と一緒にいる時
に毎回突撃してくるのにいつ買い物のお話を切り出せって言うんだ。
本人の目の前以外ないじゃないか、それだと。

「別に買い物に付き合うくらい構わないぞ？そう言えば箒も付き合
ってとかなんとか言ってたような…」

急に話を振られておたおたする箒さん。一夏の話から想像するに、
多分箒さんの言った「付き合って」は「(恋愛的な意味で)付き合
って」なのだと思う。

「い、いや私はだな…まあ、付き合わせて欲しいと言うのなら付き合
わせてやらんこともないが」

「ああ、こういうのは大人数で行ったほうが楽しいからな。そっち
の4人は？」

4人と言うとラウラ、俺、セシリア、シャルルのことだろう。…俺
はパスかな、わざわざお邪魔虫が介入する必要も無い。

「わたくしは行かせていただきますわ！」

「僕は…ちょっと、考えておくよ」

「残念だが私は興味ないな」

「俺もパス、買いたい物も特にないし」

分かると思うが、真っ先に食いついたのがやはりセシリアでそれ以
下シャルル、ラウラ、俺の順番。

シャルルはやはり、男だから遠慮をしているのだろうか。それにし
ては、何となく行きたいのを我慢している風な言い草だった、あく
まで俺の主観だが。

「じゃあ、今の所確定は俺と鈴と篝とセシリアだな。7月の臨海学
校前の休日辺りでいいか？」

「ええ、あたしも買いたい物があるしね」

「うむ、忘れるなよ」

ほら、恥ずかしがってないでちゃんと面と向かって伝えれば結構どうにかなるんだぞ？分かったら篤さんセシリア鈴ちゃんは今度からもう少し積極的にアタックをだな…これ以上考えると、何故か読心術を使われそうなので控えておく。

「あ、やっと見つめましたよ織斑君とデュノア君、それに海月君も。決勝戦、お疲れ様でした」

「山田先生じゃないですか、何か用事ですか？」

「そうなんですよ、良い報せと更に良い報せがあります。3人はどちらから聞きたいですか？」

右手人差し指中指を立てて山田先生は聞いてくる。こういう時はどちらから聞けばいいのだろうか。多分、良い報せからの更に良い報せ、と聞くほうが盛り上がりがるだろう。

「普通の良い報せからお願いします」

「では良い報せからですね！…こほん、海月さんは明日より、やっと個室になります！」

うーん、シャルルと一夏が同室なのに俺は個室とは、何やらかなりの良待遇じゃないだろうか。もしかして、今日の戦闘でとうとう俺も日本政府から重要人物認定されるようになったか？

しかし、別に今のままでそこまで不自由はしてないんだけどな。転寝さんとはきちん連絡しあってるから、一夏みたいなラッキースケベも一度も無かったし。

「それで、更に良い報せは？3人を探してたつてことは男子共通の

「報せですよね」

「はいっ！何と何と、今日から男子の大浴場使用が解禁されます！」
うーん（二度目）、別に俺はシャワーで充分だし、さっきの報せより更に良い、って感じはしない。

一夏は大喜びで山田先生の腕をぶんぶん振るっているから、そちらとしては凄く嬉しいことなんだろう。そしてその天然の動きが山田先生を赤面させていることなんて、勿論知らないのだろう。

「と、ともかくですね。3人とも早速お風呂にどうぞ。多分汗も掻かれてるでしょうし、今から使用してもらっても一切問題ないですから！」

「ありがとうございます！それじゃあ早速着替えを　あ」

さっきまで非常に喜んでいた一夏が、急に何かを思い出したかのような素振りを見せ、そしてシャルルの方を向く。
何だろう、シャルルの身体にあまり人に見せられない傷でもあるんだろうか？

「え、えーと」

「どうかしましたか？ほらほら、私は鍵を持って大浴場の前で待ってますから、3人とも早く着替えを持って来てくださいね」

何やら困っている一夏とシャルルを尻目に、山田先生はてくてくと歩いて行ってしまった。

…俺はシャワーで良いんだけど、流石に待たせて行かないって言うのはひんしゆくものだよなあ。

「うーん、まあ、ちゃっちゃと行くか。一夏、また後で」

やはり未だアイコンタクトでシャルルと立ちすくんでいる一夏にそう言い、食堂を出て行った。

「あ、やっと来ましたね戸鉄君！2人とも、もう来てますよ？」

15分後、「多分湯船に浸かっていれば、何か身体に傷とかがあっても隠せるんじゃないだろうか」と結論付け、浴場前まで来た。山田先生に見送られながら脱衣室のドアを開ける。

…閉める。幻覚を見たのだろうか？

「戸鉄君、どうかしましたか？」

「いえ、ちょっと立ちくらみました。多分大丈夫だと思います」
開ける。

…閉める。

「？ 戸鉄君、さっきからどうしたんですか？2回も連続で立ちくらみは流石に変ですし」

「いや、やっぱり立ちくらみってことは水分とかが足りてないんじゃないかなと思って、一旦戻って水分補給してこようかと」

何やら不思議そうな顔をする山田先生にくるりと背を向け、自室へと戻っていく。

言えない。

一夏とシャルルの2人しか通していないはずの浴場更衣室のドアを開けたら、そこに服を脱いだ後の金髪の子がいたなんて言えるわけがない。

しかもその姿がシャルルそっくりだったとさえ言えば…後はもう、大体予想は付くだろう。

さつきはこういう事情であたふたしてたのか。

多分、一夏は既に知っていたんだろう。3人とも早速、と言われた上に浴場前で待っているとわれ、入らないわけにもいかず困っていたんだな。

成程。初対面の時女と間違えたあれも間違いではなく、一夏がシャルルと真っ先にペアを組んだのもそれが原因　と。

いや待て。確かさつき彼、もとい彼女は　何で、裸になってたんだ？

俺がいつ来るか分からない以上、せめて服を着て待機しているのが普通のはず。しかし彼女は裸。一夏は姿が見えなかったから、多分風呂に入っていた。ええつと、つまり　まさか、一夏と一緒に風呂に入るうとしていた、とか？

いやまさかな。一応紳士（今となっては淑女）のキャラが定着するぐらいの人間だったし、まさか。…うーん、一夏が相手ならありえる。

駄目だな、俺の頭で考えるとパンクしそうだ。さつさとシャワーだけ浴びて寝てしまおう。

大浴場前で待っているかもしれない山田先生に1回だけ合掌をして、部屋に戻ってシャワーを浴びる。

まだ8時にもなっていないが、考えることが多くて頭が疲れたし問題はないだろう。…おやすみなさい。

翌日。朝のホームルームにはシャルルの姿がなかった。

朝は気まずくていつもより30分前に喰ったので知らないが、同室の一夏は教室にいたから起きていないというわけでもないだろう。

「み、みなさん、おはようございます……」

教室に入ってきた山田先生はどことなくやつれている。何やら顔に絶望を塗りたくって憂鬱を振り掛けたような表情と、まるで老人のような歩き方が純粹に恐怖を煽る。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。いえ、転校生と言ってもクラス人数は増えないというか、入れ替わりではないけど入れ替わりといえますか、その……」

転校生。ミーハーな令嬢たちはその部分に反応し、ざわめきが途端に大きくなる。こんなタイミングで転校とは、一体どんな人なのだろうか。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

ん？何かこの声って、つい最近聞いたことがある気がするような

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

ぺこっ、と今までと違う女子用制服を着たシャルル…じゃなくてシャルロットが一礼する。クラス一動のざわめきがぴたりと収まり、殆どがお返しかの如くぺこっ、と礼を返す。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした、ということですよ。はああ……昨日、やっと海月さんの個室を作るために部屋割りを組み替えたばかりなのに……」

なるほど、山田先生は単純に仕事が増えたから落ち込んでいたのだな。

「え？デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、織斑君、同室だから知らないってことは」

「ちょっと待って！確か昨日は男子全員大浴場を使ったって話を聞いたと思うんだけど！？」

「待て待て待て！俺は少し具合が悪くなったから入ってないぞ！」

止まったざわめきが再び騒然とする。ちなみに最後の弁解は勿論俺である。

しかしまあ、一夏の弁解はしていないから当然のように

バゴーン！ 器物損害罪なんて知らないと言ったスピードで教室の扉がはじけ飛ぶ。

「一夏あつー！！」

隣クラスから颯爽…とはいえないカツカとした空気で鈴ちゃんが登場。まるで虎が牙を剥いたかのような形相だ。

「死ねー！！」

IS『甲龍』を展開し、速攻で衝撃砲を一夏に放つ。

やばいだろこれは。咄嗟に『ヴェレ』を展開し、AICで止めなければ危ない所だった。本当に。

「鈴ちゃん、それ校則違反……っでもしかしてこの場合、俺もか？」

「ふん、本人たちの事情などそちらに任せておけばいいのだ」

ISを解除した所で、鈴ちゃんの後ろのドア だった場所 か
らラウラがスタスタと近付いてくる。

「いや、流石に目の前で友人に死なれたら んむっ！？」

一瞬、いやそれより早いかもしれない、刹那。

スタスタ歩いてきたラウラが急に歩みを速めたかと思うと その
ままいきなり自分の唇を、俺の唇に当ててきた。

「！…っ！？っ！、！？！」

あまりの急激な自体に対応が出来ていない。唇に唇を当てられた以

降の感覚が、未だ脳に届かなかった。

「み、海月。クラリツサ曰く日本では『気に入った相手を嫁にする』と聞いた。私よりお前の方が先だったのだから…私がお前の嫁、ということになる、な」

何を吹き込んでるんだクラリツサさんは。そしてラウラモラウラで、恥ずかしさで顔を背けるぐらいなら最初から…いや、やっぱりキスされたのは素直に嬉し…いや、俺今キスされた、んだよ、な。

一瞬で頭がショートした。バチツという音が本当に頭の中で聞こえた気がする。

「…というわけだ。悪いが織斑一夏、後の攻撃回避は自分で行え」

それ以降の教室の爆音と悲鳴、あと歓声は耳に入らなかった。いや、正確にはその日見たこと聞いたこと、全てが頭に入らなかったと言ったほうが正しい。

とりあえず覚えてるのはラウラと移動が大体一緒だったことと、ラウラが何故か男子更衣室にまでついてきたことと、昼食もラウラと食べたことと、

…あと、ラウラ以外についても言うておくのであれば、そんな感じでもラウラのことばかり頭で考えすぎて織斑先生に合計13回出席簿を振り下ろされたこと、だろうか。

40 ドラクエ形式

もぞもぞもぞもぞ。

「ふぁ……」

最近早起きが多いせいか、どうやら11時に寝ても5時には目覚める体になってしまった。

この健全な歳でギリギリまで寝ないということは、歳を取ったらもっと早起きになってしまうのだろうかと一抹の不安を覚える。

しかし、最近早起きというのにも理由があるのだ。それは

ガチャツ。

「はい、おはようラウラ」

「む……、もう起きていたのか」

この、毎朝扉の鍵をピッキングして侵入してくるラウラである。クラス対抗代表戦が終わった直後、正確には土曜日から、ラウラは毎日のように部屋に勝手に入ってくる。

そして、俺が寝ていたらそのベッドに潜り込む。∴その、なんて言えばいいか∴ソフトに言うと、お召し物を一切着用せず。オブラートに包まないで言うと全裸で（但し、眼帯と待機状態のISだけは勿論つけているが、それぞれ左目と足なので殆ど身体を隠せていない）。

最初は夜のうちに部屋に侵入しそのまま潜り込んでいたようだが、夜に部屋を抜け出した所を織斑先生に見つかって大変なことになっ

てからは、ある程度自由行動ができる朝に行動時間を変更したのだとか。

そのおかげで俺もこのように対策を取れるようになったのだ。ちなみに、最初にラウラが隣で寝てた時は超速で頬を抓った上でラウラが本物が確認した上で20分ほど無言の悶絶をした上でゆっくりと起こした。あれが土曜日で、一夏が起きるのが少し遅かったのは本当に助かった。

「ラウラ、何度も言ってるがハルフォーフさんの『朝同じベッドでおにいちちゃん朝だよと言いなながら起こすのが身長差カップルの鉄則』というのは嘘だぞ、それに『将来結ばれる者同士の設定は同じベッドで眠る』というのも嘘だ」

そう、戦闘訓練ばかりで今まであまり恋愛的感情を持たなかったラウラは、自分はどうすれば良いのかと自分の信頼しているハルフォーフさんに聞いたらしいのだ。

そのハルフォーフさんが、ラウラにこのような知識を吹き込んだわけである。今度、正しい知識を教えてあげないといけない。

「しかし、目は覚めるのではないか？」

「…寝惚けてたら抱き枕かなんかと間違えて、思い切り抱いてもう一眠りするかもしれないぞ」

それで目を覚まして、抱き枕だと思って抱いてたのがラウラだったと想像してみよう。多分、三度寝ることになるだろう。気絶っていう方面で。

「っ…！み、海月は結構大胆なのだな」

失礼かもしれないが、一糸纏わぬ姿で布団に潜り込んでこようとす
るラウラにだけは言われたくない。頬を染め上げて可愛げにぼつり
と呟いても、俺は騙されないぞ。ラウラは凄く大胆だ。そして可愛
い。

関係の無い本音が混じったって？はは、何を言っているんだ。相手
を褒める発言は心の中で留めておかないと薄っぺらくなるって昔誰
かに聞いたぞ。

しかしなんだ、今日は何もすることがない。いつもは一旦ラウラを
部屋まで送り届けた後自分（と一夏）の部屋で小説を読みながら一
夏を起こすのに丁度良い時間まで待つのだが、実は持って来ていた
小説は昨日までに読破してしまったのだ。

食堂は…5時じゃまだ、閉まってた気がする。さてさて、何をしよ
うか。

（とりあえずラウラをいつも通り部屋まで送って…いや、思いつい
たぞ！）

「ラウラ」

「なんだ？」

「ちょっと、楽しいことしないか？」

「そつそつ、上手いよ、そっ！」

「こゝこづか…？ふんっ…！」

ラウラの身体から汗が跳ねる。

「いい、凄くいいよ。次はこれを持って」

「なっ…思ったより、大きいな」

差し出されたそれを、ラウラは白い小さな手で掴む。片手ではどこか不安に思う部分があるらしく、両手でしっかりと握ったようだ。

「じゃあ、いくよ」

「う、うむ、頼むぞ」

そして俺は 両腕が塞がっているラウラの代わりに、溶いた卵をフライパンに注いだ。

朝早いため食堂は開いていないにしても、下準備や仕込みなどから自分で行いたい本格派の生徒がいるためだったり、少し時間の掛かる料理を作る生徒がいるためだったりで、生徒用のキッチンは問題なく使用できた。

時間は余っているのだし、それならと言うことで、今はラウラと一緒に朝食の弁当を作っている。

「成程、これが料理か。確かに面白いな」

ラウラは飲み込みが早い。前にセシリアと篝さんの2人の料理を軽く教えたことがあったが、その2人と比べても言った内容をきちんとこなす時点で差は歴然だ。あの2人は自分流で勝手にアレンジして散々失敗するからな。

「うんうん、更に自分が作った料理を他人に食べてもらって、美味

しいって言ってもらえたら更に楽しくなるよ」

どこかのシェフも言っていたが、料理というのは人に楽しんでもらえてなんぼだそうで、これに俺は全面的に賛成である。作るのも楽しいが、その反応を見るのが更に楽しみで、結果としてどんどん料理作りに嵌りこんでいく。

そして料理を覚えた人がまた別の人に料理を教える。素晴らしい無限ループだと思う。

しかしそれにしても、小さな身体で汗を流しながら料理をするラウラには何か愛しいものを感じる。

料理の変化を細かく見極める為に眼帯を外しているのは、流石にやりすぎだと思うが。

「焼けたようだぞ、次は何をすればいい」

「おっけー。じゃあ、次は…」

これで料理に熱中しすぎたのが原因で一夏を起こし忘れたため、何故か寝坊したシャルロットと2人して一夏は遅刻しそうになるのだが、それはまた別の話。

「それで、何でお前らはこっさり付いて来てるんだ？」

ぎくぎくぎくつ！と背後から音が聞こえた気がした。

折角弁当を作ったのだし、昼休みは逢瀬を　とは言ってもラウラとは最早クラスを飛び越え学年で公認のような仲だが　楽しもう

と屋上へ行ったのだが、物陰に黒金黒金の合計4色の髪の毛が見えたのだ。

黒金黒金だぜ、黒金黒金。この配色なんて篝さん、セシリア、鈴ちゃん、シャルロットの4人以外誰がいるというんだ。実際は半分ぐらいの生徒は外国人なわけだから別かもしれないが、少なくともここまで尾行してくるのは多分この4人だけだ。

「ここに4人がいるってことは、現状一夏はフリーだぜ。そっちに行ったらほうがいいと思うんだが…」

「「「あつ!」「」」

何だろう、まさか仲睦まじい姿に自分と一夏を当てはめて妄想でもしていたというのだろうか。前半の黒金黒は慌ててそそくさと逃げて行き、結果として最後の金…シャルロットだけが残った。

「シャルロットは行かないのか?」

「うん。最初から話があったから　大丈夫、すぐ終わるよ」

どうやら、先ほどのメンバーの中でシャルロットだけは単純についてきたわけではないらしい。…とは言え、わざわざ隠れて尾行していたということはやはり少しは他3人と同じようなことも考えていたのだろうか。

「その…前まで、僕は海月のことを勘違いしてた」

「勘違い?」

「1つのことに熱くなると、周りが見えなくなっちゃう人だって思

「つてたんだ」

「…大体間違いないぞ、それ。」

「ラウラが2回目にベッドに侵入してきた時は後ろを確認せず飛び退いて…結果一夏と頭をぶつけたし、ラウラにキスされた日なんて一日中織斑先生の出席簿以外が頭に入らなかったしな。」

「けど、対戦の時の洞察力とか日常の観察力とか、よくよく見てみたらちゃんと周りのことも考えて行動してる人だった。だから、えつと　ゴメン」

「シャルロットの口から、喧嘩の後初めて謝罪の言葉を聞いた。「ドイツの機体を馬鹿にしたこと」に関しての謝罪とは違うが、多分これを1つの区切りにしてるんだと思う。」

「そっぴいえば、大会決勝後の女子からの大逃亡辺りから同席しても不快は感じなくなったものの、結局面と向かって話すことは今まで一度も無かった。」

「…シャルロットが怒ってたのは、俺が人のことを考えずに行動する人間だと思ってたから、ってことか？」

「うん、だから」

「だとすると、俺は勘違いされてた上にまだ機体を馬鹿にされた事に関して謝罪は貰ってないってことになるのかな？」

「！　それは」

「いや正直言うと俺はそこまで怒りが持続するタイプでもないし、何より対戦でシャルロットに勝ったこと自体が「自分達の機体は決し

て弱くない」と証明してくれたと思ってるから特に怒る要因は無いのだが、こつやつて弄るネタができたのなら話は別だ。

「あー、理不尽に怒られた上に俺の主張の方はまだ解決してないのか。ちえっー。なんか釈然としないなー。うーん」

わざとらしく間延びした声で言っているのだがシャルロットはどんな小小さくなっていく。あれ、ちよつと虐めすぎたか。

「…おい海月、本当に怒っているのか？」

「やだなあー、怒ってるに決まってるじゃないかラウラー。うーん。そうだなー、シャルロットが1つお願いを聞いてくれたら、怒らなくてもないかなー」

お願い、に少し力を込めて言うとシャルロットはびくっと身体を小さく跳ねさせる。多分、全面的に悪いと頭の中で構図が出来ているから、結構不安なのだろう。

「お願いって…何を、するの？」

「そうだな、それじゃあ…今度一夏と臨海学校のための買い物に行くとき、水着の試着室に一夏を連れ込んでその反応を教え　何、やだなあ、一夏を弄るネタさえ出来ればいいんだよ」

横からラウラの強烈な視線を感じたので、慌てて弁解をした。別に俺がいちやつくわけじゃないんだからこのぐらいのジョークは許して欲しい…駄目か？駄目か。うん。

しかし、そんなラウラとは対照的にシャルロットはやたらと乗り気みたいだ。

「本当にそれでいいの？」

「え？シャルロットが恥ずかしくないならそれで構わないけど…結構冗談で言ったんだが、本当にやるつもり？」

「勿論！言われなくても、他の3人よりリードするためにそのぐら
いやろうかなって思ってたぐらいだしね」

先生、ここに不純な生徒がいます。早急に正しい男女交際について教育をお願いします…人前で思い切りキスした俺が言えたことでもないが。

「それじゃあ、成功したら結果を教えてね。というわけで今から弁当食べるから」

「あ、うん。失礼するよ。2人とも楽しくね！」

そして、シャルロットは先ほどの3人組と同じようにそそくさと逃げていった。

「さて、ラウラ」

「なんだ」

「冗談が過ぎました、ごめんなさい。ご飯を食べましょう」

こういうのを恐妻家って言うのだろうか。正しくは恐彼女家？語呂が悪いな。

「そういえばラウラは、臨海学校の準備は大丈夫なの？」

「生活用品一式はある。水着も適当に学校指定のもので問題は」

…土曜日に、予定が入りました。

「夏とは別行動で行くことにしよう。」

40 ドラクエ形式(後書き)

このサイトでは横書きなので、普通より改行を大きくしているのですが、
読みにくい、という方はいらっしゃるでしょうか？
少し意見が聞きたいです。

4 1 極東の猿、進化（前書き）

改行は問題なさそうなので、このままで行こうと思います。

41 極東の猿、進化

「うん、気持ちよく晴れたな」

週末の日曜。空は綺麗に晴れ渡り、自然と気持ちもすっきりとしたものになる。

臨海学校に向けてラウラの水着その他諸々を買うため、近くで一番大きなショッピングモール『レゾナンス』に来ている。

うちの市の中心地である駅と直結しているこのショッピングモールは、その『中心地』という称号に恥じないだけの品揃えを誇っている。俺が読んでいた本も大体はここにある本屋で買っているし、学用品が足りなくてもここでオーケー。更には「ちよつと外食がしたいな」なんて時もここに来れば大体の料理は食べられる。他にあってここに無いものを探して調べるだけでも小学生の自由研究には充分なほどだ。

「しかし海月、別に私は学園指定の水着で良かったのだが」

「甘い！甘いぞラウラ！」

急に大声を出したせいで、ラウラはびくつと体を跳ねさせる。

「ハルフォーフさんに、ファッションについて聞いたことはあるか？」

「い、いや無いが」

「一度個人間秘匿通話で聞いてみよう！今すぐ、さん、はい！」

少なくとも、俺が今ここで水着の重要さを語っても回りからは変人にしか見られないだろう。

更に、女性のファッション云々に関しては、俺に聞くより女性から聞いたほうがより詳しい意見を得られるのも事実。

というわけで、時差的に多分日付が変わるか変わらないかぐらいの時間のハルフォーフさんには申し訳ないが、力説は彼女にお願いしたいと思う。

…で、ISを展開せず集中を始めるラウラを見て、初めてISを展開しなくても通話が出来ることを知った俺は啞然としたわけだ。どうでもいい。

同時刻、ドイツ国内軍施設。現在クラリツサー同 『シユヴァルツエア・ハーゼ』は、今さっき訓練を終わらせた所だった。

先ほどまで隊員に檄を飛ばしていた隊の副隊長であるクラリツサー・ハルフォーフ大尉は、ちょうど私服を着込んでいる最中に個人間秘匿通話が届いて驚く。

「 受諾。クラリツサー・ハルフォーフ大尉です」

『 あ、ええっと…わ、私だ』

個人間秘匿通話の相手は軍所属のため本来は名前と階級の確認が必須なのだが、聞こえてくる声はどこか浮ついたものだったので疑問を抱いた。

何か軍事的問題が発生した可能性を考え、周りにいた隊員に緊急召集を伝える。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長、どうされたのですか？」

『い、いや……。別にそんなに、重要な案件でもないのだが……』

渡された紙に筆談で【緊急警戒解除】と伝えたと、周りの張り詰めた空気は一瞬で無くなる。

「では、何故通信を？」

『いや、じ、実は臨海学校の時に着る水着のことなのだが』

「……はい？」

重要案件でないにせよ上司からの話なので真剣な態度を崩さなかったクラリツサは、しかし隊長から案件を聞いた瞬間に声の調子を変えてしまった。

『そ、それがだな。私としては学校指定のもので良いと思ったのだが』

「何を言っているんですか！」

『なっ！?』

「IS学園の指定水着は機動性重視のスクール水着でしたね。確かにそれも悪くはない。むしろ一部の男子にとっては理想のものである可能性さえあります。しかし」

『し、しかし……?』

恐る恐る、といった具合でラウラは聞き返す。

「色物の域を出ない！」

『なっ………！』

「そもそも、隊長が最も水着姿を見せたい相手は戸鉄さんですね。彼が一部マニア、もしくは普通のスクール水着をあがめるような人間に見えますか、見えないでしょう。であれば、彼が思わず気絶するぐらいのものを選ぶべきです！」

『な、なるほど………しかし、どうすればいいのだ？』

手元の紙に【対戸鉄海月用、隊長の水着を考えるべし】と記入すると、隊員たちがざわめきだす。

「まだ片思いの相手を振り向かせるための水着と違い、1人を振り向かせるための水着であれば彼自身に嗜好を聞くのが一番早いでしょう。しかし、これにも問題はあります」

『問題？』

クラリッサの頭の中に、昔見た漫画の知識が浮かび上がってくる。今再び、ラウラに間違った認識が埋め込まれようとしていた。

「どのような水着を着用するのかばれていたら、『こんな姿、初めて見せるんだからね…』という日本における伝家の宝刀のインパクトが薄まってしまいます！つまり、戸鉄さんに聞くのは嗜好まで、後は自分ひとりで着る水着を選ばねばなりません」

『な、成程…クラリッサ』

「なんでしよう？」

『きよ、協力してくれないか…？』

クラリッサの瞳が燦々と輝く。筆談で状況を詳しく説明したためか、隊員のざわめきもピークに達していた。

「了解しました、海月さんの好みさえ聞いていただければ、今すぐに隊員全員で最高のものを考えます」

『そ、そうか！分かった、では海月に聞いてからもう一度連絡するぞ！』

そしてラウラとクラリッサの通話は切れた。

「どうだった、ラウラ？」

どうやら通話が終わったのだろう、目を開けたラウラに会話の内容を聞いてみた。

「……海月」

「何？」

「海月は、どのような水着が好きなのだ？」

クラリツサさんは、ラウラを見事に洗脳　もとい説得してくれたらしい。
頬を染めて俺の好みを聞いてくる姿は、思わず抱きしめそうになった。

言ってしまうえばラウラが着たかった水着でいい、というのが本音なのだが、それを言うのはただの丸投げだ。というか、最悪「ラウラが着たいやつで」と「私が着たいのは、海月が好みのものだ」で会話がループしかねない。

「……そ、そうだな。色は青とか黒とかで、うーん……多少、派手なのがいいかな？」

「青か黒で派手なものだな、では今から探してくる！」

「へ？あ、ちよつとラウラ！？おーい……」

好みを言った途端にラウラは、途轍もないスピードで走り去ってしまった。

俺：何しに来たんだろう？

呆然と立ち尽くしていると、個人間秘匿通話に通話が入る。相手は

「何で、一夏たちと場所も日時も被ってるんだ？」

通信の相手は一夏だった。

なんでも、水着売り場で右往左往しているラウラを見つけたので、一人でラウラが来るとは思えないから俺もいるのだろうと掛けてきたらしい。

そういえば、確かに予定はこの土日のどちらかだったし、買い物をするならこのモールが一番効率的だろう。だが、しかし

「それでも、ラウラが買いに行った水着屋がたまたま一夏達と被るなんてなあ…予想外だ」

結果、昼飯時まで本屋で時間を潰した後にはラウラを捕らえた（捕らえた？）一夏一行と合流し、昼食を食べるためにレストラン街へと来る段取りとなった。

今は見つけた面白そうな小説を3冊ほど買って、まだ11時だが待ち合わせ場所に向かっていた。早く着きすぎたら買った小説を読めばいいのだ。

……しかし、俺が予定を立てるとどうにもうまく行かないようだ。というのも

ドンツ！と、後ろからいきなり誰かが衝突してきたのである。

「いったあー…、ちょっとアンタ、どこ見て歩いてんのよ」

どこ見て走っているんだ、と俺が言うのが正しいはずなのだが、後ろから聞こえてきたのは女の声だった。なにぶん女尊男卑な時代で、この前のドイツからの帰りに起きたときと状況が違うため強引に出れない。

何せ、女性が適当に「こいつ痴漢です」とでも言えばその瞬間に証拠不十分でも警備員に連れて行かれるぐらい、現在の男性の立場は

驚くのも無理は無いと思う。だって目の前の人、全然太ってない上に美人の類に入る容姿なんだもん。何であんな突き出た腹がこんな短期間で引っ込むの？何で清楚なショートヘアとかになっただけ？女性ってこわい。

「あの時はよくも、散々コケにしてくれたわね……今なら、私が警備員を呼べばアンタは勝手に犯罪者よ」

しかし、体のほうは絞れても頭はユルユルのままだったらしい。そういうトラブルに、男の身で対処してないと思ってるのだろうか。

「いや、知り合いと待ち合わせてるから呼ばれる前に失礼する。ちなみに待ってるのもう1人の男性IS操縦者、IS開発者の妹、イギリス代表候補生、中国代表候補生、フランス代表候補生、ドイツ代表候補生な。問題を起こせばこの全部を敵に回すことになっちゃうけど」

この間は特権を振りかざすように感じるのが嫌でIS学園を盾には使わなかったが、時間を間に合わせないといけない今回は別だ。非常に申し訳ないが個人情報ギリギリまで使わせてもらおう。

「更に言うと、この会話は最初のほうから録音してあるから、即刻で冤罪とバレル。更に更に言うと、俺の現在の」

「ああ、もういいわよ！アンタに手を出したら危ないってのは前のことで嫌というほど理解したんだから！」

およ？やけに聞き分けが良くなった。頭はユルユルといったが、ユルの数を1つぐらい減らしてもいいんじゃないだろうか。

トラブルが発生する心配が無いのなら、俺も安心して待ち合わせ場所に行ける。

「じゃあ、俺はこれで」

「あ、ちょちょちょ、ちょっと待ちなさいよ！」

勿論待たない。

「その後散々引き止められて、最終的にIS学園に来年入学するって高らかに宣言されたよ」

「何だ、それなら個人間秘匿通話で私を呼べばよかっただろう」

レストランで先程の話をしたら、非常に怒った顔でラウラが返してきた。

「いや待て、ラウラを呼んだら軍を動かすとかしそうな気がして……」

「動かすに決まっている、私の階級はしょ」

その後の会話？俺とラウラの会話に圧倒されて、一夏一行は非常に空気でした。

4 1 極東の猿、進化（後書き）

知り合いに「転生ものとか最強ものとか書かないの？」と聞かれましたが、

僕は「圧倒的に強すぎるキャラクター」で作品に深みを出せるほど文章がうまくないので当分書く気はありません。

どうやってチートキャラに魅力を付ければいいのか、誰か教えてください（笑）

42 若者よ、遊べ(前書き)

眠いから前書きとかは明日にまたやります

42 若者よ、遊べ

「海っ！見え」

「やかましい……」

「悪い、ちょっと静かにしてくれ……」

トンネルを抜け、晴れやかになるかと思われた女子達は突然の重苦しい声にその歡喜を沈める。

声の発生源は学園に2人しかいない男子、更に言えば前半はそのうち短髪で既に彼女持ちの方 戸鉄海月、後半は短髪とはいえど海月よりは長い髪を持つ彼女持ちでないほう 織斑一夏だった。

「ふ、ふたりとも……？やけに、ローテンションだけど、どうしたの？」

「……吐きそう、うっぷ」

多少爺臭い一夏はともかく、騒ぐことが好きな海月が周りを牽制するので何かと思えば、不機嫌なわけでもなく いや、これも一種の不機嫌には入るかもしれないが 顔を蒼白にしていただけだった。もつと簡潔に言えば車酔いを起こしているだけだった。

ちなみに彼らの席は最後尾で窓際に一夏、その隣に海月、更にその隣がラウラ・ボーデヴィツヒとなっている。

(いつもはこんなに酔わないはずなのに……視線がきつい……)

視線とは何かと言えば、主に篠ノ乃箒しののほむぎ、セシリア・オルコット、シ

ヤルロツト・デュノアの3人からの軽い憎悪の眼である。つい昨日のこと、「一夏の隣の席を手に入れるジャンケン」を数十分に渡つて3人が行つていたことを知らずに、一夏が海月に「海月、明日バスの席隣同士にしようぜ」と持ちかけ、同じくじゃんけんを知らなかった海月も3人がまだ声を掛けていなかったことを少し不思議に思いつつも了承してしまったことがこれの原因なのだが、勿論そんな事情を知らない2人にとってその視線はただの理不尽な怒りだった。

その重圧をどうにか退けようと男2人が会話を始めようと思つたところで彼らの敵となつたのは、なんとラウラであった。

今まで軍勤めで娯楽的なイベントに参加した経験が殆どなかったラウラは、その興奮のせいで昨夜ほほ眠ることができず、結果としてバスの中で眠つてしまったのだ。……海月の肩に、ちよこんと頭を乗せて。女子特有の甘い香りもおまけとばかりに漂わせて、だ。生殺しとはこのような状況を示すに違いない、と海月が思つたのも無理はない。

最終的に一夏と海月には「重圧を避けることも重圧から気を逸らすこともできない」という状況に陥り、平常時に車に乗っていた時なら起こらなかつたであろう強烈な車酔いへと誘われることとなつたわけである。

その過程は知らずとも、結果として見える男子達の惨状を目にした女子達は、とうとう目的地に到着するまで騒ぐことは無かつた。

千冬が、騒がしくなかつたおかげで空気を引き締める作業が減り、ほんの少し喜んでいたとは余談である。

「それでは、ここが今日から3日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「」「」よろしくおねがいしまーす」「」

「」「よ、よろしくおねがい……しま、す……」「」

織斑先生の言葉に続けて、学年生徒全員で挨拶をする。遅れながら挨拶をしたのは俺と一夏で、正直に言くと俺は未だに少し吐き気が残っている。

「はい、こちらこそ。今年の1年生も元気があってよろしいですね」

この「今年の1年生」というのは、勿論車酔いでふらふらになっている俺と一夏は除くのだろう。旅館の柱に手を付いて、もう片方の手で頭を抑えている人間が元気なわけがない。釈明だがいつももう少し元気なんだぞ、俺も一夏も。

「あら、こちらが噂の……?」

今にも倒れそうな俺達を見て、女将さんが織斑先生にそう尋ねる。

「ええ、まあ。部屋分けも浴場分けもこいつらのせいで難しくしてしまっただのに、当の本人達がだらしなくて申し訳ありません」

「いえいえ、今までも車酔いでフラフラになる生徒は沢山いましたが、大抵そういう子はいつもはっきりした子でしたから」

「きつとこいつらが初めての例外ですよ。ほら、挨拶をしろ」

ぐいっと頭を押さえられる。うええ、胃から朝食が逆流してきそっ
だ。

「お、織斑一夏です。よろしく願います」

「戸鉄、海月です…。よろしく願います……」

「うふふ、気分が悪くなったらすぐ申し付けてくださいね。清洲景
子です」

女将さんはこちらを気遣ってくれた上で丁寧にお辞儀をする。久々に「大人の対応」というものを見た気がする、これで安心して吐けるぞ…って誰が吐くか馬鹿。

「全く、男なら車酔いぐらいすぐ回復させる。風邪だから敵が手加減をしてくれるのなんて、小学生の運動会までだ」

いえ、そう言いますけどね織斑先生。敵が手加減してくれないのは分かりますが、その分味方は気遣ってくれるものじゃないかと思っ
んですよ。

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に聞いて
くださいまし」

生徒一同がはいと返事をして旅館へと入ってゆく。荷物はやはり各自が部屋に持っていくらしく、男の着替えが女より少なくて済むことに初めて明確に感謝した。

ちなみに自由時間はこの初日だけなので、早く回復しないとどんど

ん遊ぶ時間が削られてゆく。唸れ俺の精神、気合で車酔い直れ。おええ、明確に車酔いとか意識した方が更に気分悪くなってくるじゃないか。

「さて、男子だけ部屋割が特別だ、ついてこい」

そしてそんな俺達の体調も気にせずつかつかと歩き出してしまふ織斑先生。次回から鬼斑先生と呼んでもバチは当たらないんじゃないだろうか？

とにかく、俺と一夏は口を抑えながら織斑先生に慌ててついていくしか無かった。

「織斑、戸鉄。お前の部屋はここだ」

用意されていたのは女子達の部屋とは少し離れた2人部屋。中は結構広めで、設備もかなり充実しているようだ。ホテルで上質な部屋はスイートルームと言うが、和風な旅館では何て言ったっけ。一等部屋とか二等部屋とかでいいのか？

とにかく、朝の日差しが何も邪魔をせず入ってくる良い間取りにせよ個室となつている風呂場や洗面所にせよ、大部屋を使っている女子生徒達に申し訳なく感じてしまふ程度の部屋なのは確かだ。

しかも壁一面が窓で、うまくすれば夜に抜け出すこともできるんじゃないだろうか。

「ああ、女子が就寝時間を無視して押しかけてくるだろうことが予想されるので、適当にあしらうように。もししつこいようであれば隣の教員用部屋に私がいるから呼べ」

……早速だが前言撤回。

隣部屋に織斑先生がいるということは、簡単に言えば「俺達から夜に外に出ることは確実に不可能」ということである。ああさらば、深夜密会。

「予定は見ているだろうから知っていると思うが、今日1日は自由時間だ。さつさと酔いを直さないと、楽しむものも楽しめなくなるぞ?」

そう言って織斑先生は出て行った。……と同時に、俺と一夏は一緒に床に寝転んだ。

「俺、あんなにバスで酔ったのは初めてだよ……」

「俺もだぜ、まだ吐き気が消えないってどういことだよ……」

かくして、俺たちIS学園の1年生徒による臨海学校は始まったわけである。

始まって早々、30分もの間床に寝転がりっぱなしだった校外学習は、人生の中で初めてのことだった。

45分後。やっと吐き気がおさまった俺達は、水着とタオルを持って更衣室へ向かっていた。向かっていたのだが……。

「……………」

「……………」

「……………」

現状、途中で合流した篝さん含め合計3人で立ち止まって沈黙している。

理由は　そう、道端に生えていたウサギの耳だ。こんな場所にウサギが埋まっているはずもなく……というか、そもそも形状が普通のウサギの耳ではなく、いわゆるコスプレとかで見かける『ウサミミ』の類。

俺にはこれが何なのかさっぱりだが、一夏と篝さんはそれぞれ神妙な顔をしていたので、多分これが何か分かっているんだろう。

しかしウサミミに張り紙で『引つ張ってください』なんて表記をする人間なんて、変人以外いるだろうか。いないだろう、普通に考えて。

つまり、一夏と篝さんがこれの正体を知っているのなら、彼らにはかなり変人がいる、というわけだ。

「なあ、これって」

「知らん。私に訊くな。関係ない」

一夏の問いかけが終わる前に篝さんは即否定。自分から心当たりがあると説明しているようなものだ。しかし　一夏も「やっぱり」みたいな顔をしているのに、俺だけは未だに話の内容がつかめない。

「えーと……抜くぞ?」

「好きにしる。私には関係ない」

そして篝さんは1人ですたすたと歩いて行ってしまった。さて、結局俺はどうすればいいんだろう。……一夏が抜くみたいだから、そ

れを見ていればいいか。

すぽっ。

「のわっ!?!」

下にウサミミカチューシャをつけている人間でもいると思ったのだから、一夏は思い切り力を入れてウサミミを引っ張り、そして余った力を制御できずに後ろへずっこける。

…しかし、その瞬間に俺は一夏から別のものへと興味を移していた。何にかと言うと……空から微かに聞こえた、不可解な音にだ。キィィィン……という音を立てながら、こちらに向かってきているらしい。…やばい!

咄嗟にISを展開し、空にマシンガンをセットする。しかし　その俺の現状を見ても、一夏はISを展開しなかった。

「おい一夏!上空からアンノウンの飛行物体が来ている!何故攻撃態勢に映らない!?!」

しかし、一夏の発言は俺を驚かせ、ISの展開を解除させるのに充分だった。というのも……

「いや、それは多分……篠ノ乃東博士、つまりISの生みの親だ」

と、そういつわけである。

43 おあずけっ！

「というわけで、狙撃の方はできれば……っておい、海月！？なんで歩いていくんだ！」

え。

「研究者には軽度の変人と重度の変人しかない、これは常識だよ
一夏」

「う……」

変人と会うと分かっているのにわざわざ避けない理由なんて、どこにもないだろう？

一夏が言い返せない所を見ると、あながち間違いではないらしいし。

ドカーーーーーーン！

後ろで何か落ちたらしいが、というかさっきの一夏の口ぶりから言えば確実に篠ノ乃束博士の乗ってきた飛行物体なのだろうが、

やっぱり、空からいきなり何かに乗って地面に級落下なんてことをするような人間に常識人はいない、あながちどころか完璧な変人だと確信する以外、俺は何も感じなかった。

さーて、ラウラはもう海に行ってるかなあ、なんていうよくわからない現実逃避を口走りながらそそくさと逃亡したわけだが、許してくれると嬉しい。

「あつはつはつ！引つかかったね、いつくん！」

落ちてきた機械的なにんじんの中から出てきたのは、やはりと言うか規格外ガール、いや、俺より年上なのだから規格外レディか？篠ノ乃東さんだった。……こんなスピードで落ちてきて誰かに怪我させたらどうするんだ、この人。

「それに篝ちゃん あれ？さっきまでここに、篝ちゃんがいないか
つたかい？」

「篝なら、海に早く行きたかったのかあっちの方へ」

流石にウサミミを見た瞬間機嫌を悪くして とは言えず、言葉を濁しながら篝の歩いていった方向を指す。とほぼ同時に、俺のもう片方の手からウサミミをひったくり、束さんは自身の頭に装着していた。

一応この人、千冬姉と同じ年…のはずなんだが、一挙一動がどうも子供染みていてそうだとは思えない。それでいて、知識だけは子供の時から周りの大人を圧倒していたんだからたちが悪い。

「まあ大丈夫、この私が開発した篝ちゃん探知機ですぐ見つかるよ。
じゃあねいつくん。また後でね！」

結局、一度も俺の話最後まで聞かずに束さんは走り去ってしまった。来ていたのはコスプレのようなワンピースで、どうしても機動性重視な服装とは思えないのだが、そうとは思えない速さだった。

「あ、あの一夏さん？今の方は一体……」

「あ、いたのか」

ぽかーんと東さんの走り去った方向を向いていた俺は、不意に背後から聞こえたセシリアの問いかけにようやく意識を取り戻す。見れば、セシリアもどうやら何がなんだか分からないという表情を浮かべている。多分、東さんが落ちてきた辺りから既に見ていたのだろう。

「今のが東さん。篝の姉さんだよ」

「え……？ええええっ！？あの、現時点各国で指名手配されているIS開発者の！？」

「ああ、その篠ノ乃東さんで間違いないよ」

そういえば、この臨海学校は部外者参加不可を徹底する特性上、生徒の到着前からかなり入念に周囲のチェックが行われたらしい。旅館の方々はさきほどのウサミミに気付かなかったのだろうか、それとも東さんがチェックの隙を掻い潜って設置したのだろうか。後者の方が確実に難しいのは明らかだが、「東さんだったら後者だろう」と言ってしまうのは何故だか納得できてしまう。

「……ふう、仕方ない、とりあえずセシリア、一緒に海行こうぜ」

「え、ええ、わたくしも海へ行くところですね。そこですね、一夏さん」

「ラウラ、いないな……」

更衣室で3分もしない着替えを終わらせ海に来た俺だが、ルームで眩暈 吐き気 大天国を陰気に満喫していた時間があるから既に来ているだろうと思っただろうか、箒さんもセシリアもシャルロットも見当たらない。

鈴ちゃんは一夏を今か今かと待ち構えていたので気配と位置予想である程度早く見つけたけど、特に俺より先に歩いていったはずの箒さんとかいないのは明らかにおかしいだろ。それとも、女子の着替えって水着でもそんなに掛かるもんなのか？

「あ、戸鉄君だ！」

「どうかな、水着、変じゃない？」

「一夏君と一緒に部屋なんだよね？どこなの？」

周りを見渡していると、どうやら人を見つめる立場からいつの間にか見つけられる立場に変わっていたらしい。数人の女子が一斉を浴びせてくる。その行動力を日々の授業に生かしてほしいものである。

「はいはい、一列に並んで1人ずつどうぞー」

俺が冗談交じりにそう言っただけで、女子は軍隊のごとく一瞬で一列へと変わった。その団結力を以下同文。

「1番、転寝麗！止まっている部屋はどこですか！？」

一番先頭にいたのは水着姿の転寝さんだった。目立った特徴こそ無いが、言い換えれば非常に均整の取れたボディバランスだと思う。口さえ開かなければ男も沢山寄って来る……男はあいにく俺と一夏しかないわけだけだ。

「織斑先生の隣の部屋」

その事実を聞いただけで、女子一同は事前に打ち合わせでもしていたかのように肩を落とした。

織斑先生の危惧した内容どおり、深夜にでも突撃して来る予定だったことがバレバレの反応に思わず笑ってしまう。

「2番、相川 あ、ボーデヴィツヒさん！」

2番の相川さん 出席番号では1番だが が指差した方向を一瞬で振り向くと、そこには可憐な水着姿のラウラが……いなかった。あれ？

ゆっくりと元の方向に視線を戻すと、女子一同は先ほどの落胆から復帰し、俺を見てくすくすと笑って……ああ、成程。騙された。

「相川さん、IS訓練でもし同じ班になったら、よろしくね……？」

ニコリと笑うと、くすくす笑っていた原因の人物はビクツ、と肩を震わせる。何が怖いんだろう。俺は単純に微笑みかけたただぞ？

女子と会話していると、俺の方に来たのと同じぐらいの女子が入り口に駆け寄っていった。つまりこれが示すところは、一夏の登場である。どうやらセシリアと一緒に来たらしい。

せっかくだからラウラが見つかるまで一夏と水泳勝負でも……と声を掛ける前に、「い、ち、か~~~~っ！」と一夏の背後へと、まさしく水を得た魚のように鈴ちゃん飛び掛っていった。

準備運動をしていた一夏の背を軽々と駆け上り、いつの間にか鈴ちゃんは一夏に肩車される形になっている。

「ああ…、あそこは俺が邪魔しちや悪いか」

思えば、篤さんとシャルロットという2人が砂浜にいない今、セシリアと鈴ちゃんにとってはそれぞれ最大のライバルがいないも同然。そこに俺が割って入っていくのは野暮というものだろう。

「仕方ない、適当に日陰で、ラウラを待つとしよう」

さつきまで一夏との水泳勝負を考えていた頭は、一瞬にしてラウラの水着がどんなものかの妄想、もとい想像をする頭へと変わっていた。

「しかしラウラはその後1時間に渡って来ないと思ったらシャルロット曰く『ラウラは恥ずかしくて更衣室から出て来れない』とかで俺はずっと日陰で無駄な時間を過ごしたというわけですッ！その間にお昼時になってしまったわけですッ！」

「海月！？いきなり誰に向かって説明してるの！？」

セシリアみたいなオイル塗りとか、鈴ちゃんみたいな水泳競争とか、シャルロットみたいなビーチバレーとか、俺もラウラと楽しみたかったのに。

同刻、女子更衣室。

自分の体をぐるぐるとタオルで巻いた通称バスタオル・ゴースト、もといラウラ・ボーデヴィツヒなる少女は、未だに海辺へ出ていなかった。

(う……。クラリッサの気合と自信に負けて買ってしまったが、やはりこの水着は……)

シャルロットには可愛いと太鼓判を押されたが、しかし　少々、派手過ぎないだろうか。

確かに海月は多少派手なもので、青や黒が好きと言っていたから、これはそのイメージにぴったりだと思う。しかし　やはり、この姿で人前に入る勇気がない。

「うっ……」

結局、ここまで来てここまで着たというのに最後に一步海月の前に出てゆく勇気がなくなってしまうたラウラは、バスタオルの中でもぞもぞと今(正確には2時間前から)着た水着を着替えてゆくのだった。

「副隊長！隊長が、隊長が海へ出ていませんッ！」

「な、ば、馬鹿な！どこだ、隊長は今どこにいる！」

「更衣室と思われる場所で硬直……いや！今更衣室を出て、自室と思われる方向へと移動しています……」

「何故だ…、私の水着のチョイスに、何一つ失敗はなかったはず……」

今日も今日とて、シュヴァルツェア・ハーゼ隊は元気だった。

43 おあずけっ！（後書き）

水着を考える時間を下さい（迫真）

44 ドイツの春風

ラウラ成分（詳細に関しては不明）を一切補給できないまま時間は過ぎていき、今7時半少し過ぎ。

現在、やっと姿を現したラウラと隣同士で椅子に座り食事を取っている。

本来であれば食事は大広間3つの仕切りを取った宴会場で取るのが基本なのだが、方法的、もしくは信条的な理由で正座ができない生徒のために隣の部屋でテーブル席が解禁されており、ラウラは正座が苦手ということとでそちらで食事を取ることに決めたのだ。

方法的、信条的な面で見ても俺は正座で問題なかったんだが、監督の先生方は別の部屋にいたためこれを好機とばかりに勝手にこちらの部屋に入りこんだ。

「外国人はナマモノとか苦手だって聞くけど、ラウラは大丈夫なの？」

「問題ない。物資が断たれた状況で餓死しないよう、ドイツにいた時に生の食材を食べられるよう訓練を受けている」

「……食中毒とかの可能性を考慮したら、いつでも火を起こせるように訓練するべきだったんじゃないのかな」

「って、問題はそこじゃなくて。そんな極限状態の時の食事と旅館の贅沢な食事を同じ視点で見てもいいものなのだろうか？」

「もちろんその訓練もしたぞ。ジャングルで木を加工した火の起こし方やら、無人島で海岸によく落ちている漂流物と太陽を利用した

発火方法やらな」

無人島に漂流物？はて、どういう意味だろうか。

「知らないのか？無人島は人の住む島と違って海岸が整備されていないことが多いので、海に捨てられたゴミなどが漂って流れ着くことが多いのだぞ」

俺が首をかしげていると、ラウラが分かり易く漂流物やら、その使い方やらを教えてくれた。

……飯食ってる最中に、何故無人島に漂流した時の話をしなければならぬのだろうか。

「ああ、海岸といえば　ラウラは、何で今日海岸に来なかったんだ？」

「！　そ、そのう……」

饒舌になっている今なら理由をぼろつと明かしてくれるんじゃないかな、と予想していたが、見事にアテが外れラウラは黙り込んでしまった。

しかし、明らかに顔の色が赤くなっているのを見れば、大体の理由は分かる。あと、赤面でモジモジというのは必殺技クラスの威力がある。後ろ側が私情。

「もしかして、結構派手な水着だから恥ずかしかった　とか？」

ボン！

ラウラの頭上で煙が小爆発を起こす。どうやら間違いないようだ。

「ってことは……実は水着はラウラが選んだものじゃない、もしくはラウラが選んだものだとしてもハルフォーフさんに多大な影響を受けている?」

ボンボンッ!

小爆発の煙が2段の雲になる。ハルフォーフさんの日本知識だとこ
ういう時は、「ラウラかわいいよラウラ」って言えばいいんだっけ。
ラウラかわいいよラウラ。

「それじゃあもしかして買い物の時」

「そっ、その話のもういいだろう!早く食べないと、小鍋も味噌汁も冷めてしまっぞ!」

ぶー。最後まで言わせてくれたっていいじゃないか。女の子の恥じ
らう姿は目の保養にいいんだぞ。

「な、何だその不満げな目は」

「別に?なんでもないよ。さあご飯食べよう」

「副隊長!隊長と戸鉄さん、同室で食事をしています!」

「把握しているっ!」

ドイツ軍、シュヴァルツェア・ハーゼ隊。

平常時であれば訓練を行っているであろう時間においても、クラリ
ツサ・ハルフォーフ大尉以下隊員全員は隊長　ラウラ・ボーデヴ

イツヒの動向を見守り、いや好奇心の観察をし続けていた。

「ああ、何故コア・ネットワークの位置座標特定機能には映像投影機能がついていないのだ……！」

全てのISは467機のコア同士が特殊な情報網 通称『コア・ネットワーク』で情報を共有している。

それを利用すれば、許可登録をしている者同士ならばほぼ完璧に位置座標を特定することができる。ドイツ軍内での機体同士、つまりラウラの『シュヴァルツェア・レーゲン』・海月の『シュヴァルツェア・ヴェレ』とクラリツサの『シュヴァルツェア・ツヴァイク』は勿論許可登録をし合っているのです、その座標確認とドイツ軍の衛星映像を照らし合わせることで彼女達はおおまかな位置と状況を把握していた。

本来であれば軍の一室をこのような理由で使うことは許されたことではないのだが、彼女達は「IS学園への襲撃を予想した敵態勢」という名目で軍の一室を自由に扱える許可を貰っていた。そしてその内部機能を極限まで上手く極限まで私情を挟んで利用しているわけである。

「確か、日本ではこのような状況で、『はい、あーん』という恋人間の応酬をするんですよね!？」

「そのとおりだ!それだけでなく口に一度食事を入れてからキスでの口移しや相手の頬についたご飯粒を指で掬って食べるなど、様々なイベントがある!しかし」

一瞬、クラリツサが言葉を詰まらせる。室内になんともいえない緊張が走った。

「隊長は、それを把握していない」

「……え、えええええええっー!!」「」

「慌てるな! こういう時のための我々のサポートだろう、今から個人間秘匿通話を掛ける!」

軍隊といえど、やはり若い女性達。ここの空気も、実はIS学園内の空気とあんまり変わらなかった。

『……ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ』

「クラリツサ・ハルフォーフ大尉です」

『何か問題でも発生したのか?』

食事を邪魔されたせいとか、それとも海月との会話を邪魔されたせいとか、ラウラの声は若干苛立たしげだ。

「いえ、軍内部での問題は特に」

『……? ではなぜ通話をしてきたのだ?』

先ほどまで食事をしていたラウラは、何やら通話が入ったとことで手を止めている。

彼女へ通話をかけるということは、1年生徒の誰か、もしくはドイツ軍の誰かだろう。

そいでもって1年生徒は隣で食事をしているわけだし、この通話は

ドイツ軍関連のものを見てまず間違いない。

「はあっ!?!?」

「っ!ラウラ、どうしたの?」

通話では声を出す必要はないはずなのだが、目の前のラウラはいきなり目を見開いて大声を出した。周りの生徒が一斉に振り返ってラウラを見ている。

「……………海月」

通話が終わったらしく声をかけてくるが、なぜかほんのりと顔が赤い。……………通話相手はハルフォーフさんで、何か吹き込まれた臭い。

「その……………恋人同士が同席しているなら、『はい、あーん』と相手に自分の箸で食べ物運ぶ、と、いうのは……………本当か?」

しかしその問いかけに答えたのは、俺ではなく周囲の女子だった。

「本当だよボーデヴィツヒさん!お互いが相手の口に料理を運ぶの!」

「最初の一口以外、全部相手の箸から食べる人だっているって聞いたよ!」

「えっ!?!途中からは箸じゃなく、口移しで食べるって私は教わったけど!?!?」

「それじゃあ……はい、あーん」

「あ、あーん……はむっ」

俺の箸で摘んだ刺身は、ラウラの小さく開けた口の中へ入ってゆく。その動作は、そろそろふたつ名を「銀色のリス」とか「黒兎隊の白兎」とかに変えてもいいんじゃないかと思えるものだった。「海月の嫁」でもいいぞ。何を言っているんだ俺は。

「「「きゃああああああああっ！！」「」」

刺身がラウラの喉を過ぎたと同時に、部屋中から黄色い悲鳴が上がる。

「次、次はボーデヴィツヒさんが戸鉄君にあーん！」

「次回のネタは久々に純愛物を書こうかなっ！」

「口移し！口移しはまだ！？」

いいものを見た、といった風に女子達が要求を繰り返してくる。おい、今「ポツキーゲームならぬ刺身ゲームを！」って言った奴出て来い。それは殆どただのキスだ。

「お前たちは静かに食事することができんのか」

入り口付近から聞こえた声に、騒いでいた女子達は急激に口を紡ぐ。

「お、織斑先生……」

「全く、あちらの部屋で騒ぎがあったかと思ったたら今度はこちらか。戸鉄、騒動を起こされるとこちらが面倒になる。こちらの部屋にすることは黙認してやるから、やめろ」

「う、ごめんなさい」

俺のせい……じゃないだろう流石に。今は騒いだ女子が悪い。

「……じゃあ、残念だけど普通に食べようか」

「わ……私のあーん、が……海月へのあーん、が……」

当のラウラは、人差し指をいじいじと回し、少し涙目になっていた。多少、いじけているらしい。

……そうだ。周りの女子を牽制さえできれば、まだチャンスがあるっ！ ナイス俺！ 名案！

幸い、未だ女子の大半はこちらを向いていたので、人差し指で静かに、とジェスチャーを取る。

どうやらさきほどのことで多少は罪悪感を感じているらしく、辺りは水を打ったかのように静かになった。

「ラウラ」

「………」

「ラウラ、1回だけ、俺にもそれ、やってくれない？」

「海月へのあー……な、み、海月っ！？」

それを聞いて、ラウラも初めて周りから食器の移動する音以外聞こえないことに気付いたらしい。

「ん、こほん！……では海月、あーん」

ラウラの箸が、俺と同じように刺身を一切れつまみ、俺の口元まで近付いてきた。

どうやらさっきまで俺が山葵を使っていたのをちゃんと見ていたらしく、適量の山葵がちゃんと乗っている。

「あーん……うん、美味しいな」

と、その瞬間にパシャッ、と携帯の音が鳴る。なんと、今の写真を撮影されたらしい。

いつもなら早速犯人探しをするところなのだが、しかし静かにしろと言われたばかりなのでできない。

最終的に、無言の、しかし気まずいというわけではなくむしろ小恥ずかしいという空気の中での食事が、満腹になるまで続くこととなった。

「副隊長！食事、終了したらしいです！」

「よし、次は夜中のお誘いイベント……学園教師の目を掻い潜るため、我々が全力でサポートするぞ！」

「了解！」

ラウラがドイツに戻ってくる3年間の間に、部隊がどうなってしまうのか。それは誰も知らない。

44 ドイツの春風（後書き）

実は昔の話も、ある程度読みやすいように修正してたりするので、
たまーにどうぞ。

45 お通夜モード

「いや、すごかったな、露天風呂」

「だな、あんな所を2人で占領できるなんて、特別待遇されたみたいな気分だぜ」

食後、海の夜景を隅から隅まで見渡せる露天風呂へ入ってきた俺達は、部屋にてのんびりと過ごしていた。

教員の利用している少し上等な部屋と同じ作りであるこの部屋だと、いつもと同じ面子でもいつもよりくつろげるように感じる。女子の大部屋もそれはそれで面白そうなのだが、こちらが悪くはないと、話していると隣の部屋の扉が開閉する音が聞こえる。

「……お、千冬姉が部屋に戻ってきたらしいな。悪い、ちょっと行ってくる。疲れが溜まってるだろうから、久しぶりにマッサージでもしてくるよ」

「マッサージ？一夏、そんなこともできたのか」

「ああ、あくまで素人の領域だけだな。それじゃあ行ってくる」

家事全般ができて、格好良くて、おまけに女性が好みそうな特技まであるって……こいつ、女性キラーとなるために生まれてきたんじゃないか？

女性キラーは軽く背伸びして、部屋を退出した。

「さて、俺は 本でも読むか」

こないだ購入し、この臨海学校中に読む予定だった本をバッグから
適当に1冊取り出すと、「『流石は伝統ある合唱部だな、完璧なゴ
スペルだ』先生は、耳を塞ぎながらそう呟いた。」というオビがつ
いた本が出てくる。

俺の独自理論なのだが、オビが気に入った本は大体の場合中身も面
白い面白くないは関係無しに気に入る。この本も、実はオビを見て
買ってたりするんだよな。

ぱらぱらと本をめくり始めたところで、こんこんとドアをノックす
る音が聞こえる。

「はい、どちらさま?」

「篠ノ乃箒だ、……一夏は今いるか?」

「女性キ……じゃなくて一夏なら隣の、織斑先生の部屋」

「そうか」

そこまで言うと、扉の向こうから気配が消えたので、再び本を読み
始める。と、ほんの数分もしないうちにこんこん、と再びドア
が叩かれた。

「はい、どちらさま?」

「あたしよあたし。一夏、そこにいる?……あと、箒は何やってん
の?」

「一夏なら織斑先生の部屋、箒さんは……一夏が隣の部屋にいるん

だから、言わなくても分かるだろ？」

鈴ちゃんの話曰く、篝さんは先ほど帰ったのかと思っただら隣の部屋の前で聞き耳を立てていたらしい。

全く、マッサージしてる時の声に聞き耳立てて楽しいのだろうか？

こんこん。今度もやはり、数分もしない間にドアが鳴る。

「隣の織斑先生の部屋」

「わたくしはセ……へ、隣？」

「そこで篝さんと鈴ちゃんが多分、聞き耳を立ててるだろ。一夏がいるのはその部屋だよ」

こんこん。

「……3人が聞き耳を立てている隣の部屋が貴方の目的地だよシャルロット」

「……海月、もしかしてこれが4回目？……ゴメンね」

「いや大丈夫、来るだろうと思ってた。気にするな」

いや、分かってる。決して彼女達が俺の読書を邪魔したいわけじゃないのは分かっているんだが、……どうも間が悪すぎじゃないだろうか。

だがしかし、一夏にべつたりの4人はもう来たわけだから、これ以降は邪魔されることもあるまい。

改めて視線を扉から小説に戻し、先ほどまで読んでいた位置を思い出すと、再びゆっくりと読み始めた。

「あら？ボーデヴィッツさん、どこ行くの？」

どきっ。

女子の泊まっている大部屋。布団を敷いた後、こっそりと部屋を出て行くとするラウラに気付いたクラスメイトの1人が声を掛けた。ばれる予定ではなかったラウラとしては、声を掛けられただけで心臓が飛び跳ねる思いである。

「いや、ひ、昼間に海に出てなかったから、少し潮風にでも当たってこようかと思ってな……」

「ああ、戸鉄君だね？」

どきどきっ。

まずい、何とか誤魔化さなければとラウラは必死で頭を回転させた。その結果

「へ？いや違う、違うぞ、私は決して海月の部屋にお邪魔しようなどとも、そのまんま布団に潜り込んでしまおうとも考えては」

墓穴を掘る。今のラウラを説明するのであれば、まさにその言葉が適切な表現となるだろう。

こんな2流のコメディアンのようなミスをするのだから、ラウラも相当緊張していたものだと思われる。

「へえ、戸鉄君の部屋の隣って織斑先生のはずだけど、大丈夫なの？」

「いや、だからだな、私は別に海月の部屋に行くわけでは……」

あくまで否定するラウラに、クラスメイトは揺さぶりを掛ける。

「海に出るんだったら、私が付いて行っても大丈夫だよな。一緒に行っていい？」

「そつ、それは駄目だ！」

「ええ、なんで駄目なの？」

「それは……そうだ！一応、夜に外に出るのは違反だからだ。私に付き合っつて違反を犯す必要もないだろう？」

「……なら、ラウラが違反を犯してまで外に行こうとするメリットは？」

「……」

結果としては、この通りラウラが綺麗に引っかかった。……のだが、別にラウラを引き止めようとはしなかったどころか、何やら全員で相談を始めた。

どうやら、彼女達のうちの何人かは臨海学校に来る前からラウラの行動を予測していたようで、既にラウラが抜け出すための準備は整えられていたらしい。ある程度全員に作戦を伝えると全員が同時に動き出した。

「はいはい、それじゃあボーデヴィツヒさんの布団に枕を入れておくよ。3つぐらいで大丈夫かな？」

「ボーデヴィツヒさん、声出せる？録音しておいて、先生が見回りに来たら流すからさ」

「布団から出しておくかつら、出来るだけ近い色を選んできたつもりだけど、近い色になってるよね？」

そして、道具の準備さえ整えられていれば後の仕掛けは非常に早い。あつという間にラウラの布団はラウラが入っているかの如く偽装され、ラウラの声は最高音質で録音された。

「それじゃあ、戸鉄君の所へ行つてらっしゃい！」

「惚気話期待してるよー！」

ここまで来れば協力と言うよりむしろ楽しんでるようだが、とにかく部屋を出るといふ第一関門を突破したラウラは海月の部屋へ向けて歩き出した。……シユヴァルツェア・ハーゼ黒兎隊の衛星画像からのサポートに加え、クラスメイト女子からの偽装サポートまでも味方につけて。

「…なんだ、これは？」

いざ海月（と一夏）の部屋へ着いてみるとそこには、今の自分には到底理解できない光景が広がっていた。

正確には海月の部屋ではなくその隣の、教官の部屋の前。その扉に、4人の女子が耳をひっそりと当てているのだ。……なぜか、顔を青くして。

「おい貴様ら、一体なにを」

「「シーツ!」」

訊こうと思っても、目がこちら側に向いているシャルロットと鈴が口に手を当ててくるので話せない。

しかし、相手の手から伝わってくる鼓動が、なにやら酷く落ち着いたりリズムを刻んでいるのは理解できたため、とりあえず騒ぐのはやめることとした。

多分、織斑一夏絡みなのだろう。そう直感したラウラはしかし、

「……少し、私も参加してみるか」

織斑関係のことに興味はないが、この4人をここまで沈黙の空気に沈めた会話は少し気になったようだ。

耳を開いている場所に持つていくと、なるほど確かに中の会話が聞こえた。

『どう?千冬姉、ここ気持ち良いだろ』

『つつう……そうだな、そこはっ……』

『やっぱり、だいぶ溜まってたらしいよ』

『お前がっ……世話を焼かせるのが悪いのだ……ああっ!』

……ああ、この4人はこれを聞いて、絶望したような表情になっていたわけか。

そう納得しつつ、5人の中で唯一「自分の恋する相手がほにゃほに

「や」という状況ではないラウラだけが青い顔とは対極の、赤い顔をしてしまう。

自分の敬愛する教官の声があまりにも艶かしかつたのが原因だろうか、それとも2人の、と、そこまで考えた所で、一気に現実へと引き戻されるはめになった。というのも

『さて、次は……』

『いや、待て一夏』

その時、なにやら扉の向こうから、非常に微弱ではあるが殺気を当てられたのである。いかん。ここは退かないとまずい。そう直感で判断し、慌てて当初の目的である海月（と一夏）の部屋へと逃げ込んだ。

次の瞬間、顔を蒼白にしていた4人は、織斑千冬が思い切り殴ったドアの餌食となった。

46 清く正しい学生恋愛

「え？……ラウラ？」

ノックもなしにいきなり扉が開いたので一夏が帰還したのかと思っただが、本から目を離してみるとそこにいたのは……声の通りである。当の本人は問いかけには答えず、閉めた扉にぴたりと耳を当てている。どうやら、廊下の様子を窺っているらしい。

「……………よし、廊下はもう大丈夫か。　　すまなかつたな、海月」

「別にいいけど……ノックぐらいしてくれよ？もし着替え中とかにいきなり入ってこられると、流石に俺でも恥ずかしい」

「ん？夫婦は包み隠さぬものだとクラリツサからは聞いているが……違うのか？」

「……………正しくもあるし間違いでもある」

「間違い、とはどういうことだ？」

どういうことかいまいちよく分からないらしく、首をかしげて尋ねてくる。効果音を当てはめるなら「きょとん」が一番近いだろう。

「例えばラウラの右側のわきの下に見せたくない大きなほくらがあったとする。俺は隠さなくてもいいと思うけど、ラウラはそれを見せたいと思うか？」

一応言っておくが、別にラウラの右側のわきの下に大きなほくらが

本当にあるわけではない。俺もない。

「それは……確かに、嫌だな」

「うん、つまりそういうことだよ。相手がどれだけ受け入れるって言うてようと、隠しておきたい物はあるってことだ」

更に言うと、ここは隣が織斑先生の部屋な上に一夏が同室なのだ。もし俺が着替えてる最中にラウラが入ってきてお互い硬直したとして、そこに一夏が持ち前のタイミンクの悪さで入ってきたりしたら……温泉に死体が1つ浮かぶことになった上で、IS学園に在籍する男子は1人になるだろう。

「こほん……では海月、今何をしている？」

「今は見ての通り、小説を読んでいる」

「ほう、漫画ではなく活字か。確かに、夜の暇つぶしには丁度良いかもしれんな」

ラウラが、座っていた布団に近付いてくる。手元の灯り以外付けていなかったため、暗闇に揺れる白銀の髪がそれは美しく映えていた。そのまま俺の隣へと座り、小説タイトルやら開いていたページやらを見てくる。

「『先生は、耳を塞ぎながらそう呟いた』？何を言っているのだ、耳を塞いでいては声が聞こえないではないか」

「ははは、これは遠まわしに『耳障りだ』って皮肉ってるんだよ。中身は推理ものだけど、読んでみる？」

「海月が読んだあと、面白かったら薦めてくれ。……それより、だな」

そう呟くと、ラウラは視線を小説から俺へと、眼帯を外しながら移してきた。金色の薄く輝く瞳が、ちょうどこちらの視線と被さる。先ほどまでの無邪気な雰囲気、着実に妖艶な雰囲気へと変わっていった。

「……ら、ラウ、ラ？」

「クラリツサ曰く……こういう時に何をするか、といえば……」

肌を上気させながら近付いてくるラウラに、正直言つと理性は持ちそうにない。いや、本当にヤバいだろうこれは。何か別の言葉で表現したいが、ヤバい以外の言葉が思い浮かばないぞ。

「……いや、今はやめておこう。何せ、一夏がいつ帰ってくるか分からないんだろう？」

潤んだ瞳を一瞬で普通のものへと戻し、ラウラは即座に少し退いた。これ、生殺しつてやつなの？ 虐め？ ……いかん、頭の中が結構エロチックになっていた。

「ちえーっ。あそこまでドキドキさせておいて、急に離れるんだもんなあ」

「……何だ、海月は結構肉食系なのか？」

言ってて、自分でも恥ずかしいぐらいに体が熱くなっていくのが分かる。

クラリッサには「深夜にアピールをしに行くだけで男性は喜ぶもの、危険な行動は今避けるべき」と聞かされていた。

つまり、今自分がしようとしていた行為は。いや、考えるのはやめよう。今ですらかなりの精神力を使って耐えたのだ、次にさらに考えが流れると止められるかすら心配である。

「肉食？草食？うーん……分かんないな。でも」

海月は呟くと、急激にこちらに顔を寄せてくる。

え？

気付いた瞬間、唇を海月に奪われていた。

「んっ！？んっー！んっー！……な、何をする！？」

「え、何をするって……ほ、ほら、学園の教室の時のお返し……かな？」

人差し指で頬を搔きながら、しどろもどろになりつつ海月がそう告げた。私自身の体は硬直して動かない。

そうだ、自分は、海月にアピールする方法ばかり考えクラリッサに聞いていたものだから、海月から何かされたときの反応が何も思い浮かばないのだ。

「ふ、ふふふ……ははは……」

「！？ な、何がおかしいのだ！」

「いや、なんでもない、なんでもないよ」

尚もははと笑っている海月を見ると、無性に何かかもどかしく感じる。

自分が今海月にしたいことは……そうか。

「み、海月!」

「何? 何度も名前前で呼ばなくても……むぐっ!」

自分の口が、再び海月の唇と触れ合う。但し、今度は海月ではなく私が主体で。

学生の領域を超えられない状況であれば、今は学生の領域を超えない範囲で精一杯。

何より、今はこの触れ合う時間が何よりも大切なものだから。

そのころ、廊下。

「……なあ、千冬姉、というか皆」

「何だ?」

「千冬姉のマッサージも終わったし、セシリアへのマッサージだって終わったし、……一体いつまで扉に耳を当ててるんだ?」

「決まっていますわ、もちろんラウラさんが出てくるまでです!」

「あたしも色々、聞きたいことがあるしね」

聞いていただければ分かる通り、一夏とそのハーレムたち＋姉の計6人は、ひっそりと男子生徒2人の宿泊部屋に耳を当てていた。そう、まるで数十分前の、マツサージ前の状況が如く。教師の千冬までも参加しているのは、多少どうかと思う部分はあるだろうが、勿論彼女はそんなことおかまいなしである。

「しかし、何やら先ほどから声が聞こえないぞ……？」

「変な声も聞こえないから、そういうコトをしてるってわけじゃないさそうね」

そう、確かに数分前から、一切の物音も声も聞こえないのだ。まるで、2人して眠りに就いてしまったかのように。

「……ふむ。学生にあるまじき行為をしないか多少心配したが、この調子ならば大丈夫だろう。私は悪いが寝かせてもらっぞ。」

「ぼ、僕もそろそろ寝かせてもらっぞよ」

千冬姉とシャルの2人は、中が静まったのに飽きたのか部屋へと戻っていった。

残るは俺、篝、セシリア、鈴の4人

ダンッ！！

いきなり扉から衝撃が加わり、全員が吹き飛ばされる。

何が起きたのかと思えば扉は開いており、そこに……言わずもがな、

海月とラウラが立ちそびえていた。

「なあ、一夏。噂話が好きで女子が聞き耳を立てるのは分かるが、何故お前まで一緒になってるんだ？」

「い、いや、それは……その……」

海月が俺を標的にしている間に、女子3人組はそそくさと逃げ出して行った。待てこら薄情だぞ。

目の前に怒り心頭の海月と、同じく少し不機嫌そうなラウラ。

あ、これは死んだな。明日は新聞記者が大変な一日になるだろう。

「遺言は？」

「できるだけ、痛くないのがいいです」

「却下だ」

次の瞬間、本来なら安眠を得る場所であるはずの自室に引き込まれた俺は、その後様々な意味で二度と味わいたくない苦痛の夜を過ごした。

「一夏、ゴメンね……」

生徒の中で唯一マークから逃れたシャルロット。

実は、「先ほどまで確認できた海月とラウラの位置がコアネットワークで確認できなくなった」ため怪しいと感じその場を離れたのだが、それをあそこで理解していたのは多分千冬だけだっただろう。

「けど、織斑先生に威圧されたんだから仕方ないよね…?」

実はシャルロットはこの内容をあの場にいる全員に教えようとしたのだが、その行動は急に隣で威圧感を放った千冬に抑えられてしまったのだ。

自室へ歩いていった千冬が、なにやら悪戯が成功したような、しかし幼稚さを一切感じさせない笑みを浮かべながら帰っていたことを理解していたのは、多分あの場には1人もいなかっただろう。

同刻、ドイツ某所。

「副隊長！隊長、海月さんの部屋から撤退していきます！」

「作戦がどうなったか気になるが、ここは隊長の健康を考え一時的な休憩とする！時間差の影響で次の行動開始は深夜からになる、今のうちに仮眠を取っておくように！」

「了解！」

ドイツ軍専属IS部隊『シユヴァルツエア・ハーゼ』はこうして、ラウラの日本での生活リズムと同期したサイクルが形成されることとなった。

言うまでもないが、勿論肌には悪い。

47 試験ストッパー

合宿2日目。1日中自由な初日と違い、この日は朝から晩までずっとISのデータ採集を目的として日程が組まれている。

専用機持ちともなれば、新種装備の試験運用に局地的な状況での稼働実験とげんなりするほどのワークが待っている……のだが、今俺はそれとは違う理由で非常にげんなりしている。

「……なあ、一夏」「何だ、海月」

数分前まで寝ていた俺と一夏は、しかし今は完全に眠気が覚めて、いや冷めていた。

「……この時計、遅れて」「ないぞ。昨日確認したが、確実に正確だ」

話に横から入ってきたのは、一夏ではなくラウラ。昨晚のうちに一度部屋に帰ったはずが、いつもと同じようにいつの間にか布団に潜り込んでいたらしく、起きたのは俺とほぼ同時である。

「ってことは……」

3人同時に顔を見合わせ、青ざめる。

「遅……刻……?」「」

その言葉を否定する要素は、どこを見ても一切なかった。

そう、1日IS稼働をするのだから朝食の摂取は必須、ともなればこの時間は確実に遅刻する時間帯だったのだ。

「ようやく全員集まったか。　おい、遅刻者共」

「は、はいっ」

平常時と比べておおよそ5割増（当社比）のスピードで着替えと食事を済ませたが、それでも集合時間には5分ほど届かなかった。ああ、織斑先生の声に棘が含まれている気がする。

「そうだな、　ISのコア・ネットワークについて説明してみる。最初の1人はそれで許してやろう」

コア・ネットワーク。コア独自の相互情報交換用ネットワークで話を基本として自己進化も促す未だブラックボックスなシステム。頭の中で文章もまとまっておりますいつでも説明はできるのだが、悲しきかな人のサガ、お互いが牽制と譲り合いの微妙な空気のせいで発言ができないでいる。

「……おい、誰も言わないなら全員反省文を20枚ほど書かせるぞ」
しびれを切らした織斑先生が睨みながら言うと、俺と一夏が同時に言い出して言葉が被る。皆も分かるだろう、この気まずい空気。…
…なんて、実は俺はわざと被せたんだけどな。
何故って……

「ISコアはそれぞれが相互情報交換のためのデータ通信ネットワークを持っています。これは元々広大な　」

俺と一夏がどもれば、丁度ラウラが言い出しやすいタイミングが産

まれるだろ？つまりそういうことだ。

「さすがに優秀だな。さて、織斑と戸鉄に関しては後だ。時間もないので、各班迅速にISの装備試験を始めろ」

女子一同がはい、と返事をする。確かISって世界に467しかコアがないはずだから、この生徒全員が同時にISを使うことはできない。

その配分がどうなっているかなんて、専用機持ちとしてのスケジユールしか聞いていない俺は知らないが、単純に言えば「多分あちらの方が楽そう」ということだ。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに來い」

「はい」

自分の班の準備をしていた篤さんが、班の他のメンバーに軽く会釈してから織斑先生のところへと行く。

「お前には今日から専用」

と、そこで近場にイレギュラーの反応が入る。突如表れたそれは急速でこちらへと近付いて

「ちーちゃ~~~~~ん!!!」

奇声を上げながら立ち入り禁止区域を無視し、織斑先生へと飛び掛っていた。

この声は聞いた事が無いが、ぶっちゃけて言ってしまうれば禁止区域にIS学園の人間以外でこんなに気軽に入れる人間なんて1人しか

いないだろう。裏づけは……

「……束」

という、織斑先生の発言により取れている。
つまり、目の前で……

「やあやあ！会いたかったよ、ちーちゃん！さあ、ハグハグしよう！愛を確かめ　ぶへっ」

織斑先生の指を顔面にめり込ませている、この大人げない女性こそ、IS開発者である篠ノ之束博士ということである。やっぱり、研究者なんて変人だらけだ。

当の束博士は、そのめり込んだ指を難なく抜け出して着地。篝さんの方を振り向くと、これまた無邪気な笑顔を見せる。

「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなつたね、篝ちゃん。特におっぱいが」

「がんっ！」

篝さんが、どこから取り出した刀の鞘で自らの姉を思い切り殴りつけた。デフォルメチックなたんこぶが出来かねない勢いである。

しかし、姉妹だと言うのにこの温度差は何なのだろうか。姉が我儕だと妹がしっかり者に育つ、ってということなのか？

それにしても、やはりおかしな人である。

「これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！」

一通り即興コントのように場の空気をかき乱し終えた後、束博士は大きな鉄？鉛？の塊を空中から砂浜に音を立てて落とした。

数瞬それが何かと疑ったが、この束博士の発言と作業用のアームにより姿を現したISによつて疑問は解消された。以上が現状の説明。

「……俺は無視してさっさとテスト始めるかね。どうせ機体は学園に戻つてからも見れるだろうし、多分あの博士から技術を盗むなんてのも難しそうだし」

意気揚々と準備を始める束博士を見ると、どうやら整備科志望の生徒に大まかな動きを見せるようなつもりはさらさら無いらしい。

世界最高峰の腕前というのは、あまりにもレベルが違いすぎると参考にすらならないものである。それならば、さっさと自分のすべきことをしてしまうのが得策だろう。

「さて、ええつと俺の処理する装備は」

「で、何であんたの都合に俺が合わせる必要があるんだよ、馬鹿なのか？馬鹿と天才は紙一重つてよく聞くが、天才に紙一重な馬鹿なのか？」

再び現状を説明させていただくが、俺は送られてきた装備を実験し

ていただけだ。

そうしたら篤さんの落とす予定だったミサイルのうち20発ぐらいを、俺の撃ったビームが落とした。

「はあ？何なんだよ君は。私は篤ちゃんのみ調整以外に興味がなかったのに君が邪魔したんだろ。どっか行ってよ邪魔だよ消えてよ」

で、乱射式のビームガトリングっていうアホみたいにエネルギーを使用する代わりに出力もお墨付きみたいな装備だったために、ミサイルを30発落としても威力は消えきらなかった。

「どっか行くならあんだろ？こういう特殊地形での稼働データ採取も目的の一つでさつきみたいなことは充分起こりうることぐらい考えてなかったわけじゃないよな。それとも自分が実験してる時は周りも自分に見とれて動きを止めてくれるとも思ってたのか？うわあナルシストだな気持ち悪い」

結果として、俺の射撃がそこへ突っ込んできた篤さんへと当たりそうになった。……最終的に、データ収集が予定通りに終わらないといきなり怒り出されたわけである。

自分の興味対象以外に何にも興味がわからない研究者っていうのは昔から何人か見たことがあるけれど、ここまで酷いのは珍しいのではないだろうか。

「……おいそこの2人、そろそろやめろ。予定が消化しきれなくなる」

結局その場は俺にも束博士にも話が通じる織斑先生の一喝で収められた。

……が、それと同時に、その場は別の原因で騒がしくなる。

「たっ、た、大変です！お、おお、織斑先生っ！」

「どうした？」

「こ、こっ、これを！」

というのも、平常時の数倍慌てている山田先生が、非常に厄介な案件を持ってやってきたからだ。

「全員、注目！」

山田先生の連絡が終わった直後、織斑先生のそんな大声が響く。視線を集めた所で開いた口からは、やはりと言うか色々と勘繰らねばならない内容が出てきた。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼動は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

「え……？」

「ちゅ、中止？なんで？」

今の今まで普通に稼動試験を行っていたのに不意の中止、しかも事態がただごとではないと思われるため、騒ぎが大きくなる。そんな騒ぎを収束させるのも、やはり織斑先生だった。

「とつと戻れ！以後、無許可で室外に出たものは教師側で身柄を拘束させてもらう！いいな！！」

「はっ、はい！！」

それまで噂話をしていた女子は、強烈な怒鳴り声に慌てて速やかに片付けを開始した。

「専用機持ちは全員集合しろ！織斑、戸鉄、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰！　それと、篠ノ之も来い」

「はい！！」

篤さんが、他の専用機持ちをおしのけ真っ先に威勢の良い返事をす
る。　場慣れしていなくても専用機持ちは全員駆り出すとなると、
余程の非常事態らしい。

なぜか自信満々の顔をする篠ノ之さんに一抹の不安を覚えながら、
俺たち専用機持ちは旅館の一室へと移動することとなった。

48 因幡の兎は嘘がお好き

「では、現状を説明する」

旅館の最も奥、宴会用の座敷部屋は急遽作戦指令本部となり、専用機持ちと学園教師は全員そこに集結していた。

「2時間前、ハワイ沖で試験稼動にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第3世代型の軍用IS『銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡が……おい戸鉄、どこへ行く」

「どこって、自室ですよ。たった2時間前に暴走してまだこの地域ってことは、速度的に考えれば政府側のIS、例えば日本代表の間だとかそういうプロフェッショナルが相手をできるはずですよ。さきほどの時点で各国に応援要請が来たのであれば、普通に考えて対策は練れるはずですよね？」

先ほどの専用機持ち収集はあくまで緊急事態への対応であつて、今聞いた限りなら一向に問題は無いはずだ。

そして、そうであれば自分達がここにいるより、教師が対応を話すべき場所になる。……そう思っていたのだが、織斑先生は首を横に振った。

「……残念だが、今回のISは例外だな。アメリカ・イスラエルの最重要機密が詰まった機体ゆえ殆どの機関及び軍隊に情報が届いていない」

……少々、いやかなり、いや途轍もなく呆れた。所詮、人命より軍事機密ということか。

「衛星による追跡の結果で、およそ50分後にここより2キロ先の空域を通過することが判明した。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

『らしいけど、本当に情報は届いてないんですか、ハルフォーフさん？』

はい。実を言うと織斑先生が首を振ったあたりから、会話を全てハルフォーフさんに横流ししました。まだ口外禁止とか言われてないしね。

『……はい、それとなく確認を取りましたが、未だ一切情報公開がされていません』

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらおう」

ある程度驚いたが、ここまでの会話は予想通りである。強いて言うなら、少なくとも1人ぐらいは教師も作戦に参加するんじゃないかと思ってた、というぐらいか。

「それでは作戦会議をはじめ。意見があるものは挙手するように」

「はい」

真っ先に手を上げたのは、いつになく厳しい顔つきのセシリアだった。現時点で全員厳しい顔つきなのだけけれど。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、先ほども説明したとおりこのデータは2ヶ国の最重要軍事機密だ。けして口外するな。情報漏洩が判明した時点で、諸君の全員に裁判と監視が最低でもつくことになる」

つと、ここで個人間秘匿通話での情報流しは終了しなければならぬらしい。

『……だそうだから、これ以上の情報提供は無理そうです。すいませんが、後の位置特定はそちらからお願いします』

『ここまで分かれば充分です、我々も全力でサポートさせていただきます』

秘匿通話はハルフォーフさんの頼もしい台詞と共に切れ、それと同時に空中に映し出されているディスプレイにISの詳細情報が表示された。

……おいこれ、何だよ。機動力が異常なまでに高いくせに全方位攻撃を所持しているとか、暴走されて一番厄介な類だ。

「偵察は」

「残念だが、この機体は現時点でも最高速度2450キロという速度で飛行を続けている。偵察をする暇などないだろうな」

普通、そんな高速で動き続けてISのエネルギーが持つとは思えないんですけど。何だよこの超下手物ISは。

「底の見えないエネルギーを持つ相手に対して1回のアプローチしできない、ってことですね」

「なら、その1回のアプローチで落とせる性能を持つてる機体が必要ってことで」

その場にいる全員が、一夏を見た。当人は頼りなさそうにきよとんとしているんだけど、本当に大丈夫だろうか。

「一夏、あなたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「パッケージ換装後については分からんけど、素の状態が一番早いのは俺かな？……あ、でもパッケージなしだと追いつきにくいな」

「それに超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ちよつ、ちよつと待ってくれ！お、俺が行くのか？」

「……当然」

今更突っ込むのは遅いだろう。攻撃力と機動性が必須と分かった時点で一夏の力は必要に決まっている。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら、無理強いはいしない」

織斑先生が、一夏に真剣な眼差しを向けて取捨選択を促す。

しかし、彼らには彼らだからこそ分かる空気というのがあるの
だろう。一夏の目は、先ほどまでの迷いのある目ではなくなってい
た。

「やります。俺が、やってみせます。」

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持
ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

機動力を増加させるパッケージがないなら俺が一夏に次いで早い、
ハイパーセンサーについてはどうかしよう。ただし、もしも高機
動パッケージが誰かに届けられている場合は

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうどイギリス
から強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られて
来ていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

リーチ。高機動パッケージあり、超高感度ハイパーセンサーあり、
更に援護射撃も可能なセシリアであれば、作戦はかなり順調に進め
られるのではないだろうか。

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「20時間です」

ビンゴ。完璧だろう。これでセシリアが一夏を運ぶ役目に決定
その時だった。

妙に明るい声が、頭上から部屋一面に木霊した。

「待った待った。その作戦はちょっと待ったなんだよ！」

この声は確か、東博士である。ちょっと変で、ちょっと変で、ちょっと 総合してすごく変な人。

「山田先生、室外への強制退去を」

「えっ!? は、はいっ。あの、篠ノ之博士、とりあえず降りてきてください……」

「とっっ」

……状況が状況だというのに、この人は気を抜きすぎている。正直に言わせて貰うと本当に馬鹿なんじゃないかと疑問に思う。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといいい作戦が私の頭の中にノウ・プリンティング!」

「……出て行け」

頭の、それも悩んでいるときによく人が押さえると言われるこめかみを押さえる織斑先生。山田先生は……軽々と絡めようとしている手をかわされている。

「聞いて聞いて! ここは断・然! 紅椿の出番なんだよっ!」

「はあ?」

織斑先生の「なに?」をかき消して疑問の声を出したのは俺である。いや、だってこの人本当に頭大丈夫か気になっちゃって。

分かると思うが、篝さんは『紅椿』での戦闘経験が皆無。セシリアの『ブルー・ティアーズ』のスペックをいくら『紅椿』が上回っていたとしても、簡単に言えば「銃を持った赤ん坊と武器なしの殺し屋では武器なしの殺し屋のほうが圧倒的に強い」のだから、セシリアに勝るとは思えない。

……まさか。

「おい戸鉄、ラウラを連れてどこへ行く」

「ドイツから個人秘匿通話です。すいませんが少々席を外しますので、作戦概要が決定したら連絡をください」

勿論、個人間秘匿通話なんて今掛かってきてはいない。

『嘘までついて私を連れ出して、一体どうした？』

俺とラウラは対面しているが、盗み聞きが怖いので一応秘匿通話で会話している。

『あの作戦、違和感がある』

『違和感？』

『まず、ラウラだったら身内が「勝てるか分からない戦争に行く」と言い出したらどうする？』

『……止められるものならば、止めるな』

『東博士は、止めてた？』

『……っ！』

違和感その1、普通に考えて、いくら高性能な武器があつたって身内を知らない相手との戦闘に連れて行くというのは倫理的におかしい。

『次にラウラだったら、自分が基礎を組み立てたものが暴走したら何をする？』

『ふむ……多分だが、被害を抑えるために自分で暴走を止められな
いか試すな　まさか！』

『天井裏から、データを調べるためのピポパポいう音なりカタカタ
いう音なりは聞こえなかったよな。作戦内容を把握していたってこ
とは天井には結構前からいたわけだし、普通行動を起こしてるはず
なんだよ』

違和感その2、場合によっては暴走を止めることが可能かもしれな
いののに、そういう雰囲気は一切なかった。

『以上を踏まえて聞くけど、ラウラだったらこの状況、どう想定す
るっ。』

導き出される結論は2つ。そのうち片方は、東博士がやたらとハイ
テンションに進めていたのだから確率は低い。

つまり

『まあ、少なくともそんな他人に多大な迷惑を与えることをそう簡単にぼんぼんやるのは俺も思えないけどね。とりあえず、ここで採るべき策は傍観だと思っ』

『……………分かった』

そこまで言い終わって部屋に入ると、「セシリアのパッケージ換装だと時間がかかってしまう」という理由が付けられて作戦は一夏×
篤さんのペアで行うことが確定するところだった。

49 墮ちてゆく紅白

時刻、午前11時30分。

一夏と篤さんの準備が完了し海岸へ到着したであろう頃、セシリアを除き残りの専用機持ち達は先ほどと同じ座敷間で待機していた。セシリアがいないのは、作戦が長引いた場合すぐ応援に行くために高機動パッケージをインストールしているからである。

『みんな』

『何よ？』

俺が通話で呼びかけると、真っ先に反応したのはやはりと言うか機敏な鈴ちゃんだった。

その他メンバーも通話はしっかり聞こえているらしく、少し視線をこちらに合わせて続きを促してきた。

『少し気になったんだけど……篤さん、妙に浮かれてなかったか？』

聞いたのは、先ほどから抱いていた俺の不安事だ。

例えば野球で初めてレギュラーに選ばれた人が予想以上にミスを連発するように、人間は浮き足立っているときに一番失敗しやすいものである。

『そうかな？僕にはいつもの仏頂面に見えたけど』

『だと、いいんだけどな……』

他の全員も確信が持っていたなら今から多少無理をしてもすぐ作

戦への参加を希望したのだが、そう言われると確かに自信はない。仕方が無いので、通話回線をハルフォーフさんに切り替える。

『ハルフォーフさん、福音、既に捉えていますか？』

『ええ。隊長と海月さんの携帯端末に交戦映像を送ることも可能かと思われませぬ。ただし高速戦闘の場合、少しばやけると、時間が数秒遅れるかもしれませんが』

『そこは携帯端末ですし、仕方ありませんね。映像は他の専用機持ちに見せても？』

『構いません』

とりあえず、不測の事態に備えるのであればこのぐらいは必要だろう。早速携帯を取り出し、言われたとおりの操作を行う。

画面に表示されたのは、まだISの影すらなく……そして、教師によって海域は封鎖されているためIS以外の影もない、まるで未開にさえ思えるような青い海だった。

『みんな、ドイツの衛星経由で交戦映像を映してもらうことにしたから、俺かラウラの近くにきて』

言い終わると同時に鈴ちゃん俺の、シャルロットはラウラの近くに即移動してきた。

……あ、これって福音のデータを勝手に開示したことに含まれるのかな？スペックは一切開示してないから大丈夫だとは思っけ。

福音、それを追う一夏と篤さんが画面に表示されたのは、それから

たった10秒後のこと。

「おい。今、早速瞬時加速使ってなかったか？」

福音に接触した一夏は、先ほど鈴ちゃんあまり使うなと牽制していた瞬時加速を初手で使用した。

エネルギー消耗が激しい瞬時加速を使用して失敗してしまったら意味がない、一撃で決まればいいが……残念ながら回避されてしまったらしい。

それにしても、暴走しているISだというのに動きはかなり精密なものに見えた。上空からの雑な映像のみで分かりにくかったが、多分数センチ、もしかしたら数ミリ単位かもしれない程度しか隙間を空けない無駄のない回避動作だった。

これが『重要軍事機密』の理由の一端であるとすれば、確かに隠しておきたい性能かもしれない。多分、映像を手に入れたドイツ軍も解析を進めるだろう。

少なくとも短期決戦にしなければ確実に不利になることは一夏にも分かっていているらしく、続けて攻撃をするがこれも回避される。画質が荒くて正確にスペック把握ができないのがもどかしい。

更なる大振りの追撃を福音は同じく華麗に避け、翼のようなもの
スペックデータによると、確かこれが砲口　を広げた。

これが福音の主装備。もしこの作戦が失敗した場合を考えるならば、しっかりと目に焼き付けておかねばならない　がしかし、俺の集中は別へと動くこととなる。

「！　待った、今一瞬、画面に何か映りこまなかったか？」

画質が荒く、またコマ以下とはいえず少しずつコマ送りになる画像を見ていると、ただの一瞬だけ右下に何か変なものが移りこんでいた。……ような気がした。

慌てて右下を再度確認するが、戦闘箇所がずれたためか何も変なものは見えない。見間違いか？

「っと、これが紅椿の性能か、確かにとんでもないスペックだ」

再び視線を戻すと、篝さんが福音相手に攻撃を開始していた。

相手の福音もひどいものだが、篝さん操る紅椿も相当である。

一夏では回避しかさせられなかった福音相手に二刀流を上手く利用し、攻撃の隙間をうまく埋めている。猛攻を続けられた福音は、とうとう防御に一瞬の隙を割き始める。

しかし、どうにも一夏の兵器が危険であることは認識しているらしい。一夏が近付こうとすると、翼を広げ連射されるエネルギー弾がそれを許さない。

……が、その一夏へ向けた攻撃こそが篝さんには隙となる。異常な高機動を利用し、攻撃に専念していた福音へと一撃を叩き込む。

先ほどから一夏に隙を見せなかった福音は、そこで初めて一夏に攻撃を叩き込まれる大きな隙を作った。

この時点で零落白夜を使えば、作戦は終了する。

「よし、いける！」

しかし 一夏は光を纏いながら、目の前の福音へではなく真下へと移動をした。

最高速度を確認するに、多分瞬時加速も連発しているだろう。

「一夏、何してんの!？」

「分からない まさか!」

画面が一夏を追うように切り替わると、そこには本来あるはずのないものが映りこんだ。

……先生達の作り出した封鎖領域のはずの海域に、1艘の船が海を漂っている。

「避難警告が出されたはずなのに……もしかして密漁船!？」

さきほど一瞬見えた気がしたものは、気のせいではなかった。

一夏は密漁船を、そして多分密漁船へと直撃しそうなエネルギー弾を見つけてしまい、それを零落白夜でかき消すためにあんな無茶なエネルギーの使い方をしたのだ。

もう少し早く確信して一夏に通信を入れられれば、こんなにエネルギーを消費する必要はなかったかもしれない。

しかし、自分の見間違いだという可能性を捨てきれず、福音の戦闘情報を見るために画面を移動させることができなかった。

その結果、全力を振り絞ってエネルギー弾を消した一夏の光の刃は、そこで輝きを失った。

「ま、待って!まさか2人とも、もうエネルギーが……!」

シャルロットが深刻そうに呟く。一夏の光の刃が消えただけでなく、篝さんが落とした刀が具現化をやめたのだ。

具現維持限界、つまり エネルギー切れである。

『おい、福音を見る！』

篝さんの後ろ、福音が再度翼を広げた射出モードになっているのを確認し、慌てて一夏に通信を入れる。

通信が届いたのか、それともそれより自分の目視が先だったのかは知らないが、一夏は篝さんをかばうように飛び出した。

的となった篝さんを抱きしめるように庇った一夏は全ての砲撃を喰らい、

エネルギーも切れ装甲も壊れたISはゆっくりと解除され、

そして、生身の状態で海へと一直線に落ちていった。

『一夏！？一夏！おい、応答しろ！一夏、一夏っ！！』

続く通話で呼びかけても一夏の声は聞こえない。

画面を見ても一夏の姿はなく、福音もどこかへ飛び去ってゆく。画面で確認できるのは、一夏と篝さんが落ちた海面の跳ね上がる様子と、そそくさと逃げて行く先ほどの密漁船だけ。

『篝さん！篝さんは大丈夫なのか！？無事なら一夏は！？応答してくれ、頼む！』

しかし篝さんの声は聞こえない。代わりに、画面に新たな変化があった。

既にエネルギーがまともに残っているかも分からない篝さんは、その腕にスーツを纏った一夏を抱えていた。

「一夏……?」

「うそ、でしょ……」

マッチポンプ
自作自演だと考えていた作戦は、福音もしとめられず一夏も重傷を負うという最悪の結果を残し、失敗した。

49 堕ちてゆく紅白（後書き）

通常戦闘でも臨場感が出せないのに、画面越しとなると……泣けてきますね（笑）

泣いてるのに（笑）とはこれいかに。

50 仕返し存在肯定

日本時刻にして1時半。

ドイツでひとつのカツプルの動向を見守っていた部隊は、それが理由でIS学園をずっと監視していたために、他より数段早く『銀の福音』への対応を開始していた。

昨日までの和やかな雰囲気など一切ない。ドイツでは深夜だということにも拘らず、隊員達の動きは一切止まっていなかった。

「総員、全力を挙げて『銀の福音』を搜索しろ！現時点であればまだそこまで遠くへは行っていないはずだ！」

「副隊長！対象に光学迷彩はあるのですか！？」

「不明だ、アメリカイスラエル両国とも未だに事実を隠蔽してデータを開示してこない！」

既に数十分前からクラリツサは両国へコンタクトを取るべく何度も何度も何度も何度も何度も何度も、ただの数分で気が遠くなるようなあらゆる思考を駆使して情報を引き出そうとしているが、全てが知らぬ存ぜぬで押し通されてしまっていた。

下手を打つと情報漏洩の嫌疑を掛けられてしまうために強く出ることはできず、そのため地道に交渉策を練る。そして突っ返されまた別の交渉策を練る、その有限ループである。

「『銀の福音』の反応、衛星から目視した場合10キロ圏内には見つけられませんでした！」

「次は20キロ圏内を調べろ、それと光学迷彩を利用されている場

合を想定した搜索も始めるんだ！別部隊にも応援を要請してくれ、私の名前を出して勝手に権限を使っても構わん！」

「了解！」

この部隊の現状を表すのに、必死という言葉は最早生温かった。

『……分かりました、引き続きお願いします』

上がらぬ成果に少しの苛立ちを覚えながら、それでもその感情はドイツで今も必死に索敵を続ける人達にとって不条理だと海月は言葉を喉仏に仕舞い込む。

一夏と篤さんが撃墜されてから既に2時間が経過。織斑先生からの『現状待機』以降の命令は未だにない。

「……くそ」

もしも、自分が違和感を明確に一夏に伝えていれば。

「くそっ……畜生っ……！」

もしも、傍観策など取らず無理矢理でも作戦に参加していれば。

「何で、一夏があんなことに……」

そうすれば、一夏はあんなにも無惨な姿になることはなかったかもしれない。

体のそこかしこが黒く焦げた、生きているのかすら定かではないま

ま眠り続けることもなかったのかもしれない。

結局、何だかんだ理由を立てて自分は戦闘が怖くて、臆病ゆえに傍観策を選んでしまったのではないか？

自分にISという『兵器』を使う資格は、本当にあるのだろうか？

考えていると、息すら制御できずに過呼吸になってしまいそうだ。

すう、はあ、と息が耳に届くぐらい大きく深呼吸をして、もう一度考え直す。

いつもなら30分も考えれば何か案の1つでも思いつくのだが、今日に限っては何一つ思いつかない。

考えることを脳が拒否しているのか、前提部分を頭が受け入れていないのか。とにかく「海月、ちょっといいか」

待機状態で自室にいるはずのラウラが、男1人では空白の多すぎる部屋に入ってきた。

不安げで今にも泣き出しそうである、というのはラウラのことではなくガラスの反射で扉の方を見たときに映った自分の顔のことだ。

たった今日の1日で一気に老け込んだようにさえ錯覚するその面構えに、返事しようとした言葉さえ失ってしまう。

「……………」

「一夏だが、絶対防御のおかげで命に別状はないらしい。怪我はか
なり深いが、死ぬことはないそうだ」

よかった、とは口が裂けても言えない。『死ぬことはない』と『今までと同じ生活ができる』はノットイコールなのだ。

「海月。1つだけ言わせてもらおう」

返事の言葉が出ない俺に対して、ラウラは突き放すわけでもなく、慰めるわけでもなく静かに会話を続ける。

「たった1ヶ月前、『誰がどう言おうと私は私だ』と海月は言ったな」

ラウラは何を言いたいのだろうか。

こんな時に、恋愛沙汰の話をするつもりでもないだろうに。

「なら、誰がどう言おうと、その『誰か』が自分だったとしても」

耳にぎりぎり聞こえるような軽い一呼吸を置いて、振り絞ったように彼女は残りの声を出す。

「海月は、海月なのではないか？」

その一言は、ラウラの言いたかったであろう大量の言葉をすべて1つ「」の中に収めていた。

「あ、……あ、あはは、ははは……はははは！」

そうだな。

そうだよ。

何を迷っていたんだか。

自分は、戸鉄海月は、こんなに落ち込む人間だったか?…違う。自分が原因で取り返しのつかないことになってしまった時、その重圧に耐えかねて引き籠るような人間だったか?…違う。

「……だから、海月の考えている」「いや、もう大丈夫だよ」「ラウラの言葉を遮る。

今できることがあるなら、それをする。今できないことをぐちぐちと悩むのは、今できることを全て終わらせてからでいい。

俺は、俺が自分で思う限りそういう人間だし、一夏だってそういう奴だ。

『ハルフォーフさん、聞こえますか?』

『……はい、聞こえています』

『今から言う言葉は、独り言です。独り言だからハルフォーフさんも特に気にしないし、わざわざ他人に言う必要もありません』

『は?』

理解しかねるといった声のハルフォーフさんを無視し、俺は言葉を続ける。

『福音、光学迷彩を装備されてたら捕捉できなくて厄介だったなあ。それと』

規約に触れるか触れないかのギリギリのラインで、福音の情報をゆつくりと流していく。

鮮明に、先ほど見た画像と照らし合わせ、機密の印が無い部分だけを綺麗さっぱり全て抜き出して。

『それでハルフォーフさん、福音は見つかりましたか？』

『いえ、見つかってません、見つかってませんが……その情報は』

『はい？情報？僕が話したのは独り言ですよ。しかも重要軍事機密には全部触れてないんですから、何も問題はありません』

自分が話せる全てを話し、唯一の頼りであるドイツ軍の人全員に福音のあぶり出しを協力してもらおう。

やれやれ、これは夏休みにでも顔を出して、一人一人に土下座で礼を言わなければならないかもしれない。

「ラウラ、少しやりたいことが出来た」

「……何だ？」

「夏を治すことができない俺が今できることなんて、これしかないのだから。」

せめて、被害者がこれ以上増える前に、

「福音を　落とす」

それを聞いたラウラの顔が、少しだけ安堵したように見えた。

それからおよそ20分後、ドイツ軍の協力により福音は発見された。一箇所に停滞している上に位置もここから30キロ、叩くのである。

ば今しかないだろう。

「ラウラは、一緒に来てくれるかな？」

いつもは着ない黒い軍服　なるほど、確かに黒兔隊というだけある　を着用したラウラが、『了解』と敬礼をする。

それだけで、最も信頼できる仲間が1人増えたのと一緒にだ。

「それじゃあ、織斑先生に見つかる前に……」　「僕たちも連れて行つてもらおうよ」

「……本当に行く決心は、つて聞くまでもないみたいだな」

声を重ねて部屋に入ってきたのはシャルロット、セシリア、鈴ちゃんの3人。

各々が既に迷いのない目で、見ただけでも臨戦態勢に入っているのが分かった。

「　　箒さんは、いないか……」

しかし、いないのも仕方ないかもしれない。自分を庇って倒れた一夏も、自分の最愛の相手を自らのミスで傷つけてしまった箒さんも、彼女にとって悲劇という言葉では足りなさすぎる。

「……はあ。海月、アンタ今、箒がいないのは仕方ないとか考えてたでしょ」

「へ？いやまあ……」

鈴ちゃんに凶星を指され、とうとう鈴ちゃんも読心術を覚えてしま

ったのかと複雑な気持ちになるなんて日常のギャグじみた考察は停止。呟きと表情だけでも、なんとなく分かったのだろう。

「あたしが、今から箒のところに行くてくるわ。あいつだって、今がどついう時で自分がどついう状況に置かれていくかぐらい、心のどつかで理解してるはずよ。あんたと同じようにね」

「……できるの、か？」

「箒が自分のことしか考えられない我侷な人間じゃないなら、100パーセント保障してあげるわよ。その間にあんたとラウラはパツケージ換装でもして待っててよ」

くすり、と思わず笑みがこぼれてしまう。セシリア以外はもうパツケージ換装まで終わらせているのか。なんだ、覚悟がない人間どころか、俺がちつぽけに見えるぐらいの覚悟を皆持っているんだな。

「じゃあ、15分後にこの部屋で作戦会議だ。鈴ちゃんも箒さんを頼む、パツケージインストールは出来るだけ早く終わらせる」

「教師たちに、ばれないようにね」

「そつちこそな！」

仲間は5人、一夏がいないのが物足りないが、今いる最高のメンバー。

勝てるか負けるかの予想なんて、意味を成さない。負けたときの保険なんて考える必要はない。

なにせ、勝たなければ何も残らないのだから。

51 フラッシュアウト

旅館より30キロ、海面より200メートル。数時間前の海域封鎖が未だ生きており、今度こそ周囲の海峡に障害物は一切見えない。『銀の福音』はその場所に、回復に専念する状態で停滞していた。回復が終わったら搭乗者を巻き込んで再び高速での移動を始めるのだろうか、それとも辺りを攻撃し出すつもりだろうか？

しかし

「どちらも、させる気はない！」

その刹那、空でうずくまっていた福音に砲弾が直撃する。しかも一撃ではなく、2撃だ。

「初手2発、両方とも命中を確認。続けていくぞ！」

「了解！」

普通であれば何も届かないであろう福音から半径5キロ地点、そこにラウラと砲戦パツケージ『パンツァー・カノニア』を装備した「シユヴァルツェア・レーゲン」は浮かんでいた。

福音は彼女が高速で2発の砲撃を発射したと判断し、途端に戦闘形態へと以降、ラウラへ急加速を始める。

しかし、ラウラと福音の間が2キロまで詰まった時点で、不意の砲撃を喰らい吹き飛ばされる。

『敵機Bの存在を確認、海中に潜伏と推測。排除行動へと移る』

海面を確認すれば、砲口だけが確かに海面から伸びている。次の瞬間、福音のエネルギー弾が一齐に海へと到達し、盛大な水しぶきと共にそこに存在していた銃を黒焦げにした。

「ほら、こつちだよこつち。そこにはフェイクしかない」

福音に、再び海面からの攻撃が当たる。遠距離からのラウラの砲撃もあわせ、2箇所からの同時攻撃。

海上200メートルにいた福音は再度エネルギー弾を海面へ飛ばすと、目視できる対象を優先しラウラへと再加速を始めた。

福音が狙った海にあったのは、焼け焦げた　やはり銃である。

海面からの射撃が絶えず福音を狙い続けるが、福音はその殆どを機動とエネルギー弾による相殺で回避していた。

「頼むぜ、セシリア」

ラウラにギリギリまで寄った福音の攻撃行動を、上空にステルスモードで待機していたセシリアが阻む。

その機体はいつもの『ブルー・ティアーズ』と異なり、ビットを機動力に回し高機動下の戦闘を可能とする『ストライク・ガンナー』のパッケージを装備している。

『敵機Cを認識。排除行動へと』

「だから、狙うなら俺にしとけよ」

何もいない、やはり銃のみが浮かぶ場所から狙撃が飛んで来る。目の前の2機に対処を集中する予定だった福音は回避しきれず、その弾

をまともに喰らった。

『狙うなら俺』の言葉に反して、どうしてもその存在位置が掴めない福音は、背後に注意を向けつつも存在のハッキリしているラウラとセシリアを狙うしかない。

当のセシリアは高速移動から射撃を開始し、ラウラも再度距離を取っている。セシリアの回りこんだ側を狙えば正体不明の海中からの攻撃も対処しやすくなる、と判断したのか、福音はラウラに背を向けセシリアに照準を定めた。

「どっち向いてるのさ」

そこで福音に直撃したのは、ラウラとは少し角度を開いた位置にステルスモードで存在していたシャルロットによるショットガンの射撃だった。

福音はとうとうしびれを切らし全方位への攻撃を開始するが、その分弾幕の密度が薄くなり回避行動及び防御行動が取りやすくなるため、各機回避しながらの攻撃を続ける。

三方からの射撃、更に海中からの不明の攻撃アシノコウ含め四方射撃となると、高機動を謳う福音でも流石に対処は難しいようだ。

『……優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先』

「……っというのは困るな」

上空への離脱を図った福音に、遠方からの狙い澄ました一撃が直撃し大きく体勢を崩させた。

先ほどまで正体不明の攻撃が続いていた位置で、海面よりほんの少しだけ上体を晒す黒い機体 『シユヴァルツェア・ヴェレ』と海月が巨大なスナイパーライフルを携え福音をロックオンしている。

「体勢崩すまではやったよ、箒さん鈴ちゃん。頼む」

「分かっている！」

崩れた福音の真下の海面が爆発し、『紅椿』を纏った箒と『甲龍』を纏った鈴が福音へと突撃する。

軽い体勢の崩れなら即座に戻していた福音も、想定外の距離からの直撃を一瞬で立て直すことはできていなかったらしい。

結果、箒の攻撃は福音の腹部に直撃、大きくダメージを与える。

「箒、下がって！」

紅椿が刹那で上空へ逃げたかと思うと、福音に向けてパッケージ『崩山』を装備した鈴の4つの衝撃砲が全てヒット。

不可視の性能を捨てた衝撃砲は絶大な威力を以って福音のシールドエネルギーを大幅に削った。

「やりましたの!？」

「まだまだ、セシリア、少し右にずれてくれ！」

これだけの直撃の連打を喰らって、なお福音は稼動を続行している。とどめと言わんばかりに海月が放ったスナイパーライフルを寸での所で回避すると、砲口である翼を全方位に開き、一斉射撃を開始した。

実弾であればAICによる停止を目論めるのだが、福音は実弾兵装が1つもない。エネルギー弾のみであるため、密度の高い弾雨を展開されると防御以外の方法がない。

2km離れた地点にいる海月以外は守ってこそいるものの、隙間を縫って後退しなければともに動けない状態となった。

「けど、俺は動ける！」

近距離にいる5人の後退まで、海月が遠距離からの狙撃を狙う。

基本的に福音の装備は、かなり距離を離して狙い撃ちをすれば全て届かないものとなっている。それを補うための福音の機動力だが、近接している味方間的を絞っているのならば話は別である。

味方を狙い撃つ福音、を狙い撃つ海月という構図で、福音をどんと稼動停止へと追い詰めてゆく。

「止まったぞ、頼む！」

「まかせときなさい！」

動きを停止させた福音へ、鈴と箒がエネルギー弾をその身に受けながらも近接、刃で福音を切り裂いてゆく。

その猛攻へあわせ福音は格闘を開始、装甲をぶつけて鈴と箒へと打撃を浴びせる。

しかし2人は攻撃を止めず、とうとう砲口の1つ　福音の片翼を落とした。

「鈴ちゃん、福音が回し蹴りしようとしてる、注意して！」

「了解、…っと、危ないわね！」

遠距離にいる海月は、近接戦闘時の狙撃が出来ない時には福音の動きの観察を続けていた。

「箒さん、福音の右腕、回避して！」

「わかった！」

「背中が開いてる、シャルロット頼む！」

その中で近接戦闘における行動パターンを把握し、いわば遠距離からの指揮官役を担っていた。

既に福音の攻撃は、エネルギー弾以外全て彼女たちにとって致命傷とならない。

「ラウラ、そっちに突撃する可能性がある、少し下方に移動！」

福音にとっては一度も攻撃が当たらず、それなのに自分のエネルギーは着実に減らされてゆく苛立たしい展開である。

エネルギー砲も先ほどまでの半分の範囲しか攻撃できないのだから、結果として海月に踊らされているも同然だった。

『標的Bに殲滅対象を変更』

無機質に福音の機会音が告げると、構えていたセシリアを無理矢理突っ切って2キロ先の海月へと福音が加速する。

……海月の、予想通りに。

「篤さん！」

「分かっている、はあああああつ！！！」

紅椿が、その福音の後ろにぴたりと付き、エネルギー刃を発生させる『雨月』を振るう。

背後からの攻撃に立ち止まった福音。

そこへ、箒の2つの刀が交差し、翼を、足を、奪っていった。

「落ちろおおおお!!」

箒の刀、その刀身からエネルギーがあふれ出し、福音へとぶつかる。福音はその衝撃に耐え切れず、海面へと落ちていった。

「箒さん、どこか怪我は？」

「……特に、問題はない。福音は今ので落ちたか？」

「分からない。とりあえず福音の搭乗者の安否確認を」

海月の言葉はそこで途切れる。何故なら 海面が激昂したかのよう
に光ったかと思うと、大きく飛沫を吹き上げ、そして海面をへこ
ませたからである。

そこに存在したのは、青い雷を装甲に纏った『銀の福音』だった。

「何だよ、これ……?」

「……まさか、おい海月!早く離れる!それは 『第二形態移行』
だ!」

ラウラの声が響き、それに対応し各ISへと情報が伝達されていく。
が、しかし遅かった。

安否確認のために近接していた海月の体を掴んだ福音は、恐怖を与

えるほど鮮やかなエネルギー翼を生やし、

「海月、海月いいいいっ！」

その全身へと、眩いばかりのエネルギー弾を叩き込んだ。

52 エンドロール

海月を包み込んだその翼が、何を意味するのか。傍にいた彼女達がそれを理解するまでに、数瞬を要した。たった1人、銀髪の彼女を除いて。 たっ

「海月、海月から離れろ！海月、応答してくれ、海月っ！」

福音を狙ったラウラの攻撃は乱雑だが、それでも福音を火に包んでゆく。しかし、海月を抱いた2枚のエネルギー翼は未だに黒い機体を外へと晒さない。そのことにラウラは更に焦り、それが原因で照準は更に合わなくなるばかりである。

ところが、突然ラウラの砲撃が止まる。

福音が背後に攻撃が届かなくなったことを不審に思った、その次の瞬間に福音の装甲を一筋の光が貫いた。右腕を貫かれた福音が後退すると、ようやくスナイパーライフルを握った海月の姿が浮かび上がる。

右腕とスナイパーライフル以外の、IS装甲全てを削ぎ落とされて。

海月の装備していたパッケージは専用機限定機能特化専用パッケージ、通称『オートクチュール』だった。

「津波は国外でも日本語の『ツナミ』という言葉が使われる」という理由と、『ヴェレ（波）』の強化パッケージであるという2つの意味で津波の名が付いたそのパッケージは、機動性を大幅に減らす

ことにより耐久性と射撃精度に特化したものとなっている。
莫大なシールドエネルギーと確実な射撃によって後方から味方を支援する、完璧な複数戦専用パッケージである。

そのパッケージと、今の戦闘で一度もダメージを喰らっていないという2つの要因があったからこそ、一夏が深い傷を負うほどの光弾を喰らってもISの装甲を何とか残り、無理矢理の超近接射撃で福音を引き離すことが出来たのだ。

「海月、大丈夫なのか!？」

「うん、大丈夫……ぶ……、装甲、残って、るだ……る?」

しかし、それと体の痛みは別モノ。ISより伝わる神経情報として海月の体にはしっかりと福音の攻撃によるダメージが入っている。その結果、海月は意識を手放し、ゆっくりと海面へと降下していった。

「まずいよ、海月を早く引き上げないと……うわあ!」

落ち行く海月に一瞬でも視界を集中させたその隙に、福音はシャルロットに瞬時加速で近付く。そうして、防御パッケージなどまるで無視しているかの如き重い蹴りを浴びせた。

更にそれだけでは終わらず、福音の装甲のそこかしこから生えるエネルギー翼が追撃を行う。

海月が海面に落ちた、そのたった3秒後に、シャルロットは落とされてしまった。

『キアアアアアア……!!』

福音がこの世のものと思えない激しい咆哮を上げ、次の標的と言わんばかりにシャルロットの傍にいた鈴へと接近する。

海月の方へと向けた一瞬の隙は既に終わり、鈴は既にしっかりと福音へと対処している。鈴はここで自分が止めるという気概で福音と向き合う。

向き合っているつもりだった。

……次の瞬間、正面にいたはずの福音は爆発的な加速で旋回。正面へと構えていた鈴の背後に回りこんでいた。

「なっ……」

回り込む時の勢いをそのまま利用し、福音は高速の打撃を叩き込む。元より数発のエネルギー弾を喰らっていた鈴の『甲龍』にはそれが致命傷となり、機能停止へ追い込まれてしまう。

既に絶対防御を発動する機能以外を果たさなくなった鈴の『甲龍』へ福音は追撃を加えようとするが、そこへ両手に刀を握る箒が割り込んだ。

「落とさせるものか！」

遠距離から、持ち前の機動力を使って一気に間合いへと滑り込んだ箒。

しかし福音の中での箒の殲滅ランクが低いのか、はたまた単対多で箒の相手をするのは分が悪いと判断したのか、福音は斬撃を回避するとぐるんと大きく一回転しセシリアへと近づく。

ずっと味方に密接されていて射撃を加えることができなかつたセシ

リアとラウラが攻撃を開始するが、福音の機動力は先ほどまでのそれとは比べ物にならないほど上昇している。

事実、福音のスピードに追いつけるものは現時点で算しかおらず、その算が割り込んだら射撃はどちらにせよ停止せざるを得ない。福音から見れば、ただの回避ゲームのようなものだ。高速で動き回りながら射撃をしていたセシリアに、ものの10秒もしない間に追いついてしまう。

セシリアも高機動パッケージを装備してこそいるが、あまりにも福音の機動力がケタ外れなのだ。

「そんな、こつもあつさり追いつかれるなんて……！」

海月のスナイパーライフルよりは短いが、それでも2メートルはある大型のライフルを装備していたセシリアにとって、自分より早い相手に懐に入られるというのは明確に『敗北』という2文字を示す。距離を取って再度射撃しようとしてもすぐ追いつかれてしまうのだから、手立てが何一つないのである。

追いついた福音は、再度0距離からのエネルギー弾射撃を一斉に行った。

背後に迫る算を察知した福音が回避行動を選択したために、セシリアの被弾時間は先ほどのそれと比べればかなり少なかったが、機体はボロボロで最早まともに動ける状態ではない。

再度の一斉射撃を回避することなど当然できず、ライフルを手放してリタイアとなった。

そして　現時点で上空に未だ残っている戦力は、連携を前提としたラウラと福音に後回しにされている算のみとなった。

次に狙われるのは、当然　ラウラである。

福音が、筈に捉えられぬよう、また照準を合わせられないように変則軌道を描きながらラウラへと近づく。

「くっ！」

高速で近づく福音にラウラは砲撃で応戦するが、一次移行の福音でも彼女1人だけの砲撃はほぼ完璧に避け切っていたのだ。決してラウラの腕が悪いわけではないのだが、1対1の状況となつてしまえばあまりにも相性が悪い。

「停止結界で……くおっ！」

目に見えぬエネルギー線であろうと、その射程距離ギリギリで止まられたら意味を成さない。

更にA I Cは使用にかなりの集中が必要となるため、隙も生まれてしまう。

他に打つ手が何一つ無いラウラが放つエネルギー線は避けられ、そこに発生した隙を見逃さずに福音は翼を大きく開く。

「！ みっ」

最後の一文字を言う前に、『シユヴァルツエア・レーゲン』へと大量のエネルギー弾が襲い掛かる。

結果、「き」という言葉が紡がれたのは、海上へと落ち行く最中。ラウラが撃墜された場所は、海月の安否確認のために真っ先に動いたので当然なのだが、海月の撃墜された位置と全く一緒だった。

他の殲滅対象を落とした福音が、ゆっくりと筈へと体の向きを変える。

『クオオオオオオオッ………！』

福音が雄叫びを上げて箒へと加速してゆく。

「私の仲間が　　ここまでしてくれたんだ、堕ちるわけにはいかない！」

対峙する箒もありつたけのスピードで福音へと近づく。第4世代装備である展開装甲を細かく利用、福音のエネルギー弾をかわしながら斬撃を浴びせ掛ける。

福音が斬撃を回避し、蹴りを入れる。

紅椿が蹴りを回避し、同じく蹴りを入れ返す。

福音がその蹴りを後ろに下がって回避し、エネルギー弾を一斉発射する。

紅椿がエネルギー弾をまた後ろに下がって回避し、刀を振ってエネルギー刃を発生させる。

回避、攻撃。回避、攻撃。何度も何度も繰り返される応酬に、しかし着実と機体性能を発揮する紅椿が押し始める。

（勝てる！このまま行けばっ　　）

福音の体勢が崩れた所で、箒が2本の刀を構える。

後2メートル近付き、刀を振り下ろせば勝ち。仲間が、癩だが姉が、そして　一夏が、自分をこの一撃へと導いている。

そう感じた、そうだと言うのに。

キュウウウン……。

「ば、馬鹿なっ……！ここに来て、またエネルギー切れなどと……」
体勢を崩している福音に、刀が届かない。
刀が届かなければ、福音は再度動き出す。

そして、動き出した福音の腕を避けることも、今の筭には出来なかった。

53 移行拒否

「う、うう……む」

先ほどまで『銀の福音』と戦闘状態にあっただはずが、ふと目を覚ますと辺りは深い青色に染まっている。

身体の全てをひんやりとした感覚が包み込み、所々で気泡が上へと浮かんで行く。

（海の中……かな？）

とすれば自分がいるのは水の中。確かに、水の中で感じる浮遊感と圧力を感じる。

しかし、息が苦しいとは感じない。服装がいつの間にか制服に変わっているが、それが濡れて重くなるような感覚も特にはない。

（場所、どこだろ……それより福音は！？）

もし自分が今いる場所が先ほどの海域であるなら、上空には福音や、それと交戦している仲間がいるかもしれない。

そう思つて上を見上げたのだが、海面は見えない。

そもそも、今が本当に福音と交戦をしていた時だったのか？それすらも頭の中では理解ができていない。

「深いな……、息が出来てるのはISの機能か？とりあえず、早く海面まで上がらないと」

足をせわしくばたつかせ、上へ上へと上昇して行く。 が、一向

に空は見えてこない。

『そつ　い、　だ』

突然、耳に微かな声が届く。

あまり馴染みがないような、それでいてどこかに懐かしさを漂わせる、そんな声。

『そつち　は、こ　だ』

その声の雰囲気奇妙に心動かすものがあり、その発信源へと身体を泳がせる。

泳ぐことに疲れを感じない。

『そつだ　、私はこ　だ』

段々と、声が鮮明になってくる。

(　見つけた)

海の底、無骨な岩肌の上。吸い込まれるような黒い髪と、それに揃えたような黒いドレスを纏った女性が、静かに瞳を閉じてそこに佇んでいた。

「く、ふうっ……！」

福音の締めている筈の喉から、ひゅーひゅーと息の漏れる音が聞こえる。

既にエネルギーがないため反撃はできず、逃げ出すことも福音が首をがっちり掴んでいる上に周囲をエネルギー翼が覆っているのでままならない。

「いち、か……」

限界状態の筈は、無意識のうちにかすれた声でその名を呟っていた。ただ、一目でいいから彼に会いたくて。

しかし、無情にも福音の翼は光輝く。

「一夏……」

まぶたを降ろしたのは、覚悟を決めたからだろうか。それとも、何かを願ってだろうか。ただ、最後まで彼女は

イイイインツ……！

『！？』

彼女が喉に感じていた、福音からの圧力が不意に消え去る。いや、喉だけではない。周囲からのプレッシャーが、底冷えするような恐怖が、一切感じられなくなった。

何が起きたのか。それを確認するために瞳を開くと、目の前にいた福音は狙撃を受け、真横に吹き飛んでいた。

(こ、これは一体)

福音が吹き飛んだ方向と逆、右側を咄嗟に振り向く。

（まさか、 あんな大怪我をしていたはずなのに!?!）

つい先ほどまで渴望した存在が。今すぐに会いたいと、狂おしいほど望んだ人が。そこに、暖かな輝きを以って、光臨していた。

「……………それで、貴方は一体？」

対面する黒髪の女性に先ほどから何度も声を掛けているのだが、無言の睨みで返され続けている。

これは、無視されているのだろうか。それとも言語が違うのだろうか。さっき呼びかけていた声がこの人だとしたら、言語が通じていないわけではないと思うが。

「……………うーむ……………」

何だろう、この気まずさは。思わず腕組みして天を仰ぐが、先ほどの通りそこには水しか見えない。

……………そういえば、結局ここはどこなのだろう。真っ暗ではない深い青ってことは、少なくとも多少の光は届いているはずなんだけどな。

（まあ、少しぐらいぼーっとする時間があっても、いいのかもな）

思えば、たったの3ヶ月間で自分の周囲は激変した。

普通の高校に進もうと思っていたらISが起動できてしまって、IS学園に入学して、ドイツへ行って、会いたかったラウラが実は部

隊の隊長で、色んな人と喧嘩して。更にはいきなり実戦。一般的な人が数年掛けても起こしていくかいかないか分からないぐらいの大変動を、数倍に凝縮したかのような激動の3ヶ月だった気がする。

きつと、話が進まないのも少し休めということなのだろう。勝手に1人でそう解釈した俺は、目の前の女性の視線を気にせず足を放り出して座り込んだ。

「一夏っ、一夏なのだな！？身体は、傷はっ……………！」

「おう。待たせたな」

すこし前まで満身創痍だったはずの一夏は、軽やかにこちらへと飛んで来る。その身体には、焼け焦げた痕も血も見当たらない。安堵の気持ちと共に、ぼろりと涙が零れるのを必死で拭い取る。

「よかつ……………よかつた……………本当に……………」

「なんだよ、泣いてるのか？」

「な、泣いてなどいないっ！」

一夏の手が、優しく頭に乗る。そのままゆっくりとなでられると、ここが戦場ではないかのような錯覚に陥る。

「心配かけたな。もう大丈夫だ」

「し、心配してなごっ……」

それは精一杯の強がりだった。本当は泣いてもいたし、誰よりも一夏の身を案じていた。

目の前で微笑む一夏を前に、どうしても気恥ずかしさが隠せなかったと言っべきか。

「これ、やるよ」

「え……？り、リボン……？」

「誕生日、おめでとうな」

「あっ……」

7月7日。戦闘に夢中で忘れていたが、今日は自分の誕生日である。そういえば、買い物時に一夏とシャルロットだけが少し抜け出した時間があった。あの時は非常に腹が立ったが、もしかしてこれを……？

「それ、せつかくだし使えよ」

「あ、ああ……」

「じゃあ、行ってくる。まだ、終わってないからな」

リボンを私の手にしっかりと握らせた一夏は、体勢を立て直し突撃してきた福音へと向き直り、急加速していった。

「……落ち着いたか？」

座り込んでから数分経っただろうか、向き合って初めて女性の口が開かれる。

「最初に来たとき、貴方は異常に何かに急いでいるように映ったがらな。あのままでは話が咀嚼できないだろうと黙っていた」

「ああ……確かに、急いでたと思うよ」

少し休むことで、頭の中で多少だが整理がついた。相変わらず、目の前の女性が誰かは分からないが。

「さあ、では本題へと入ろう……。貴方は、力を欲するか……？」

長い黒髪をかき上げながら、女性はそう尋ねてきた。

「力？……いや、今はいららないな」

力、とはまた抽象的な質問だったが、俺の考えをそのまま言うところだけだ。

「いらない、とは……？」

「今、自分が持っている力が、使おうと思えば使えるはずの力がいくつもあるはずだろ？それを使えない今の俺が、新しい力を求めたって使いこなせないさ」

何がおかしいのか、目の前の女性は笑う。変なことを、口走っただ

ろうか？

「欲が、ないんだな」

「何言ってるんだ、俺は強欲だぜ？自分が欲しいものはどうやって手に入れるし、不満があれば突っかかっちゃうし」

「そうか……中々、興味深い答えだな」

ゆっくりと、感想を言いながら女性は頷く。

「なら聞くが、お前がさっきまで急いで欲しがっていたものは何だったのかな？」

「さっきは……確か、自分と戦っていた仲間の安息っていうか、安全と言うべきか……まあ、そんな所かな」

福音とさっきまで交戦していたはずで、仲間が無事なのかが分からない。できるならば、すぐにでもここを抜け出して仲間の元へに行きたい、そういうものを欲していた。

「……なら、今の貴方には力よりも目覚め、か。いいだろう、貴方が今の力だけで足りないと思うことがあれば、再びここに来るといい」

「いや、ここがどこかを教え」

言葉は最後まで続かなかった。

目の前の光景がかすれて、少しずつ消えてゆく。

最後に見た女性の顔は、どこか　そう、どこかが、誰かに似ていた気がする。

「くっ！」

福音が、先ほどから回避行動に専念し始めてきた。第からエネルギーを貰ったというのに、再びエネルギー残量は33パーセントを切っている。

『対象のエネルギー減少を確認。空域離脱を優先』

福音から、そんなマシンボイスが聞こえてくる。

攻撃対象としてくれれば無理矢理押してでも倒すことができたというのに、この状況で逃げられては全てが水の泡となってしまう。

しかし、追いかける余力はそこまで残されていない。

「くそっ、逃げるなあああー!!」

全速で追いかけようにも、それではとどめの一撃が刺せない。しかし、追いかけないと逃げられてしまう。

全力でブースターの出力を上げて追いかける。

『余力、確に　……!!』

恐ろしいスピードで空域を離脱しようとしていた福音の動きが、突如停止する。腹部に、強烈な白い一閃が突き刺さって

『……俺は、さっきも言ったぞ。逃がさないって』

海面から、海月の右腕が伸びている。右腕以外の装甲を全てそぎ落とされてこそいる海月は、そのスナイパーライフルで真下から福音を狙い打つたらしい。

「海月！大丈夫か！？」

『……大丈夫に見えるなら、明後日ぐらいに眼科に行け。それより、福音を倒すのはお前の役目だろ？』

「分かってるさ！」

海月の攻撃を直撃させられ、逃げられないと悟った福音がこちらへ向き直り、エネルギー弾を放つ。

それを全身に浴びながらも、零落白夜を福音へと当てる。刃からの感触が腕へと伝わってきた。

「おおおおおっ！！！」

ブースターを最大出力まで上げ、刀を胴部分からその奥へ、ゆっくり、ゆっくりと進ませる。

刹那、最後に力を溜めた福音が首筋へと攻撃を振りかぶるが 真下からの射撃に、その攻撃を不発させられた福音は、とつとつ機能を停止させた。

53 移行拒否（後書き）

さて、ここで問題があります。

実は僕、原作を3巻までしか持ってません！／＼べーん／

A・別の話とか今度は転生者のとか書けや

B・さようなら

C・さつさと4巻買って来い

D・O H A N A S H I

どれがいいと思いますか！

54 スチューデント・アンド・ゴスペル

「作戦完了」と言いたいところだが、お前達は独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

福音のパイロットを運びながら帰還した、メンバー計7人に待っていたのは説教と正座という素晴らしい特別待遇だった。普通であれば報酬がでてもおかしくはないぐらいのだが、罰則はそれを上回るということだろう。

しかし、こちら辺で足がジンジンと悲鳴を上げ始めた俺の嫁もというラウラのため、ジョーカーを2枚ほど切ることにする。つまり独占札。

「織斑先生。それに関して、2つほど話があります」

「何だ、聞くだけ聞いてやろう」

「まず1つ、一夏は意識不明の状態で帰還したため、待機命令を受けていません。誰かが看病をして起床時すぐに命令を伝えたのであれば別ですが、そうでなければ一夏が罰則を受けるいわれは無いはずです」

切り札その1。身内に敵しい織斑先生のことだ、これでも罰則は残るだろうが、しかし内容が軽くなる程度ではあるだろう。

「ふむ……、それで2つ目は？」

「はい。2つ目ですが、多分そろそろ連絡が」

そこまで言った所、丁度良いタイミングで山田先生が電話を持ってくる。待ってました、この連絡。

「もしもし。 はい……はい、了解しました。 ……はあ、戸鉄とボーデヴィツヒ、両名の罰則を取り下げる。別室で診断を受けて来い」

篤さん以下女子全員が、『信じられない』と言わんばかりに俺を見ている。勿論ラウラも例外ではない。あ、俺を除く男子1人も同じような感じだ。

「了解しました、では失礼します。ラウラ、立てる？」

「あ、ああ……」

俺とラウラが立って、いざ部屋を出ようとした所でセシリアの声がかんこえてくる。織斑先生、説明は頼みました。

「待ってください！納得が……納得がいきませんわ！」

「……先程のは、ドイツ軍からの連絡だ。『今回の作戦において、戸鉄海月及びラウラ・ボーデヴィツヒ両名はドイツ軍からの命令を優先すること』、……後は分かるな？」

うん、元々予約されてる旅館や海岸はともかく、戦闘した海域はIS学園の治外法権が適用されてないってことで、そちらでの行動はドイツ軍の命令を優先できるように取り計らってもらったんだよね。一応学園生徒はあらゆる機関の干渉を受けないことになってるけど、今回は緊急事態ということで『福音データは変わらず未提示』『内

容は絶対黙秘』以下色々と制約を付けた上で了承して頂いた。
戦力が欠けてしまった場合を考えた学園側も、結構焦っていたとい
うことなのだろう。

結果 今回の作戦で、俺とラウラだけはドイツ軍からの命令を優
先した扱いになるから、学園の罰則が適用されない。

「……う、裏切り者おつ!!」「」「」

襖を開けて部屋を出るとき、後ろからそんな声が聞こえた。振り返
ると、もう正座が苦手な方々は真っ青な顔で涙ぐんでいた。
仕方ないじゃないか、誰だって罰則は喰らいたくないもの。町内会
で有名な逃亡みっちゃんとは、何を隠そうこの俺のことで多分正解
だ。

「ね、ね、結局なんだったの？教えてよ」

「……道端で寝てたヨッパライが実は悪の大魔王で、助けようとし
たら救急車が破壊されたからその魔王を倒しに行ってたんだよ」

やはり昨日と同じくテーブル席で夕飯を取っていると、数名の女子
が事の内容を聞きだそうと俺に話しかけてくる。

ラウラに聞きに行かない辺り、俺のほう聞き出しやすいと思っ
たんだろう。しかし、一応これは学園で緘口令が敷かれている上に軍
からも口止めが入っている、言わば二重ロック。そう軽々と話せた
ことでもない。

「うん、これは誰か、もう少しとっつきやすい人に聞いた方がい

いかな」

「だから、道端で熟睡していた会社帰りのヨツパライが実は魔物を引き連れた悪の大魔王でだな」

「教えてくれてもいいのに、戸鉄君のケチー」

「……あんまり海月を困らせるな、言える範囲で私が話してやる」

「え、ボーデヴィツヒさん本当!？」

「ああ。まず、大魔王の配下の魔物のことだが」

そこまで聞いて、野次馬していた女子達は一斉に驚きをあらわにする。おい、流石に口に手を当てて震えるのは演技過剰だぞ。かく言う俺も多少びっくりしちやいるけれど。

「むう……、私が冗談を言うのは、そんなにおかしいか？」

「少なくとも俺は初めて聞いたぞ」

「戸鉄君が初つてことは、私たちにとっても当然初だよな」

「そうそう、人前であーんするカップルの片割れが知らないことを、うちらが知ってるわけじゃないじゃない」

人前であーん、がカップルの一種の基準になっているらしい。それはともかく、ラウラが冗談を言わないタイプの人間ってというのは共通認識で正解みたいだ。

「……そういえば、今日はあーんしないの？」

女子の1人が、作戦内容を聞き出せないと悟った瞬間に爆弾を投下してきました。未恐ろしい子ですね。

いや、実を言つと飯を喰い始めてすぐにそれは考えたんだけども。

「口の中が盛大に切れてて、相手の箸に血がついちゃうから今日は残念ながら、ね」

「口の中って、いつそんな傷をつけたの？」

「魔王の手下との魔法合戦で……」

おいしい、何で呆れるんだよ。仕方ないだろ、福音との戦闘中に海に落つこちて、その時に盛大に切つたなんて言えないんだから。

「とにかく、だ。私と海月からは何も情報は出ないから、聞きたいのであれば隣の部屋のシャルロットにでも聞いてこい」

そのラウラの一言で、話を聞きたがっていた女子はそろそろと大広間へ出て行った。

……まさか一番口が堅いシャルロットに振るとは、ラウラも人が悪い。

なんて考えてたら、女子の大半が消えた部屋で、ラウラが急に心配そうな目で見つめてきた。

「口の中が切れてる、と言っていたが、大丈夫なのか？」

「ああ、うーん……痛いけど、大丈夫だよ。ラウラこそ右腕がさっ

きから少し不自然に動いてたけど、もしかして痛いんじゃないの？」
ぎくり、という効果音（が聞こえた気がした）と共に硬直するラウラ。どうやら凶星らしい。ばれないと思っていたのだろうか？

「言ってくれば手伝うのに、何で言ってくれないのかなあ」

「は？て、手伝うとは……」

そこまで言われたところで、無防備になっていた手から素早く箸を抜き取る。ラウラが気付いたときにはもう遅い。って何で策士みたいな言い方になってるんだよ、『お前は既にワシの術中にある』みたいいな。やかましいわ。

「はい、あーん」

「！？ ……あ、あーん」

結局のところ、これに落ち着くわけである。

織斑先生曰く「食事は迅速に」なのだが、怪我人がいるわけだしまあ大目に見てもらおう。

かくして、俺とラウラは他の生徒の2倍近い時間を掛けて食事を行うこととなった。

「ただいまー……あれ、一夏？」

少し時間をかけた食事が終わった後、特にすることもないので自室

に戻った所、既に食事を終えているはずの一夏の姿が見えなかった。

(どこか行ったのかな……浴場？いや、この時間は男子が使える時間じゃないし……)

少し気になったので、コアネットワークを利用して場所を特定してみると……あ、まだ登録し合ってなかったっけ。正確な座標が表示されないや。

もうすぐ点呼の時間だろうから、そろそろ帰ってこないとやばいんだけどなあ……あ、そうだ。

「戸鉄です、ハルフォーフさん？」

『はい、こちらクラリッサ・ハルフォーフ大尉です。戸鉄さん、どうしたのですか？』

「衛星から、織斑一夏は見えますか？」

福音の時の搜索開始時間とか、その前の緊急時の反応の速さとか作戦後の話とか。

とりあえず色々な理由の元、ハルフォーフさんがこちらを衛星で監視していることは既に知っている。

本人も「あ、ばれちゃいましたか」と言っていたから確定情報。きつと通話の向こう側では舌でも出していたのだろう。

『ちょっと待ってくださいね……あ、海岸にいるみたいですよ』

「海岸？」

『ええ、何やら岬の方で、誰かと一緒にいますよ』

誰かと一緒に？

あの唐変木が！？

嘘だろ！！

という酷い（けどあなたが間違いではない）中傷はさておき、そんな良い雰囲気ですべて誰と一緒にいるのだろうか、凄く気になる。

『あつ！？ちよつと待ってください、今顔と顔を近づけてますよ！』

顔と顔つてことは……顔と顔つてことだよな。ええつと……つまり。

キス？

あの朴念仁が！？

嘘だろ！！

という（以下略）、とうとう一夏も誰かと好き合う仲間になったわけか？

ガチャツ。

……扉が開いて、点呼を取りに来た先生
織斑先生　　が、こちらを睨みつける。

「おい戸鉄、織斑はどうした」

「……どっか行ったらしいです」

『戸鉄さん、織斑さんがISからの攻撃を受けてますよ……？多分、ブルー・ティアーズ、甲龍、ラファール・リヴァイヴ・カスタムの3機ですね』

「訂正、一夏は海岸で篝さんと一緒にセシリアと鈴ちゃんとシャルロットに追い掛け回されているみたいです」

その報告を聞いた所で、織斑先生の顔がフツと笑う。笑い方としては小悪魔な笑い方という表現が正しいのだろうが、この方がこういう笑い方をすると女帝である。

「……では、一夏は罰則をつける必要があるな。……戸鉄、お前はいいのか？」

「織斑先生、教師なのに生徒を非行に走らせないで下さい」

結構、俺だって抑えてるんですから。

そう続けると、もう一度織斑先生は軽く笑った。

「……お前にはまだ言ってなかったが、まあ、何にせよよくやった。では、な」

それ以上言うことはないということだろう、織斑先生は扉を閉めて去っていった。

よくやったのは落ち込んだ俺じゃなくて、そういう俺を頑張らせてくれた皆ですよ。

「まあ、何にせよ」

靴に入れていた小説が、扉が閉まった衝撃のせいか床に落ちる。それは、昨日の夜に読んでいた小説。題名は

「『学生たちと福音』、か……」

流石は2ヶ国共同開発、完璧なゴスペルだったよ。

一夏が女子達に追い回されているであろう中、オビの台詞にそんな当て字をしながら、俺はやっとこさ戦いの終わりを感じていた。

54 スチューデント・アンド・ゴスペル（後書き）

「どうやら」さっさと4巻買ってこいこの貧乏人がア！」が一番多いらしいので、出来るだけ早く4巻を買ってきます（汗

全巻買う金は…今はないんですよ

55 @k u r a g e | b a i t o (前書き)

4巻、購入してきました！

後に続ける導入話なので、今回はいつもの50 70%ぐらいの長さまで。

「非常に申し訳ありませんが……、『シユヴァルツエア・ヴェレ』の修理費用の一部を、海月さんの給金及び貯金から回させていただきます」

俺の夏休みは、ハルフォーフさんによるその一言によって幕を開けた。

事の発端は、言わずとも対『銀の福音』戦である。

あの時にオートクチュール、即ち専用機専用パッケージをありえないまでに大破させてしまった、これが原因。

専用ISが通常のISと比べて『様々な特殊兵装の性能テスト』やら、同じく『個人の技能に特化した特殊兵装』やらという理由で高いことは周知の事実であるが、勿論機体専用のパッケージであってもそれは例外ではない。

用はお高いパッケージをたった1回の使用でべっこんべっこんのオンボロの鉄クズ　は言いすぎか　にしてしまったわけで、勿論それでも実戦データという貴重なデータは取れたがそのメリットをコストが上回ってしまったのだ。

その分の差額が、俺の代表候補生としての給料から差し引かれることになったため、結果として俺の貯金はスツカラカンという話。

さあ、ここで問題だ。

高校生がお金を手に入れたとき、どういう活動をすればよいか？
もしくは、どういう行動を選択するのが適切か？

答えは　バイト、である。夏休みという非常にロングなバケーションを使って、金銭的な問題を解決する。

問題はバイト先。IS学園から可能な限り近距離にある場所で、あと夏休み限定でのお勤めを許可してくれて、高校生オーケーな場所。数箇所を目星を付けているが、後3つまで絞って内容を再確認してみると、どれも正直似たり寄ったりなのだ。

「……とりあえず、ここに決めるか」

両目を閉じて、3つの中から1箇所をランダムに指差す。迷った時に、細かい条件をうただ見てても決まるとは到底思えないので運任せに決めてみた。

「@クルーズか……」

@(アット)クルーズ。女性はメイド服が、男性は執事服が制服の(確実にそういう層を狙っているであろう)喫茶店。

時給も良く、IS学園からもそこそこ近い。更に緊急で人材募集をしているため、面接からシフトが組まれるまでの時間が非常に早い。急にバイトを始めることになった俺にとって、条件だけは理想的だ。問題があるとすれば　やはり、知り合いにこの喫茶店の制服姿を見られるのは少々気恥ずかしいといった所か。

「ま、目を瞑って決めたのは俺だし、とりあえずここにしてみよう。ばれたらばれたで仕方ない」

と言いつつも筆筈から伊達眼鏡を取り出し、非常に残念ながら全国区で知っている人は知っているといるというぐらいの知名度になってしまった顔の印象を少しだけでも変えることに務める。

「夏より有名でもないと思うし、ニューズなんてあんまり見ない人からすればただの男子だからそこまで几帳面にならなくてもいい……とは思うのだが、念には念を入れる。」

「さて、電話番号は」

2日後。午前中に面接を終わらせた俺は 何故か、執事服を身に纏っていた。

「あのう……、面接当日からシフトを入れられるなんて、予想外と言いますか聞いていないと言いますか……」

「あら、似合ってるわよ?」

「そういう話じゃありません!」

「できるだけ早く入りたいて言ってたじゃないの」

制服を着た、見た目20代後半ぐらいの店長が言ってくる。いや、できるだけ早くって早すぎじゃないか?

「接客業は初めてだし、もう少し基礎を教えるからシフトに入らせるとか、そういうのが普通だと思ってたんだけど。あれ、俺が間違ってるの?当日からいきなり働かせるのが普通なのかな?」

「大体はさつき教えたじゃない、あれをこなせば問題ないわよほら、お客さん」

「あっ、店長!……っと、@クルーズへようこそ!お客様、3名様

でしょうか？」

それと同時に、店長が俺との会話を切り上げて逃げていくのが横目で見えた。都合よく客が入ったからって逃げられるとは酷いものだ。……とりあえず、入ってしまったからには仕方ないので、付け焼刃の知識で接客を開始してみた。

カラン。入り口が開き、4名ほどの客が入ってくる。

「いらっしやいませ、@クルーズへよう　こ、そ……」

へ？何故どもったかって？噛んだわけじゃないぞ。

「やほ、くらげんじじゃないか」

「えっ、え、戸鉄君、ここで働いてるの!？」

入ってきた客が、IS学園1年1組の　単純な一言で表現すれば俺と同じクラスのメンバーだったからだ。

バレないように努力しようとしたら、1日目で噂好きの知り合いにバレるってどうよ。なあ、転寝さんと布仏さんと相川さんと田島さん。

現実逃避をするべく、俺は他人のように振舞ってみようと考えた。

「お客様、4名様でよろしいでしょうか」

「うん、4人で大丈夫かな。さて、クラスの皆にも早急にメールを回さない」と

「それではこちらのお席へどうぞ」

「おお、くらげん、様になってるね。よし、一斉そうしーん！」

早急に現実に戻されたが、いきなり「うわあやめてくれ！」なんて大声を出すわけにもいかず、俺としてはこのクラスメイト4人から注文を承る以外できない。

もちろん、その間にメールはIS学園生徒の携帯電話をぐるぐると回っているだろう。個人情報流出万歳、うわーん。

「はあ……、情報が回った当日だけで30人もIS学園の生徒が来るなんてな……はあ」

先程から何度も何度も、最早溜息しか出ない。

しかし、折角合格できたバイトなわけだから、ここでやめるというわけにもいかないのがまた困った所である。

仕方がないから、『俺がいることで客が増える』とポジティブシンキングに切り替えることにした。通算31回目の溜息を漏らしながら。

56 その頃一夏は(以下略)

それは、8月のとある金曜日の話である。

(コレ、どうしようか……)

俺の手には、2枚のチケット。
つい先日開園したばかりの娯楽施設、ウォーターワールドの入場券である。

これを手に入れた経緯。

昨日、いつものように@クルーズで働いていたら、一緒に働いてるおねーさんが彼氏と別れたとのこと。『持ってけドロボー!』と放り投げたのを最速でキャッチした、以上。

これを持って何故悩んでいるかの理由。

チケットによると使用できるのは明日。そのおねーさんと違って、俺は明日@クルーズのバイトのシフトがある。そうでもなければラウラを誘って遊びに行くのだが、店長曰くどうしても明日休むことはできないらしい。人数ギリギリなんだとか。

何故、手に入れた昨日ではなく今日になって困っているかの説明。

ポケットに入れたまま、存在をすっかり忘却の彼方へと追いやっていたため。

つまり、当日券を購入する場合ですら最低2時間並ぶのは必至とまで言われるチケットを、紙束にしてしまいかねない状況というわけである。

誰かに渡そうにも、食堂で『このチケット、2人に譲るよ』とかなんとか言って振りかざそうものなら、コンマ1秒を数えられるかという瞬間に食堂は殺気漂う戦場と化すだろう。

（公平に渡す方法、公平に渡す方法……そうだなあ）

くじを作って、当たった女子生徒に渡そうか？学園生徒全員分のくじを作成する手間と、当たった相手が既に予定持ちだった場合のやるせなさを考慮して却下。

それこそどこかに落としたりした風にして、拾った人のものに……いや、一応、多分淑女の多いこの学園のことだ。ねこばせずに届ける生徒でもいたら、捨てる労力の対価が「俺の手に再度戻ってくる」という虚しいものになってしまうのでこれも却下。

うーん、うーむ？……うーん。どうしよう。

そういえば、知らない人に渡すより知ってる人に渡した方が違和感がないんじゃないだろうか。

知らない人に渡そうと思ったらその人も用事が入っていたよ！なんてことになったら、多分マグロが泳ぐのをやめるくらい気まずいだろうし。分かりにくいけど、つまり死ぬほど気まずい。

……よし、食堂で一番最初に俺に話しかけて来た人に無償提供しよう。指名制で内密に渡せば騒ぎも起きないはずだ。

8月。またこの季節がやって来た。降臨なさった。おいでなすってしまった。

この国の、湿度の高いべたべたとした夏は本当に嫌いだ。全く、好意を寄せている相手の名前の中に入っている季節が最も嫌いだなん

て、酷い皮肉だと思う。

あたしは鳳鈴音、中国の国家代表候補生で、IS学園の1年生。好意を寄せている相手 織斑一夏を好んでいる女子達の中で、唯一自分だけが1組ではないというのもまた悔しい。

そういうハンデを覆すためには、クラスの垣根を越えた行事。例えば、この8月の夏休みなんかを利用するのが一番だ。つてのは分かっているんだけど

「うう……」

正直に言っちゃうと、この暑さのせいで行動する気が起きないのだ。まったく、何故季節は春夏秋冬の三季じゃなかったのか。

(ああ、もうっ！こんな近くで女の子が暇してるんだから一夏も誘いにぐらい来なさいよ、あの甲斐性なし！)

なんて腹を立てつつも、あいつの甲斐性なしはそういえば昔から全然変わってないな、と思いつく。そのため、腹を立てていたエネルギーは行き場を失い溜息へと変わった。

とにかく、何かあいつを誘えるようなキツカケを作らなければ。五反田食堂、もとい旧友の五反田弾の所に久々に遊びに行こうとか

ああ、ダメだ。あそこの家には、同じく一夏に気を寄せている蘭がいる。

(どうしようかしら……あれ?)

今、食堂へ入っていた影は男子制服じゃなかっただろうか。

もしかして、一夏なんじゃないの？あ、海月の可能性もあるっちゃあるけど。

とりあえず、何か理由を付けて誘うなら他に予定を入れられる前の方がいいし、どっちか分からないなら声を掛けてみよう。

「ねえ、ちょっと!」

声が届いたのか、男子制服を着たその生徒は食堂からバックして

あっちゃー、海月だった。

戸鉄海月。一夏と並ぶもう一人の男性操縦者イレギュラーで、ドイツ代表候補生扱いであると同時にラウラ・ボーデヴィツヒの恋人でもある。全く羨ましいと思ったらありゃしない。

「ああ、鈴ちゃんか。どうしたの?」

「あ、いやその……一瞬、制服だけ見て一夏と見間違えて」

こうして本人に面と向かって言ってしまうと、少し失礼だっただろうか。

いや、制服はある程度自由だっていうのに全然いじってないこいつらが悪い、きつとそつだ。そう思うことにした。……ごめんなさい。

「ああ、しかし、見間違えてよかったな。おかげで一番乗りだ。ちよつと聞くけど、鈴ちゃんは明日暇だったりする?」

?

こいつは何を言っているのだろうか。

「ええ、今の所、特にすることはないけど」

「じゃあこれ、あげるよ。明日バイト入ってるからさ。一夏でも誘って行ってくればいいんじゃないかな?」

わけがわからず考え込んでいるうちに、海月は笑いながらあたしの手てに小さな紙切れを少し強引にねじ込んだ。

とりあえず、右てのひらを空けて中身を確認すると、

「なにになに……ウオーターワールド招待券、日程は8月第一週目の土曜日、って……え？」

え？

えっ、……ええ。え？

このウオーターワールドって、ついこの間できたばかりのあの……予約額かなり高い奴じゃないの！？え、ええええええええ！何でこいつ、こんなものタダで渡しちゃうのよ！

「いやあ、俺もタダで手に入れちゃったんだけどさ。ほら、俺が使わずに持っても宝の持ち腐れ、ってやつになっちゃっちゃん？」

そう言っつて海月はすたすたと食堂の中へ歩いて行ってしまった。

全く、寮の中でオークションでもすれば5000円ぐらい簡単に付くだろうに。

売らないにしても、あたしならバイトなんて絶対すっぽかして遊びに行くだろう。全く律儀な上に欲のない奴よね。って、それはともかく……。

「一夏を誘う口実が、こんなに簡単に手に入った……！」

思わず心で、ではなく右腕をぐっと上げてガッツポーズをする。

気付けば、ついさつきまで感じていた暑さがすっかり消えていた。

食堂を出たとき再びじめじめとした蒸し暑さを感じたから、それが冷房のせいだったのは明白のだが、つまりその時のあたしはそれすら気付かないぐらいに浮かれていたわけだ。

1日が経過して、土曜日。雨は降っていないどころか雲ひとつ見えないくらい空は晴れ渡っており、絶好の娯楽日和と言って差し支えないだろう。

とはいえ俺が行くのは娯楽ではなくバイトなのだが。市街地へ繰り出す人が多ければ結果として多忙になるので、つまり既に多忙が約束されていると言って大体間違いはない。

「さて、そろそろ行くか　お？」

準備を終え、バイト先の@クルーズに行こうと部屋を出たところで私服を着ているセシリアとばったり出会った。

私服は青を基調とした清楚な服装で、この暑苦しい季節にはぴったりの涼しげな印象を与える。『ブルー・ティーズ』の印象も多少はあるのかもしれないが、やはりセシリアには青い色が似合っているように思う。

「セシリア、なんだかやけにご機嫌じゃないか。これから何かあるの？」

「ええ、少しばかりいいことが……こほん。海月さんこそ、私服でどちらへ？」

会った時の笑みを崩さないままセシリアは聞き返してくる。ここま
で気分がいいということは、一夏絡みの何かだろうか。……でも、
あれ？一夏って鈴ちゃんと遊びに行く予定なんじゃないのか？
少し遅い起床をしたら既に一夏はいなくなっていたので、一夏がど
ういう予定を立てているのかが分からない。もし一夏が鈴ちゃんと
遊んだあとにセシリアと遊ぶとか、『セシリアからもどこかに行か
ないかと誘われたから』とか言ってる3人で待ち合わせしてたりした
ら、それはもう頭部に狙撃するレベルだ。

「俺はちよつとバイトに、ね。こないだの　まあ、その、フレ
ムを大破させちゃったせいで所持金が全然ないんだ」

「こないだのというと　ああ、あの時ですわね。それで、バイト
とは一体どちらで？」

「接客業だけど、場所は秘密。知り合いに店に来られたら恥ずかし
いじゃないか。それじゃあ、またな」

どうやら、セシリアの携帯には俺が@クルーズで働いているという
情報は回っていないらしい。あの時のメンバーなら既に1組の生徒
なら全員知ってると思ったんだが、もしかして一夏狙いの女子達に
は伝わっていないとか？

ともかく、疑問を持ったときですらご機嫌の笑顔を一切絶やさない
セシリアと校門まで一緒に行き、そこからお互い行き先が違つたため
別れた。

57 そして海月は（略）

（一夏さんからの誘いで、一夏さんと、一夏さんとデート！）

わたくしことセシリア・オルコットが、海月さんに指摘されたとおり非常に機嫌が良いのは 昨日、なんと一夏さんの方から遊びに誘ってくれたというのが大きい。大きいというより、100パーセント中の100パーセントがそれ。

（しかも、場所はあの人気のウォーターワールド！海月さんぐらいのエスコート力を持っていただきたいと前々から思ってはいたことですが、しかしそんな心配は不要でしたのね！）

そうともなれば、自然と化粧や服のコーディネートにも気合いが入る。

今だって、下手をしたら待ち合わせ時間5分前を大幅に上回る30分前に到着しかねない時間帯。自分がとても浮かれているというのを容易に自覚できてしまう。

「さて、ここがウォーターワールドですわね。待ち合わせ場所のゲートはどちらかしら？」

入り口のゲートを地図から見つけ出し、少し早足で向かう。多分相手はまだ来ていないが、もし来ていたら待たせるわけには

「ん？」

「あら？」

不意に、IS学園でよく聞く声が耳に入る。確か、この声は。

「これは、どうも。鈴さん」

「う、うん？セシリア、こんにちは」

どうして、ここに鈴さんがいらっしやるのでしょうか？

確かにここは人気の施設ですし、このような休日知り合いと遊びに出るといったことはありえそうですが……それにしても奇遇ですわね。

（しかし！鈴さんと違い、わたくしは一夏さんですわ！鈴さんの悔しがる顔が目に浮かびますわね！）

まだ来ない約束相手を心待ちにしながら、それから先の

それから

それ

「どうしたのかしら……」

約束の10時から、もう20分近く経過してしまった。

鈴さんも携帯電話を何度も取り出して時間を確認しているようなので、あちらも相手が遅れているらしい。

（もしかして、事故に会ってるとか……いやいや、そんなまさか！ISがあるのですから、少なくとも大怪我をするなんてことは）

「もしもし！？あんた何してんのよ！今どこ！？」

不吉な予感を頭で否定していると、突然近くで鈴さんが声を荒げる。どうやら、待ち合わせ相手と携帯で連絡を取っているらしい。

「はあ!? ……なに? なあっ!?!」

どうやら、鈴さんは怒り心頭のご様子。相手の方が電車を乗り間違えでもしたのでしょうか?

とにかく、近くで聞いていたら耳に声がキンキンと響き、声が聞き取れない。……あら? 今、わたくしの名前が一瞬出たような?

「だ、大丈夫なわけじゃないでしょうが! はあ!? な、なんてことをしてくれたのよ、あんたは!」

一瞬静まったかと思ったら、再度の大声で再び耳が痛む。……と、そこで通話は終わったらしい。

「あの、鈴さん? どうなさったの?」

「ふ、ふ、ふ、セシリア……よく聞きなさいよ……。一夏は来ないわ」

「……………」

はい?

がやがや、がやがや。

@クルーズは、当然今日も大繁盛。

何がここまで人気を生み出すのかって、とにかくこの店はあざといのだ。

女性のメイド服は男のマニア心をくすぐるような白黒基調なもの、執事服もこれまた女性のマニア心を以下ほぼ同文。それを、店長が采配して相手に一番ウケのよさそうなスタッフを各テーブルにつけるのだ。あざとい理由その¹。

しかも『顔で合否を決めているのではなからうか』と勘繰ってしまいうぐらいに美女美男率が高い。これは、接客に回っている俺も美男の一員に回れているのかもしれないと考えれば、少しは嬉しいことなのかもしれないが。あざとい理由その²。

更には特別感溢れる期間限定メニュー、多種多様な種類の紅茶やコーヒーなど、商品に関しても隙がなく客の心を奪う。料理の完成度もそこそこに高い。あざとい理由その³。

以上が@クルーズの説明である。@はきつと「あざとい」のイニシヤルだろうと、俺は信じて疑わない。

「戸鉄君、2番テーブルにオーダー取りに行つて」

「了解しました」

慌てて2番テーブルに行く。……と、布仏さんと転寝さんが座っていた。何と、俺がバイトに来ている時はこの2人とも皆勤賞である。まだ今日で3回目だが。

「お嬢様、ご注文は何になさいますか？」

この言い方も、最初は非常に恥ずかしかったが今は慣れた。今では、知り合いだらうと問題なくお嬢様と言えるまでになっている。まだ3回目だが、流石は町内会で有名な無神経みっちゃんである。言っ

たやつ出て来いコラ。

「それじゃ〜ね〜、私はこれで〜」

「あ、私もこれで。織斑君も戸鉄君も、仕事大変なんだね」

「かしこまりました、オレンジジュースが2つですね。少々お待ちください」

オーダーをしつかり受け取り、厨房へと伝える。あの2人も、もう少しぱふえだとかけえきだとかいうハイカラな食べ物を注文すればいいのに。

「それにしても、おりむ〜も学園にいるんだったらつれてくればよかったね〜」

びくっ。

「いやいや、山田先生が書類を見落としてたのを織斑君に必死で謝ってた場面、私みかけちゃったんだよね。あの切羽詰った状況だと連れ出すのは無理だよー」

びくびくっ。

なんと。もしかして一夏は今、学園にいるのか？

しかし、確か鈴ちゃんは昨日一夏を誘ったわけで。 うーん？

「お嬢様、オレンジジュース2つ、お持ちしました。」

それだと、鈴ちゃんは誰と一緒にウォーターワールドへ行ったんだ？

何故だか、凄く嫌な予感がするのだが。

今朝のセシリアのご機嫌具合とか、そういえば一夏にどこか誘われたかって程度に機嫌よさそうだったよな。

まさか いや、まさか。一夏も鈴ちゃんに、昨日の間に連絡ぐらいい入れているだろうに。

(しかし、一夏のことだから……ありうる!)

とりあえず、事実確認のために通話で聞いてみよ

「戸鉄君、オレンジジュースもう2つ頼める?」

「はい、かしこまりました。少々お待ちください」

の前に、今考え事で少し立ち止まっていたらしいので、聞くのは次の休憩辺りにしよう。今は仕事仕事。

「……で、やっぱり鈴ちゃんはセシリアと一緒にいるわけだ」

『そうよ!何よ一夏め、昨日は開いてるって言ったのに!』

通話で確認したところ、なんとまさかのまさかで一周して(?)やっぱり鈴ちゃんはセシリアというらしい。

声を聞くだけで、非常にご立腹なことはすぐに分かる。

「昨日のうちに一夏からは何も聞かされてなかったの?」

『今日に備えて8時に寝たら、どうやらその8時より後に一夏が言いに来たらしく……はあ』

ふむ。

どうしてこう、一夏とその周りの人達はタイミングが非常に悪いんだろうか？

考え事しているぴったりのタイミングで話しかけてくるセシリアとか、2人きりで話す予定で屋上に行ったら何故かいるメンバー全員とか。そういう星の下に生まれているとしか思えない。

「まあ……ご愁傷様」

『ああーっ、もう、この後どうしようかしら……』

「折角だしセシリアとでも楽しめば？……なんて雰囲気じゃないよなあ……あ、ごめん、そろそろ休憩終わるから切るね」

『……どうせだし、バイト先教えれば行ってあげないこともな』プツツ。

大変申し訳ないが、通話は強制終了させていただきました。何故セシリアも鈴ちゃんも聞いてこようとするんだ。

「店長、休憩終わりました」

「そう、じゃあちょっと遠出になるんだけど、これ届けてくれない？」

軽く背伸びして気持ちを切り替えて、さあ涼しい店内で仕事に励むぞと戻ってくると、何やら大きな荷物を急に店長が手渡してきた。

「……これは？」

「ウォーターワールドって分かる？あそこにうちの系列で店舗を出してるんだけど、どうも予定以上に人が押しかけたせいで材料が不足してるらしくてね。特に今日はイベントがあつて大量の売り上げが狙えるから、ここで店を閉めちゃうのは勿体無いんだってさ。あ、このバッジを見せれば一応顔パスで入れるから」

「はあ、分かりました」

どうやらこの土曜日、俺はウォーターワールドと妙に縁があるらしい。

ともかく、今は一刻も早く荷物を持って出なければ。

「……そういえば、今日行ってるイベントって一体全体なんなんだろう？」

58 店長逆転！（前書き）

金がないとか言いつつ、結局7巻まで購入しました（笑）

58 店長逆転!

「ああ、君が言われてた海月君だね？」

「はい、店長に言われた品物を届けに参りました」

ウォーターワールド内、フードコート的一角。俺こと戸鉄海月は、ちょうどそこに40×30×30のダンボール箱を運び終え確認を取っている最中である。

店長に「絶対開かないこと」と念を押されたダンボール箱（自分が今着用している執事服より軽いため、いったい何の材料が入っているのかが一切分からない）の封を系列店の店長と思しき男性は丁寧に破き、中身を確認している。

「中身が違ったり、壊れていたりしませんか？」

「……うん、確認した。僕が頼んだもので間違いないね」

何故か、受け取ったダンボールの中身と俺を見比べながら言うてる。

まあしかし、そんなことはどうでもいい。@クルーズ本店はちょうど混み合う時間帯（きこくじょう）なのだから早く戻らなければ。

「了解しました。それでは失礼しますね」

荷物に問題はなさそうなので、一礼してからぐるりと入り口へ振り返り歩き出す。 つもりが。

「ちょっと、ちょっと待ってくれよ。話と違うじゃないか」

「……へ？」

話？

店長に「時間が無いから急いで運びに行け」と言われ、26度設定のクーラーが効いた店内から35度の直射日光が効いた屋外に放り出されるまでのたった30秒の間に、他の何かを話していたというのだろうか。少なくとも、俺には店内のがやがや音と厨房の金属音しか聞こえていなかったはずだが。

しかしそんな俺の疑問も、次の一言で解消された。

「こっちの販売を手伝ってくれる人を1人、制服と一緒に送ってくるって約束だっただろう。聞いてないのかい？」

「はい一切聞いてません」

聞いてないどころか騙されましたよ、僕は。

不足しているのは「人材」じゃなくて「材料」って聞いてたし、荷物だって同じく「材料」って聞いてましたともさ。道理で荷物が軽いなと思っただけだよ。

「……けども、来たからにはこちらで仕事したほうがいいんじゃないか？ うね。何の仕事をするばいいんですか？」

「それすら聞いてなかったのかい！ 全く、あつちの店長は……って愚痴っても仕方ないね。君の仕事は」

「冷たい飲み物、食べ物はいかがですかー！」

俺の仕事、それは今日行われるというイベント『水上ペアタッグ障害物レース』の周囲での販売だった。

人が大変集まるこういう状況において、熱中症の予防や水分補給、また単純に暑い気候が苦手な人のための即時販売は非常に高い売上が期待できる。

問題は、俺が、非常に、非常に、それはもう、嫌なくらい、暑い気候が苦手な人の部類に当てはまりすぎる人間だということだろう。というか、この湿気大国日本の妙にべたつく暑さが大好きな人間なんて、この世界に存在するのだろうか。町内会で有名な統計みっちゃんである俺から見ても、今のところそういう人の比率は0のままである。

……なるほど、こういう事情を正確に店長が知っていたのならば、全て正しく伝えれば俺は拒否していたかもしれない。

「冷たい飲み物、食べ物はいかがですかー！あ、はい。スポーツドリンクが2つですね」

蓋を開けながら、ちらりとイベント会場に視線を移す。

何やら妙に女性参加者が多い　　と言うか、全員女性参加者なんじゃないだろうか？奇遇なのかそれとも故意の事象なのかは、参加希望受付が終わった今となっては確認のしようが無い。

「ありがとうございました。　　あれ？あそこにいる選手って……？」

妙に、見慣れた髪型のペアが見えた気がする。

日本人離れた金色でロールのかかった髪の子と、サイドアップで日本人に近い色をした髪の子。

言わずとも、その2人はまんま今日ウォーターワールドに来ているセシリアと鈴ちゃんである。

準備体操を非常に入念に行っており、それはもう背後に炎が浮かび上がって見えるほどの気合の入りよう。……ああ、賞品狙いか。

確かこのイベントの賞品は、5泊6日の旅行ペアチケットだったはず。どうせ、お互いに『手に入れた後どうにか奪い取る』とでも考えているんだろう。

(しかし、あの2人が本気を出すってことは……はあ、他の参加者には合掌しなきゃいけないな)

障害物競走は、様々な状況に対応できるよう訓練されたIS学園生徒、特に代表候補生には非常に有利なルール。

しかも、「妨害あり」というルールは、「能力が高い相手を妨害している」と時間がかかり、妨害を掛けたチームも首位争奪戦への参加が困難になる」という点を見れば、実力が低い人間を勝手に蹴落としてくれるルールと取れる。

誰か、金で雇われた妨害専門グループがいたりしてな。いやまさか、たかだか沖縄旅行程度のためにそこまで金をつぎ込む頭の悪いお方がいるとは到底考え難いが。

(対抗馬は あそこのゴツイ女性陣か?)

確か、テレビでも何度か見たことがある2人記憶に間違いが無ければ、柔道選手とレスリング選手だったはずだ。

身体は走ることより戦うことに重点を置いた筋肉のつき方をしているため、スピードではセシリア鈴ちゃんに敵わなかったとしても妨害戦では非常に厄介だろう。スピードだって、そこいらの鍛えてい

ない女性と比べれば充分早い……と思う。

「まあ、頑張れ　はい、ジンジャーエールですね」

頑張れとは、もちろん「盛り上がれば沢山商品が売れるから頑張れ」の頑張れだっということは、心の中に留めておいた。

だって、筋肉馬鹿2人が優勝するより、見目麗しい高校生2人が優勝したほうが盛り上がるだろ？

「さあ、いよいよレース開始です！位置について、よいい……」

パン！と空砲のピストルが音を出し、レースが開始された。

水が掛からないよう、自分で（材料だと思い込んで）持ってきていた防水用の合羽を羽織る。

2人は　おや、早速妨害を受けているじゃないか。

先頭グループが一步先へ進んでいるのに、妨害が多すぎて思うように進めていないらしい。

「うーん……あ、はい！パインですね、ありがとうございます」

歩きながら呼びかけるのを忘れていたことを思い出し、再び声を出して販売を開始する。

チラチラと横目で経過を確認すると　妨害ペアが、2人にリアアツトを仕掛けていた。

「あーあ、あのペアは落ちるか……はい、コーラ2本ですね、360円になります」

突如、大きな歓声が主に男の野太い声で沸きあがる。何が起きたのか確認すると、どうやらセシリア鈴ちゃんペアが女性の水着を脱がせた。おい！

「おっと、商品が減ったな、そろそろ補充に行くか」

2人掛かりで突破するのが基本の障害物を独力で突破している2人に軽く応援を送り、3度目の商品補充へ喫茶店に戻る。イベントに人が集まりきっているのか、喫茶店はガラガラだった。

「すみません、商品を補充しに来ました」

「ああ、君か。……あれ？もうそんなに売ったの？」

短時間での連続補充に驚愕しているらしい。単純に売りに回るだけでなく、汗を多めに掻いてる人やあまり席を立ちたくないであろう人を見つけてそちらへ重点的に回ったかいるかあるというものだ。…全員大体そんな感じであったが。

「うーん、そつちで売る用の商品はもうないかな、イベントが終わるまではこつちにおいていいと向こうから連絡があったから、イベントをじっくり鑑賞してから帰るといいよ」

「あ、了解しました。それでは失礼しますね」

この人、なんだかすごくアバウトである。別に、料金変わらず仕事量が減るのであればいいんだけども。

「で、どうしてこうなった？」

イベント会場に戻ると、2機のIS 勿論、セシリアと鈴ちゃん以外にIS学園の生徒は参加していなかった が戦闘を繰り広げていた。

50メートル×50メートルプールの上で、国家の叡智の結晶2つが、よくわからない女子のプライドを賭けている。

「はあ、……学園に連絡しよつと」

このまま続けていれば、建物への被害はおろか怪我人が出る可能性まである。とりあえず、割って入って止めるぐらいの許可は貰わなければ。

びっ、ぽっ、ぽっ。

「……あ、もしも織斑先生ですか？俺です、1年1組の戸鉄です。実はですね、今ウォーターワールドっていう娯楽施設にいますて

」

「遅かったじゃない、一体どうしたの？」

IS戦闘を止める前に痺れを切らした2人が会場で爆発を起こし、一応怪我の確認をしていました。なーんて、うん。

セシリアと鈴ちゃんには後日、かなりの罰則が与えられるだろうな。こつこつのを自業自得とイウノデス。

「ええまあ、ちょっと。……それより、店長？」

俺の声に気迫が籠ったことを悟ったのか、店長は一步後ろへとたじろぐ。

「な、何かしら……?」

「よくも、俺を騙しましたね」

「な、何のことかしら……?」

「次の本社からの視察の時、洗いざらいぶちまけますから覚悟しておいてください」

軽く脅しを掛けると、店長は急に足元に飛びついてきた。全く、どつちが上司なのか分かったもんじやない。

「やめて!時給上げるからそれだけはやめて!」

「……言いましたね。それじゃあ、仕事に戻りましょうか」

ニコリと笑うと、これまた軽く身体を震わせてくる。一応弁解しておくが、俺は何も殺し屋の目つきをしているわけでもないし、殺気を出しているわけでもない。威厳が　威厳がない。この人本当に店長か?

とりあえず震えている店長を一瞥し、客の入ってきた入り口へと向かう。

「さて、いらっしや　へ?」

「ちょっと店員、へって何よへって　へ?」

「あら鈴さん、一体どうしましたの　へ？」

「セシリア、鈴、とりあえず入り口からどいてくれ。何で固まってるんだよ　あれ？」

一夏だけ最後の言葉が仲間はずれとかそういうことはどうでもよくて、つまり　言わなくても分かる3名の面子が、ご来店した。間の数秒、空気が固まり辺り一面が静かになる。いや、店内は客の呼び声と店員の応答でやかましいのだが。

「失礼しました。3名様ですね、こちらのお席へどうぞ」

「海月、ここで働いてたのか！いや、俺も初めて知ったよ」

「こちらがメニューになります、お決まりになりましたらお申し付けください」

「あの、海月さん。もう注文するものは決まっていますわ」

「おや、左様でしたか、失礼しました。それではご注文をどうぞ」

「期間限定パフェ、一番高いやつが2つね。それと海月、何で初めて会ったみたいに振舞うのよ」

仕事だからに決まっとうろうが！

「はい、期間限定のパフェがお2つですね。かしこまりました」

今までばれていなかったはずの3人にまで仕事場所がバレた俺が、その日の終わりに、初日で知り合いにバレた時と同じぐらい盛大に

肩を落としたという説明は蛇足である。
期間限定パフェ2つ(合計5000円)を払った一夏以上に肩を落
としていたと断言できる。

59 @クルーズビンゴ1

同じく、8月のあくる日のことである。

その日、いつもなら@クルーズの黒い執事服に身を包みお客様への接客 もといお嬢様方の接待をしているはずの俺は、何故だか。

ビンゴ大会
の賞品にされていた。

「ね〜ね〜、このお店、スタンプとかないの〜?」

@クルーズの常連オブ常連、なんと毎日通っているらしい布仏さんの、そんな一言が事の発端だった。

確かに、サービス精神旺盛なこの店にしては、そういった「通い続けることで得られる利点」みたいなサービスが一つもない。

「そうだね、確かに私たちは毎日来てるし、ちょっとぐらい特典が

あつたほうが嬉しいかも」

ウェーブセミロンガー、こともう一人の常連である転寝さんも追撃してくる。

この2人、毎日クラスの友人を誘っては来店し、俺がいる場合はそのたびに俺を指名している。

「俺の写真を密かに撮影して学校で売りさばっている」ということを先日知った俺としては非常にいい迷惑である。

あー、ちなみに何故知ったかというと、その「先日」にラウラがほくほく顔で撮られた記憶の無い俺の写真を集めていたからだったりする。まあ、ラウラにはれることに文句はないんだけどね。

とまあ、簡単に言えば撮影機会を得るために何度も何度も重ねて来店しているということで、今では店長と顔見知りになっただけだ。

「うーん、そうですね。基本的に何も言わずともお客さんの足は途絶えないから、本社の方もそういうことを視野に入れてないみたいなんです。今度視察に来たときに話してみますね」

と、これは店の奥から出てきた店長の言葉である。

改めて説明するが、ここ@クルーズは男性が執事服着用、女性がメイド服着用のカフェ。その非常にマニアックな とうか一部の層を狙いました 制服のせいもあってか、特に若者からの評判が非常に高い。

「けど、2日ごとに来るお客さんが毎日来れば、それだけでもかなり売り上げは伸びるんじゃないかな？」

「んー、そうですね。それでは……完全な不定期でビンゴ大会を行

う、というのはいかがでしょうか？」

「不定期で……ですか？」

「ええ、不定期です。毎日来なければ参加できるかも定かではないとなれば、ファン層の来店頻度は上がるでしょうか？」

なんてこと考えるんだこの店長は。あろうことか、常連層全員を毎日ここに来させるつもりだ！

「け、けど店長。賞品はどうするんですか？本社からの指示がないと金銭の掛かるものを賞品にはできませんし、ビンゴ大会を行っている間の時間口スを上回るほどのメリットを出すことができるんでしょうか？」

新サービスを始めるともなれば、勿論それなりの準備は必要なのは。盛り上げるだけ盛り上げて、いざ賞品となったらドリンク1杯なんて悲しいどころの騒ぎではないぞ。

「ええ、ええ。分かっていますとも。海月君、貴方が心配しているのは各方向から見た利益率でしょう。確かに、そこを心配するのは大事なことだわ。」

まず時間口スをメリットが上回れるか。……問題ないわ。ビンゴ参加自体に少しの参加料金を出すことで、最低限のカバーは行える。次に準備。……これも大丈夫。こないだ私がパーティの運営を手伝ったとき、報酬の一部と言われてビンゴカードを大量に頂いたわ」

それ、単なる余り物の押し付けなのでは？なんて心無い台詞を言うかとも考えたが、考えたとおり心無いなと思って喉の少し上あたりで押し留めた。

「最後に賞品。これも一切問題が無いわね。 当日店内限定の、
スタッフ1名独占権を賞品にすれば、コストは0よ」

しかし店長は、そんな俺の気遣いも気にせず、あまりにも大きな
爆弾をさらつと投下 もとい言い放った。

スタッフ1名独占権。つまり、賞品を手に入れられたら店の中でだ
け人権が無くなるわけだな？

流石に靴を舐めろだとかキスしろだとか、そういう強引な内容は拒
否できるのだろうが……しかしそれでも、多少の我侭は通さなけれ
ばならない状況に陥るだろう。

「店長、流石にそれはいかなも」「いいですね！スタッフ独占権、
私は欲しいです！」反論を言い切る前に転寝さんに言葉を遮られた。

「では、早速今日からやっちゃいます？」

これも、刹那の動きで店の奥からビンゴカードを取り出してきた店
長の台詞であった。

以上、俺がビンゴの賞品にされるまでの経緯は大体こんなもの。

「それでは続いて45番、45番に穴を開けてください」

店長の声は、ビンゴ大会が終わるまで通常接客の従業員おれたちの心臓をぐ
りぐりぐりと削ってゆく。

誰がビンゴを成立させるのか、そしてその客は誰を独占スタッフに
選ぶのか。言いようのない不安が募る。

「次が82番、82番に穴を開けてください」

店長の、7回目のコール。2列のビンゴを揃えた人が勝ちのこのルールだと、中央が開いているビンゴカードでは最小8回で条件が成立する。

つまり、次のコールからが従業員にとって正念場となる。自分達は結果が決まるまで何もしないんだけども。

「次は、9番。9番にあ」「あ、揃った」

綺麗に、2人の女性の声が被る。どうも、俺が良く知っている声と同じ声らしい。

「同時優勝ですか。おや、でも　確か、そちらの2名様は同じグループでの来店でしたね？」

「そうですよ」

店長もしらばっくれてはいるが、確かにこの声は　布仏さんと転寝さんである。うわーん。

「ではではスタッフ独占権、誰にご使用なさいますか!？」

スタッフの間に、緊張が走る。

頬を汗がつたう者、指先が震える者、指先どころか腕が振るえ
おい、おひやを零すなよ、気をつけるよって感じの者。ある意味、
IS戦闘開始時を彷彿とさせる緊張感である。
しかし、彼らの心配は不要だ。何せ

「戸鉄君で!」

彼女らは、この店で俺以外のことを一度も指名してないし、他の店員の名前も知らないのだから。

「さあさあ戸鉄君！おとなしく私たちに写真を撮らせなさい！」

転寝さんが、カメラを堂々と掲げて近付いてくる。狩人のような瞳に、少しばかり恐怖を覚えた。いつもの女神の転寝さんは、一体どこへ行ったというのか？

「……店長からご説明があった通り、注文商品1つにつき独占命令は3つまでとなっております」

「おひや4つ！さーあ、戸鉄君覚悟はいいかい？」

「おひやは商品に含まれません」

「ちえーっ、けちー」

いやいや、おひや1つで何度も独占で命令を下されたらたまったものではない。店長もこの「商品が実質の命令権となる」っていう形式を考えた上で利益を見込んだわけだから、まあここは譲れないのだ。

「それじゃあ、うーん……この季節先取りケーキって、どんなの？」

「季節先取りケーキですね。そちらは名前の通り、次の時期に旬となる果実を使用し、一歩先の季節を味わってもらおうという商品で

「ございます。今は夏ですので、多分……梨や葡萄、栗などを使ったものではないでしょうか」

「じゃあ紅茶とこれを1つ……いや、人数分。皆も食べるよね？」

転寝さんの問いかけに対し、同席している3人は声を揃えて「勿論」と返してくる。……本当は別のを食べるつもりだったんだろうが、それより命令権を早急に増やすことが目的だったのだろう。

「かしこまりました、季節の先取りケーキが4人前と、それに合う紅茶を同じく4人前ですね」

「うん！出来るだけ早く戻ってきてね」

この「出来るだけ早く戻ってきてね」は命令の1つに入るんだろうか？それと、紅茶は4人分でポット1つとすれば、命令権を9つぐらい減らせるんじゃないだろうか？

……いや、命令を減らすことを考えすぎって言われるかもしれないけどさ。俺だつて減らせるものなら減らしたいんだよ、分かってくれるとお兄さん感激。

60 @クルーズビンゴ2&amp;その他の追いかっこ(前書き)

昨日、寝落ちやら寝坊やら大量り重なって1回落とてしまいました
たorz

60 @クルーズビンゴ2&その他の追いかけてこ

この小説は非常に健全です。

あらかじめ沢山の友人を誘い、一緒に見るようにしてください。

「脱げるわけないだろ！何言ってるんだアホウ！」

「だって、命令権はまだ残ってるよ？」

……これは、服を脱がせようとするエリート学園生徒の女子と、その女子から逃れようと悪戦苦闘する執事服の男子の物語である。

狩人の瞳から餌を狩る雌獅子の瞳へと変貌した転寝さんは、その命令は受け付けないと逃げ出した俺をとうとう厨房側の壁際へと追い詰めていた。ライオンは雌が獲物を狩るらしいけど、次から凶鑑では「ライオンは」ではなく「ライオンも人間も」と表記すべきだろう。

気が動転して意味不明なことを考えているが、重要なことはずばり「転寝さんが俺の上半身ヌード写真を撮影しようとしている」という一点以外にない。

「当店では特に18歳未満の方に刺激が強いような露出と言動は控えておりこの命令権ルール内においてもその基本は適用されるため服を脱ぐなどといった行為は禁止になっていますというか普通に考えて真昼間から裸写真撮影とか駄目に決まってるでしょ考えて転寝さん！！先輩方も助けてください！！」

「上半身だけの露出ぐらい海に行けばいくらかでも見られるわけだし18歳未満の人間に刺激が強い露出とは言いきれないと思いますそれに あっ、待てえ！」

俺のノーブレスに合わせるかの如くノーブレスで回答してきた転寝さんを置き去りにし、何やら男女2人店の隅でコソコソ話していた先輩も押しのけ、今度は入り口付近へと逃げる。

「命令権その7！勤務時間が終わるまで店から出ないこと！」

入り口のドアノブに手をかけたところでその声が聞こえ、慌てて足で急ブレーキ。こけそうになるのを重心移動で堪えて体勢を整えなおす。

店長曰く、常識範囲内の命令であれば逆らった時点で店から『本日のバイト料なし』のペナルティを言い渡す予定らしい。つまり今の命令のせいで、午後6時までの後3時間程度は俺はこの店の中に閉じ込められるわけだ。

「命令権その8、戸鉄君、今すぐに上半身を曝けだ」「その命令は当店のルールに違反するため、遂行しかねます！」言わせきつてなるものか。

「うー、じゃあ命令権その8再度で、まず上着を脱ぎましょう」

……上着。上着だけか……。これは抵抗ができない。別に素肌を晒すわけでもなし、店のルールに違反しない範囲だ。

上着を脱いでいる最中の転寝さんの目つきが妙に熱っぽい気がするのは、俺の勘違いということにしておく。

「命令権その9で、とりあえず私に写真を撮らせなさい。そして命令権その10で、今度はそのシャツを脱」「その命令は当店のルールに違反するため」「ちっ」

写真撮影しながら舌打ちしたよこの人。一定以上はアウトだってさつきから説明しているのに、何度も何度も命令しようとしてくるんだから、対処が困る。

そもそも俺の写真だぞ？一夏ならともかく、低身長（とはいえ169はある）で彼女持ちの俺に、需要なんてないんじゃないのか？

「女性アイドルに彼氏がいたって、その女性がアイドルをやめる理由にはならないでしょ！あ、命令権その10で、私との会話は日常会話で喋ること」

「ははあ……っておい、とうとう転寝さんまで読心術かよ!？」

「とにかく、戸鉄君の写真は普通以上に需要が高いのよ！ドイツの雑誌を探しても、代表候補生だっていうのに写真が全然見つからないし！」

「代表候補生になってからドイツに一度も言っていないんだから当然！」

再びカメラを持っていない左腕を突き出して突撃してきた転寝さんを右にワンステップして避けると、転寝さんが盛大に壁に激突して床に落ちる。

「いたた……ああ、もう！命令権その11、戸鉄君は私をゆっくり起こすこと！」

再度逃げようとしていた俺に対し、転寝さんは非情な命令を下す。なんだか、今日の転寝さんは平常時と比べて異常にテンションが高くないか？7月6日の修学旅行と比べても、明らかに熱の入りようが違う。

転寝さんと同時来店した他の3人は、転寝さんの威圧感に気圧されて見ていることしかできていないのだから、これは少なくとも普通の女子3人が簡単にひるむぐらいのテンションがあるという真実の裏づけに他ならない。

「ほら、店の規則には違反してないよぉ〜？ ゆっくり、誠意を持って、丁寧私を起こしなさい」

なんて、もうこれは完璧に俺を虐めるモードに入ったと形容しているのではなからうか。

しかしうちの学園の女子ってのは、どうしてこんなにも多いのだろう、好奇心旺盛な人。 もっととこ、昔から『お嬢様』として育てられた、気品を感じさせるような人の割合が異常に低い。もしかして一般的な『お嬢様』のイメージが間違っているんだらうか。

「そうそう、ゆっくり、ゆっくり……じゃあ命令権その12、私が何をしても動いてはいけな」「その命令は当店ルールに違反する可能性があるため」「これも駄目なの！？」 当たり前だ。 止まったまま何にも抵抗しないなんて、されることは決まっているじゃないか。

「戸鉄君、諦めって肝心だと思っわよ」

「転寝さん、諦めって肝心だと思っぜ」

丁寧に立ち上がらせた所で、再び脱兎の如く逃亡を開始する。

再び影でコソコソとしている先輩方2人を押しのけ、厨房の中へと逃げ込む。ここなら安全地帯

「命令権12再度！私から逃げないように！命令権13！私から離れないように！」

じゃなかった。

「いやー、いい写真が沢山撮れたよ」

午後6時すぎの帰り道。結局服は脱がないまでも大量の写真を撮られた俺は、勤務終了後に待ち伏せしていた4人娘に捕まり、帰路を共にしていた。

とはいえ、やたらと饒舌に喋っているのは転寝さんだけであり、布仏さんが軽く口を挟む以外には他2人 相川さんも篤さんも口を出さない って篤さん!? 何でだよ、こういうところに誘われて一緒にいてくるタイプだったか!?

驚いた、今の今まで全然気付かなかった。いや、転寝さんのテンションが高すぎたんだってば。

「後はこれを篤先輩に渡して……ふふふふふふふふふふふふ」

このとおりである。

ちなみにだが、彼女は新聞部所属。今まで撮影していた写真というのも全てそちらのツテで売却しているというのはついさっき聞いた。本人の前で言うか、普通?

と、一人で勝手に盛り上がっている彼女は放置して、さりげなく先ほど沸いた疑問を解消しておくことにした。

「そっいえば、篤さんがいるのって珍しいよね。こっ、浮かれた場所とか賑やかな場所とかは苦手だと思ってた」

急に話題を振られ、篤さんの身体はぴくりと跳ねる。

「……っ! し、仕方ないだろう! 寮を歩いていて後ろから声を掛けられたと思ったら、いきなり口に布を当てられたんだ! ふと目を覚ましたら知らない店の前だぞ、どうしろというんだ!」

「だって、クラスメイト全員と1回は来る予定なんだから。だ
いじょーぶ、クロロホルムとかの危ないのは使ってないからさ」
そういう話じゃないだろうと言うべきかそれは犯罪ですと言うべき
か、とにかく突っ込みどころが満載すぎて逆に絶句してしまった。
そんな絶句をすること3秒、確実に取れる狸の皮算用から復帰した
らしい新聞部新入部員が話題へと復帰する。

「後はデュノアさんとボーデヴィツヒさん、それにオルコットさん
と織斑君の4人だけだね！デュノアさんと織斑君は頼めば来てくれ
そうだけど、ボーデヴィツヒさんは……うーん、戸鉄君で釣れば来
るかな？」

「セシリアは？」

「次の機会に一緒に来る約束をしてるから、確定事項みたいなもん
よ！」

そう言って大きくガッツポーズ。全員と来ると願い事が1つ叶うと
か、そういう特典があるんだろうか。少なくともあの店にそんな効
力はないよな？

「……私は無理矢理連れてこられたのだが、『一緒に来る』に該当
するの……？」

「問題ない、のーぷろぶれむだよ」

一応は人に薬品を嗅がせて無理矢理つれてくるという、犯罪ギリギ
リ（アウト？）な行為をしたというのに非常に能天気な布仏さんに
は、やはり俺も篤さんも肩を落とすしかない。

真夏の長い太陽は、男女1人ずつの憂鬱そうな姿も女子2人の朗らかな足取りも、しっかりと繁華街の地面に焼き付けていた。

「ラウラだ。海月、夏休み最後の1週間、ドイツへ行くぞ」

帰宅後に自室で寛いでいると携帯に着信があったため、特に名前も見ずに出ると開口一番そう宣言された。

「ドイツ……？ああ、そつか。代表候補生だから、機体見せたり報告したりしないといけないんだな」

「それとだな……つと、その前に確認するが海月、今バイトをしているというのは本当か？」

おや、ラウラの携帯アドレスを知ってる人なんていなかったと思うけど……噂話を聞きつけた、って所かな？

「本当だけど」

「そつ！それなら、いい方法があるぞ！」

「いい方法？」

「うむ。海月は知らないかもしれないがな、国家代表や代表候補生は、いわばモデルのような仕事に誘われることが多いのだ。私は今まで断ってきたのだが、海月が貯蓄を増やしたい、というのであれば 受けないこともないぞ」

なんと。

転寝さんが店で言っていた、「ドイツの雑誌を探しても見つからない」とはそういうことだったのか。

てつきり、ニユース雑誌やらの類の話だと勘違いしていた。ああ、そういうえば、たまーにゴシップ雑誌でもES操縦者の写真や特集って見かけるな。

「でも、それって代表候補生側の仕事に支障をきたしちゃうんじゃないの？」

「それならば問題ない。言うなれば国家公認の広告塔だからな、そういう仕事も一種の義務みたいなものとして組み込まれている」

……となれば、既に回答は1つしかない。何と、義務を果たしてお給金を貰う。実に効率のいいサイクルじゃないか。

「じゃあ、ドイツでの一週間の中で入れておいてよ。……出来れば、ラウラと一緒に出来る場所がいいな」

61 日本、そんな狭くて大丈夫か？（前書き）

日本はジャッポーネの発音で（笑）

原作だとウォーターワールド同日の出来事みたいなのですが、それだと両方に絡ませることができなかつたのでこちらでは日にちを分けることにしました。

61 日本、そんな狭くて大丈夫か？

あくる日、朝早くからシフトが入っていた俺が店の扉を開けると
店長が、両掌と膝を地面にぴったり付け、どす黒おいオーラを放ちながら床に打ちひしがれていた。

「……………どうしたんですか店長。威厳の無さが、いつもと比べて当社比5割増しですよ」

「はあっ！？今朝方いきなり2人辞めたって、今日は視察の日ですよ！？」

「そんなこと分かってるわよ、……………駆け落ち、らしいわね」

俺の後に到着した店員と共に、かくかくしかじかと店長から事の顛末を聞かされ、真つ青な顔でうづくまって頭を抱える従業員が2名増加。どうにか立っていた俺含め残りの店員も、ようやっと声を出すのが精一杯である。

曰く、今日来る予定だった2名の従業員（男女1名ずつ）が駆け落ちまがいのことを引き起こして自主退職^{じゆうたく}、他のメンバーでも今日からシフトに入れる人が1名もないというのだ。

これがいつもなら多少店の開店を遅くしてどうにか回すのだが、今日に限ってはそうもいかない。本社からの査定が入る今日、そんなことをすれば給料の上下にすら関わってくる。

そういえば確か、いつも店の隅のほうでサボタージュしてコソコソ話している男女の先輩がいた記憶がある。今日の本来のメンバーの

うち到着していないのはその2名だけだ。予想外だ、まさかこんなことになるとは。

もう少し、人の事情を考えて駆け落ちして欲しいものである。いや、人の事情を無視するのが駆け落ちなのかもしれないが。

「とにかく、客の出入りが少ない午前うちに急募で、今日1日だけでもいいからバイト2人探してきてください！午前中は俺達だけで回しますから！」

「……分かったわ、できるだけ早く連れて来る」

頭から足にかけて重みを掛けていた鈍重オーラを左右に払いのけ、ともかく店長は立ち上がり、およそ秒速7・5メートルほどの駆け足で店の外へと駆け出した。

心なしかいつもよりも頼もしく見える、……なんてことはなく普通の店長であったが。

「というわけです。今日は最悪ここにいるメンバーだけで査定に響かないように務める可能性もある、何せあの店長ですから　ともかく、最悪でも午前中はしっかり客を回しましょう！」

おう、と、どうにか希望を少しばかり取り戻した店員が気合の一声を掛け、開店前の準備へと流れるように移行した。

という流れで開店したところまでにはいいのだが　やはり、平常時と比べて3人も人数が減少しているという部分より来る不安からか、店員のミスが目立つ。

例えば、既に客が去ったテーブルの片付けが5分経っても行われな
いだとか、重複して注文を承りに行くとか。とりあえずこまめに客

を確認することを優先付けたため、注文をいくら待っても取りに行かないという事態が発生していないのが救いだ。指示系統が混乱していることによる運び間違いもちらほらと見える。すんでのところで慌てて訂正を入れているため、どうにかまだ完全に間違えるまでには至っていないが。

全く、人っていうのはいるだけでも多少の支柱になるのだなと実感させられる。そもそも駆け落ちした2人は前からサボタージュしていた2人なのだから、いてもいなくても仕事をする人数にそこまで変化がないはずなのだから。

と、現状に悪態を軽くついでみたが、しかし文句を言っても仕方ない。場合によっては助っ人すら来ない可能性もあるのだから、今のうちに最低限この人数で店を回すことに慣れておかねばなるまい。とにかく、一縷の望みを店長にとிட்ட所だ。

(うつむ、誰も見つからない……)

12時ほぼびったり、ちょうど客が増えてきて@クルーズが混乱に陥るか陥らないかの瀬戸際に立たされていたその時、@クルーズ店長である彼女はとあるカフェでランチを取っていた。

とは言え、彼女は決してバイト探しを諦めているわけではない。既に『うちの会社で働いて問題のなさそうな』男女に何度も声を掛け、通算13回の玉砕をしていたのだ。

(本当に、何で今日に限って駆け落ちなんかするのかしらね)

運ばれてきたペペロンチーノにも手をつけず、突如辞めた2人を毒

づいては如何にしてピンチヒッターを仕立て上げるかを考え込む。本来であれば昼食は早々に切り上げるべきなのだが、考え事に没頭していた彼女はそれが冷めかけても手をつけていないようである。少なくとも今の彼女は、隣に非常に美麗な若く背の低い銀髪の女子と中性的な外見の金髪の女子　まさに、探している『男女1人ずつ』という条件に（片方が男装さえすれば）ぴったりの2人組がつい数分前に着席しても外見を確認する時間すら惜しいといった具合にまで、頭をフル回転させていた。

「……………どうすればいいのよ、まったく……………」

出された料理が冷め切った辺りまで考えても良い案が浮かばず、はあ、と深く溜息を出す。

しかし、良い勧誘案が思い浮かばなかったのであればこれ以上考える必要もないだろう。そう考え、彼女は冷たいペペロンチーノに手を伸ばそうとした。その時だった。

「あの、どうかされましたか？」

先ほどまで隣の席で話していたと思われる声の女性が、急に彼女に声を掛けた。

（あれ……………ああ、少し落ち込みすぎていたかしら）

そう思って、ふと顔を見上げる。……………すると。

「え？　　！？」

そこで彼女は、ようやく隣の席に座っていた逸材の2人に気付いた。

時刻は12時半より前、本社から視察が来るリミットまでは、まだまだ時間はあるであろう時の話だ。

何故だろう、非常に嫌な予感がする。

嫌な『予感』というか、現在進行形で店の回転は非常に悪いという嫌な現象が起きているのだが、それとは違った変な胸騒ぎ。

誰かが皿を割る気がするとか、厨房でガス爆発が起きるような予感がするとか、とにかくこの店が危ない……気がする。ただの直感だけでも、大体こういう予感は当たるんだよな、皮肉なことに。杞憂であればいいんだけど……。

しかし、そこで携帯からメール着信音が鳴ったため、思考は一旦中断し慌てて取り出す。勿論、今の俺は昼食のための10分しかない休憩の最中であり、携帯をお客様の前で取り出したわけではない。メールの発信者は、ただいま1日限定バイトを必死で探しているのであろう店長からだった。

「何々……『良さそうな子2人から了承を得られました、後少して店のほうに到着します』か、よし！」

『良さそうな』というのがバイト経験者という意味か店の雰囲気を壊さないという意味かは分からないが、どうやらこれである程度は店も回るようになりそうだ。

右手のゼリー状エネルギー補給飲料をズズッと啜り切り、昼食10分のうち3分も使わずに仕事に復帰した。

「え！？戸鉄君、もういいのか？」

「はい、それよりも、店長からメールは来ましたか？あと少して代役2人が店に到着するそうですよ」

「ああ、休憩中以外は切ってるから気付かなかったよ。なるほど、それじゃあ次は俺が休憩取ってくるわな」

そう言っつて、俺と入れ替わりで先輩が昼食休憩に入る。と、同時に店のドアがカランと開いた。

「いらっしやいま……あ、店長ですか。緊急代打の2人はどちらに？」

「ぜえ、はあ……多分みんなメールは見れなかったと思っつて、伝達のために場所を教えて私だけ走っつてきたのよ」

なるほど、確かに肩で息をしている。しかし、それだと最悪の場合そのピンチヒッターにも逃げられるのではないか？

……まあ、ちゃんとバイト代も言っつた上で了承を取れたのなら、そんなことも起きないか。

「とりあえず汗拭いてください。それとスカウトしてきた2人の特徴を教え」

言い終わる前に、再びドアが鳴る。客なのか、それとも店長のスカウトしてきた2人なのか。

店長が「先に行っつてごめんなさいね」と言っつて入り口まで歩いていっつたから、後者だろう。しかし、その店長の言葉に対して、入っつてきた2人というのが一向に返事を返さない。

「ええつと、店長に誘われたお二方ですよ。今日はわざわざ予定を潰してきていただ」

そうして、俺の言葉も止まる。間にいる店長だけが、何があったのかと3人の顔を何度もせわしなく見るばかりだ。

そりゃあ、会話だって止まるさ。何せ、目の前にいた2人は

「ラウラと、シャルロット？」

語尾が疑問符になったが、疑問ではなく確定事項である。

……俺が働いている場所を知らないクラスメイトは、今この瞬間に0名になった。

61 日本、そんな狭くて大丈夫か？（後書き）

気づいたら100万PV+10万ユーチューブ突破しました、ありが
とございます！

……記念に閑話とか入れた方がいいでしょうか？（

「あの、店長。シャルロットは女なんですけど」

店長に状況説明と着替えを任せ、さあ最初は付け焼刃で接客を見てもらおうと出てきた3人を確認した。と、そこまではいいんだが、シャルロットが男性制服であるはずの執事服を着込んでいたのだ。シャルルだと思っていた人はシャルロットだと思っただらやっぱりシャルルでした。なんてことは流石にないだろうし、シャルロットの少し不満そうな顔からして多分店長に無理矢理着せられたんだろう。

「知ってるわよ。でも、こっちの方が似合っじゃない？それに、男女1名ずつ減ったんだから同じ割合で入ってもらった方がいいですよ？」

「そりゃ否定しませんけど……まあいいや。さっきの手順どおり後は俺がやるんで、指示のほうお願いします」

そう言って、みだれていた指揮系統を店長に任せる。確かに彼女には威厳こそないが、指示能力だけは天下一品なのだ。指示能力だけは。

……という体裁を取って、俺が店長をこの場から消し去ったのは勿論言うまでもない。

「……で、2人とも。何で？」

思わず主題をすっ飛ばして質問してしまったが、どうやら意味は理解してくれたらしい。

「ラウラが私服の服を持ってないって言うから、今朝から町に買い物に来てただけども……」

「シャルロットがお節介を發揮してな。非常に沈んでいたさっきの女に事情を聞こうとした結果、私の意向は無視してここに来ることになった」

流石と感想を述べるべきか、非常に分かり易い上に状況が簡単に理解できる。

おそらくうちの店長が、持っていないカリスマを精一杯引き出しても1人もバイトが集められず、がっくりと肩を落としていた所でシャルロットが声を掛けた、という図式だろう。

それにしても、何故このタイミングでシャルロットとラウラが店長と出くわすのだろうか？そもそも、ラウラが買い物に出かけること自体が珍しいのだから、この遭遇は天文学的確率と言って差し支えない。

全く、「奇跡」というバロメータの値を下げるのであれば、もう少し重大な出来事の時に下げて欲しいものだ。

「それにしても、確かに店の前で制服がちらりと見えたときに少し違和感があったが 写真の中で海月が着ていた服だったのだな、今更ながら納得したぞ」

ラウラは腕を組んで、シャルロットとは違う、ちゃんとした女性制服 メイド服姿でうんうんと頷く。

再三説明するがこの店は女性がメイド服を着ており、今言った通りラウラもそれは例外ではなく さっきまで会話に集中していたの

で気付かなかったが、姿に意識を映すとこれがまた非常に似合っているのだ。

カメラ、誰かカメラは持っていないのか!? 転寝さん、さっきまであそこの席に　もう帰ってやがる!

「む?　いきなり膝を付いて、どうしたのだ?」

「……はは、なんでもないよ、うん……くそお」

「お待たせいたしました。紅茶のお客様は?」

流石の気品と言うべきか、シャルロットの接客は非常に流麗なものだ。

動作の一つ一つが丁寧で、周りの女性からも視線が釘付けである。

……だと言うのにシャルロットは実際のところ女性なんだから、彼女が多少不憫にも感じる。

「彼女、本当にバイトは初めてなのかしら?」

「ええ　少なくとも、高校に入ってから一度もこういった類のバイトはしていなかったと思いますよ」

していなかったというか、全寮制な上に空いている時間も一夏の訓練相手をずっとやっているシャルロットに、そもそもそんな時間はないのだ。

というかそれ以前に、代表候補生としての給金が入っているのだから、無理にバイトをする必要性を彼女は持っていない。
だから、

「うーん……あの子、うちでバイトしてもらえるように誘えないの？」

なんて俺に質問しながら頭の中で『彼女がうちで働いてくれた場合の売り上げ』を妄想し出す店長にも、

「残念ながら、難しいんじゃないですかね」

としか答えることができない。店長の残念そうな顔は、悪いが無視させてもらおう。

それに対して

「水だ、飲み　　」すぱーん。「ううっ!？」

乱暴にコップを机に置いたラウラを小突くと、抗議の目を向けられる。

「お客様に対して粗相のないように。ラウラ、分かりましたか？」

「し、しかしだな　　」すぱっこーん。「あうっ!」

「しかしじゃありません、気分を悪くされてしまったらどうするんですか」

「あ、あの店員さん。僕だったら別に気分も悪くないですから、大丈夫ですよ……?」

目の前で、水を置かれた男性がおろおろしながら呟く。

「ほ、ほら海月！彼もそう言っていることだし、だな……」

それで言い分も通りそうと判断したのか、2回頭を小突かれ多少涙目になりながらもラウラは抗議を返してきた。

うーん、当事者がいいって言ってるならいいか？

「左様ですか、それではまた何かあったらお申し付けください。ラウラも、接客はきちんとするように」

「はい……」

うむ。お客さんにまで怯えられたのは少々理不尽感があるが、これできっとラウラもきちんとして

「ラウラ」

「む、何だ？」

「まだオーダーすら確認してないのに、何で厨房の方へ歩いているのかな？」

「ふん、どうせだれかれ構わず気に入った女に声を掛ける凡夫に味の違いなど」

でっこぴーん。「うにゃあっ！」

そう、軍勤めな上に基本無愛想なラウラは、「まとも」などとは到底かけ離れた接客を行うのだ。

一応は店の備品を壊さない程度の力加減はしているようだが、それ

でも客に対しての所作が乱暴なのである。

「戸鉄君」

「何ですか、店長？」

「あの子だけど、ちょっとあのままの接客で行かせてみない？」

は？

「何言ってるんですか店長、あれじゃお客様、怒って帰っちゃいますよ」

「……そうでもないわよ。ほら、あそこ見てみて」

店長が男性客3人を指差す。そこには

「あの乱暴な口調、すごくいい……」

変態が、いた。

思わず頭を抱えそうになったが、それをする前に店長から再び声が掛かる。

「そつちだけじゃないわ、ほらあつちもそつちも」

そう言われてよくよく確認してみると、どうやら男性客の9割近くがラウラへと熱い視線を送っていた。「罵倒されたい！」「みたいな叫び声も聞こえた気がするのだが、気のせいであって欲しい。

今更気付いたわけだけれど、もしかしなくてもこの店に来ている男性客は変態ばかりか。

「……もう、好きにしてください……」

そして、シャルロットの美麗な対応とラウラの傍若無人な対応という、対極な2面対応が始まったのだった。

と、それがよかったのかまズかつたのか。

いつもと比べて数割り上乘せしたぐらいの人数の客が入ってきていて、ロコミの影響なのかその客の殆どがラウラもしくはシャルロット目当てのようだ。

それが影響して、逆に平常時の作業員の仕事量が普通より少なくなっている。

流石に、このまんまでは2人にはばかり疲れが行くんじやないだろうか？そろそろ2時間も経つし、慣れない作業という理由もあってか2人とも疲れてきたようだ。

「店長、そろそろ2人にも休んでもらわないと」

「うーん、そうね……ここで下げたらブーイングが飛んできそうなんだけれど、仕方ないかしら」

「そもそも2人とも本来は町へ遊びに来てたんですから、1日中働き通しというわけにもいかないでしょう。ピークの時間ごろには帰して」

と、そこで会話は途切れてしまった。いや、故意に途切れさせたわけではない。

なら何が起きたのか？それは

「全員、動くんじゃない！」

入り口から、覆面をつけてそれぞれ種類の違う銃を持った人間
背丈と体つきから見て多分、男　　が3人、店内になだれ込んでき
たため、咄嗟にカウンターの方へ飛び込んだのである。

……全く、知り合いと同店舗内で鉢合わせするのが悪い予感の正体
かと思ったら、こういう厄介事に巻き込まれるとは、なあ。

62 うにゃあっ (後書き)

昨日言った、いろいろなのの記念話について。

A・誰かの作品とクロスしてその話の中に行って見る (協力者必須です) (チラッチラッ)

B・海月君がISを動かせなかったら*のif* (ただの受験話になります)

C・その他 (まだ思いついてませんキリッ)

どれがいいでしょうか (笑)

相手の3人はそれぞれが銃器を所持。リュックサックを背負っていて、所々から福沢諭吉がチラチラと顔をのぞかせている。装備の薄さから見るに、犯罪組織などは絡まなただの銀行強盗だと思われる。

先頭に立っている、ハンドガン所持したゴツい男がおそらくリーダー。後の2人はショットガンにサブマシンガン……そこそこの低価の、扱い易いものだろう。

……こういうとき、普通の代表候補生ならかなり簡単に対処はできる、と聞いたことがある。

確かに自分も代表候補生なのだが 如何せん、自分はたった数ヶ月前までただの男子学生で受験勉強をしていた身だ。そういう特殊な訓練は、残念なことにあんまり受けていない。

勿論、俺がISを使っていいというなら話は別なのだが、ここで条例を違反して更に給料が減るなんてルートは考えたくない。悪いが俺は俗に言われるヤンデレとは違って行動理念全てがラウラで出来ているわけでもないし。第一彼女は彼女で打開策を考えているはずだし、無理と判断しても最低限の保身ぐらい1人で出来るはず。

そもそも日本の警察はそれなりに優秀だからわざわざ太刀打ちする必要もあまりない。のだが、こんな駅近くで立てこもりを起こそうと考えると、銀行強盗は短気な性格のようである。もしかしたら警察の対応までに怪我人が出てしまいかもしれない。仕方ない。折角隠れることができたんだ、対処に必要そうなものを準備しておく。

『あんまり』受けていないだけで、一応一般人よりは訓練を受けている側だし。

「あー、犯人一味に告ぐ。君たちはすでに包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返し」

優秀と評価した警察は、やっぱりかなり早くやって来た。客の中から「……古……」なんて声が聞こえたことには言及しないでおくとして、とりあえず熱々の紅茶を作る。

「ど、どうしましょう兄貴！このままじゃ、俺たち全員」「無視して、カップを暖めておく。長めのタオルを探し、これも執事服の中に隠しこむ。

「うるたえるんじゃないっ！焦ることはねえ。こっちには人質がい」
やかましい声に耳を塞ぎながら、さっきあいつらが割ったガラスの破片を砂糖入れに入れる。

「へ、へへ、そうですね。俺たちには高い金払って手に入れたコイツがあるし」

セーフティが外れ、ポンプアクションと共に入店後2度目の威嚇射撃が行われる。蛍光灯が割れたらしい。備品を壊しやがって、掃除が大変なんだぞ。

「大人しくしてな！俺たちの言うことを聞けば殺しはしねえよ。わかったか？」大人しく、執事服の裾にナイフを仕込む。……ふう。大体こんなものか。

そもそも、人質は1人2人適当に非力そうな人を見繕っておいたほうが効果的だろうに。警察としても狙撃対象の近くに人質がいるだけで撃ちにくくなるし、身近に置いておかないと犯人に抵抗しうる

客がいた時に面倒だぞ。　　ラウラとか、シャルロットとかね。
さて、そのラウラとシャルロットの位置は

「ばっ……」

大声を出しそうになって、なんとか口を紡ぐ。

ラウラが、既に強盗たちと対峙していたのだから、驚いても仕方ない
いと俺は思う。

「なんだ、お前。大人しくしてろってというのが聞こえなかったのか
？」

リーダー格の男　以降、頭かしらと呼称　　がラウラへと近付いてゆく。
隠られる物があれば簡単に背後に近付ける無防備な歩みだったが、
残念ながらそういうものは店内にはない。

「おい、聞こえないのか！？それとも日本語が通じないのか！？」

頭かしらがラウラへと銃を突きつける。あの距離であれば、ラウラなら充分
反応できるぐらいであろう。

と思ったらそこへ残りのふたり　　以降、子分A Bと呼称　　が、

「まあまあ兄貴、いいじゃないツスか！時間はたっぷりあるんスから、
この子に接客してもらいましょうよ！」

なんてことを言っ　　日亜jfd　zjp@0亜え打・得歩jら：9

あj?rjp氏さ・俺の頭の理解力を飛び越えた。こいつら、本

当に銀行強盗かよ？緊張感というものがまるで感じられない。

「だって、ホラ！すっげー可愛いツスよ！」否定はしない。

「お、俺も賛成っ。メイド喫茶って入ったことなくて……」

子分A、B両方とも身体をくねらせながら照れ笑いをする。結論、客だけでなく強盗まで変態。唯一まともなのは　頭かしらだけかもしれない

「ふん。まあいい。ちょうど喉が渴いていたところだ。おい、メニューを持ってこい」

全員馬鹿ばっかだ。

「海月、いるんだろう？」

カウンターの中へと入ったラウラは、外へ聞こえない程度の小さな声で海月へと確認を取る。

「いるけど　ラウラ、無茶すぎ。もしあそこで乱発されて」

「ふん、当たるものか」

「　備品が壊れたら、掃除が大変だろ」

当たらないくらい当然といった口調の海月に、やはり多少の心配はして欲しかったのであるう、ラウラは多少頬を膨らませる。

だが、そこは流石に公私の切り替えが早い軍人。すぐに先程までの

鋭い目つきに戻った。

「さて、では氷水を　使う予定だったのだが、備品を壊したくないのであれば威嚇にこれを使うのは問題が出そうだな」

「いや、単純に掃除が大変そうだっていうだけで、緊急事態なんだからそのぐらいは大丈夫」

そこで、強盗犯から怒鳴り声が掛かる。

「おい、メニューはまだか!!」

「まだ　です、今日がここでの初仕事なんで、まだ場所を覚えてないんです」

「ちっ、さっさとしろ!!」

自分より格下の相手に敬語を使うのは屈辱なのだろうが、それでも犯人を刺激しないようにとラウラは丁寧に戻す。

「とりあえず　メニューとおひや、氷はたっぷり。怪我、しないでな」

「分かった、行ってくる」

そして、鎮圧劇は開始した。

「遅えぞ!!」

「申し訳、ございません」

言葉だけは丁寧な、ラウラは犯人へとメニューを3つ渡す。彼女がらしてみればやはりと言うべきか、「制圧なんてされるわけがない」と勝手に考えている子分2人がトリガーから手を離してメニューを読み出した。

唯一様々な状況を想定しているのであろう頭のみがメニューを開いていないが、それでも充分に気はそらせたらしい。

「おひやです、どうぞ」

3人分のおひやを、1つずつ丁寧に置いてゆく。おひやがトレーに1つ余っているのに気付かなかった時点で、制圧は成功したと同義だった。

「それでは、ご注文が決まりましたらまたどうぞ。決まらないかな」

言うやいなや、3人組の返す言葉すら聞かずにラウラはトレーを端からひっくり返す。

メニューに目をやらずにラウラを見ていたらもう少し早く対応できたのだろうが、生憎多少なりともメニューに目を移していた3人は、その後に繰り出された氷の指弾にすぐに反応することはできなかった。

「いつてええっ!?!」

やはり身構えていた頭が一番早い復帰を見せるが、その時ラウラは既に1人分の意識を刈り取った後だった。

「ッざけやがって！このガキ」

「お客様、店内でのハンドガンの乱射は禁止となっております」

ハンドガンのトリガーに手を掛けた頭の頭に、陶器が直撃した。

「んなっ…………」

出来た小さな隙を大きな隙へと変換すべく投げつけられた陶器は、辺りにガラスの破片を散乱させながら割れる。

そして、彼等にとって隙は、その一瞬で充分だった。

「全く2人とも、僕のことも考えてよね」

「いえいえ、こちらは2人だけで終わらせる予定でしたので。ご協力感謝します」

カウンターから飛び出した海月と背後の物陰より現れたシャルロットは、それぞれ手近だった1人ずつの武器を剥ぐ。

シャルロットはかかと落としを、海月は手刀で銃を落としつつ、首筋にナイフを。

「この通り、僕が隠れた場所には武器もありますし、ね。さてお客様 左腕を動かそうとしても、そちらにサブの銃があるのは把握しております。素直にご投降下さい」

「馬鹿な、俺がこんなガキ共に…………ガッ」

頭の首筋に密着していたナイフがしまいこまれ、それと同時にナイフがしまいこまれた手のひらが首を強打する。

結果、3人の強盗犯の体中に氷を当てられてからものの1分で、頭も子分も無力化された。

(さて、気絶してる間に縛っとくか)

急に起き上がられて抵抗されたらたまったものではない。そう考え、海月は執事服から出した長いタオルで3人の両手両足を縛り付ける。

「ふう……皆様、もう大丈夫です。紅茶の準備ができておりますよ」

その一言に、てっきり「紅茶も武器の1つだ」と想定していたラウラは、アフターケアまでしっかりとした海月に目を瞬かせるばかりだった。

63 にゃるーん(後書き)

A、B、Cどれがいいのか微妙なところみたいですね……。引き続き、意見求めます。

64 定期極東の猿回

「店長」

縛った上で強盗の服を入念に調べ、武器らしい武器は全て奪ったというところで、海月は店の角で縮こまっていた店長に声を掛ける。店長なら店長なりに自ら出て行って、客の安全を保障してもらおうという考えはなかったらしい。

「な、何かしら……？」

「実を言いますと、そのう……俺とこの2人、あんまり顔出しとかをしたくないんですよ。というわけ、で、し、失礼します！」

ばつの悪そうな笑いを顔に浮かべていた海月は、それを言い切ると返答も待たずに店の外へと退散した。

その数十秒に警察が店に踏み込んできたが、助かった実感が未だに沸かないのか機械的に紅茶を啜る客と、同じく実感が沸かないながらも壊れ物を掃除する店員しか、店の中では動いていなかったのだとか。

「結局俺も付いていくことになっちゃって、今日はゴメンな？ 折角女子2人のシヨッピングだったんだろうに」

「いやいや、海月と一緒に来たおかげでラウラも俄然やる気になったみたいだし、むしろ感謝だよ」

強盗をちやつちやと退治してから2時間。本来ならまだバイト中であつた俺に他の時間つぶしなどあるわけがなく、結果として2人の買い物の荷物持ちなぞをやっていた。

傍から見れば「普通と同じ、女性が男性をこき使っている構図」なのだろうか？ 俺からしてみれば「両手に花」みたいな状態、どこるかラウラと予想外の買い物ということと終始笑みが退かなかつたのだが、もしかしたら「こき使われて喜ぶマゾヒスト」って見られている可能性もなきにしも非ず。

「それでシャルロット、買い物はこれで終わりか？ 私としてはまだまだ体力は有り余っているが」

「俺も荷物ならまだ余裕で持てるぜ」

半分は本心から思っていること 実際、女子達の買い物というのはもっと、2ケタ単位のキログラム分ぐらいは買うものだと勝手に思っていた だが、もう半分はせっかくラウラと一緒に買い物だからもう少し伸ばしたい気持ちからである。

前半乗り気じゃなかつたらしいラウラがこう買い物に積極的なのも同じ理由……だと嬉しいかな。

「そうだね、一通り買いたいものは揃つたし。あ、あつちの公園なんか行つてみない？」

そう言つてシャルロットが指差した方向を向くと、確かにすぐ近くに公園が見える。公園と言つても、そこら辺に簡素に作られた遊具などがある公園ではない。

「あれは……城址公園か？ いつ頃造られた城かな」

「そこまでは僕も分かんないや。あそこに公園があるって聞いたのも今日だしね」

うん？ 今日初めて聞いたのなら、何で公園に行こうとしているんだろうか。

「まあいい。日本の城には私も多少見てみたい部分がある。他に行く場所もないのなら行こうではないか」

「見てみたい部分？」

「日本の城はいわゆる華美なものではなく戦に適したものだと思うからな」

決して諸外国の城だから戦闘に適していないというわけではないと思うのだが、戦乱の時代が続いた日本の城は一風をなしているという事かな。

「どちらにせよ、俺は後から参加した人間だから2人についていくよ」

ついていくって言っても、どうせほんの2、3分歩けば到着する距離だけだ。

「そういうえば、今日のバイトはいきなりで悪かったな」

「へ？」

「ほら、買い物途中だったんでしょ？ 本当なら欠員が出ても他でしっかり回すべきだったのに それに店長、どう見ても2人を

「こき使ってたからさ」

「ああ、気にしないでよ。あの店長がすぐにお給料を入れてくれたおかげで、むしろ思ってたより沢山買えたんだから」

「そりゃよかった。……さて、公園に着いたわけだけど、シャルロットは何でまたこの公園に来ようとしたんだ？」

「ああ、そのう……お店で聞いたんだけど、『この公園にあるクレイプ屋さんでミックスベリーを食べると幸せになれるっておまじないがある』って聞いたからさ」

成る程、確かに10代の女の子っぽい発想だな。10代の男の子っぽい発想　　というか俺の考え方　　だと、占いやおまじないはあまり信じれないんだよなあ。

「『オマジナイ』……？　何だ、それは」

「漢字では『呪い』^{のろ}って書いてな、古来は悪霊を人間に憑かせるため悪名高き呪術師が考案した……あいたっ！　シャルロットに小突かれた。

「まったく、海月は嘘を教えないの。おなじないっていうのは、リンクスだよ」

「ほう、つまり験担ぎだな」

「それはちよつと違うな。験担ぎは昔良い結果が出たことをなぞって良い結果が出るようにと考えることで……あいてっ！　シャルロットに突っ込まれた。

「大体一緒だからいいの。ほら、早く探そうよ」

このそこまで広くもない公園なら、わざわざ別れて探す必要もないだろう。

そう思って近所の学生が学校帰りに通りそうなルートを調べてみると、やはりというか目に付き易い一角にすぐ見つかる。

「さて、俺は荷物を持ってるし、俺の分はラウラに任せてみよう」

「う、うむ。任せられたぞ。好みはあるか？」

好み、か。ここからではメニューが見えないから、選択肢としてはそうだな。

「せっかくの『幸せになれるおまじない』だって言うなら、ミックスベリーにしてみようか」

「ミックスベリーだな！ 分かった、行ってくる！」

「あ、待ってよラウラ！」

そう言ってクレープ屋へと、妙に気合の籠った足取りでラウラはずんずんと歩いてゆく。買い物の時もそうだったが、ラウラが突き進んでシャルロットが支えるその姿は友人と言うより姉妹のようだ。さて、2人が戻ってくるまでこちら辺で一休み

「何で、アンタがここにいるの……？」

どこかで聞いた事がある気がする声がして、振り返る。女子の

3人組がいて、その中の1人はやっぱり見覚えがある。えっと、この人は確かー、うーんと。あ、思い出した。

「極東モンキーちゃん！」

「誰が極東モンキーだ誰が！ 人間に昇格させる、人間に！」

二度あることは三度あると言うべきか、1度目に会った時はやたら太っていて男性を無下に扱う気が満々だったあの人と言えば、大体は理解できるだろうか。

そうか、最初に遭遇した時と同じ制服だ。確かにここの付近の学校でもおかしくはないわな。

「それで極東猿子ちゃんはIS学園に入学できそうかい？」

「勝手に名前つけんな！」

非常にノリがいい。はっ！ 『IS学園に入学する人間は、毒電波でノリが良くなる説』ごめんなさいなんでもありません。

「ねえ極東猿江、この人はどちらさま？」

「極東猿美つたら、痩せてすぐにこんな知り合い作っちゃって！隅に置けないなあもう」

「私の名前は極東猿あずままで確定か！ 『名字が東』って部分しか被ってないし！東あずまだ東！」

何故だかは分からないが、いや分からないというわけではないのだが、IS学園と同じにおいを感じた。女3人寄れば姦しいとはよく

言ったものである。

「じゃあ東ちゃん、改めて聞くけど俺の後輩にはなれそうかい？」

「IS適正はAよA、完璧ね。来年アンタと同じIS学園に入つてやるから覚悟しておきなさい」

笑っていた3人組のうち、東ちゃん以外の2人が笑い顔を解いて硬直する。「IS学園」と「俺が在籍」で、大体予想が付いたのだろう。

「ああ、ごめん。連れが戻ってきたから失礼するよ。受験頑張つてな」

そう言つて3人から離れると、後ろから「ね、ねえあれつてもしかして織斑さん！？ それとも戸鉄さんの方！？」なんて声が聞こえた。ので、注目の的になる前にアイコンタクトを取つてラウラシャルロットと早急にその場を離れる。

ああ、ごめんラウラ。逃げるように公園を出ちゃったせいで、城の見学ができなかったよ。

64 定期極東の猿回（後書き）

AかCが多そうですね。

A・誰かの作品とクロスしてその話の中に行って見る（協力者必須です）チラッチラッ

B・海月君がISを動かせなかったら*のif*（ただの受験話になります）

C・その他（まだ思いついてませんキリッ

今日の終わりの時点で一番多かった意見を採用しようかな、と思います。

65 じじいじやつらなんですの

公園から駆け足で逃亡して数分後。ラウラは手に持っているクレール
の形を崩さないようにしながら、海月は5キロの荷物を持ちなが
らだというのに息を切らしている者は一人としていない。

それどころか公園から少しだけ付いてきた野次馬たちですらアイコ
ンタクト1つで陣形を作りあげ撒いてしまうのだから、『流石は代
表候補生』と言ったところだろうか。

かくしてスパイ映画顔負けの逃亡術で見事に逃げとおした3人は、
今は駅の構内にてIS学園最寄の駅へ停車する電車を待っていた。

「いやあ悪いな。眼鏡で多少は雰囲気を変えたつもりだったんだが、
バレちゃってさ」

「大丈夫、僕たちの買つのが遅くなっちゃったのも原因だし、気に
しないでよ」

謝罪を許してもらったところで、はておかしいぞと海月は疑問を抱
く。

「そつえばは目的はミックスベリーって決まっていたのに、確かに思
ったより遅かったな　　っておい、シャ、シャルロット？　どうし
たんだ？」

海月としては狼狽するしかなかっただろう。なにせ普通に話してい
るだけのつもりだったというのに、シャルロットの表情が夕立前
のごとく急激に暗くになっていったのだから。

「ミックスベリー、売り切れだったんだよね」

「そ、そうだったのか！ いやごめん、そつとは知らずに失礼なことを」

しかし、シャルロットが残念そうにしている傍らラウラはそういう表情を見せない。

とすると、やはり彼女にとっておまじないなどは興味の対象外だったのだろうか、今度は海月が頂垂れる番となった。

「あ、でもでも、ちゃんと別のは買ったよ！？ ね、ラウラ！」

「うむ、イチゴとブドウを2つずつ、な。」

ラウラが、シャルロットに聞こえないぐらいの声で海月へと耳打ちをする。……と、すぐに海月の調子はいつもの物へと戻った。彼の感情の浮き沈みは、発散するグラフの如く激しいようだ。

「海月、なにを言われたの？」

「いやいやなんでもない。ミックスベリーが楽しみだなあって」

つい先程ミックスベリーが売り切れだったと聞いたはずなのにと、シャルロットは首をひねるばかりだった。

時間は過ぎて夕食後、IS学園。

女子校であるこの学園においてたった2人の男子、即ち一夏と海月は並んで廊下を歩んでいた。

勿論偶然ではなく、『少しラウラたちの部屋に行こうぜ』と海月が一夏を連れ出したためだが 当の一夏は、何故自分が呼ばれたのか皆目検討も付かないらしい。

(ラウラと話したいただけなら俺は誘わないだろうし、見せ付けるためか！？ ……なんていうのも考えられないし。うーん)

なにはともあれ、場所さえ分かっていたればたかだか寮の中。迷うこともなく2人は目的地へと到着した。

コンコンコン、と扉を3回ノックすると、中からどうぞと声が掛かる。

入室して彼等2人が最初に見たのは 勿論、その部屋に住んでいる2人だったので人物としては当然だが 猫の着ぐるみのようなパジャマを着たラウラとシャルロットだった。

途端、『このパジャマを購入したのを知っている海月だけが来る』と予想していたシャルロットは恥ずかしさに赤面し出した。

「え、み、海月っ！ 一夏も誘ってたんだったら教えてよっ！」

「ノックしたときは別に確認もせずにごうぞうて言ってたから、言う必要もないかなって」

それは前提で来る相手を勘違いしていたからすぐにオーケーを出したのだ、とシャルロットにも言い分はあったのだが、猫の着ぐるみパジャマ姿を一夏に見られた恥ずかしさで上手く言葉が出ないらしい。

「ん……コホン。シャルロット、一夏をつれてくるように海月に伝えたのは私だ」

「え、ラウラが？」

「うむ、そもそもクレープは『4つ』買っただろう？」

「あつ……」

一夏の疑問は殆ど無視される形で話は進んでゆく。

「さつ、何はともあれクレープだ」

甘い物を食べる時は腹の中で勝手に隙間を作ってくれるらしいから問題なく食べれるだろう、などと豆知識を教えながら、冷蔵庫にしまつてあつたクレープを取り出し、4人に配る。

あらかじめシャルロットに食べたい味を聞いて各自への配分を決めていたため、特に誰から文句が出るでもなくクレープを配り終えた。

「それで海月。俺が呼ばれた理由がいまいちハッキリしてないんだが……」

「ん？ ああ、そういえばそうか。いや、今日買い物に行ったときの帰りにクレープ買ったんだけどさ、そのおみやげ……って、買ったのはこっちの2人なんだけどな」

「へえ、そうなのか。シャルもラウラもありがとな」

引き込まれそうな笑顔と言ふべきか、ともかく一夏に恋するシャルロットにとって一夏の笑顔の破壊力は絶大だったらしく、先程までの恥ずかしさとは違った理由でまた顔を赤くする。

その間にラウラと海月がアイコンタクトでなにやら確認を取った……

隣を見て、なるほどこうすれば2つとも味わえると思っての一夏の提案だったが、自分からその話を切り出そうとしていたシャルロットにとっては願ってもない好機である。今回は、幸運のパロメータをうまく消費できたようだ。

「あ、やっぱり嫌か？」

「そ、そそっ、そんなことないよ？ はい！」

「おう、ありがとう。……おお、こっちも美味しいな。俺も喰うか？」

「い、いいのっ！？」

願ってもない話・パート2に、夢ではなかるうかとシャルロットは頬を抓りそうになったとか。その前にクレープのひんやりとした感触で、感覚が途切れていないことを確認したらしいが。

「まったく、どっちが恋人なのか分からないな」

隣で同じようにお互いのクレープを食べさせあっていた2人は、今宵だけは空気のようにだった。

「……………いやいやちよつと待て海月」

「ん、ラウラ。どしたの？ クレープおいしくなかった？」

その問いかけには、首を横に振って否定する。

「そうではなくてだな。同じ行為をしているはずなのに、あちらだけ妙に甘ったるいというのは納得いかないぞ」

「それはほら……シャルロットが妙に恥ずかしがりだからじゃないの？ ラウラは間接キスとか、最初以外そこまで恥ずかしがらなかつたじゃない」

「そうかもしれないが　な、なら直接だ！　海月、口移しをやるぞ！」

「待った待ったラウラ、別にこれは対抗するものだからそういうわけじゃ　ムグッ！」

2人の仲が非常によろしいことは、自明の理であった。

65 1じじいじやつらなんですの(後書き)

三人称だけで書いてみたんですけど、やっぱり一人称のほうが書きやすいですねw

書き忘れていましたが、これより以降のアンケートは対象外と見ます

目を開くと、そこはひやりと冷たいコンクリートの上だった。

自分が昨日の夜、流石に人前で口移しは恥ずかしいと逃げ出した上で扉に南京錠をかけ　一夏は廊下で寝ることになったが　、自分がベッドにしっかりと寝転んだことは覚えている。

しかし、起きたら白線が中心に引かれたコンクリート、端的に言う　と道路の上に寝そべっていたのだ。なにがなんだかわからない。

寝相が悪いから、窓を飛び出してここまで転がってきた……流石に、この理論は色々と超越しすぎている。

誰かに襲撃された？　いや、だったらわざわざ途中で捨てて逃げるとは思えないし、もし途中で捨てて逃げる状況になったとしたら多分学園側に追いつかれたという状況であり、少なくとも目覚めるのは保健室のベッドになるだろう。

そういう追い詰められた状況でなければ、俺を襲撃したのなら基地まで持ち帰っているはずだし。

まさか、IS限定での強奪？

なんらかの方法でISを奪う装置があったとして、それがちゃんと作動するまでは人ごと奪って逃げる。そして、ISを奪い取ったら俺を置き去りにする。……うん、納得。

と思って慌てて起き上がり確認するが、どうやらヴェレの待機状態であるフィタは右の足首にちゃんと残っている。

そのことに安堵はするが……やっぱり、自分がここにいる理由は理解できない。

とりあえず、今の自分の状況を確認しよう。

まず場所。昨日来たから覚えているが、クレープ屋のあった城址公園が近くに見えるから、大体の位置は把握できる。

次に時間。人通りが殆どないことと太陽の向きを考えれば、多分かなりの早朝だろう。

自身の状況。記憶を呼び返してみても、昨夜（かどつかは不明だが）の夜以降の記憶はないし、以前の記憶に障害が出ているわけでもない。おかげで嫌いな記憶まで思い出しちゃったという馬鹿なオチ。

格好は私服のシャツ＋ジーパンという大雑把なもの。ポケットをまさぐってみても、財布や携帯などの日用品は見つからない。

結局、身の回りを整理しても混乱が深まるばかりじゃないか。

しかも日常品ゼロってどうするんだよ、IS学園まで戻ろうにも電車に乗れないし、こんな場所で条例を思いっきり無視してISを展開するわけにもいかないし。

銀行から金を下ろそうにも、まだバイト代入ってないじゃないか。

……………仕方ない、歩くか。

どの程度歩くかは分からないけれど、他の移動手段なんて何も無いんだから仕方ない。

えーっと、IS学園の方向は、っと。

歩き出してから4時間。

ある意味緊急事態だから個人秘匿通話を試してみたが、何故か誰も出ない。

もうIS学園は目と鼻の先ですが、僕は暑さによる熱さと空腹が重

なって死にそうだからこころへんで倒れますね。
ISの機能で、生命は維持してくれますように。

……ぐわっ。

「う、ううむ……」

目を開くと、眼前にはよく知る天井が。そう、これは確か IS
学園の、保健室の天井だ。

ということは、多分教員の誰かが拾ってくれたということだろう。
いやあ、助かった。

「あ、気付きましたか？」

戸口の方から、夏休み前にはほぼ毎日耳にしていた、1年1組副担
任こと山田真耶先生の声が聞こえる。

「少し用事があったから外に出かけていて、帰ってきたと思ったら
校門の前で倒れてるもんだからびっくりしちゃいました。運ぶの、
すごく大変だったんですよ？」

ということは、この小柄で華奢な体でここまで運んでくれたという
ことか。流石は元代表候補生、つてところだな。

「ありがとうございます、山田先生」

「いえいえ。……あら？ 私、もう名前教えませんでしたっけ？」

何をすつとぼけたことを言っているんだ、この人は。確かに俺は最初の自己紹介の時、体調が優れずと寝てたけどさ。副担任の名前が分からないなんてことは流石にないぞ。

「教えるもなにも、3ヶ月も顔を合わせれば嫌でも覚えませうって」

「へ？ へ？ あの、すみませんが……人違いじゃありませんか？」

こんな特徴的な人を間違えるなんて、視力が相当低くてもないだろうに。……さつきから、妙に会話が食い違っぞ？

「IS学園1年1組副担任の、山田真耶先生で正解なら、人違いじゃないですけど」

「え、ええ。確かに私はこのIS学園の教員の山田真耶ですが……本当にごめんなさい、どこかでお会いしましたっけ」

おかしいぞ。

いつもの天然が効力を発揮したのかとも思ったが、流石にここまで認識に相違が生まれるのは考えにくい。

そもそも、一応俺は世界でたった2人のIS操縦者のはずなのだから、忘れるということ自体あまり……。

ふと、壁に掛けてあったカレンダーが目に入る。

9月。

「すみません、いくつか質問してもいいですか？」

「は、はい。私で答えられることなら、いくらでも」

「じゃあ1つ目ですけど、この学園の夏休みはもう終わっていますか？」

「はい、8月で終わりですね」

「次に2つ目ですが、ここにドッキリカメラは仕掛けてありますか？」

「まさか。一応ここは重要機密を扱っている学園ですよ。見知らぬ人を入れること自体特例なのに、そんなもの仕掛けられません」

淡々と答えられるにつれて、背中が汗をかいているのを感じ取る。まさか、とは思ったが。まさか……？

「3つ目ですけど、この世界に男性IS操縦者は何人いますか？」

「2人ですね。1人目は織斑一夏君で」

ん？なんだ、ということは俺が何故か昏睡して、山田先生が何かの衝撃で俺の記憶をなくしたっていう構図で

「2人目は、この間操縦可能だと発覚したばかりの桜井和人博士、ですね」

とはいかなかったらしく、嫌な予感の正解に冷や汗が流れる。桜井和人博士ってどちら様？ という話は置いておくとして。

とりあえず俺が今いる世界「1」は……俺がいた世界「2」と違う世界らしい。

「山田せん、じゃなくて山田さん」

「なんでしよう?」

「質問その4です。僕が異世界の人間って言ったら、信じますか?」

俺は、元の世界に戻れるのだろうか。

ここは、確かに自分がいた世界とかなり似ている……が、俺の知らない存在イレギュラーがあるのも確か。つまり、100%同じ世界ではない。しかもこの世界は俺のいた世界より数週間先に進んでいた。戻れたとしても、最悪の場合空白の期間が生まれるかもしれない。

というわけで俺は

食堂で飯を喰っていた。

シリアス? 何だそれ星座の名前か? それはシリウス。

ともかく、元の世界に変えられるかは心配だがそれでウダウダと言っている仕方がない。

戻れなかったら戻れなかったで、最悪の場合こちらの世界でないはずの戸籍を無理矢理作る必要があるわけだし、とりあえずこういう時は行動に限る。

生きれる場所で生きる、それが町内会の悟りやみっちゃんこと俺のフィロソフィー。

「山ぴー山ぴー、この私たちと同年ぐらいに見える男の子は誰ですか?」

……当然だが、この場に男がいるというのは結構珍しい出来事である。傍から見ればまだ普通の男性で、俺がIS学園に入った当日ほどの注目度が無いのは非常に助かるね。

「あ、えつと……織斑先生に用事がある方です」

「新たな男性IS操縦者……はないかなあ。もしそうなら、織斑君と桜井君の時みたいにニューズで流れるはずだもんね」

あながち間違いでもない予測に多少ドキツとした。こんな所に名探偵候補がいたとは思わなかったぜ……と思つたら、どうも本人たちも冗談で言つたらしい。

ただの客人という確認が取れると、お得意（お特異、でも誤字ではない）の女子通信網ガールズネットワークで噂が広がるため、それ以上女子が寄ってくることはなかった。

「山田せ……あの、すみません。いつもの癖が抜けられないんで山田先生って呼んでいいですか？ それと織斑一夏君、とかも一夏、で」

「ええ、そちらのほう呼びやすいのなら結構ですよ。それで、どうかしましたか？」

「放課後にとりつけていただいた一夏、篝さん、セシリア、鈴ちゃん、シャルロット、ラウラ、織斑先生との面会なんですけど、その前に服を一着貸していただいただけませんか？」

「え、服……ですか？」

「はい、山田先生はさっきの話で『一応は信用』してくれたみたいですけど、言つたとおり僕は道に放り出されていた状態だったんで、

その 正装している相手には失礼かな、と。それに、そちらの視点から見ても僕が武器を隠し持っていないか確認できると思うので一石二鳥だと思っんですよ」

勿論自分としてはIS以外の装備はしていないのだが、再三確認して言うが道にポイ状態だぜ？ もし爆弾とかが服に取り付けられていたら困るじゃないか。

「そうですね、たしか織斑君の予備の制服が一着あったと思います
がそれでいいですか？」

「大丈夫です、ありがとうございます」

再び時は流れて面会時間。

日ごろは会議用に使われているらしい部屋に一夏、篝さん 省略

ラウラ、織斑先生と俺が存在。

……あとは山田先生と、

「ええつと……、その女装している男子が桜井和人博士って人ですか、山田先生」

「なっ!?! バレただって!?!」

「頑張つて隠しているんだろうけど、喉仏が少し大きい。後は雰囲気かな」

「カズの女装を一発で見破るだと……!」

後でコンタクトを取ろうかな、と予定していた桜井和人博士が、何故かこの場で 女装して ひととき大きな存在感を放っていた。それと非常にどうでもいいことだが、この世界の一夏は多少馬鹿っぽい。非常にどうでもいいことだけぞ。

「それじゃあ説明しよう。俺は戸鉄、戸鉄海月だ

」

66 乱入者は異世界の夢を見るか？ s1-1（後書き）

投票終了時にA3・5、C3・5同率となっており、Cルートがやはり思い浮かばなかったので「Aルートを採用し、そちらの作者様から文句が出たらCルートに話とタイトルをごっそり変えよう」ということで作成。

日付が変わってすぐに話を作り出していたので、それ以降の意見はばっさり切り捨てた形となっています。

というわけでAの別世界乱入ルート、真尋様の『転生者は可変戦闘機の夢を見るか？』（<http://ncode.syosetu.com/n4153s/>）へ乱入する形となりました。多分3回ぐらいで終わらせませす。

あちらの話も面白いのでぜひ読んでみてくださいね！

67 乱入者は異世界の夢を見るか？ s 1 - 2 (前書き)

結構いろいろと事情があつて、投稿遅くなりました。

「……おい、1年の専用機持ち殆どと私まで呼び出すから何事かと思えば、自分はパラレルワールドの住人で前の世界では私たちと知り合いだっただと？ 冗談もそのくらいにしておけ」

「冗談じゃないですよ、織……千冬さん」

信じられないと思うのは当然だけれどね。俺だって未だ信じてないし、俺の右隣に座っている山田先生だって最初は信じちゃあくれなかったさ。

「それじゃあ うん。『銀の福音』の話とか、『展開装甲』の話とか、……ああ、これくらいは漏れた情報をかき集めれば手に入っちゃうのかな」

とは言え、これらも緘口令が敷かれている機密情報。彼女ら 彼2人と彼女6人の比率だから、彼らじゃなくて彼女らでいいだろうの気を引くぐらいはできただろう。掴みはこんなもんだ。

「こつちの世界に『桜井和人博士』がいなかったからどれだけの差が起きてるかは分かりませんけれど、臨海学校2日目の夜の織斑一夏さんと篠ノ之箒さんの密会とか」

ある程度注意をひきつけてしまえば、後はこういう『緘口令以前に、そもそも本人たち以外が知りえない情報』を言ってしまうばいいのだ。

こういう細かな所は前の世界との違いが原因でいくつか外れるかもしれないが、大事件さえ変わっていなければ後は『いくつかヒット

すれば『信用度はグッと上がる。

「シャルロット・デュノアさんがシャルル・デュノアだったときに、屋上でラウラ・ボーデヴィツヒさんを除く5人が昼食をとったこととか？ 旅館にウサミミは生きていましたか？ その日に織斑一夏さんはマツサージを行いましたか？ 織斑一夏さんは、必読の教科書を古い電話帳と」

「だああっ！ どうしてこう、俺がらみの話ばかりなんだ！」

どうやら、全部こちらの世界でも起こった現象のようで一安心。

『しかし納得がいきません』

「ん？ 納得って……の前に、今の声は一体全体どこから？」

『ここですここ、初対面の相手にいきなり女装で会う変態博士の』

「初対面の相手が前でも変わらぬ毒舌のお前に言われたくないよ！」

『戸鉄海月さんもそういう変態な友人は持ちたくないでしょう？
多分ですが』

「散々な言いようだな！」

機械が喋る？ それどころか人と話す？ こちらの世界の技術は、もうそこまで進歩しているのか？ ……とりあえず、漫才は放っておくとして。

「で、納得がいかないってというのはどこに？」

「貴方の仰っている内容は、全てIS学園にて起きたものです。貴方は男性だとお見受けしましたが……？」

「ああ、簡単なことだ。そこに2人の例外がいるのと一緒で」

「やたらと横に長い机のせいで会議室が狭いため、全身ではなく右腕部分だけISを展開してみる。」

「流石に一同、驚愕を隠せないらしい。……博士以外は。何で博士だけ驚いていないかは俺にもよく分からないけれど。」

「『桜井和人博士』のいないあちらの世界での2人目の男性操縦者イレギュラーおまけであちらの世界でのドイツ代表候補生。それが俺だよ」

「1人が、この発言にぴくりと反応する。一番背の低い少女は、同じくドイツ代表候補生だからだろう。」

「ドイツ、だと？」

「勿論それは向こうの世界での俺の恋人にして、こちらの世界では悔しいことに一夏に落とされている（気がする）少女、ラウラ・ボーデヴィツヒである。」

「ドイツドイツ、もろドイツ。この機体にもAICは積まれてるよん。大丈夫、他の人にデータを渡したりするつもりはないし」

「それなら問題ないが……貴様、私相手の時だけ妙にくだけていないか？」

「ぎくっ。」

そくだよなあ、あつちではラウラはその、こ、恋人だったわけだし、
ついつい堅苦しい空気で話せないと言うか……。

何か言い訳を考えようとした所で、織斑先生から助け舟が出た。

「しかし、少なくとも『ある程度こちらの事情に精通している、3
人目の男性IS操縦者』というところまではハッキリした。異世界
からの訪問者というのは理解しかねるが 山田先生！」

「は、はいっ！」

「どうやら殺気は感じないし、完全に嘘を言っているようにも感じ
ない。何より殺害目的であれば今のIS展開でこの場の半数の首は
持っていったらうが、それをしなかったからな。というわけで……
…仕事をするぞ」

「仕事 ああ、分かりました。はあ……」

「そういうわけだ。織斑、桜井、しっかり面倒を見る」

そう言つて、返答も待たずに織斑先生と山田先生は会議室を後にし
た。

「……さて、まだ信じてくれない人は、って皆信じれるわけも」「
ああ、俺は信じるよ」「ないよなあって、言い終わる前に即答!？」

「

最初の即答相手は、どこまでも男性言葉が似合わない男性 平た
く言えば、俺と一切あちらでは関わりがないはずの桜井博士 だ
った。

「まあ、疑ってても話は始まらないしな。織斑先生が嘘をついてないなら俺たちに危険はないだろ？ それならいいんじゃないのか？」

『みなさん騙されしないで下さい、彼の考えてることの99%は「面白そうだから」です』

「信用ないな俺！ ってちょっと待て？ みんな、何で納得したような顔になってるんだ？」

「カズならありえそうかな、と」

一夏にそう言われ、桜井博士はがくりと膝をついた。演技過剰も甚だしい。

「とにかく、疑ってても始まらないってのは同意ね。みんなも別に問題ないでしょ？」と鈴ちゃん。

「そうですね、急な展開にはもう慣れっこですし」とセシリア。

「まあ、異世界のドイツ軍技術というのも興味があるしな」とは、相変わらずミリタリー視点なラウラ。

「というわけだ。よろしくな ええっとー、と、と、藤堂？」とは復活した桜井博士。

「大国相手に奇跡を起こした軍人じゃないぞ、俺は」

「とが」

「働かない漫画家でもない！」

「とんが」

「指に嵌めたいお菓子でも、さすらうハムスターでもねーよ！」

「とつや」

「困暮の名人でもなければ木刀の精霊でもないわ！ 戸鉄だ戸鉄、戸鉄海月！ 何で1文字目しか被らせないんだ！」

手刀で思いつきり突っ込む。

「ぐおっ……殺意はないって、言ってたのに……」

そして、桜井博士は今度こそ演技とは別に床へと崩れ落ちた。

……周りの（現状では俺から一方的な）知り合いからのサムズアップには、どう対処すればいいのか分からない。

「まあ、そつちの世界では知り合いらしいから名前も分かると思うけれど一応。織斑一夏だ、よろしくなトト……」

「ネコバスは呼ばないしアトリエも持つとらんわ！」

再び手刀を入れると、この場で立ちあがった状態のままな男は俺一人となった。

ちなみにだがツッコミは何故か頭の中に浮かび上がってきた単語をそのまま言っただけで、どういう意味か自分ですら分かっていない。

自分流のナレーションをすると、織斑先生に『緘口令を敷いた上で、一時的にIS学園に編入しているものとして扱う。男性IS操縦者としての発表は、こちらの言う元の世界に帰れる見込みがなくなっ
てからにする』という措置を頂いた。

こちらの世界でも、相変わらず生徒のために尽力してくれる素晴らしき先生だなと思う。

というわけで、今は一夏の 正確に言えば、この世界では一夏と桜井博士の 部屋で、夕食前の雑談をしていたりする。

当の一夏が、あちらの世界とあまり変わらない面子に誘われていて部屋にいないため、『あちらの世界にいない彼とこちらの世界にいない俺』という非常に奇怪きっかいな状況を作り出していた。

「桜井博士」

「カズとか和人かでいいし、博士もいららないよ」

「俺からすれば『かずとかかずとかでいい』って聞こえるからどう呼べばいいか分からないけれど それじゃあバカズ……もとい和人」

おっと口が滑った。

『ひとつめの呼び方で言い切っていいと思いますよ』

「いやいい、よく考えたら研究者は例に漏れず変人だった」

この世界の場合、彼の影響なのか一夏も多少変な人格が混じっているが。

「ええい、話が進まない　おい、そこで泣き崩れているフリをしている和人！　ひとつ聞きたいんだが、この世界に『凭』っていう名字の研究者はいるか？」

質問を投げてみると、顔に当てていた手を速攻で外して立ち直った。何この人。

「いや、悪いけれど聞いたことないかな。何で？」

「俺の父親の研究者名義での名前。そっか、聞いたことがないっていうことは多分、この世界には元々俺はいなかったんだあってさ」

すると、急に桜井博士　許可も頂いたことだし、和人で統一するか　は顎に手を当てて何かを考え出した。

「そうだな……そっちの世界に俺はいないって言ってたし、俺が研究した物が原因で研究に携わっている人も大分変わってるんじゃないか？」

「和人が研究したもの？」

「ああ、可変戦闘機の　いや、正確に言えば、俺はパクったようなものだけだ」

後半が小さくて聞き取れなかったが、しかしトーンを下げたということは聞かれない部分でもあるのだろう。と、一方的に納得して話題を続ける。

「可変？　……って、どういうことだ？」

「意味はそのまんま。実物はともかく、映像だったらすぐ見せられると思うけど　ま、説明も加えると長くなるから夕食の後で。それより、俺からも1つ質問していいか？」

そう言つて、笑い顔を急に真面目な顔へと変化させて和人がこちらへと向き直る。

「人が生まれ変わることがあるつて、信じるかな？」

しかし口から発せられた言葉は、なんとも謎めいた言葉だった。

「さあ　、知らないけど。パラレルワールドがあるのなら、死んだ人がやり直す世界があつてもおかしくはないんじゃないのかな？」

「俺が生まれ変わった人間だ、つて言つたら？」

「信じる要素はないけど疑う要素だつて特に無いし、「冗談の1つとでも考えて受け止めておくよ」

俺が異世界から来たつて言うのも、証拠がなければ妄言の欠片と変わらないしな。

そう続けると、和人はからからと笑い出した。

「うーんと、おかしいことでも言つたかな？」

「いや、大丈夫大丈夫。なるほどなあつて思つただけ」

ええつと、そう言われても、意味ありげに質問された俺側としては非常に気になるんですけれど。

しかしその会話は、部屋に帰ってきた一夏が理由で中止となった。

「一夏の間が悪いのは相変わらずだな」

「否定しない」

「2人とも酷いぞ!?!」一夏は無視しておく。

「もしかしてこっちの一夏も、朴念仁?」

「ああ……、そっちも唐変木なのか」

この2人がいると、ギャグが非常に多くなる気がする。

ご覧の通り一夏の膝の付き方は、どう見ても芸人のようだ。

「とりあえず一夏が戻ってきたんだ。飯喰いに行こうぜ、飯」

「オーケー。とは言え、その一夏は部屋に置いていくことになるが」

「待て待て待て! 俺を気遣うことの優先順位はどれだけ低いんだ

!?!」

立ち上がった一夏に反論を喰らう。

「「下から2番目ぐらい」」

そこに反論を見事なハモリで返すと、とうとう一夏は玉砕した。

「えっ……」

「IS学園の制服を着た、男子生徒？」

「しかも桜井君と織斑君も一緒に食事を……？ 誰？ あの人は誰なのっ？」

「私が聞いた話によると、単純に織斑先生に話がある客人って聞いたよ？」

「でもでも、制服着てるじゃない！ まさか3人目の男性IS操縦者なんじゃないの!？」

「情報、情報求むわ！ 報酬ははずむわよ！」

忘れていた。昼にもやり過ぎたはずなのに、ミーハーな令嬢方の存在を頭の隅へと追いやっていた。昼間は彼女達が言っていた通り客人として通したのだが、流石にこの時間ともなればそりゃあ騒然ともなるだろう。

「なあ」「どうした？」

「部屋で喰わないか？」「遅いと思うぞ」

そりゃあ、即答ですよね。

67 乱入者は異世界の夢を見るか？ s1-2 (後書き)

真尋様の『転生者は可変戦闘機の夢を見るか?』(<http://ncode.syosetu.com/n4153s/>)への乱入話、その2。

実は学校に行っていた最中にPCが謎のシャットダウンを起こし、途中保存する前の記録を消してしまったという問題が発生。

ももとの長さの2/3程度になっているので、場合によっては4話構成になるかもしれません。

68 乱入者は異世界の夢を見るか？ S1 - 3 (前書き)

結局、4話構成という結果で(笑)

あちらの主人公様を「自分の楽しみをある程度上位に位置づける」というキャラに捉えた上でパロを更にパロった結果に。

こういうノリでいいのだろうかと少し疑問も残ってたりします。

「いやあしかし、どこにいても女性っていうのは嗜好きなもんなんだなー」

頭からシャワーの湯を被り、男性としては少し長めの髪を洗いながら桜井和人は呟く。

人間、整った顔立ちというのは中性的なことが多いというが、彼の顔は中性的を通り越し女性的と言っても過言ではない。

実際、今いる場所が大浴場で今日が週2回の大浴場を男性が使用できる日という事実がなければ、初めて彼を見た人間は「彼」を「彼女」に錯覚する可能性さえあるだろう。

最も、この大浴場に今いる人間は全員「彼が男性」であるという事実を知っているため、実際のところ彼が女性と錯覚する者はこの時この場には存在しなかった。

ただ、いつもと違い、「おお、確証が持てなかったけどやっぱり男なんだな」などと自分の考えに念を押す短髪の少年 どちらかと言えば、中性的な印象より男前といった雰囲気を漂わせる が今日に限っては存在していたが。

「正装に着替えたいって言ったのは俺だが、IS学園の制服に着替えたのは失敗だったか。私服なら変に勘ぐられる心配もなかっただろっし」

和人の呟きに、その短髪の少年……戸鉄海月が声を返す。

どちらかといえばすらっとした体はあくまで無駄なトレーニングを省いているだけで、しっかりと筋肉は付いている。

「明日に説明するはずだった分を今日説明することになったってだけさ。気にすることないって」

唯一、風呂が好きだからと高速で体の汚れを落とした初代男性IS操縦者 織斑一夏 が嗜める。

中性的よりは男の方向に傾いた顔つきの彼は、今は風呂の暖かさに顔を紅潮させている。

「とはいえ、情報統制が大変になったのは確かだよな……」

「ごめん、一夏」

「あつ、いやいや別に海月を攻めてるわけじゃないぜ!? ただほら、女子のネットワークって怖いからさ!」

元々が人と打ち解け易い性格であるがゆえか、既にこの3人の間に他人行儀な呼び方は存在していない。

最も、名前呼びをするようになった理由は海月がすっかり 本人としては、世界が違うとは言え姿も声も全く一緒なのだから仕方ないが いつもの癖で名前呼びをしたところに起因するのだが、しかし発端が何であれ既に違和感を取り払われていた。

「……にしても、何でまた別世界に飛ばされるなんてことが起きたんだろ」

「漫画や映画みたいな世界であれば、こういう時って『何かを為すため』みたいな状態なんだろうけど。少なくとも今現在事件は起きてないし、別に隕石が落ちてくるような観測もないからなあ」

平面世界の内容に当てはめて考えるのは和人らしいといえれば和人ら

しいが、しかし未だに何故海月が世界を移動してきたかは不明なのだ。

何をするかが分かっているらなければ海月としても元の世界に戻れるかもしれない希望があるが（勿論、何かを為すことがそのまま元の世界への帰還に直結する確証はないとはいえ）、今のままでは完全にお手上げ状態なのだ。

「海月がこっちの世界にいる間、海月の言う元の世界ではどうなってるんだろうな？ ひよつとして、元の世界にも同じ『海月』が存在してたりして　ん？ 海月。ちよつとあつち向いて」

「？　ほい、どうかしたのか？」

浴びていたシャワーを止め、海月は左側にくるりと90度回転する。

「……いや、首の後ろ側にシミみたいなのが見えた気がしたからさ」

「あつた？」

先程視界に入った辺りを和人が入念に探すと、肌の色の中で一箇所だけが水色に変色していた。

少し茶色っぽいだとか、擦りむいて軽く血の出た赤色だとか、もしくはメラニン色素の黒なんかであれば納得もいくが、水色というのは不可思議なものだ。

「……うん、あつたけど……なあ海月、もしかしてお前って合成音声ソフトとして作られた過去とかある？　それが刺青とか」

「すまん、元ネタが分からない。刺青はしたことがないけど、それが？」

一応、中学を卒業するまでは品行方正、成績優秀で通っていたのだ。それ以前に刺青の格好よさが理解できなかった以上、そんなものを体に刻印するわけもなかった。

「ああ、いいや。なんでもない。よく洗っておけば取れるだろ」

なにやら和人の発言から感じる違和感に軽く首を傾げるも、たかだか汚れの一つにそこまで神経質になる必要もないだろうと海月は特に気にしなかった。

深夜、全員が寝静まった頃。明日に備えて00:00以前に全員寝てしまう中、桜井和人その人だけは狸寝入りをかまし、実際には全く眠っていなかった。

「さて、首筋首筋、っと」

『ドラキュラが狙うのは淑女の血ですよ。あれ、処女の血でしたか？』

「俺がドラキュラに見えるの!？」

多少のコントを1人(+1機?)でかましつつ、寝静まる海月へと和人は近付いてゆく。

することは、風呂場で見つけたシミの確認だった。

寝静まっている海月をそろりとひっくり返し、首の根元をよく確認すると あった。『00』と水色で書かれたシミが。

『目的のものはあったんですか？』

「ああ、うん。間違いないな　風呂で見たときは『01』だった」

「こういう場合、普通はどういうことを示すのか？」

「確信とまではいかないが、大体の予想はつくだろう。」

「多分、制限時間だろうな。もしかして今日、大事件が起こるとか？」

『その発言、フラグですよ』

機械とは思えないくらい感情のある声に、博士はしまったと顔を多少引きつらせる。……が、すぐに元の顔に戻った。

「大丈夫。俺が知る限り、今日は何の事件も起きない」

『だといいですね』

彼が海月へと掛けた問い。

『生まれ変わった人間の存在を、信じるか？』

彼がその存在そのものであるとは、勿論誰も気付かないであろう。

「しかし、海月の存在はまた違った意味で驚きだな。もしかしたら、他にももっとパラレルワールドみたいなやつがあるのか？」

『行ける機会はあるのでしょうか？』

そんなことは知らないが、もし行けるのであれば行ってみたいかもしれない。

流星は研究者というか、知識欲が深いというか、好奇心旺盛というか　とにかく、男の子だ。

結晶体は、苦笑せざるを得なかった。

翌日の朝。

日ごころから空騒ぎの止まない教室は、今日はいつも以上の喧騒に包まれていた。

「ねえねえ！　3人目の男子転校生の噂、聞いた！？」

「あたし昨日見たよ！　織斑君桜井君と一緒に晩御飯食べてた！」

「私なんて誰だか聞いてみたんだけど、2人ともはぐらかすばかりで何も教えてくれなかったんだよね」

とこのように、どのクラスを見ても誰も多言を慎む様子がない。最も、昨日戸鉄と既に顔合わせをした上で緘口令を既に敷かれている、1年生の数名の代表候補生たちは別であるが。

しかし、そんな憶測と妄想の飛び交う騒ぎも、教師が来れば　1年1組のように、担任がいるクラスであれば特に　とりあえずその噂についての説明があるだろうと、一瞬にして静まる。

「ほら、全員静かに　ん？　今日はもう静かだな」

予想外だ、と言わんばかりにその担任　織斑千冬は目を丸くする。

……のだが、どうやらその沈黙の理由はすぐ悟ったようで、驚きの表情もすぐにいつもの平静へと戻った。

「よし、それでは早速だがホームルームを開始する。しかしその前に」

ごくりと、クラスの誰かが唾を飲み込む。この担任が通常の連絡事項を言う前に特別に時間を作るというのは、よほどのことがあるのだらうと誰でも予想がついたからである。

「今日は1人転校生がいるが、その転校生に関しての情報は一切を学園の外に流出させるな。流出が発覚した場合、情報元を辿った上でその生徒を退学にする可能性もあると肝に銘じておけ」

そこまでプレッシャーをかけた上で、千冬はドアの方向へ「来い」と一言声を掛ける。

果たしてそこにいたのは、昨夜男子2名と夕食をとっていた男子であった。

何よりも優先して緘口令が敷かれたぐらいだ、何かいわくつきの男子生徒、もしかしたら一夏や和人とすら一線を画す生徒かもしれないと大体のクラスメイトが予想しただらう。

その男子生徒は、こほんと一つ咳払いをすると同時に温和な顔つきとなり、どこかで聞いたことのある声で自己紹介を始めた。

「ミツキ・トテツです。異世界から来ました。この世界では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願ひします」

すばーん。

「おい戸鉄。大体分かるが、これは誰の差し金だ？」

「和人が、転校してきたときはこうしたほうが面白いぜって言ったので」

尚もシャルロットの声のままであるため、その風貌では異常な違和感を感じる。

当の和人本人は笑いを堪えるのに必至のようだ。ああ面白いと、そう言いたいのであろうと口に出されずとも伝わる。

「……はあ、いいから挨拶を続ける」

「はい、教官」

ぱーん。

佇まいを直した海月は、その一撃で再び大きく体勢を崩す。

「おい桜井、どうせお前が声を操作しているんだろう！ 今すぐ元の声に戻せ！」

「あ、ばれましたか」

「当たり前だ、まったく！」

ふたたび海月が元の姿勢に戻す間に、和人はなにやら端末を手に持ってピポパポと弄る。

「戸鉄、今度こそまともな自己紹介をしろよ」

「はい。あ、僕は転入生の戸鉄海月。よろしくね。IS学園男子

生徒やってまーす」

「……………」

今回も女声で他人の真似であったことは確実なのだが、千冬としては誰の真似だったのかピンと来なかった。

しかし、「これ……薫さんだっけ？」と思い出したように呟いた女子のせいで、折角担任の目を掻い潜ったと思われた海月は和人と共に三度みたひ手痛い一撃を喰らうこととなった。

「……………」というわけで戸鉄海月、漢字は戸棚の戸に鉄パイプの鉄に海風の海に満月の月です。くらげじゃないです。絵空事に聞こえるかもしれませんが、状態としては異世界から来た……あの、できれば『何だコイツ頭おかしいのかそれとも電波君なのか』みたいな顔はやめていただけるとありがたいです」

「異世界から来たなら、証拠とか欲しいよね」

「俺の家系を調べてもらったらいいと思いますよ？俺より上の人間が1人も出てこなければ、それが最大の証拠です。……ま、既に学園側で洗い出したみたいだけれど」

洗い出した結果、彼がこの世界のあらゆる血縁関係から切り離されているため、最悪でも国家に所属しない人間として学園側が処理する結果となった。

それゆえ、生徒が調べても良くて同じ結果になることは明白だ。

「で、国との繋がりはないんですけど、専用ISを所持しています。しかも世界中にある467個のコアのどれにも該当しないと、大体こんなもんですね。後、敬語が面倒になったからタメ口でいいですか？」

専用IS。

この言葉に、昨日会議室にいなかった生徒のほとんどが反応した。

何せ、専用ISというのは普通は国家代表、及び代表候補生のみが扱えるもの。

昨日まで一切の情報がなかった男子が、いきなり専用ISを持って表れる。そのことは、異世界云々は確信させずとも異常性を見せ付けるには充分だったのだ。

当然、教室は一時騒然となる。

「静かにしろ！ そいつに聞きたいことが大量にあるのは分かるが、ホームルームが終わってからだ！」

全員を鎮めた上で、ようやく千冬は本日の予定を言い出す。

「既に全員に伝えているとおり、今日は一日中IS機動の実習だ、迅速に着替えて第一アリーナへ集合するように。戸鉄の面倒は男子2人が見る。以上だ」

そこで千冬からの言葉は終わり
学校全体じょしゅくんだん対男子3人の壮絶な鬼ごっこが開始されることとなったのは当然である。

「織斑先生、ISで突っ切るのは」

「特例は認めん」

はあ、と溜息を漏らすと同時に、海月はチャイムが鳴るまでの準備運動を始めるのだった。

同時刻、とある2年生の会話。

「うーん」

「どうしたの?」

「昨日の実習で使ったラファール、妙に動きがおかしかったなあ、と今更ね」

「あー、わかる。うちのところの打鉄もそうだったもん。ま、多分整備が入ってるだろうから大丈夫でしょ。それより今は」

「緘口令が敷かれる謎の男子転入生、戸鉄海月君ね!」

68 乱入者は異世界の夢を見るか？ s1-3 (後書き)

真尋様の『転生者は可変戦闘機の夢を見るか?』(http://ncode.syosetu.com/n4153s/)への乱入話、その3となります。

69 乱入者は異世界の夢を見るか？ S1-4 (前書き)

やっとういぢぢ。

女子達を振り切るのは、大変そうに思えて意外と楽だった。

あくまで、窓から飛び降りたり張り込みの裏を突いて女子を誘導したりを簡単にこなせるなら、という前提が付くが。

ともかく、主に一夏を囷として使うことで、俺と和人の2人は遅刻という難を逃れることに成功したわけだ。

こういう時に損な役回りをするのは大抵一夏、申し訳ない。だなんて勿論思っているわけがない。和人のサムズアップには極限の笑顔で返しておいた。

「今頃、一夏はどこら辺かな？」

「さあ、女子達に踏み潰されてるんじゃないかな」

和人と談笑しながら着替えていると、かすれた「勝手に決めるな」という声と共に一夏が更衣室へ入室してきた。

確かに現時点踏み潰された跡はないが、既にヘトヘトになりかけている。

「2人とも……2人とも俺を見捨てて置いていきやがって……！」

とは着替え始めた一夏の言葉だが、しかしその時点で和人も俺も着替え終わっていた。

「あと10秒で着替えないと遅刻するぜ、じゃあお先！」

「ああ、待て！ 置いていかないでくれよ！」

一夏が二言目を出した時には、既に更衣室には1人しか残っていないかった。

断末魔が聞こえた気がした。

「……で、それが遅刻の言い訳か？」

鬼担当が、2分ほど遅れてきた一夏を睨みつける。

「なるほど。確かに戸鉄の面倒を見るといったのは私だ。しかしな織斑、どう言おうと遅れてきたのがお前だけという事実には変わりはないぞ」

「うっ……け、けどさ！」

「『だって』『でも』『だけど』は男らしくないぞ」

俺が言うと同時に、すぱーん。言い訳無用の出席簿。こちらの世界でもアイアンウェポン・シュツセキーボは健在のようだ。

「さて、今日は来月に向けた……おっと、その前に戸鉄はあちらへ行け」

あちら？ 織斑先生が指差す方向を見ると、山田先生が『ラファール・リヴァイヴ』を纏って待機していた。

「ええっと……？」

「授業に必要なデータ取りだ、専用機持ちはある程度の戦闘データ

がないと今日の実習は成り立たない」

「あ、そういうことですか」

なんとも急なことだが、そもそも俺が急に来たんだから急尽くしは仕方ない。

むしろ、最小限の手間で授業に参加していけるようにスケジュールを組み立てている所に感謝すべきなのだろう。

俺が向かおうとすると、「ああ、桜井もデータ採取の手伝いに行つてこい」と織斑先生が言葉を付加した。

「え、俺もですか？」

「手間が省けるからな。第一、お前と一夏が揃つと馬鹿をやらかして授業の進みが遅くなるだろうが」

とことんまで合理主義らしい。むしろ感嘆すら覚えるが、一夏と和人はそんなに信用されてないのだろうか？

「私はこちらで授業の続きをやる、2人とも迅速な行動に努めるように！」

それだけ言うと、再び生徒方向へと向き直ってしまった。

「仕方ない、行くか」

「だな」

『ゆっくり分析して体よくサボろうなんて考えてはいけませんよ？』

誰が！ と言いつつ、多少その気はあったのか和人はびくりと体を振るわせた。

山田先生のところに着ると、既に各所動かしての動作確認が行われていた。

「うーん、少し動きがゆっくりなような……？ あ、来ましたね。それじゃあ戸鉄さんはISを展開してください。とりあえず模擬戦でデータを取らせていただきます」

「分かりました」

何やら流麗な作動を見せなかったらしいが、しかし授業の進行を遅れさせない関係上そうもいかないのだろう。その時点で確認は終了された。

それに合わせて心の中で『ヴェレ』を呼ぶと、1秒の間も空けずにその装甲の全てが展開し終わる。

昔は『ISが展開する所って綺麗だな』なんて考えていた気がするが、高速で展開ができるようになってしまっただけはもうその『綺麗』を感じる暇はほとんどなくなっているな。

「部分展開の時も思いましたが、戸鉄君の展開速度は早いですね」

「前からISには何度も乗っていたって、こうすれば信じてもらえるんじゃないですか？」

「それもそうかもしれませんが、それじゃあ和人君、開始のカウントをお願いしていいでしょうか」

こうして、こちらの世界で最初の戦闘が開始されることとなった。
……1対1ならAICをうまく絡めればすぐ試合終了なのだが、使
っていいのだろうか、これ？

「じゃあいきますよ？ 5、4、……」

が。

しかしそれは、唐突に起きた。

「3、ってまだ数え終わって……うわっ!？」

山田先生のISが、突然不規則な移動を開始しだしたのだ。

ぶつかりそうになるのを和人は間一髪で避けると、山田先生の乗っ
たISは上空へと飛び上がっていった。

「山田先生？ 何が……って、おい、これどういうことだよ、和人
?」

「いや分からん。けど1つだけ分かるのは……」

そこで、すべきことの対象だった存在から通話が入る。

「織斑先生！ これ、どういうことですか!？」

「分からんが、あれを止める前に他の生徒を避難させる必要がある
! それ完了するまでは攻撃が地上に届かないようにできるか!
?」

「分かりました、やってみます！ 機械的な問題かもしれないから、

和人は生徒と一緒に中で原因を調べてくれ！」

「了解っ！」

最低限の情報伝達だけして、再び上空を見上げる。

そこには……山田先生だけでなく、他にも不規則に飛び交う計8台のISがあった。

空へと飛翔すると、続けて同じ組の専用機持ちが次々と空へ上がってきた。とはいえ全員ではなく、クラスメイトの避難が終わるまでシャルロットとラウラが地上待機のようにだ。

「海月、カズはどこだ？」

「システムエラーの可能性を調べてもらってる。そっちは織斑先生から何て聞いている？　のわつと！」

暴れるISから発射される実弾を、慌ててAICで止める。

「避難はすぐ終わるから、そうしたら原因を調べるまで可能な限り攻撃をいなしてろって」

撃墜は　少なくとも、避難が終わるまで無理か。

地表にむやみに降りれない状況の時に空中でISが解除されて、その間に他のISから攻撃を受けたらまずい。それどころか、ISごと突っ込んでこられたら搭乗者の命さえ保証できない。

避難が終わった後、できるだけ相手を消耗させて危険度を減らしてから1機ずつ機能停止に追い込むのが好ましい。

「武装を弱らせるぐらいの攻撃が一番かな？ 打鉄のブレードを折るとか」

「何を言ってるんですの！？ 仮にもISへ攻撃をするための装備ですわよ、銃ならともかく剣を折るだなんて……」

そこへ、タイミングもぴつたりブレードを振りかざした打鉄が突撃してくる。

乗っているのは 相川さんかよ！ 予想はしていたけどやっぱりクラスメイトって同じなんだな！

「セシリア、前も言ったじゃないか」

へ？ と怪訝そうな顔をするセシリアから打鉄へと意識を集中し、2つの武装を同時に展開する。

「戦法にルールなんてない、ってさ！」

逆手の《リュフトフェン》、同時装備の《1989・11》が、相手のブレードと刃を交える。

しかし、俺のこの装備は 「装甲を破壊する装備」。

相手と刃を交えれば、ダメージよりも装甲の破壊を優先する。

「って、悪いセシリア。これを言ったのはこっちのセシリアじゃなくてあっちのセシリアだ」

ぺきん、と音をたて、打鉄のブレードが形を崩した。

「さて、避難は終わったらしいから……後は原因説明が先か、全機の機能停止が先かだな……一夏！」

「分かってる、零落白夜で迅速な機能停」「ちげーよ！ 空中で機能停止させたところで暴走したISが突っ込んできたらどうすんだ馬鹿！」「じゃあ何するんだよ！」

何をする、だなんて、

「決まってるだろ、盾だよ盾」

2度目の断末魔は、耳に聞こえこそしないものの悲痛な叫びだった。

「別に、暴走機の無力化っていう細かい作業ができるのなら参加しても文句はないけどさ……来たぞ！」

ラファールの実弾射撃を、再度AICの線で防ぐ。……あ、一夏を盾にする予定だったのに一夏への射撃を防いでしまった。

「で、あれの銃を狙い打つ自信のほどは？」

「……ないです」

「じゃあエネルギー消費を抑えて、弾の的になってね」

空いている左手にもうひとつの《リフトフェン》を呼び出し、ラファールの持っていた銃にピンポイントで狙いをつける。
そのまま、こっちを向いてくれよ……今！

「ほら！ 俺はこっぴつ作業向きの機体なんだから、むしろ一定の

距離が主体のISに乗ってる奴を助けにいつてやれよ！」

「分かった、絶対落ちるなよ？」

「一夏が落ちるまでは落ちないさ」

再び銃を狙って狙撃すると、銃口に当たったらしいその一撃が武装を無力化する。

「分かっているとと思うけど、1機だけ隔離することができたら迷わず零落白夜で機能停止にしろよ」

最も、暴走の末自分達ですらぶつかり合っているISを絶対安全圏へ隔離するなんて、そう簡単にできることじゃないだろうけれど。とりあえず了承したらしい一夏は、最優先と判断したのかセシリアのサポートに付くようだ。

629

防戦に回りつつも、どうやら攻撃タイミングをつかんできたらしい代表候補生の面々は俺と同じく武器の破壊を始める。

ああ、こういう時に小回りが効く武器って便利だよな　と、思っていたところで。

『作戦が順調なところで悪いけど、原因分かったよ』

唐突に連絡が入るから何かと思ったら、それは和人の声だった。

「もうか、早いな！」

『うん、見たことないバグが発生してた。けど　とりあえず、大

体の行動パターンは把握できたぜ』

すげえな！　と思わず言うのと、だって天才だもんと返答される。おまけに『自分で天才とか……』というシリアスなムードをぶち壊す声まで入ってくるが、これは無視しておくべきなのだろう。

『とりあえず今から相手の行動パターンを説明するから、各個撃破して』

「はいよ、まずは？」

聞いている間も攻撃が止まないの、とりあえずAICで手近なISの攻撃を止める。

ある程度武器を壊してしまえば、後は相手の攻撃を絞り易くなる。作戦は非常に簡単なものになるんじゃないだろうか。

『いくよ、まずは』

「それで、今回の暴走事故の原因はなんだと思う？」

全てのISを止めたところで、和人はそう尋ねてきた。「そうだなー、……」と返事をしてから理由を考えてみるが、どうも思い浮かばない。

結果、「そもそも機体データを見てないんだから分かるわけないだろ」が答えとなった。和人は苦笑し（ているだろうと思う）ながら説明を始める。

「実は、暴走したISと海月のISから、似たようなノイズを感知したんだよ」

「えっ……」

「個人的な意見だと、少なくとも海月が暴走に関係してるんじゃないかと思うんだよな」

しかし、原因は俺自身じゃない。俺がなにもしていない上にする暇もなかったはずなのは、今いる全員よく分かっているはずだ。それを見透かしたかのように和人は続ける。

「実を言うとき、昨日日本の都市部で妙な磁気の乱れがあったって報告がアメリカから届いてるんだよ。この乱れで出来たノイズがまた、今回発生したノイズとそっくりでさ」

「俺がこつちの世界に来たのが原因ってことか？」

「そういう可能性も否定できないってことだよ。すっごく科学的じゃないけど、全部の繋がりは否定できない　ってと」。

ま、今日が終われば海月は元の世界に戻るだろうから、そこまで心配しなくていいんじゃないかな」

つまり、俺がこの世界に長居してしまうとその分だけ被害が出るってい……へ？

今和人、なんて言った？

「あっ」

本人も慌てて口をつぐんだが、鎮庄に参加していたメンツ

織斑

先生、俺、1組の専用IS持ち（山田先生は保健室で見てもらっている）にはすっかり聞こえてしまったらしい。

「説明してもらおうか、桜井？」

そう凄む織斑先生は、やっぱり俺の世界の織斑先生と大差ない怖さだった。

こっちの世界で一番変わっていないのは、どうやら織斑先生のようにだ。

『特にこの後事件はなかったので夜まで飛ばします 間の描写が見たかった方は作者に文句を言え、だそつです』

「メタ発言かよ！ いや言っちゃった俺もそうだけとさ！」

緘口令が敷かれる、俺が明日には消えている可能性を考慮して言い訳を練る、などを事件に含めるなら、直後も事件のてんこ盛りだったが。

「なあ、今電波が届いた気がしたんだけど」

「気のせいだ、海月」

日付が変われば俺は消えるらしいという和人の予想だが、あくまで予想な上に他の面子とは交流が少なかったため、こんな夜ともなれば見送りは一夏と和人しかいなかった。

「後何分？」

「2分ぐらい」

「じゃあ時間はあるかな……これ、俺のISの稼働データ。一応ドイツの技術で作られたものだから、ラウラに渡しておいてよ。できるだけラウラの戦闘記録に近いやつを選んでおいたから、まさか別の機体のものとはバレないと思う」

独断で渡すのもどうかとは思ったが、どうもラウラを別人とは思えないらしい。

「あいよ。それじゃあ 俺はこれかな」

言われて、ディスクを1枚差し出される。

「何、これ？」

「可変戦闘機の映像」

ばっ……

「馬鹿じゃねーの！ 俺は別世界の技術が漏れないように最低限の工作はしてんのに意味ないじゃねーか！」

すると、特に悪びれた様子もなく、そのままディスクを手に握りこませてきた。

「大丈夫、俺がいなきゃ映像を見ても特撮としか思われないからさ。

最悪でも、1回見たら後は壊しちゃえばいいじゃん」

そういう話ではないと思うのだが……まあ、そこまで現実離れた技術っていうのであれば気にはするまい。

正直なところ、気になっていたのは確かだし。

「さて、本当に戻るのか分からないと、ここで別れの言葉とか言ってもし消えなかったら凄く恥ずかしいよな」

「録音しておくよ」

「おいやめっ……」

最後の言葉を言い切る前に、目の前が暗転した。

「扉を開ける海月！ □移しだ！ □移しの続きをやるぞ！」

ふと気が付くと、ドアの向こうからラウラの声が聞こえる。……ん？ □移し？

あれ、待った待った。時間感覚がおかしい……のは当然として、まさか今って ドゴン。

「逃がさないぞ海月！」

ドアがいきなり悲惨に飛散したかと思うと、ドアの先には右手IS左手クレープのラウラがいる。

間違いなく、あの時間だ。

「こっちでは和人はいないんだよな……」

「ん？ 和人とは一体誰のことだ。いや今はいいとしよう。それより海月 むぐっ！」

ラウラはいる。

ああ、やっぱり。

俺は、この世界の人間である。

一方。

「なあ、一夏。海月がいきなり消えたと思ったたら出てきたこの黒い穴、何だと思う?」

「別世界へ通じてるに一票」

『飛び込んじまえよ！ 飛び込んじまえよ!』

「キャラがおかしいぞ!？」

彼は、この穴に飛び込んだのか。
それはまた別の話。

69 乱入者は異世界の夢を見るか？ s1-4 (後書き)

真尋様の『転生者は可変戦闘機の夢を見るか？』(<http://ncode.syosetu.com/n4153s/>)への乱入話、その4です。

説明の前に、更新に間が空いたことと話が多少飛んで終わったことに謝罪させていただきます。

更新ですが、使用しているPCがやたら固まったりレッドスクリーン現象が発生したりと色々な要因が重なり遅れる結果となりました。今後も少し遅めになるかもしれないです。

話が飛び飛びなのはもう完全に組み立て方のミスですね。

途中で間違えて一度話を消してしまった 急いで書き直したが時間がなくて短い投稿になった

というのが問題だったかなあ、と。

本当は風呂の中とか2話目でやって、アリーナには3話の終わりで到達させた上で4話でトラブル解決に1話費やす構成だったはず、なんですけどね)

というわけで、ここで番外編は完結となります。

何が異世界へ飛んだ原因か？ という話は、次にお祝いする時があった場合を考えて書かない方向で終わらせました。

僕の視点で見ると、あちらの話は和人君と一夏君の絡みが特に印象的だったので、そこに入り込む話にできてたらうれしいなあ、と思います。

70 ラウラは黒服が一番似合っに異論は！

それは、俺のバイトが3日ほど空いた、夏休みのあくる日のことである。

世間では俗にお盆週と言われる時期となっていて、今までひっきりなしに、もしくは空けても1日程度だったバイトが3日も連続で休みになったのもそれに起因する。

我がIS学園の生徒もかなりの人数が自宅へ帰っていて、寮も平常と比べて熱気が和らいだような錯覚を覚えさせた。

俺はといえば、家の方には既に顔を出したので特にすることもなく、久しぶりの休日を情眠を貪りーのトレーニングに没頭しーのとそれなりに満喫していた。

「海月、祭りに行かないか？」

そんなときに一夏が、部屋のベッドで寝転んでくつろぐ俺に対して、こう提案してきた。

祭りと聞けば、前にも言ったが町内会で有名な祭司みっちゃんである俺の血が騒ぐ。同じく前にも言ったが町内会で有名な野次馬みっちゃんとしても、ここら辺の祭りには興味津々である。

「祭り？ 祭りってあのジャパニーズ・マツリ？」

「そうそう。ああと、筭の昔の家だった篠ノ之神社であるんだけどな」

「ああごめん、俺パスで」

途中まで聞いて一瞬で否定させていただくこととした。

祭りといえば乗り気、というか馬鹿騒ぎは好きな部類の話なのだが、「篝さんの昔の家」の「篠ノ之神社」という単語を聞き、あちらで起こる大体のイベントを導き出してしまったわけだ。

「即答かよ!? 篝も多分いるんだぞ?」

「篝さんがいるから行かないんじゃないじゃボケッ!」

何が悲しゅうて、折角の篝さんのアタックチャンスをわざわざ妨害する役回りにならなくちゃなんのだ。町内会では、まだ引き裂きみっちゃんとして有名になった覚えはない。

一夏の性格を考えると、どうせ俺が「じゃあ一人で屋台見て回るよ」とか宣言したところで「へ? 大勢で回った方が楽しいだろ」って返答して篝さんに鬱憤を募らせる。これは確定事項である。

すると俺の台詞を聞いて、一夏は怪訝そうな表情となった。それから顎に手を当て思案顔へと表情を変化させる。

「うーん……? 海月って、篝と仲悪かったっけ?」

「俺の方面から見ただけで、少なくともそこまで悪くはないと自負してる」

御気楽脳では分からないだろう、彼は更に疑問符を増加させた。

「じゃあ何で」

「篝さんにも同じ質問してみ、今日祭りに誘ったら篝がいるって聞いただけで来るのを拒否されたんだが、もしかして仲違いしてる

のか?』とか。多分『嫌いじゃあないが、そうか来ないでくれたのか』みたいなこと言うから」

一応だが、俺から篤さんに嫌われるようなこともしていない自信はある。こないだ昏倒させられた上で無理矢理@クルーズに来た時も普通に会話はできてたし、「次は一夏とでも一緒に来なよ」とドリンク1杯無料券なんてものも渡した。

未だに来店していないから多分その情報は一夏に伝わってはいないのだろうが、渡したときの篤さんの顔は満更でもなさそうだったと思う。

「うーん、海月の言ってることは難しくて分かんないな」

一夏は不服そうな顔をしてそうほざきやがりますのだが　うーん、

一夏の頭の中は難しくて分かんないな。

勿論、どういう思考回路をすれば自分への好意をそんなに気付かずにいられるんだ、という疑問について。

「とにかく、俺は祭りには行かないからな?」

どうやらどれだけ考えても答えが出ないと悟ったらしく、そこで一夏はすぱんと脳内考察システムの稼働をサスペンドさせたらしい。

「ちえーっ、仕方ないや、1人で行くか」

こうして、俺はまた1つ一夏を取り巻く環境への干渉を防いだわけである。

織斑一夏に篠ノ之神社での祭りに行かないか誘われた、その日の夕

方のことだった。

「海月、祭りに行かないか？」

ラウラが、食堂で1人月見うどんを食べていた俺に対してそんな提案をしてきた。

服装は制服。買い物時に買った服はどうやら寝巻を除けば全て外出用ばかりらしく、日常ではまだ私服を見ることができていない。シャルロットによると「女の子なんだからもっとオシャレに気を遣わないと！」とのことで、再び買い物に誘う予定らしい。

「祭り？ 祭りってあのジャパニーズ・マツリ？」

こういうのをデジャヴって言うんだっけ。一夏の言葉とラウラの言葉がぴったり一緒だったので、つい俺も同じ言葉で返答しただけだ。

勿論、その後の言葉は一夏とは違ったものだ。

「うむ、クラリツサ曰く日本の祭りは夏の定番と聞いたのでな。せっかく日本にいるのなら、一度は体験しておくべきだろうと思った次第だ」

ハルフォーフさんが正しい日本文化を初めて教えたことに驚愕を覚えたが、そこは現時点での問題点ではないだろう。間違った大量の知識の中に、正しい知識の1つぐらいがあっても別におかしいというわけではない。

それより 「場所はどこのの？」 というのが一番の問題だった。

しかし、行動決定時のラウラの手際の良さは流石は一流といえるものがある。

「場所についてだが、実は既にこちら辺で祭りがある場所を調べてあるのだ。一週間以内だと、この近所では3箇所ほどで行われているそうだ」

既にそこまで調べがついているのであれば、行かない理由は見つからないだろう。最近はバイトでラウラ成分（残念ながら主成分は不明とのこと）が足りてないし、一も二もなく賛成だ。

ああ、成分とか言っちゃってるよ俺。

「よし分かった。日程はいつ？」

「さきほど挙げた3つは明後日、明々後日、6日後だな。少し遠出すればもっとあるのだろうが」

「それじゃあ善は急げってことで明後日でどうかな。明後日雨が降ったら6日後に変更する感じで」

そうして、一夏からの祭りの誘いを蹴ったちようどその日に、ラウラからの祭りの誘いを受けることに決めただけである。

ラウラが、がくりと肩を落とす俺の方を心配そうに見つめている。別に、急にバイトの予定が入って祭りに来れなかったとか、道を間違えてしまったとかそういうわけではない。

そういうわけではない、ということとは別の理由があるということだ

ある。その理由とは、

「何で、ここなんだ……」

誘われた日から2日後、近隣の地形を覚えて迷わずにラウラと2人でやってきた祭り。『篠ノ之神社』という文字が目の中の看板に見えるのは、幻だと信じたいが現実らしい。

そうなのだ。一夏に誘われたのを断った篠ノ之神社の祭り、そこそがラウラの見つけてきた「IS学園からそう遠くない場所での祭り」だったという話なのだ。狭い日本そんなに急いでどこへ行くと言うが、もう少し世間の幅は広くてもいいのではないかと、思わず愚痴りたくなってしまう。

「み、海月？ どうしたのだ？」

尚もラウラは状況が掴めないらしいので、分かり易いヒントを提示する。

「ああ、……ラウラ、あの漢字、読めるよね？ 神社より前のやつ」

そう伝えて看板を指差すと、馬鹿にするなよと言ったように彼女は読み始めた。

そして、段々スピードダウンして、漢字にして3文字目ひらがなに
して4文字目の地点で、完全に停止する。

心なしか、汗がダラダラと流れるようなアニメーションが映っている気がした。

「ま、まさか……」

どうやら、この神社がどういふ場所なのかおぼろげながらも理解し

たらしい。俺から見れば、この字は幻だったという可能性が消え去って再び肩を落とすだけのことだ。

「しかもいるのは篝さんだけじゃないぜ……なんと、今日は一夏がこの祭りに来るらしい」

そこまで聞いて、どうやらラウラにも完璧に俺が肩を落とした理由は理解できたらしい。「2人きり 悲しく消える 夏祭り」とは、誰かが詠んだ俳句のことだ。誰がだ。俺がだ。

「はあ、これで一夏と会うことになって、そしたらあいつのことだから」 いや、違う！ こうなったら「一夏にも篝さんにも、見つからなければいいんだ……！」

そう。

2人に俺達の姿を見られさえしなければ、あちらの雰囲気も壊さずこちらも2人きりということでも万々歳の結果となる。これならば誰からも文句は出まい。

「というわけでラウラ、ISで一夏と篝さんの位置を把握するぞ！」

「なっ！？ ISの無断展開は条例違反」

「知るか、今は緊急事態だ！」

いつもの俺であれば、こういう時に暴走する人がいたら止めていたと思う。しかし、その時は心にある焦燥感に駆られてしまった。ほんの出来心だから、許してほしい。

かくして、「隠密！ 一夏と篝さんに見られず篠ノ之神社のお祭りを楽しもうよ大作戦」の幕がここに開かれたのであ

「あれ？ 来ないって言ってたのに海月、来てるじゃん。……あ、ラウラと一緒に来てたのか」

閉じたのである。

ISでの位置情報確認をしても、声からしても、この後ろから話しかけて来た人物が織斑一夏であることは間違いなかった。

このときほど一夏のタイミングの悪さを恨んだことはない、断言できる。

思い切り殴って昏倒させようかともその刹那に考えたが、辺りに人の目が多いのでできなかつた。……人の目が少なければ躊躇なくやっただけのことだ。

せめてこちらの雰囲気気付いて声を掛けないでくれれば、と淡い期待もしてみた。してみたのだが、それが淡すぎて存在しないも同然な期待であることは、兄の俺が一番よく分かっている。水母の口調はいつも通り淡々とした物言いが半分と、好奇心が半分とで構成されていた。

そんな水母には、とりあえず淡々とした物言い半分と「あっち行け半分との口調で返すことに今決めた。

「よお、水母あっちいけ」

「そちら、彼女？ お似合いじゃない」

好奇心が6割に増えたらしい。声色が、少しご機嫌そつなものへと変わる。

ええい。気恥ずかしさ半分とあっち行け半分で返事するしかなくなってしまったではないか。

「お前も彼氏の1人ぐらい作れよ水母あっちいけ」

「ううん、作りたいかどうかと聞かれれば作りたいんだけどね、兄さん以上の男がいないのよこれが」

無理矢理話題をずらしてみると、どうやら乗ってきてくれたらしい。ここら辺の空気読みが早いのは非常にありがたいところだ。

「そりゃ残念。悪いがラウラ ああごめん、紹介が遅れたけど彼女の名前あっちいけで、ラウラは俺の見立てじゃお前以上だぜ水母」

挑発的に笑いかけてみたが、やはりコイツには効果がないらしい。

しかしその途端、一緒にいた女子達がキヤーキヤーと騒ぎ出した。成程、聞きようによっては今の発言は、水母の超ブラコン発言とも取れるだろう。

それとも、ラウラを彼女と公言した方が騒ぎの対象だろうか？ 少なくとも両方に見える。

ラウラはラウラで何を勝ち誇ったような笑みを浮かべているんだ。なでなで。

「あ、あの。水母さんのお兄さん、ですか？ 初めましてっ」

赤茶がかった髪の子が、恐る恐るそう尋ねてきた。 確か、水母から名前を聞いたことがある気がする。ええと、……

「ああ、五反田蘭ちゃん だっけ？ 確か生徒会長だよな」

知ってるんですか！？ と驚愕されたので、どうやらこれで正解らしい。

そう、うちの妹が副会長を務めるって聞いて驚いたんだよな。水母であれば臍肩目で見なくても絶対に会長だと思ってたから、その妹から会長の座を奪い取った人物がどんな人が気になってそれで聞いたんだった。

確か、「私と違って自然体で人に好かれる才色兼備」との評価だったと思う。「才」はともかく「色」は間違いではないらしい。

「うん、水母が人のことを褒めるなんて珍しいからね。会長さん、水母がいつもお世話になってます」

「いえいえっ！ お兄さんの噂はかねがね！ 水母ちゃんにはいつもお世話になってますっ！」

すると、ニマリと笑ってうちの妹が「ねっ？ 私がいつも会長のことをベタ褒めしているってこと、嘘じゃないってわかったでしょ？」妹が普段口にしないう褒め言葉を暴露するという渾身の一撃は、ひらりと身をかwasされた。

どうやらこの女子達も同じ学校の生徒会一同らしい。結構充実した生徒会だよ、という噂は、目の前の彼女達の仲の良さを見れば真のことであるようだった。

「ねえ副会長。ISに乗れる男性って世界で2人だけなんだから、おにーさんを超えられる男性って1人しかないんじゃないの？」

「ブラコンシスター、ここに極まれりだね！」

他の女子達が再びきやいきやい騒ぎ出すと、蘭ちゃんが「すいません、この子たちふざけるのが好きで」と詫びてくる。うちの妹とは対極に位置する礼儀正しさである。「越えられる男性って1人しかないんじゃない」の所で何故かピクリと反応していた気がするが、一夏の知り合いだろうか？

それはともかく、俺にしてみればこのぐらいの悪乗りは慣れたというか、IS学園であればもっと酷い。噂は1日で学園を駆け巡り、事実上3回転半の捻りを加えて伝わってゆく。ピッチャー顔負けの曲がり具合である。

「ブラコンじゃないって。私だって毎回内申合計マックスとって来て料理裁縫できてイケメンで頭の回転が速くて包容力ある男性がいれば、そっちになびくから！うちの兄貴は強情で喧嘩っ早いし背も169から成長止めてるから、そこもカバーされてれば完璧ね」

それは何か？ 遠まわしに俺自慢をしてるってことかい？ と思ったら中傷も加えるっていうことはアレかい？ ツンデレかい？

褒めてから落とすだからデレツンかい？ うわ鳥肌っ。

「水母お前あつちいけ、自分と性別以外全く同じ人間がいたらそいつになびく
だろ」

それを聞くと、水母は身体を腕で抱くようにしてブルツと振るえた。

「いや、何それ気持ち悪いっ。あ、会長が男なら惚れてたかもよ」
そうして水母が蘭ちゃんに近付いたかと思うと、一気に飛び掛って
抵抗する間もなく頬擦りしている。さつきシスコンキャラを自信た
っぷりに付属したかと思つたら、今度は同性愛キャラで売り出した
らしい。

この中で、水母の本性を知っているのは俺だけなのだろうか。
コイツは、内外の全てを計算ずくで動かすヤツなのである。ロール
プレイングゲームでいったら、魔王の最大の配下の知将みたいな立
ち位置のヤツなのである。それでいて主役クラスの实力を持ってい
て、負けたら負けたで上手く保身のルートを握って最終的に生き残
るようなヤツなのだ。

「それじゃあ、私達は学園祭のためのデータ取りがあるからここら
へんで。 あっ」

それを最後に友人たちと一緒に去りかけ、たところで思い出したか
のように1人だけ戻ってきて、耳打ちしてくる。

「私と蘭ちゃん、2人ともIS学園志望だからね。来年はヨロシク
あ、ちなみに蘭ちゃんは私より凄いわよ」

どうやら用件はそれだけだったようで、結局夕立のようなスピードで水母は去っていった。

は？ 来年からIS学園に来るのか、アイツ。

一応非常に高い倍率を誇るIS学園だが、水母が落第するビジョンが見えない。あいつ、適正A行つてなかったっけか。それを蘭ちゃんが越しているということは、きっと2人とも合格するのだろう。これも、悪いが身内鼻屑ではない。

「海月、あれがお前の妹か？」

姿が見えなくなった辺りでラウラがぼつりと呟いた。

「ああ……うん。名前は水母って言うんだ。変なヤツだったでしょ、忘れちゃっていいよ」

返答したその言葉は、今俺が吐ける最大限の皮肉だった。

その後ラウラが「いや、流石海月の身内だ。隙がなかったぞ」と褒めるところを見て、今度こそ石畳とご対面しかけることとなったのだが。

それにしても、IS学園に来ようとしているヤツをこれで3人は知っているわけだ。

将来は、ある程度明るいようである。しかし残念ながら、俺にとつては真つ暗とも言う。1人は腹黒い妹でもう1人は俺への対抗心バリバリの少女。どこに期待しろと……あ、蘭ちゃんは礼儀正しいいい子だったな。

72 浴衣姿のラウラ……ゴクリ

「さて、どこの屋台から回るうか？」

人ごみの中。沢山の屋台が出揃い、祭りはこれでもかというほどの熱気を帯びていた。

焼きそば、たこ焼きお好み焼きなどの軽食からりんごあめやラムネなど菓子類、後、射的やクジに輪投げの娯楽　あ。

いつもと服こそ違えど髪型や背格好は変わらない2人分の後ろ姿を見つけて、慌てて文章を付属する。

「但し、金魚すくいは今はナシの方向でお願いしてもいいかな？」

「む？　クラリツサの情報によると、金魚すくいは祭りの醍醐味と聞くが……何故駄目なのだ？」

その質問への返事代わりに、ある方向を「アレアレ」と指差す。指の先には金魚すくいの屋台と、今まさに金魚をすくっている客が2人。

織斑一夏と篠ノ之箒、その人である。

ラウラは苦い顔をしながらも納得したらしく、ひとつ咳払いをして「では、あそこはどうだ？」と提案をしてくる。

だがしかし、その時急に人の通りが多くなってしまったのでラウラの指す「あそこ」がどこが見えなかった。

「えっと、どこ？」

聞いてみると、どうやら今度はラウラが返事を行動で代行する番になった。

それ即ち 自然と手を引っ張って、その屋台の先まで連れてこられたというわけだ。

「わたあめ？ ……あ、もしかして食べてみたかったの？」

「うむ！ ついさつき横を通った子供が持っていてな、興味が沸いた」

そう俺に説明しながらも、既にラウラは目を光らせながら綿状の砂糖へと目を向けていた。「なるほど、砂糖を熱して……」だとか「手近なもので装置は代用できそうだな……」だとか呟いているのを見たところ、どうやら今度寮で作れという啓示らしい。

「それじゃあ買おうか、いくつも作って置いてあるし。おじさん、わたあめ2つ下さい」

「はいよ、2つで800円だ！」

いつも思うんだけど、わたあめってかなりポツタクリだよな。原価と販売額に差がありすぎる。

財布から野口せんえんを召喚、野口せんえんをリリースしてワタアメ・トークンを2体特殊召喚！ 効果で百円玉あつし二枚を手札に戻す！

アニメで有名なキャラクターのプリントされた袋を2つ、それぞれに手渡される。あー、キャラなしのやつならもっと安いのかなあと考えてしまうのは、今俺がかなり金欠だからだろうか。

貰った袋の1つをラウラに渡すと、喉をゴクリと鳴らしながら彼女はそれを受け取った。

さて、2つ買ったわけだから俺も食べるか。

と右手でわたあめの袋を持ち上げて、そこで問題点に気付く。

「えっと、ラウラ？」

「ん？」

「そのう……左手、解いてくれないと袋が開けられないんだ」

「あつ！ すつ、すまん！」

慌てて手を離れたラウラの頬は少し赤くなっているように見えたが、自分の顔も少し赤くなってきた気がついていや往来で見せ付けるものなのかこれは！？

男だけできている学生陣から殺気の籠った視線を飛ばされた。

「おう御二人さん。イチヤつくのはいいが、屋台の前で止まられてたら後ろがつかえちゃうぜ」

「あつ、す、すいません！」

慌てて離れると、先程まで後ろにいた女性からクスクスと笑い声が聞こえる。嫌味を感じられないその笑い方は見守るような視線を含んでいると気付き、更に恥ずかしい。

一方のラウラは走りながらもわたあめにかじりついていたりする。

だがしかし、そこで方向を見ないで走ったのがまずかったらしい。後、ラウラに見惚れてたのも原因だけれど、

ドンツ、と、思い切り人にぶつかる。お互いにこけなかつたのは、
どうやら相手もそこそこに身体を鍛えている相手だったからのよう
だ。

「おつとつ、ごめんなさ……い、」しかし、そこで口から出た言葉
は急な方向転換をした。「ちか!？」

疑問系にするまでもなく、ぶつかった相手は一夏だった。隣には篝
さんがいて、なにやら悔しそうな顔をしている。

反対に上機嫌そうに一夏の手の中には、いつ買ったのやら焼きそば
があつた。篝さんは持っていない、何故だろうか？

あれ？ そもそも、さっきまで金魚すくいしてたんじゃないか
つた
け？

「む？ 戸鉄とラウラか。珍しいな、IS学園の外で会うとは」

篝さんは多少むつとするが、俺及びラウラが恋愛の障害とはならな
いことは既に知っていたためか、そこまで過剰な反応はしなかつた。
と思つたら、ラウラがなにやら「羨ましいか！」と言わんばかりに
腕を絡めてきた。挑発か？

素直に気分は有頂天なのだが、絡めてきた直後にもじもじは……い
や、性格的に似合わない気はしたけど、逆にアリかもしれない。

「いやあ、2人とも見せ付けてくれるじゃないか」

「そついつ一夏こそ、篝さんと並んで歩いているとカップルみたいだ
ぜ?。」

「一夏のからかいにに応じて俺もからかうと、一夏は「えっ、そ、そうか？」とどもった後に少し照れる。

この応酬で篝さんが一瞬で上機嫌になったのは言うまでもないが、一夏がどきりと反応を見せたのは予想外だった。知らない間に、この2人の間にも少し進展があったんだろうか？

「じゃあラウラ、2人の邪魔したら悪いから行くこうぜ」

「ほふだは、ほれでは」

いつまでもあそこで話し込んでいたらお邪魔虫以外の何者でもないことは明白だったので、すたこらとその場を退散。

その間もラウラはわたあめをかじるのを止めていないので、どうやらお気に召したようだ。

「ラウラ、あの2人は今日どこまで進むと思う？」

「ううむ……、篝は積極的なのだが、なにぶん一夏があ性格だからな。進んでも、少しだけ抱きつくだとかその程度ではないか？」

それは、かなり冷静な分析だと思う。「だねー、大体俺も同意見かな」と返すと、彼女は自身の推理に満足したようでニヤリと笑みを浮かべた。

実際にそれが正解だったと分かったのは後日談になるので、省かせてもらおう。

それからわたあめを2つラウラが頬張って（勿論俺のをあげたが、写真的な意味で10万ぐらいは得したと思う）、やっとこさ次の舞台である。

「それじゃあ……一夏と篤さんがいなくなっただってことは金魚すくいもオーケーってことになったけれど、行くところか？」

「だな！……と、思ったが海月、どうやら再び顔見知りが参戦しているらしいぞ」

へ？

一夏たちがもう一回、ってことはあんまり考えられないし……ってことは、水母か。全くタイミンクの悪いや、これはむしろタイミンクがいいぞ。

「ラウラ、ちょっと見に行ってみようぜ」

先程まで身内との顔合わせを嫌がっていたところを急に轉身したためか、ラウラは不思議そうに首を傾げる。

「ま、いいからいいから。最も 金魚すくい自体は、できなくなるかもしれないけど」

それでもなにやら分からないらしかったが、俺が金魚すくいの屋台へ歩き出すとトテトテとついてきた。

金魚すくいの方は……お、やってるやつてる。

「水母」

金魚すくいをやっている水母は途轍もない集中力を発揮していたため、その呼びかけは彼女の耳には届かなかった。

代わりに、それは屋台のおじさんの方へと届いたようである。

「な、なあ兄ちゃん。このお嬢ちゃんは兄ちゃんの知り合いかい？
ちよつと、こりやまずいんだがなあ……」

「あー、おじさん諦めてください。こいつ、網が完璧になくなるまでは
ですくい続けますから」

その会話をしている横の水母の状態はというと、既にすくった金魚
は3ヶタを突破したようである。

網からうまく尾びれを外し、2匹3匹と同時にすくい上げるさまは、
名人さながらである。屋台のおじさんにとっては悪魔さながらであ
る。

「あ、こつち側は空いてるんですね。ラウラ、右半分には水母は手
を出せないみたいだし、こつちでやらせてもらおう」

だがしかし、ラウラにも言葉は届かなかった。

水母の腕前を見て、感激しているのか驚嘆しているのか、といった
ところだろうか。

「……仕方ない。おじさん、1人分下さい」

「はいよ、だが 隣でこんなに乱獲されてんを見ながらだと、
嫌じゃないかい？」

おじさんは知らなかった。

この、隣で金魚をすくっている少女と俺が、兄妹であるということ
を。

そして、水母に金魚すくいのコツを教えたのは、俺であるということ
とを。

それから15分後、金魚は水槽から消え去っていた。
増えていたものといえば、おじさんの汗と涙、それと野次馬観客の
人数だろう。

73 しかしこのラウラは制服なのです残念ッ！

兄妹揃って水槽内全ての金魚をすくい上げ 勿論、そこにいたメンバーの全員で分担したとしても全ての金魚を持つことはできないので、お互い2匹ずつだけ貰って後は返したが した後、何故か生徒会長こと蘭ちゃんが抜けた妹の学校の生徒会メンツと2度目の挨拶を交わすと腹の虫が喚き、そういえば自分の腹の中が銀行の預金と同期しているような状態だったことを思い出す。

それはどうやらラウラも一緒のようで、いくら俺と違ってわたあめ2つをたいらげたと言えど、小さな砂糖の塊を食べただけと同義では足りないのだろう。

お互いに1匹の金魚を左手首にぶら下げながら、屋台の並びを歩いてゆく。

「さあ、どこにしようか？ タコ焼き、焼きそば、お好み焼き、とうもろこし……へえ、炒飯とかピザなんてのもあるんだ。国際化を感じるな」

「ドイツ料理は見つからないぞ」

「後10年もすれば出てくるんじゃないかな？ その頃に来てみよ」
なんて台詞を口走った直後で、今言った内容の重大さに気付いた。
10年後にまた来てみようってそれはつまり、そういうことだ。どういうことだって、そういうことなのだ。

しかしどうやらそこに違和感は抱かれなかったようで、「まあ折角日本の祭りなのだし、昔ながらのものを楽しむか」とラウラは一步

先を歩いていた。
内容に深く突っ込まれなかったことに少し安堵感がありつつも、何故か少し切ない。

とは考えつつ、悲しげな表情をすると心配させてしまうかもしれないので、そんなことはおくびにも出さなずに話を続ける。

ラウラは大雑把な性格に思えて意外と心の機微に聡いから、気付かれていないことを祈ろう。

練り歩きながら様々な屋台を見ていたら、射的屋にて銃を持つ3人組が目に入った。

「あれは一夏と篝さんと　　蘭ちゃんか」

蘭ちゃんが一夏と会話していたのは少しだけ予想外だったが、確かに先程も多少一夏の名前に反応していた。『篠ノ之神社』である時点で一夏の知り合いは沢山いると見て間違いないわけだし、この近所に住んでいるのであれば蘭ちゃんが一夏の知り合いでもおかしいところはどこにもない。

「あれ、一応一夏と篝さんは学園で訓練とか受けまくってる身なんだけれど、あーゆーのやるのは反則じゃないのかね？」

そんな疑問をふと口にする、ラウラが「情けないことだが」と前置きをしながら解決してくれた。

「かたやつい最近まで近接装備限定だったISの操縦者、かたや現時点で刀を振る動作ばかりのISの操縦者。一夏の方は、確かシャルロットと多少の射撃訓練はしたそうだが　　まあ、正直ズブの素

人と変わらんだろう」

「違う、と苦笑。」

「一応一夏も篤さんも現時点でISに飛び道具はあるが、それを操る腕前はお世辞にも良いとは言えない。というか篤さんの飛び道具は、確かそれすら刀を振るうやつだけだったような……？」

「まあいいか、とにかくあの2人は射撃が下手だったことに変わりはない。」

「ま、私達があればやるのは流石に反則だろうがな。どうしても欲しい賞品があるのなら別だが？」

「それは言い換えれば「やろうと思ったのなら問題なく参加するぞ」という問いかけだったのだろうが、生憎目を通して欲しい賞品はなかった。」

「それなので「いいよ」と返すと「では、改めて晩御飯を決めよう」と話題が元に戻る。」

晩御飯の内容が決まったのは結局それから4分の1時間ほど過ぎてからだった。

「ラウラがたこ焼き、俺がたこ焼きに追加してお好み焼き。全額俺が払う予定だったというのに、たこ焼きの金額はラウラがさっさと払ってしまった。」

「なに、ギブアンドギブ対テイクアンドテイクでは割に合わないだろう」

「なんていうのがラウラの主張だったが」「ラウラ、一応言っておくと、俺がラウラに貰っている物は金じゃ買えない物で」

「多少臭い台詞をいいかねない勢いで反論してみたが、しかしその反」

論はラウラに途中で防がれた。

「何を言っているんだ、海月？ それが一番通行じゃないことぐらい、理解していると思っただけだな」

一言で表すと、うえーい。

音で現すと、ゴクリ。

目頭が熱くなった。

あー、俺明日死んでもいいかも。いや駄目か、ラウラが天国とか来世にいるとすれば別だろうけど。

「というわけで、続けて買おうとしているそのお好み焼きも」

なんて考えていたらラウラが呟きながら財布を出していたので、慌てて手で押し返した。

「ダメっ、コレは俺が個人で買うものだから俺が払うのっ」

「ならば私もそれを買おうではないか！ すまない、こちらと同時払いでお好み焼きをもう一枚」

「こちら、ちゃんと食事は制限しないと太っちゃうよ？」

「このぐらい、多少訓練量を増やせば問題ない！」

やれ購入だ、やれ取り消しだ。

屋台前で、男女がお互いの意見を言い合い、そして痴話喧嘩を続ける。

お好み焼き屋のおじさんは、ほとんど困り果てた。

「ラウラ、花火は見ないでよかったの？」

帰り道、祭りを満喫したのか満足げに歩くラウラに、確認するように海月は問いかけた。

篠ノ之神社では、つい数分前から花火の音が聞こえ始めていた。ドンドン、パチパチと様々な火薬の音が辺りに響いている。

少し首をかしげながら、ラウラは海月の質問に答える。

「花火ぐらいなら、ドイツでも何度か見たことがあるしな。特別これが凄いというものもないだろう」

どうやら、現時点でも十分に日本の祭りの空気を味わうことはできたようで、ラウラとしては満足したらしい。

しかし、それはあくまで外国人から見た視点なのだ。海月からすれば別の見方となる。

「そりゃあ、花火は世界共通だろうけど……逆にさ、どんな場所でも締めめの醍醐味みたいなものだよ？」

その言葉に反応してぴたりと足を止めたかと思うと、ラウラはくると90度回転した。

その回転後の視線の先にいたのは、勿論だが海月である。

「醍醐味、か。なら、来年の祭りの楽しみにしておこう」

その言葉と同時に、歩いてきた方向からドン！ と大きく花火の撃

ちあがる音がする。少し前から聞こえてきていた花火の大きさから察するに、どうやら『本番』みたいなものに突入したらしい。気を取られてそちらを向こうとした海月を、その方向へと回り込んでラウラは制止した。

「来年の楽しみにすると決めたのだから、今花火を見てはだめだぞ」
くすり、とラウラが微笑む。

夜空からの一瞬の火の光が、乗用車1台が通れるかといった小道の中央に立つラウラの影を、背中からくつきりと移した。

気付けば、海月も同じように微笑みを返していた。

「それじゃ、また来年もここの祭りに来ようか」

最初に祭りに来た時には絶望したただの不条理だだの叫んでいた海月の顔にはしかし、そのような不満は今や影も形も見えない。

どうやら満足したのが自分だけではないことを理解したラウラは、その日一番の笑顔を作り出した。

少年が、少女の手の平を静かに握る。

少女は、それに逆らう素振りも見せずに、自然と手を握り返す。

歩みを止めていた2人分の人影は、再びゆっくりと、ゆっくりと、静かな火薬の音に耳を傾けながら歩いていった。

二度目上がった花火は、今度は繋がった2人の影を、綺麗に地面に反映させていた。

73 しかしこのラウラは制服なのです残念ッ！（後書き）

次回からドイツで一週間編が始まりますけれど、

A・本1冊分ぐらいの大きめのストーリーに入る

B・多少いちゃこらさせて終わらせる

の2つの構想どちらも考えています。

どちらのパターンにも入っていきえる状態なのですが、どちらがよろしいでしょうか？

74 航空機オーバーワーク

夏休みも、残す所あと1週間となった。

帰省を終えた生徒達は着々とIS学園へと戻ってきており、静かだった寮の内部も少しずつ熱気を取り戻しつつある。夏が終わりに近付くと熱気を取り戻すだなんて、字面で見ればどう考えても矛盾しているのだけでも。

こんなに生徒が抜けていたのにバイト先では1組生徒全員を見た記憶があるとは、なんとも恐ろしいことだ。

さて、3週間に渡って色々な厄介事を俺の元へと舞い込ませたバイトだが、つい昨日最後の勤務を終わらせた。

完全歩合制のスタイルを取っていた上に途中で店の中が数箇所破損するというトラブルもありかなり給料の方は心配していたのだが、逆に被害を最小限に食いとどめたことも高評価に繋がったとかで、かなりの額が口座に振り込まれていた。

嬉しい誤算だ。直後に「今後も、土日だけでいいからバイトに来てよ」と店長に誘われたのは予想外だったが。

後1週間は夏休みがあるのにバイトを断った理由は、もちろんラウラとドイツへ行く予定があるためだ。

予定としては代表候補生としての報告やデータ取り、それに加えて代表候補生に舞い込んでくるというモデル紛いの仕事。

特に男性IS操縦者のデータはドイツ軍上層部も喉から手が出るほど欲しがっている情報であるため、どうやらゆっくり観光といった機会は今回もあまりさそうである。

なんて言いつつ、一番興味があるのはモデル紛いの仕事、の方である。

どこから情報が漏れたのか、既に掲載雑誌が一部の学園生徒に漏れているのだとか。情報屋でもいるのか、この学園？

閑話休題。

というわけで現在、ドイツ出発組は日本の空港にいる。

周囲は同じ便に乗る人でごった返しており、種類もスーツを纏ったおそらく仕事为目的の人間、夏休みの最後に旅行をしようという魂胆であるう親子連れ、逆に自国へ戻ろうとする外国人など様々。

目の端に、飛行機を指差してキヤーキヤーと叫ぶ子供がいた。年の頃は7か8もいかないうらいだろうか？ 過去、飛行機は怖いとガクガク震えていた自分とは正反対である。

俺がドイツ行きの航空機に乗るのは、これで3度目だ。今となればもう慣れのおかげで落ち着いている。

慣れよりも、「航空機は電車より事故率が低い」とどこかのテレビ番組で見たのが恐怖がなくなった最大の原因だが。

……とは言え、そんな俺と違って落ち着きがない人物が3名ほどこの場にいる。

先程『ドイツ出発組』と表現したとおり、今回の旅はIS学園からの複数の同伴者がいるのだ。

まず『もう一人の男性IS操縦者』一夏と『IS開発者の妹』篝さん。

この2人は数日前、企業からの勧誘や武装の宣伝にてんやわんやだった所にたまたま俺が遭遇し、これは商売チャンスとばかりに『多分、多少データ取りに協力すれば夏休みが終わるまでドイツの方で匿えるよ』と誘ってみた。

俺のデータを喉から手が出るほど欲しいと言っていたドイツ軍上層

部だ。IS開発者の自ら手がけたISのデータ、男性IS操縦者第一号のデータが不要なわけもない。

機体の詳細スペックは公開しない前提で、何度かの戦闘データを採取することを条件に、夏休み終了までドイツ軍の方で匿う形となった。

こちらはある程度観光なんかもするらしく、羨ましい限りである。

「織斑君、篠ノ之さん、戸鉄君。今はいいですが機内で騒いではいけませんよ。珍しいのは分かりますが……」

そう注意を促しつつ、自分が一番そわそわしているのに気付けないのが「1年1組副担任」山田先生。

また、その隣で腕組みをしているのが「1年1組担任ノドイツ軍元教官ノブリュンヒルデ」織斑先生。

この2人は、今回は引率という形で来ると聞いている。

どうにもこの織斑先生は一夏が心配なのだろうな、と頭の中で考えていたら織斑先生お得意の読心術で頭をはたかれたので、こちらに關しては深く考えるのをやめた。

ここに「ドイツ代表候補生ノ男性IS操縦者第2号」俺と「ドイツ代表候補生ノシユヴァルツェ・ハーゼ隊長」ラウラを含めた合計6人。これが今回のドイツ出発組だ。

「いやあ、旅行ってなんとなく、こっちはしゃいじゃうものじゃないですか？」

年甲斐もなく土産物に目を光らせながら、一夏が言う。

外国人向けの日本の土産物なんて見て、一体何が楽しいのだろうか？

「旅行ってほど楽しいばかりのもんでもあるまいに。第一、はしやぎすぎるとどうせすぐ武装宣伝が跳んでくるぜ？ ドイツ側からは一切営業をかけるな、って軍の方からは言ってるらしいけどさあ」

「まあまあ、いいではないか」

いつもは歯止め役になる篤さんも、ある意味一夏と同じ境遇での旅行ということでは浮かれ気分を隠しきれないようだ。

そういえば、セシリア、鈴ちゃん、シャルロットの3人は地味に悔しがっていたっけな。鈴ちゃんの「くそ　　っ！　あたしにも無駄な武器販売来い！」が記憶に新しい。

こういう時の最終ストップパー役になる織斑先生は、現在はラウラと会話していてこちらには何も言っていない。

一夏曰く、あれで結構思い出を大事にする人らしいから、織斑先生がドイツで教鞭を振るっていた時の話でもしているのだろう。

それから10分もすると、機内に乗り込む時間となる。乗ってしまえば、後は到着を待つだけだ。

席はエコノミークラス。俺とラウラの2人で行くのであればもう1つ上のランクの席を用意できたらしいが、4人分　教師陣はIS学園からの出費となるので、その2人分は計算に含めない　の出費となるため、ドイツ軍の方も多少ケチったとはラウラから聞いた裏話である。

「ええっと、席、席と……おっと！　すみません」

チケットを確認しながら席を探していたら、前方不注意で女性とぶつかってしまった。

あちらが「きゃっ、」としりもちをついてしまったので、慌てて手

を取る。

「あらら、こちらこそごめんなさい」

立ち上がったパンパンと埃を払うと、長い髪の女性は笑顔で謝り返してきた。

手にはチケットを持っているので、どうやらあちらも俺とおなじく前方不注意だったようだ。

「どこか、捻ったりしてないですか？」

「ええ、大丈夫」

肩や足首を軽く数回まわしてどこにも異常がないことを俺へとアピールする。

最後に首を回す時、手を当てながら片目を瞑っていたのでやはり捻ったのではないかと焦ったが、「これは今朝、寝違えたの」と笑いながらのウインクで誤魔化された。

「心配してくれてありがとう、それじゃあね」

再びチケットを確認して、その女性はすたすたと機内前方へ歩いていった。

歩く後姿で本当に異常がないことを確認すると、俺も自分の席探しへと戻った。

……つと、一夏達はどこだ？

くるくると辺りを見回すと、3列ほど後ろへ行ったところの席に横一列で座っている。

どうやら、俺が立ち止まっている間に席を見つけたらしい。全員固

まった席なので、俺の席も多分あそこらへんか。

「海月、さっきの女の人って、知り合い？」

「いや、ぶつかっちゃって怪我がないか確認しただけだけど見てなかった？」

「あ、そうだったのか」

一夏の質問に答えながら席につくと、ちょうど機内放送が入った。今から5分後に離陸。シートベルトを着用してください。

教師と俺、ラウラは慣れた手際で、一夏と篤さんは慣れない手つきでシートベルトを探り当て、カチリと締める。

テンションの方は真逆で、飛行機に慣れていない手つきの一夏達は未だに浮かれ気分を持続させているらしい。

それを出発前、最後に日本で確認した風景として、俺は時差ボケ回避で睡眠を始めた。

ドイツ時間にして、およそ午前9時少し過ぎ。ちょうど、後1時間ほどで海月達がその地に到着するといった時のこと。

「いえ、ですから！　そういうのは一旦上を通してからですね……」

ドイツ軍内は緊急時と同等の状況、つまり隊員総動員の状態となっている。

それはISを持つ特殊部隊である『シュヴァルツェ・ハーゼ隊』に

おいても例外ではなく、いつもは隊員と捻じ曲がった日本文化の勉強に勤しむ副隊長のクラリツサ・ハルフォーも今日は真剣に事に当たっていた。

いや、訓練時間には普通に訓練をしているため、別に彼女が無能ということではないが……。とにかく、その性格のせい、ふざけたキャラクターに取られやすいのは彼女の欠点の1つなのかもしれない。

「現時点はそういった内容には対応できないと　ああ、もう全く！」

一方的に切られた通話に苛立ちを感じながら、クラリツサは強引に携帯電話をポケットにしまいこむ。

4人増員分の軍内受け入れ準備は、海月がある程度余裕を持って連絡してくれたので別段騒ぐようなこともない。

即ち、このてんでこ舞いには別の原因があった。その根本こそ、4人の増員が生まれたという内容に直結はするが。

男性IS操縦者2人がIS学園を離れここドイツに揃うという情報が、どこからかは不明だが軍外に漏れたのだ。

到着まで軍内の一部の人間とドイツのIS武装生産企業トップを除き秘匿とされていたはずの内容が漏洩したとあれば、重要度の高いこの案件のせいで軍内が騒然とするのも無理はない。

内外における対応、情報の漏洩源探し、それと同時進行で空港への受け入れ準備。

動ける奴はとにかく動け。様々な課題を急に抱えた軍内では今、休む暇も許されない。

にしても、タイミングがこれ以上ないほど完璧ですね。

出迎える体制を整えつつ、クラリツサは考える。

『情報が漏洩した』という事実が発覚したのは、ちょうどあちらで予定の便が離陸した直後。時間差にして、何と3分。

離陸前に発覚していればまだ何とか対策は練れたというのに、離陸直後ではギリギリ『既に手遅れ』のタイミングだった。

かと言って本当にその時間に情報が漏洩したのかと言えば、そうでもなかった。

数日前から情報を掴んで動いていたと思われる組織や海外企業が、既にいくつも見つかっている。

そこら辺の組織の情報さえ、ドイツ軍には今さつき届いたのだ。

国内が大本の話だと言うのに、ここまで華麗に我々の警戒網を欺けるとは。

夜の11時から10時間近く経過した現時点でも、情報の出所については一切尻尾がつかめていない。

それなのに、外部へは次々と情報が流れ出していた。とんでもない失態である。

男性IS操縦者2人の他、同行者が4名いる。

4名の名前は織斑千冬、ラウラ・ボーデヴィツヒ、篠ノ之箒、山田真耶。

ドイツ軍の管理する施設であるどこどこに宿泊する。

日本へ帰るのは一週間後である。

露呈したと確認されている情報は、これ以外にもかなり大量に存在した。

海月の側には、「ドイツ軍で圧力をかけて企業側からの営業は掛けさせない」と伝えてある。

だが、国外の企業に関してはその限りではない上に、営業以外にはそもそも隠匿する形を取っていたのだ。

国外含めここまで早く情報が伝わってしまったのは、抜け駆けで営業やインタビューをしようとする者は絶えないだろう。

先程掛かってきていた電話も、ある程度自分と繋がりのある雑誌編集者からの連絡だった。

犯人は軍内にいるのか、それとも盗聴されているか。企業側から流れた可能性もあるか。

目的は、軍の権威の失墜？

それにしても、流出しているのは今回の案件だけだ。俗に言うブラックボックスと呼ばれるような情報が流出したという話は、一切聞かない。

とにかく、確実に……妙手だ。

少し考え事をしすぎて歩くペースが落ちていたのか、隣を何人も隊員が追い抜いていたことに今更気付く。

ハツとして数回大きく瞬きをしてどうにか頭を冷やしながら、クラリッサは廊下を駆け抜けていった。

とにかく、現時点での万全な対応をしなければ。

海月達一行を空港に迎えに行くまでの実に一時間、彼女の東奔西走は止まらなかった。

「はあ……。何も、することがないわね」

日本時間で午後5時ごろ、IS学園、食堂。少し早い夕食を取りながらの鈴の呟きは、テーブルを挟んで同席するシャルロットの耳にもしっかり届いていた。

なにやら2人とも意気消沈といった面持ちであり、その原因は勿論2人の共通の想い人である織斑一夏にあった。

折角殆どの用事は済ませたというのに、最後の一週間というこの時に一夏がいない。

今度こそ、ちゃんと遊びに誘おうと考えてたのに。

鈴の考えていることの根本は、やはりシャルロットとシンクロしていたらしい。

日本国発祥パスタと名高いナポリタンをくるくると巻きつつ、こちらでも軽く溜息を漏らす。

「まあ、暇があつたら企業の人に呼ばれてたもんね、一夏」

「仮病でも何でも使つて、とにかく無視しちゃえばよかったのよ！

あたしだって面倒な時はそうしてるし！」

「ええ〜……。少しぐらいは、話を聞こうよ」

シャルロットはカッカする鈴を嗜めるが、それにも聞く耳持たずのようだ。

一夏は仮病だとかの類の嘘が苦手だということは知っていたが、それを理解していても鈴の悔しさが紛れることはなかった。

がっ、と鈴はラーメンの器を両サイドから掴む。

「しかもドイツよ、ドイツ！ 箸が羨ましいっいたらないわよ！」

ヤケ食いで諦めを鎮めるかのように、鈴はラーメンをかつ込み始める。

およそ女子の食べ方とは思えない風景だが、既に見慣れた風景なのでシャルロットは特に呆れることもなかった。むしろ、こういう食べ方のほうが彼女には似合っさえている。

「まあ一夏のことだから、帰ってきたら2人が恋人だなんてことはないと思うけど……あれ？」

シャルロットが何かに気付いて席を立ったが、鈴は気にせずにラーメンの残りを飲み込んでいる。

どん！ と音を立てて空の器を机に置くと、先程までその器が隠していた目線の先に鈴は、なにやら上機嫌な顔つきプラス軽い足取りでサンドイッチを運ぶ金髪のイギリス代表候補生 セシリア・オルコットを見つけた。

おかしいわね、確かセシリアも、結構ガツクリきてた筈なんだけど……。あの機嫌の良さは、一体何なのかしら？

そしてそれと同時に、なにやらもう1人の金髪女子 シャルロットが、コソコソとセシリアの後ろに回りこんでいるのも発見した。先程まで席についていたというのに……。シャルロットの身のこなしは、鈴には異常に機敏に映った。

「オルコットさん。機嫌がよろしいようですが、どうかなさったんですか？」

セシリアの耳元に顔を近付け、ひそひそとシャルロットが囁く。まるで別人が話していると見せかけたかのように、その声色はいつもと違う少し高めのものだった。

それに対し、声の主が誰であるかも確認せずにセシリアは返事をした。

して、しまったのだ。

「それが、ですね」

それから1分後。

鈴・シャルロットと同席することとなったセシリアは、1分前に後ろの人物が誰であったかを確認しなかったことを非常に後悔し、涙目になったという。

それに反して、鈴とシャルロットは、先程までの仏頂面から急に「機嫌顔になっていた、とか」。

ドイツ、ベルリン・シェーネフェルト国際空港。

首都ベルリンに存在するこの空港には11時現在、大量のマスコミが押しかけていた。

まさに包囲網の如く出口を占拠するその集団は、一種の虫の大群にさえ錯覚する。

彼等の目的は皆一様に、後僅かで訪れる男性IS操縦者及びIS学園関係者へのアプローチであった。

どこのメディアよりも早く有名な一団をニュースに流す。いや、既に殆どのメディアに情報が流れている以上、重要なのはその質である。彼等に、より深く突っ込んだ内容。

彼等が乗っていると思われる航空機の到着を、今か今かと待ち構える者が殆どだった。

その『人カタマリ』を牽制、抑圧しているのが、軍服を纏っているドイツ軍兵である。

当初の予定では人員は1ケタ、それも最小限に抑えるはずであった。しかしマスコミ達への牽制の意も兼ね、現行では2ケタは動員されている。

この2ケタというのもとあるマスコミの大雑把な目算であり、実際の人数はこの群がる人間の中では調べようがなかった。

人々の熱気が伝わっているのか、空港の内部はやけに蒸し暑い。勿論、それは正午へ近づくほどにジリジリと焼く太陽も影響している。それを見計らってか、がたいの良いスタミナのありそうなマスコミの割合が高く、更に空港内を暑苦しくする要因ともなっていた。がたいが良いとは言え、流石に軍人のそれとは比べ物にならないが。

自社との連絡、及び情報を回す者達も多く、固唾を呑んで待つとはいかない状況ではあったが、その緊張感、世界的なスーパースターの来国時と比べてすら高かった。

まるで餌を待つ獐猛な肉食獣のように、餌投入かっそつごをがんと睨む記者団、リポーター群。

いやあしかし、来る空港まで特定されてるとは。

今回自分達へと回ってきた情報を思い出しながら、発行部数が国内最大クラスの雑誌の記者である1人が考える。

来る空港、人数、更にはその背格好や性別。事細かに伝達されてい

るその情報は、個人情報保護など知ったことではないとさえ思わせる正確さだった。

問題は『情報の出所が一切不明』である点。彼がそれとなく探りを入れたところ、一端の記者が知らないだけであればともかく2つ上の上司ぐらいまでは出所不明で通っていると判明した。3つ上に関しては、今の所調べがついていない。

しかし いち早く情報を得て、日本の空港で張り込みをしていた記者より『確かに情報通りの人数が、法兰克福経由のベルリン・シエーネフェルト行き便へ入っていった』と本社に連絡が入り、信憑性は急激に高まった。情報が信用さえできれば、飛びつくのは当たり前である。

うつむう、他の会社に負けじと何とか空港までは特定したが、情報に信憑性がないのが問題だな。

別の、こちらは発行部数も少ない三流雑誌の記者は、その空港の別の場所でそんなことを思っていた。隅の方に塵の溜まった埃臭い休憩所から、唯一日本語が話せる記者だからと急に駆り出された彼。

上司から『とりあえず、降りてくる男2人女4人のグループにインタビューを掛ける！ 日本人5人ドイツ人1人、日本人の1人はブリュンヒルデだ！』なんていうほんの一握りの情報だけを与えられて駆り出された身としては、不安を感じざるを得ないのだろう。

様々な思惑が飛び交う空港で、1つの声が上がった。

「あれだ！」

一瞬建物内部が静まったかと思うと、直後にざわめきは先程まで以上となる。

先程まで飽和状態だった建物内は、入り口付近へ記者が更に詰め寄り逆に少しの隙間が発生していた。

勿論 外が空けば、中は詰まるのだが。

そして、それと同時に動き出していたのは、ドイツ軍も同じである。防波堤の役目を果たす隊員は一定数確実に残り、数名のみが下乗口へ出迎えへと向かった。

『来るぞ』

『男の片方はドイツ代表候補生だ』

『ブリュンヒルデ含む6人組』

『ドイツの冷氷ことラウラ・ボーデヴィツヒ』

もいるらしいな』

『まだか』

『ま』

だか』

『まだか』

『まだか』

『まだか』

『出てこな』

いぞ』

『……………』

『……………』

『……………』

目的の人物達が出口より姿を表すまで、ざわめきは収まる気配を見せない。

着陸より2分が経過。まだ、誰も出てくる気配はない。マスコミ達に、緊張が走り出す。

着陸より5分が経過。一般客しか見える気配はない。中で、何かトラブルでも発生したのだろうか？ そんな声が、どこか片隅で上がった。

着陸より10分が経過。そろそろ、情報に間違いがあったのではとかなりの人間が疑い出す。

すると、中からドイツ軍人がようやく出てくる。しかし、どうにも人数が増えていない。

「……まだだ」
いないように見せかけるブラフの可能性がある。一応、多少は人数が減ったらしいが、未だ大量の記者が留まっていた。

着陸より、30分。

三流記者の不安は、現実となる。

ドイツ軍が、誰も出ていない入口から撤退を開始したのだ。

「ここに到着する予定だった6名は、どうなさったんでしょうか！？」

思わず記者の数名が、ドイツ軍服を着用した1人の女性へとインタビューを掛ける。

それに対し、軍服の女性は

「ええ、既に到着していますよ。下乗先を経由地点のフランクフルトに急に変更するとは、隊長も無茶をするものです」

極めて冷静に、それでいて愉快そうに。
大衆を魅了するような笑顔で、そう言い放った。

眼帯をつけたその女性は、クラリツサ・ハルフォーフ 階級まで
付け加えれば、クラリツサ・ハルフォーフ大尉 と言う。
ドイツ軍特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ隊』副隊長にして、ラ
ウラ・ボーデヴィツヒ少佐と個人間秘匿通話を行える数少ない人間
の1人である。

クラリツサの発言を聞いたメディア一団で、どよめきが大きく広がる。

『フランクフルトだ！ 逃げ！』

『逃げられたか？』

『次は軍

基地に張り込みだ！』

『一旦本社に戻るぞ、

計画を

『くそっ！ やられた！』

『馬鹿、今更フランクフルトに行っても間に合わん！』
『宿泊先はどこだ！？』

『下乗口まで変えるんだぞ、宿泊先ぐ
らい変えているだろう！』

『入場券を買え！ 本当に中にいないか確認する
ぞ！』
『とりあえず大きめの宿舎のある基地全てに張

り込め！』

押し合いへし合うメディアの喧騒を耳に入れながら、クラリツサ以
下隊員達は足並みを揃えて空港を後にする。

自分達へこれ以上インタビューをしてくる輩は無視しているようだ。

着陸から1時間後。

空港内の、どこを探しても目的の人物がいなかったことが確認されると、ようやくマスコミユニティの群れは消失して行った。

日本語が話せる記者が1人しかいない三流雑誌編集部は、その日だけで大損だったようである。

一方、フランクフルト国際空港の側で、流れてくる情報を信じきらずに一応記者を待機させておいた一流雑誌編集部や数少ないマスコミが、その用心深さが幸いして甘い汁を独占できたことは、言わずもがなであった。

「まあ、全員を封鎖するのは無理ですから、折り合いをつけるのであればここらへんじゃないですか？」

そんな、翌日の雑誌に大文字で刷られるコメントを残した少年がいたのだが、それはやはりまた別の話だろう。

75 思考交差チエックイン 1

窓が強化スモークガラスであることを除けば、外見は至って普通の乗用車。

同じ道路を走る別車種2台のその中に3人ごとに分かれて、日本から来た6人は座っていた。

不審に思われぬように、2台は間にスモークのついていない乗用車を2台挟む。

勿論これも軍所有の車であるが、傍目には一般人が運転しているようにしか認識できないだろう。

それに加えて数台、軍の車やバイクが周囲を走っており、スモークガラスの2台の周囲には、見かけとは完全に違った鉄壁の守りが完成していた。

振り分けは前側の車に一夏、箒、千冬。後方の車に海月、ラウラ、真耶となっている。

元々分かれる予定だったメンバーにそのまま教師が1人ずつ乗り込むだけだったので、比較的簡単に決まった。

「あの……」

前側の車で一夏が、運転手に向かって恐る恐る問いかける。

現在運転手を務めている筋骨隆々の男性は、予想外に男性としては少し高い声で返事をした。

「はい、なんででしょうか」

「ラウラからある程度事情は聞きましたけれど、マスコミを避けるためだけにここまで無理矢理をしなくても、良かったんじゃないですか？」

「どうやら、先程までの一連の行動は流石に過剰な対応だったのではないか、というのが彼の心配事らしい。」

それに対して運転手はやんわりと、それでいて芯の通った声で答える。相変わらず高い声だが。

「詳しい事情は、基地の方へ来る算段がついてからでお願いします。すいませんね、自分はクラリツサ・ハルフォーフ大尉から口止めされていまして」

『クラリツサ・ハルフォーフ大尉』。

直接会ったことこそ一度もない 学年別トーナメントに来ていたらしいので、もしかしたらそれとは気付かずにすれ違ったことが1度だけはあるかもしれない が、たまに海月とラウラの会話に登場する人物であるため、一夏はその名に多少心当たりがあった。

とは言え、専用機持ち、日本のサブカルチャーが好きである、20代である、ラウラの所属する部隊の副隊長である、程度の情報しか頭にインプットされてはいないが。

一夏が考えていると、横から細めた鋭い目つきの千冬が口を挟む。

「それよりも、情報漏れが異常に早かったではないか。本来なら1人の記者すらいなくてもおかしくはなかったのだぞ。何があった？」

ドイツ軍が優秀であることは教官として滞在していたために良く知っている千冬の、裏のない素朴な疑問だった。

運転手が苦笑する。

「諜報部が現在調査中ですね。今の所、穴は見つかっていないらしいです」

「なに……？」

その言葉に、千冬の疑問は更に深まった。

曲がりなりにも数年前、自分の欲す情報を真つ先に調べ上げて提供したあのドイツ軍だ。

このたった数十ヶ月で、そこまで落ちぶれてしまったのだろうか？

「情報がどの程度漏れているかは、先程ベルリンで撮影された映像で大体把握できると思いますがね」

「あの、それはどういう？」

何を言っているのか分からないといった風に、一夏が再び尋ねる。

『次の質問は私がする番ではなかったのか！？』と筈が少し場違いなことを考えるが、それが場違いであるとは本人も自覚していたようで、おとなしく聞くことにしたらしい。

再び、運転手は苦笑する。今度の苦笑は先程の苦笑とは少し雰囲気が違うらしいが。

「映っている記者の顔ですよ。全て調べ上げれば、どのくらいの規模までの出版社に情報が漏れているかはすぐに分かるでしょう」

「あっ、そういうことか」

ぼん、と一夏が手を叩く。頭に豆電球が光った。

そこへ千冬から「そのぐらい自分で考えろ」と頭へ攻撃が振られた

のを見て、箒は先程質問しなかったことに安堵した。

「まっ、とにかく地道に調べれば、貴方がたが帰国する日までには全て調べ終わっていることでしょう」

それを最後の言葉にして、車はキイとブレーキを掛けて止まる。

一夏が慣性で少しの身体に浮遊感を味わっている間に、ドアが開いた。

「どつぞ」

声を掛けられ、箒と共に外へ出る。千冬は既に助手席から降りていた。

目の前には、見た目20階以上はありそうなホテルが建ちそびえている。下から階数を数えていくと窓ガラスに太陽光が反射して、結局どこの階まで数えたか分からなくなった。

とりあえず25階以上ありそうだ　考えていると、もう1台スマートフォンがガラスの乗用車が到着してドアが開く。十数分前に分かれた3人が、中から順に出てきた。

「このホテルは？」

一夏が本日3度目の疑問を口にする、今度回答したのはラウラだった。

「軍の中に情報を流出させた者がいる可能性もあるのでな、だと言っのに基地については情報もただ漏れだろう。急遽手配した」

「え、でも、ここに泊まることをドイツ軍が知ってるんじゃない、意味がないような」

「少なくとも盗聴器はない。空港に到着した時点で無理矢理予約を入れたからな」

また、無理矢理だった。

そこまでいくつも無理矢理を重ねる理由はあるのだろうか？ 一夏は疑問に思うが、先程緘口令が敷かれていることを聞いたため詮索はやめておいた。

そうして質問をやめて、周囲を見回して初めて気付く。自分達2人以外は、既に建物の内部へと入っていたことに。

少なくとも海月はラウラのことは待っているだろうと予測していた一夏は、予想外の出来事に驚いた。

もしかして、説明のためにラウラをかなり手間取らせてしまったんじゃないだろうか？

真耶が、自動ドアの向こう側ではしゃぎながら手招きをしていた。

「さあ、私たちもさっさと行くぞ」

スタスタと、先にラウラが歩いていく。自動ドアのセンサー前に立つてからドアが開くまでのタイムラグのおかげで、何とかラウラに追いついた。

フロントでは、既にチェックインが済んでいた。

自分達が借りるのは4部屋。そのうちの2部屋を6人で振り分け、残った2部屋には軍の護衛が入るのだそうだ。

待っていた4人を見る。係員の説明を聞いている真耶と千冬、パンフレットに目を通している篤。そこで一夏は、海月が妙にそわそ

わしていることに気がついた。
明日と言つには、少し遠いような　そう、数時間後の方向を向いているような感じだ。

「海月」

「……フンケさん、か……　んー……」

ぶつぶつ、ぶつぶつ。かなりの小声のせいで内容は上手く聞き取れないが、どうやら今の呼びかけは無視されらしい。
平時であれば少しでもこちらを認識すれば反応を見せる彼が、手の届く位置で声を掛けた一夏に気付かない。

やっぱり海月、いつもと違うよな。

海月の態度は、一夏にそんな思いを加速させる。

「海月！」

「わおうっ！……ああ、一夏か」

少し強く呼びかけると、ようやく反応した。

声が大きかっただろうか、ホテル内にいた客に睨まれたような気がする。

「さっきからぶつぶつ言ってるけど、何かあったのか？」

「ん、いやなんでもない。基地に行けない間の予定はどうしようかな、って考えてただけ」

その直球に聞こえる発言に様々な裏があることは、何故か一発で見

抜けた。

いつもの海月であれば、自分の予定ぐらい頭の中で整理してしまうだろう。

しかし、どちらにせよ個人の事情である。

こういう時に一番心配するであろうラウラが、別に気にした風な態度をとっていない。

ならばこちらにも、詮索は野暮だ。

「そつか、じゃあいいや」と表面だけ取り繕って、考え事を邪魔しちゃ悪いと一夏はその場を離れた。

数分するとホテルマンが出てきて、それではこちらへと宿泊部屋へと案内される。それまで、海月の小さな声は止むことがなかった。

23階、49号室から52号室。

部屋は、先程車に乗った時と同じ振り分けに決まった。

「了解、6人はそのホテルに泊まることになったんですね」

女性は携帯電話を持っている。周囲には誰もいないというのに、その声はできるだけボリュームを絞っていた。

「はい、はい。了解」

びっ。

通話は終わったようで、携帯電話に通話時間が表示される。

続けて、女性は別の人物の番号を呼び出した。

『はい』

「ああもしもし？ 私だけど」

会話をしながら、その女性は歩き出した。

歩いているというのに、足音が一切聞こえない。足音と同時に気配までも消し去る。それだけ表現すれば忍者を彷彿とさせるが、しかし彼女の歩き方は至って普通だった。

「うん、その調子でお願い。それじゃあね」

ぴっ。

2度目の通話が終わると、女性は持っていた鞆の中に携帯を仕舞い込んだ。

案内地図でタクシー乗り場を見つけると、一直線にそちらへ歩いてゆく。

そうして 女性は、フランクフルト国際空港を出た。

左腕に小さめの鞆を持ち、

右手に、小型の発信機を握りながら。

……どんっ。

フランクフルト国際空港にて、数人だけいたマスコミと簡潔にやり取りを済ませた後に、時間は遡る。

この後は用意されているという車に乗り、それからホテルをラウラにとってもらって移動、という状況。

入口の方向へ振り向いて「さあ」と、ラウラを呼ぼうとした時。本日2度目の、女性との衝突をした。

いや、そもそも俺のぶつかったこの相手が女性であると判断するには、少々情報が足りないかもしれない。

まず、髪の毛が帽子で隠れていて、目元がサングラスで、口がマスクで隠れている。身体の方も、飾りっ気のないコートやズボンなど、酷い花粉症患者が家族に誘われ嫌々花見へ行く時のような、そんな風貌と表現すればいいだろうか。

体格は小さめで、おそらく胸の位置と思われる場所が膨らんでいる。相手を女性だと判断した要因はそれだけだった。

というか、相手が男性か女性かを判断する前に、先に頭をよぎる物があった。

目にグラス、口にマスク、頭に帽子、身体はラインが見えにくいもの。先ほど考えた花粉症患者という可能性を除けば、それはどう考えても正体を隠そうとする不審者の格好でしかない。

ただでさえ予定外の事態が発生しているのだ。自然、対応は刺々しいものになる。

「あの」

警戒して身構えながら、飛行機の中でぶつかった時よりは少し尖った言い方で反応を見てみる。

「はい？」

「いえ、ぶつかったから大丈夫かな、と思いましたが」

「ええもう、コンタクトがずれて眼球の裏側に入り込んだ以外は、全く問題ないです」

弁解だが、お互い顔は衝突していないので、少なくともコンタクトがぐるり120度以上も回り込む可能性はほぼ0だ。

ほんの今さっきの記憶をひやひやしながら思い出すことになる、嫌なジョークである。

ともかく、今の情報から『声が高いのでやはり女性らしい』ということとは理解できた。

逆に、更に疑う要因となったものが2つ。

1つは今更気付いたことなのだが、先程までこの相手の気配を一切感じなかったところ。そういえば機内で女性と衝突した時も気配を感じなかったような気がするけれど、怪しさで言えば断然こちらが上だ。

もう1つは、目の前の彼女（もしかしたら彼かもしれないが）に、隙が見えないところ。別に攻撃をするといった予定は今の所ないが、自然体で身構えているように見えなくもない。

「すみません、大丈夫ですか？ サングラス取ってください、怪我してないか確認します」

「いえいえ、結構ですよ。急いでいるんで、失礼します」

そう言って、相手は踵を返して去っていく。流石に色々と不自然なので腕を掴もうかとも考えたが、それよりもラウラ達を待たせているということを書いて置いておきたいとどまる。

すぐに、サングラスマスクの女性は旅行者達の行き交う雑踏へと姿

を消した。

身体に変なものがついてないか、後で調べてもらおう。発信機とか盗聴器とか……、一番外側に着てる服は、脱いでどっかに持っていつてもらったほうがいいかな？

シャツを脱ぎながら、ラウラに個人秘匿通話をかける。
今起きた内容の経緯と希望を説明すると、ふたつ返事で了承が返ってきた。

「どうやら、目立つ位置に小型の発信機の類は見当たらないぞ」
車に乗る前の軽いボディチェックで、ラウラが出した結論はそれだった。

一旦ISを展開してもらってハイパーセンサーで確認してもらったため、余程巧妙に仕込まれたのでなければ本当に何も仕掛けられてはいない、という裏づけが取れたのと一緒だ。
そして、自惚れていないのであれば、巧妙に物を仕掛けられるような隙は、先程の間には作っていないはずだ。

明らかに怪しいと俺は感じたのだが、どうやら思い過ごしだったらしい。

「ということは、同じ日に2度もぶつかるっていうのは完璧な偶然か？ 珍しいこともあるもんだな」

「3度目も、あるかもしれないぞ？」

談笑しながら、車の助手席に乗り込む。後部座席にはラウラと山田

先生が乗り込んだ。

ドイツで車といえば、速度無制限高速道路として知られる『アウトバーン』を真っ先に思い浮かべる。実際は所々で速度制限がされているのだそうだが、果たしてどの程度のスピードで乗用車は走っているのだろうか。

考えていると、「すみません、戸鉄さん」左隣の運転席から声を掛けられた。

背の少し高い女性で、確か乗る時にフンケさんっていう名字だった。自己紹介してははず。

「なんですか？」

「はい、実はですね戸鉄さん。私の双子の妹が、どうしても貴方に会いたいというのでその旨をお伝えしようかと」

「どうということだ？」

先に対応したのは、俺ではなくラウラだった。

「その、ですね。数ヶ月前から『私、戸鉄さんと面識があるかもしれない』と妹が話していました」

面識？

それとなく隣に目を向けてみるが、どこまで若く見積もってもフンケさんの年齢は20を越している。車の免許を持っている時点で最低でも俺の3つ以上であることは確定。あれ、ドイツで免許取得ができるようになるのっていくつだ。とにかく、ハルフォーフさんよりも年上の雰囲気を漂わせている。

双子の妹ということとは、同じく『俺と面識がある』というその人も最低3つは俺と年齢が違うことになる。そこまで歳が離れている知り合いは、ドイツには今の所ハルフォーフさんしかいないはずだった。

けれど、どうも嘘を言っているようには見えない。一体どういことだ？

「人違い、っていう可能性はないんでしょうか？」

「同名の別人の可能性も勿論0ではない、と妹も言っておりますが、年齢も雰囲気も自分の知っている人物と一致するらしいんです」

「いや、しかしイダ少尉。海月は今の所、ドイツ軍内以外に知り合いはいないはずだぞ？ 確か貴方の妹は、軍と関わりのある研究所に勤めてこそいるが軍属ではないはずだ。それとも、私がIS学園へ向けて出発するゴタゴタに紛れて、いつの間にか」

運転席で、「いえ」と首を横に振ってフンケさんは否定する。

「私の妹は確かに軍属ではありません」

「では一体、どこで海月と知り合えるというのだ」

「それが、どうしても詳しい事情を説明してくれないんです。ただ一言、『伝言してくれ』としか」

「伝言？」俺の声とラウラの声が重なる。車の中で話に入っていないのは、唯一山田先生だけだ。

「『私は廊下で3回嘔みながら貴方の仰った内容を、確かに伝言しました。今度は失礼ながら、私が一度お話をしたいと伝言させていただきます』と」

どくん。

心臓が大きく跳ねる。実際に跳ねたわけではないが、本当に上下に揺さぶられたのではないかと錯覚する。それほどに強い衝撃が、身体を奔走した。

そうだ、自分ではもう名前すら思い出せない　ラウラに浮かされ過ぎていただけかもしれない　が、確かに自分を知るドイツ人は何人もいる。

しかもその中でも、名前こそ覚えていないがラウラの次によく記憶していたドイツ人の研究員。

【怠けずにドイツ語もちゃんと習っていれば、もしかすれば話せたかもしれないのに。】

【結果、その時の自分に出来たことは、】

【近くにいた研究員にその少女について尋ねることと、】

【『「格好良かった」と伝えてもらう』ことだけだった。】

小さい頃の、父と共にドイツに居た自分。

水底の記憶と成り掛けていた、ラウラに憧れたその日のこと。

自分に勉学を教えていた、そして自分がラウラに伝言を頼んだ研究員。

おぼろげな記憶を掘り返せば、確かに女性だった。

「フンケさん」

「なんででしょう?」

「フンケさんの妹さんには、いつ、会えますか?」

俺が会うつもりだと知って、驚いたのは勿論ラウラである。

研究員を通じて俺がラウラに伝言をしたことは前に話した。話した、よな? が、その詳しい状況までラウラが知るはずもない。今、フンケさんの口から出た伝言を、ラウラが理解しようというのも無理な話だ。

「ラウラ、俺が昔ドイツにいた時に知り合った人みたいなんだ。時間が作れるなら、話したい」

「! ……分かった。少尉、時間に関しては?」

「今日か明日であれば、いつでも問題はないそうです」

それは急な話だ と、いつもは考えるだろうが、これに関しては別である。

今の自分を形作る要素の一部かもしれない相手。

今更思うが、俺は、どうやら、

ドイツに来て何事もなく1週間が過ぎるだなんて考えは、甘すぎたのかもしれない。

「ねえ、父さん」

机で隣に座る息子が、ふとそう言う。食事を終わらせた後の小休憩、読んでいた新聞を畳んで左に振り向く。

「なんだい？」

「父さんは、どんな研究をしてるの？」

予想外の質問だった。

自分が現在ここでやっているのは、もっぱら兵器開発に関わる内容である。

実際は兵器そのものを開発しているのではなく、その一部。最大限に噛み砕いて言えば『感性の制御』と言うべきだろうか、しかしそこまで噛み砕いた実例を出した所で、まだ小学校低学年程度の息子には理解することができないだろう。

どうしても、何に使うのかと言う実例を出さなければ説明はできそうにない。

そこで兵器という言葉を使用してしまうと、揉め事の嫌いな息子のことだ、途端に不信感を抱かれてしまうだろう。

結果、口からは「ううん、そうだな……」といったような、曖昧な返事しかすることはできなかった。

「父さん？ 僕に言っちゃいけないことだったら、言わなくても僕は平気だからね？」

息子が、気を遣ってか話題を区切るきっかけを作ってくれた。「悪いな」とどうにか話を終わらせるが、しかし息子のこの性格には不安に感じる部分も多々ある。

この歳であれば、もっと自由に振舞おうという感情があってもおかしくはない。この子は、空気を読みすぎる。言い換えれば感情を抑えすぎている。

一歩引く精神というのは美德かもしれないが、逆にいつも一歩引いてしまうようでは向上心が生まれない。

面倒を見てもらっている研究員からの評価も、「大人しいが大人しすぎる」。

最も、息子の精神をこのように構築してしまった原因の一部は、自分にあるのかもしれないため、「人に抗え」と強く言い出せないのが悔しい所だが。

いつも通り、大人しくしているよとだけ声を掛け、息子の元気な「はい！」という返事を聞いて部屋を出る。

ここで歳相応に「うん！」という返事をしてくれないことも、多少は不安を加速させるのだが。

息子の名前は、海月みづきと言う。

最愛の妻娘と別れ、出身国である日本も捨て、今ではここドイツで唯一と言える自分の肉親である。

海月8歳、ドイツ某所、研究所にて

8年前だったろうか、戸鉄……いや、もたれ凭海月がもたれみなと凭皆徒とドイツに来たのは。

フンケという名字のとある研究員が、ドイツ某所の研究所に併設された寮の一室で独りごちる。

まだギリギリ30に届かぬといった年齢なのだが、思い出の内容に耽るその姿は老婆の如き雰囲気を醸し出している。

どこか哀愁を漂わせ、それでいて年老いた外見ではない。雰囲気と外見の不一致は、彼女を一種の魔女のように見せた。

彼女の名は、ヴェスぺという。

数ヶ月前に来国した戸鉄海月の名前と、研究所に送られてきたその顔写真から、彼女は彼が過去ドイツにいた凭海月であることを確実に視していた。

もう、会うことは二度とないと思っていたのだけれどな。

ふっ、と一息吐き、彼女は愁いを帯びた瞳をして寮の壁をてのひらでなぞり始めた。

そこに残る面影を、思い出すかのように、丁寧に。

シミのひとつひとつでさえ、いとおしく愛でるように。

しかし、彼女の瞳はやはり愁いを帯びたままである。

不意に、携帯の音が室内に響く。

休日だというのに白衣の研究服を身に纏っていた彼女は、音が響いた瞬間に表情を清楚な女性のものへと変容ていようした。

机の方へつかつかと歩いてゆき、画面を開く。電話ではなく、それはメールであった。

メールの発信源は不明と表示されている。フリーメールが利用されており、それも見たことのないアドレス。ウィルスの添付などされていないだろうか？ 3秒ほどそう考えたが、そういえばこの携帯は予備の方であった。抜き出されて困る情報なぞ一切ない。

ボタンをカチカチと手馴れた操作で操り、メールを開く。

内容は母国語ではなく、しかしIS関係者は習得必須の日本語で書かれていた。

```
『from:kurage|dakara|namittte|a  
ntyoku|sugi@xxxxxx.xx.jp
```

イダ・フンケ様からの伝言、承りました。

僕の頭の中では2回しか噛んだ記憶はないのですが、どうも認識の齟齬があるらしいです。

お会いして一度話をしましょう。

場所に関しまして、イダ・フンケ様からはこちらの自由指定と聞いていますので、非常に申し訳ありませんが僕達の宿泊しているホテルへ出向いてもらうことになります、よろしいでしょうか？

よろしいようであれば、返信お願いします。再返信にてホテル名を送信します。

凭改め戸鉄海月』

「凭」という研究者について、全ての記録は抹消されている。

彼の過去の名を知る者は、本人と自分を除いて10名前後。多分、これは本人のメールと見て間違いはない。

少し考えそう結論付け、彼女は返信のメールを打ち始める。

『メール内容、確かに承りました。』

失礼ながら、私の頭の中では3回ではなく4回5回、何度も噛んでいたかと存じます。

多分そちらの記憶が脳内で美化されているのでしよう。これは、会って話をすべきかと思えます。

場所の件、了解しました。

貴方のよく知る研究所から半日以上経過しない位置であれば、一向に問題はありません。

できれば、豆のシチューが食べれるホテルだといいいのですが。

ヴェस्प・フンケ』

送信を押したところで、ヴェस्पの口から小さな笑いが漏れた。

なんとまあ、昔の彼と比べて随分ジョーク好みな性格になったものだ。

しかも そんな所まで、似ている。

彼女の携帯が再度着信音を鳴らしたのは、それから3分後のことだった。

ドイツでの生活は概ね快適だった。

まず、日本の凭家からの要求は、大体は研究所の方で突っぱねてくれる。

話を聞かせたい本人にそもそも話が届かないのだから、凭家としても脅迫のしようがない。

海月に関しても、最近は妙に楽しそうだ。

妙に機嫌が良かった時に話を聞いてみたが、硬く口を閉ざして何も

教えてはくれなかった。

仕方がないので海月の勉強を見てもらっている研究員に尋ねてみると、そのうち1人　ヴェस्प・フンケという、女性研究員　が真相を教えてくれた。

どうやら、好意を寄せる相手が見つかったのだとか。

その相手の詳細までは教えてくれなかったが、海月はヴェस्प研究員に3度嘔みながら伝言を要求したというぐらいなのだから、余程強烈な一目惚れなのだろう。

誰かは分からないが、その女性のおかげで海月の向上意欲が多大に沸いたことは事実。

それであれば、自分は、海辺うみべと　最も愛した女性と離れることになった自分は、海月には恋を叶えて欲しいと考えている。

研究に関しても、順調に進んでいる。

日記の余白で書くには海月が量を取りすぎたので、成果に関しては次のページで書くこととしよう。

親馬鹿、だろうか？

親馬鹿といえ、海月が唯一嫌う食べ物があった。これを作るのをつつい避けてしまうのも、やはり親馬鹿が原因かもしれない。

凭皆徒・8年前の日記手帳

「豆のシチュー？」

ラウラが不可思議な顔をして、携帯画面を覗く。携帯を持っていた海月は、別に画面を隠そうとはしない。そもそもこれはラウラの持っていた、盗聴防止用のコーティングがしてある携帯なのだ。その持ち主に見られて困るようなものを、開けるはずもない。

「俺がドイツにいた頃、唯一苦手だった食べ物だよ」

懐かしむと共に、海月はメール相手が確かに自分の過去を知る人間であると確信した。

「今はもう、食べれるけどね」

『豆のシチューですか。いいですね、確かにおいしそうだ。』

それはともかく、4回5回は流石に多すぎです。うちの父じゃあるまいし、そこまで話がつつかえる人間じゃないと自負してます。

ホテルは添付ファイルに詳細を載せておきました。合流位置も同じく。

戸鉄海月 《添付ファイル》

メールを送信して、パタンと携帯電話を閉じる。

「ありがとう」とラウラに閉じた携帯を渡し、海月は洗面所へ行く。

「海月？」

「柄でもなく緊張してるから、少し顔洗う」

緊張しているという言葉に嘘偽りがないことを、すぐにラウラは見抜いた。

嘘にしてはあまりにも早口で、そして 海月のたまに見せる、や

けに興奮した状態と、今の海月のそれは非常に似ていたからだ。

「そういえば、私も海月の家族については一切聞いていなかったな」

「あれ、そうだったけ!? 水母とはこないだ会ったから」

そして、既に彼の呼吸が分かってきていたラウラの言葉は、単純に顔を洗うよりずっと綺麗に海月の緊張を解きほぐすのだった。

「ヴェレの時にちょっとは話したと思うけど、まず父さんの名前が皆徒。俺の最後の記憶によれば 変人だらけの科学者の中ではかなりまともな部類の人間だったと思う」

濡れた顔をタオルで拭きながら、海月が家族の説明を始めた。

「……最後の記憶？」意味が飲み込めないラウラが、文の区切りで遮って訊ねる。

「色々事情があってもうこの世にいない……ちょっとストップ！
気まずそうな顔はしなくていいよ、中学に入る前の話だから！」

ラウラの表情に少しばかりの翳りが見えたので、海月は暗い口調になっ
ていないことを強調するように返す。

実際は、本人ですら気付かぬ暗い雰囲気
をラウラの方は敏感に察知してしまっ
たためなのだが あえて深くまで追求するつもりもないのだし、そもそもヴェス
ペが到着すればある程度の事情は判明するだろうと、とりあえず平
静を保つこととした。

細かな事情を知悉している必要性など、皆無なのだから。

一方の海月は海月で、ラウラが多少続く質問を我慢していることは感知しつつも、その我慢が自分に対する気遣いであることは明らか

だったので、ありがたく受け取ることにした。
海月の簡潔な家族紹介は続く。

「んで、こないだ会ったから少しぐらいは知ってると思うけど、妹が水母。完璧のように見えて裁縫料理掃除　家事全般アウト。流石にセシリア程酷いわけでもないけど」

実際の所、遠く離れた日本で水母がくしゃみをする程度に、今の発言はただの事実無根な噂の類でしかなかった。家事全般に関して、彼女は海月より要領が悪いだけで一般人水準のそれをクリアしている。

海月がそれでも彼女のことを『家事全般苦手』と表現するのには、勿論のことだが理由があった。

2つほどある理由のうち1つが、自分がIS学園に入学してからの水母の成長を考慮していなかった点である。しかし海月が一般的な家事の水準を間違えているのは、もうひとつの理由に影響される部分が大きい。

「で最後に、まだラウラが会ったことはないうちの母さん。海辺って名前で、俺に家事全般を教えた人。ついでに俺の荷物を部屋が決定する前からIS学園に送りつけ、その荷物の中に俺が今まで隠せていると信じて疑わなかった冬用コート裏側の貯金を全額紛れ込ませる素敵マザーだ」

そのもう1つの理由が、今説明された母親である。

彼自身の言葉通り、海月の技術は母親たる海辺のダウングレード。そして、水母に家事を教えた人物は海月だったのだ。2段階のダウングレードである上に、実践しようにも一個上の兄が大抵のことはこなしてしまう、いくら飲み込みが早い人間でもこれでは上達が遅滞して当然だ。

「うちの家族のうち説明できるのはこれで全員、かな。母さんの方は祖父母両方生きてるけれど俺も殆ど会ったことがないし、父さんの血筋は思い出したくもない」

「思い出したくもない、か」

実際の家族がないラウラにとっては海月がどれほどまでに凭の家を嫌っているかあまり理解はできなかったが（そもそも海月の事情が特別なので、家族を持っていてもあまり理解できないという事実は置いておくとして）、そういう凭家がどうこうという海月の少しばかりの説明を思い出す。

そこで、ラウラの興味対象は専ら海辺や水母といった現在の家族に移行したが、

「ん、ヴェस्पさんが了承のメールでも返信してきたのかな？」

性格やら容姿やらといった補足を求める前に先程海月に貸していた携帯がバイブレーションを始めたので、一旦会話を区切ることにした。

顔は拭き終わったらしく、タオルを使用済みのカゴの中に入れ、海月はラウラの携帯へと意識を移す。

彼のメール着信という予想は外れ、それは電話だった。

「こちらラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ……何？ 分かった、応援が必要であれば再度連絡を頼む」

20秒ほどで会話は終了する。

階級を名乗ったということは、多分軍部絡みの内容だろう。そう2度目の予想をした海月に、ラウラは正解、の代わりとなる内容を告

げる。

「どうやら情報流出源が判明したそうだな。IS戦闘が発生する可能性は低いらしいし、出る幕はないだろうな」

「ん、分かった。アレ？　そういえば、この部屋にいるはずの山田先生は？」

一種の緊張状態が続いていた彼としては仕方がないことだったが、今更過ぎる質問にラウラは多少驚く。

「海月がメールを始めた辺りで、隣の部屋に行くと部屋を出たぞ。見ていなかったのか？」

「うん、気付かなかった」

ああ、と海月は納得した。

ちなみにだが、4部屋並んで借りたうち間の2部屋に6人が、両端2部屋に軍関係者が泊まっている。

ドイツ軍関係者とIS学年1年1組担任の間に面識はあるが、副担任にはなかった。ということは多分、教師同士で今後のある程度の行動を相談しているのだろう。

「それじゃあヴェスぺさんを待つてる間に、俺達の予定も一応再確認しておこうか」

「そうだな、この状況では正確に進行しないかもしれんが」

「大丈夫大丈夫、きつとどちらにせよ正確には進行しなかったよ。」

だって、ドイツにはクラリツサさんがいるんだから」

海月のジョークに、ラウラは笑おうにも笑えなかった。

何故か、クラリツサは仕事よりも遊びを優先するような人物像らしい。

公私を使い分けられる優秀な人間だとは分かっているのに、何故か否定しきることができなかった。

その頃。

噂の対象となっていたクラリツサは現在、ラウラ及び海月と会う算段も立てられずに車の中にいた。

同じ車には、屈強な男が少しと普通の（軍人であることを除いて、だが）運転手がいる。

車は、先程発覚した情報発信源の確保をすべく、潜伏先とリークされたとある場所へ向かって移動中だ。

彼女がこの車に乗っている理由は、ラウラが同時刻に想定していた状況　つまり、一夏や筭の情報を横流しした人物がもしISの所持者と繋がっていたら、という状況　に対応するためである。

考えすぎ、かもしれないが、軍内の機密情報を鮮やかな手口で盗んだ上に、逆にその尻尾を今の今まで掴ませなかった人物。警戒して悪いことはない。

むしろ、シュヴァルツェ・ハーゼ隊に残るもう1つのISを持ってきてもよかったのではないだろうか？　とさえ主張する人物がいたほどだ。

国内で緊急自体が発生する可能性を想定し、そちらは却下になった

のだが。

とにかく、仕事より遊びを優先するように見られていた彼女は現在、立派にお勤めを果たしていたわけである。なぜか先程から感じる鼻のむずむず感が、彼女を不愉快にさせていた。

向かう先は、とある研究所。

IS兵装の開発にも携わっていることから軍に対しても多少の発言力を持っており、長時間情報が漏れなかったのはそれが原因らしい。そして、IS戦力を保持している可能性、というのも、それが理由だ。

一応、研究所の責任者に話は通してあるとのこと、入所した途端に攻撃されるようなことはない、はずだと通達されている。だまし討ち。その可能性も考えたが

数分後、結局特に問題もなく、研究所内へ入ることとなった。

「ちょっと、拍子抜けすぎませんか？」

どこで聞かれているか分からない以上私語は基本的に厳禁 特に相手の本拠地ではどこに目と耳があるか分からないため なのだが、思わずクラリッサがそうばやく。

しかし、酒の席であればともかく作戦中には緊張感を絶やさないとすの男数名の方ですら、多少の脱力感を覚えていた。

クラリッサが周囲をくまなく探すが、更に眼帯を外してまで盗聴器やカメラを見つけ出そうとするのだが。しかしそれでも、潜伏情報のある建築物に、最低限のプライバシーを守る以上の目的で設置さ

れているカメラ以外のものが一切見つからないのだ。

「気を抜くんじゃない」と口では叱咤している即席部隊の隊長は、しかしそれでもいつもの張り詰めるような緊張感を持ち合わせていない。

銃を構えて一步も動かないまま、突撃部隊がドアへと近付く。

もう半分は建物の外にて逃亡者がいないか、もしくは突然の襲撃がないかを見張っている。勿論、連絡は今のところ一切ない。

ガコンと大きな音を立てて、ドアが開かれた。鍵すら掛かっていない。

たった1人の人間しかいなかったその部屋に、殺伐とした空気が発生しない。

目の前で何が起きたのかすら理解していない女性に、隊長が宣言する。

「うちの情報を抜いたにしては、警備がなってなさすぎではないか？ ……まあいい。同行してもらっぞ、ヴェस्प・フンケ」

77 延長滞在カフェテリア 1

「わたくし1人の予定でしたのに……はあ……」

日本時刻で午後7時頃、場所は日本某所。

長い髪をくるくると巻いた金髪の英国淑女　イギリス代表候補生のセシリア・オルコットは、大きな溜息を漏らしていた。

とは言え、溜息の大きさのわりに表情はあまり曇っておらず、口を尖らせある程度の不満を示しつつも、そこはかたなく楽しげな雰囲気雰囲気を漂わせている。

実際の所彼女は、ほんの2時間ほど前までは後者の雰囲気　即ち、期待と歓喜に満ちた雰囲気しか醸し出していなかったのだ。その時に彼女を喜ばせたフアクターはまだ消えていない　どころか、ほとんど近付近付いている　状態なので、完全な不満を纏纏うことがないのも当然というものだ。

さて、幸せ一杯夢心地気分だったセシリアが現在所持する不満感情を作り出した、その原因はといえば、ちょうどセシリアの両隣両隣に座っていた。

「ま、ぺらぺらしゃべっちゃったのが運の尽きね」

右隣で、原因の片割れが更に「諦めなさい」と付言しながらセシリアの肩に手を置く。正体は、そこにいる3人の中で唯一東洋人モンゴロイドの外見をした小柄な少女　中国代表候補生鳳鈴音だった。

肩に手を置く動作は背の高い方が低い方にやるものだ、などとは口に出さないお約束である。

こちらこちらも機嫌がよく、日常で頻繁に顔を出す刺々しさが感じられない。

「酷いですわ、わざわざ声色を変えなくてもよろしかったでしょう」

「そこはあたしじゃないわよ」

「そもそも！　今回は殆どわたくし1人が尽力したからこそこうなつたんですのよ？」

ヒートアップしかけた所で、横槍が入る。

「ストップ。2人とも、周りに人がいるんだから大声出しちゃダメだよ」

宥める、というよりは牽制と表現すべきだろうか。

軽い口論に発展しかかった2人を抑えたのは、その場にいたもう1人の、こちらはフランス代表候補生　シャルロット・デュノアだった。

雰囲気は、以下同文。

「別に、セシリアに感謝してないわけじゃないわよ。……ありがとう」

「分かっているならよろしいですわ」

とりあえず、事は収まったようだ。先ほど重ねて大きくなっていった声は、今はもう平時のそれに戻っている。

安心して、シャルロットは紅茶に口をつける。すぐに飲みきるには少し熱いようで、鈴音はまだ一口も飲んでいないらしい。

下手をすれば小国1つさえ滅ぼしかねないこの代表候補生3人は、

今現在カフェテリアの一角で、優雅と表現するにはあまりそぐわない夜のティータイムを満喫して……もとい、チェーン系カフェで時間潰しをしていた。

「時間は？」

「あと20分ほど、ですわね」

周囲に座っていた数名が立ち上がったことを確認して鈴音が訊ねるが、セシリアからの返事は「まだ」であった。

「思ったより遅いのね？」

「仕方ないよ。むしろ、思い立った即日にとまたま隙があったことの方が奇跡じゃない？」

「そりゃま、確かにそうだけど」

それなら、後20分IS学園からの出発を遅れさせるべきではなかっただろうか？

そういった疑問を口にしようとして、鈴音は即座に押し込んだ。良く考えたら、「遅れたらどうすんの！早く早く！」と一番出発を急かしていたのは、何を隠そう鈴音自身であった。

「時間は？」

せっかちな性格の鈴音が、そこまで時間が経過していないことを承知で再び訊ねる。

「あと19分ほど、ですわね」

「はあ……、何か、暇潰しの物とかない？」

ここでランプの1セットでもあれば良い暇潰しになるのだろうが、急いで出てきた3人は勿論、そんなものを持ってはいない。

「予習も兼ねて、そこかしこにある雑誌を読むというのは如何でしょうか？」

「エンカウントしそうな場所ぐらい、もう全部ピックアップしてるわよ」

「じゃあ、今後の予定とか」

「そんなの、ISをこっそり使って探し回る以外あるわけないじゃないの」

「しりとりとか！ IS専門用語限定の固有名詞ありでどう？」

「何でここまで来て勉強まがいの内容やんなきゃいけないのよ」

ぐっ、と背の高い方から順に2人の喉が詰まる。どうやら近場にあるものでは、それ以上のアイデアが出てこなかったらしい。

次に鈴音が周囲を見回すが、同じく面白そうな物は殆ど発見できなかった。

「……仕方がない、日本のお土産品でも見てみよつと」

先ほどからミルクを入れ何度もかき混ぜ、飲める量になっていた紅茶を鈴音は一気に飲み干し、席を立つ。

それなら一緒についていくよ、とシャルロットも席を立ち、席に残るのはセシリアただ1人となった。

「あ、セシリア。正確な搭乗時間教えて」

再度、鈴音がセシリアに時間を訊ねる。

「17時25分。後17分30秒ほどですわ」

セシリアの回答に「了解」と返事をして、鈴音が最初に見つけた土産屋へと2人は走っていく。

その2人に届かない程度のボリウムで、もう一度、軽くセシリアは溜息を零した。

「はあ……、そもそも一夏さんが海月さんに誘われてドイツへ行くだなんて、言い出すからですわ」

そしてぶつくさと文句を垂れつつも自分も紙コップを空にして、先に暇潰しへと走って行った2人の後を追隨するのだった。

日本、一同日朝に海月達のいた場所^{くわいじう}。

3人が最初に見つけた土産屋は、奇しくも一夏が暇潰しのために見ている土産屋と同じ店であった。

しかし、一夏と篝の2人と違って3人は私服着用だったことが原因となり、店員が「そういうえば、朝もIS学園の生徒さんがいらっしやいましたね」と思い出して呟きそれに3人が便乗するという絶好の暇潰しのチャンスは、破壊されることとなってしまった。

そもそも、東京で手に入れることができる土産物など、そこまで多くはない。特に鈴音なんかは前に日本に住んでいたの、見たこと

がある商品ばかりだった。

一夏や筭のように、純粹な旅行ということで浮かれる感覚も、この3人は持ち合わせていない。

結局これといって珍しい物品も発見できず、どうにか潰すことのできた時間は7分程度だった。

「今」

何時？ 言いかけた鈴音を、セシリアが遮る。

「出発時間は教えた通りですわ、携帯電話ぐらい、鈴さんでも持っているでしょう？ ちなみに後10分ほどですわ」

「セシリアなら腕時計持つてるじゃない、あたし達より早いのよね。後10分って、乗れるようになる時間であって離陸時間じゃないわよね」

「腕時計だったら土産物で売ってたよ、全然お土産になってないけど、必要なら」

次は、鈴音がシャルロットを遮った。

「離れたら離れたで、その時は携帯使うからいいの」

その発言に、つまり自分がいいように使われているだけだとセシリアが理解するまでには、数秒と掛からなかった。

しかし、怒るつもりも特にないらしい。こういった場面に限らず、日常的に鈴が合理主義者だということを、ここにいる全員よく知っている。彼女の専用ISが燃費第一の合理的設計であることは、妙

にしつくりくる。

「後10分を切ったなら、そろそろ並ぼうか」

「ですわね」

彼女達が向かう搭乗口。行き先を表す電光板には勿論、トイフランクフルトの文字が光っていた。

「そういえば、あっちにいる誰かに僕達がドイツに行くってこと、伝えてあるの？」

「いいえ、一切伝えてませんわ」

セシリアが、意地悪く笑った。

「まだかな？」

海月が呟いた。

場所はホテル内カフェテリア。つい数十分前、彼がヴェスペとの待ち合わせ場所に指定した所である。

4人掛けの席で、最も下座の位置に海月が、その次の位置にラウラが着席している、それ以外には誰も座っていない。

「待ち合わせしてるんです」とラウラがドイツ語で店員に説明をしてくれなければ、2人掛けの席に移ってくれと店員からクレームが来ていたであろう。

決して人は多くなく、別に2人が4人掛けの席に座っていても客入りに弊害は生じさせなかっただろうが、もっぱらモラルと『店員にとって2人席の方が片付けが楽』という些細な理由である。

ともかくドイツ代表候補生の2人は、比較的入口に近い席で、お互いにコーヒこーひーを飲みながら、ヴェスペ・フンケを待っていた。

「一応、4時待ち合わせなのだろう？ まだだぞ」

「あれ、腕時計がずれてたかな」

日本から持ってきていた安物のデジタル時計を海月が確認すると、既に4時を5分ほど経過していた。

しかしラウラが携帯電話で時間を確認すると、そちらはまだ3時5分を少し過ぎた程度である。

「時差を調整するときに見た時計がずれていたのではないか？」

「うーん、インタビューに来た記者さんの時計で合わせたんだけどなあ」

「記者にわざわざ見せると言ったのか？」

「まさか！ メモ書いてる間に勝手に見て変えたんだよ。うーん、5分前行動じゃなくて10分前行動、ってことか？」

スケジュール調整が重要な記者の時計であれば時刻に間違いはないと思っていたのだが、どうやら違ったらしい。

「とりあえず、時間がまだなら仕方ない。待ってよう」

そして、それから10分後のことである。

「まだかな？」

店の入口に目を向けながら、再び海月が呟いた。

今度は予定時間から5分ほど経過しているので、先程ラウラが指摘した時間認識のズレという線も、今回は当てはまらない。

「……………ホテルの場所が分からないのではないのか？ 何にせよ、まだ5分だ。一般人からすれば、この程度の時間の前後はありうるだろう」

一般人の時間感覚など勿論知らない、というか軍属なのである程度時間に厳しい（とは言えやはり成長期の少女であるためか、臨海学校のような失態も犯すことには犯すのだが）ラウラは、とりあえず

納得のいく理由としてそれを挙げた。

「名前はちゃんと載せたんだから、ホテルで検索をかければ場所ぐらいすぐ出てくるんじゃないかなあ」

言いながら、海月はラウラに携帯を借りる。発信履歴で、ホテルの名前を間違えて書いていないか確認するためだ。
ミスはなかった。

「しかし渋滞だなんだで遅れる可能性ぐらい、なくはない　自信はないが」

即否定された時に返す言葉がすぐには思い浮かばなかったので、ラウラは口が塞がっていることをアピールするようにコーヒーを一気に飲む。

幸いなことに、海月からラウラへの反論は特になかった。

「急に決めたことだし、あっちもスケジュール調整で苦労してるのかもしれないからなあ。少しくらい遅れても、気にしないでおくか」
そして、ラウラに合わせるように海月もコーヒーをぐいと飲んだ。

更に、25分が経過した。

「まさか、事故とかに会ってないよね？」

本来、既に年上の女性が座っているであろう席を見つめながら、少し早口に海月が呟いた。

5分までは説明がついたが、流石に30分の遅刻となると多少は心

配してしまつ。しかも、それが心待ちにしている内容であれば尚更である。

遊園地で、自分の乗りたかつたアトラクションが乗り込む直前に点検を始めた時の子供のような、そんな不安が海月を襲つ。

「……あちらも心待ちにしていたのだらうから、そういう予想外の出来事に対応するため細心の注意ぐらい払っているだらう」

「じゃあ、何でこんなに遅れてるんだ？」

「勤め先がフレックスタイム制でも導入しているのではないか？」

「成程！ 話す時間さえ確保できるならば前後30分ぐらいは予定を変えられるつてそれは流石にないだろ！」

2人でたわいもない会話をし、待ちぼうけから来る不満から目をそむける。

そして、遅れて到着するであろうヴェスぺに必要以上の責任を感じさせないよう、飲み干してしまった2杯目の飲み物ジュースを店員に下げてもらつた。

そして、午後5時。

未だに、ヴェスぺは到着していなかった。

「遅れるなら、連絡ぐらいしてくれよな……」

流石にここまでになると、不安よりも先に文句である。

1時間もあれば、軽食とデザートを注文しても問題なく完食できる。ラウラと2人で、飲み物だけを頼んで待つ必要はなかったのだ。

いくら年上といえど、遅れすぎだった。

「しかもメールを送信してみても返信ないし。こんなことならイダさんに電話番号の方も聞いておくべきだった」

「イダ少尉の連絡先ならあるが、そちらに確認してみるか？」

ラウラが尋ねる、そちらの口調も少し疲れたものになっていた。

「出来るならお願いするよ」

「分かった」

そして、ラウラが携帯を取り出す。
同時。

ちょうど コンマ以下すらぴったりだったのではないか、と思えるほど、そのタイミングはぴったりだった 折りたたみの携帯を開いた時に、携帯に着信音が響く。
メールではなく、電話だった。

「誰から？」

「イダ少尉からだな」

そして「ちょうどいい」と言いながら受信ボタンを押そうとしたラウラだったが、そこで「む？」と呟いて押すのを止めた。

「どうしたの？」

「いや、実は個人間秘匿通話が入った。クラリツサからだ。すまな

いが、イダ少尉との話を任せてもいいか？」

了解、と一言答えて、海月が受信ボタンを押しながら携帯を受け取る。

「もしもし？」

『もしもし、その声は戸鉄海月さんですか？』

「はい、そうですけど」

『それならば話は早い。ええっと、海月さん、もう妹と会う約束はされていますか？』

「してまずけど、待ち合わせ時間を過ぎても来ないんです」

電話越しに、小さな溜息が海月の耳に入る。そして、次のヴェスペの言葉は、海月を混乱させるには十分すぎた。

『実はですね　うちの妹は今、ドイツ軍の方で拘束されています』

どういうことか飲み込めない海月は、力のこもっていない声で「は？」と返す。

『犯人だったんです。織斑一夏さん以下数名がドイツに来国するという情報を、一般企業に横流しした』

「なんだと!？」

声を出したのは、海月ではなくラウラだった。

クラリツサとの秘匿通話を行っているラウラは、本来ならば声を出す必要はない。それでも叫んだということは、それほど予想外である何かをクラリツサから聞いた、ということに他ならない。そして、タイミングから考えると、おそらくラウラが聞いている内容は海月とほとんど同じであろう。

「それで、拘束されたのは、大体何時ごろなんですか？」

『およそ1時間少し前、だそうです』

1時間少し前。

自分たちが待ち始めていた時間に、ぴつたりだ。海月は即座に理解した。ああ、だから来れなかったのか。

『話は、それだけです。非通知設定にはしていないので、他に連絡があつたら履歴からお願ひします』

最後にそれだけ言って、イダからの電話は終わった。少しの虚無感と、空になったグラスを、残して。

79 延長滞在カフェテリア 3 (前書き)

投稿していないように見せかけて、じーっはっ！ 更新されているっ！ みたいな)

7kbの繰り返し返していくとオリジナルの部分で1000を突破しちゃいそうなので、書いたものうちのほうを順次纏めながら書くことに。

更新日時は変わらずに文章は新しいものが、という形の読者に優しくない形式なんです、トップページがやたら縦長になったらそれはそれで見にくいためこういう形にさせていただきました。

翌朝。

昨夕に予想を大きく裏切られる出来事があつたゆえ、多少気落ちこそしていたが、海月の目覚めはそこまで悪いものではなかつた。

最近は一夏と同室になつた 自身に保護対象として十分な価値を見出されたため が、その前には女子うたねと同室であつたため、同じ部屋で女性が2人も寝ていようが、特にどぎまぎしてしまうことはなかつた。

だがしかし、悪くないのは目覚めだけである。

……むにむに。

「ん？」

ベッドの中に、異物が存在している。

異物、というほど肌触りは悪くなかつたが、少なくとも昨晚布団に入る前には存在していなかつたものだ。

……むにむに。

「……………」

自分のつついているそれについて、いくつか理解した。
ひじ。

つつくと、なにやら聞き覚えのある と、いうより、毎日のように聞いている 女性の声が、微かに聞こえてくるといふこと。

ひとつ。

昨晚3人で割り振ったベッドのうち、ちょうど中央のベッドがペタンコ、というか誰も入っていないであろうということ。ひとつ。

つついた物体をまだ見ていないが、どうやら質感が人肌のやわらかさと温度に、非常に近いということ。

そして海月は思い出した。

ラウラが夜中に部屋に侵入してこないのは千冬を恐れるがゆえであつて、特に教師が厳しくない場合は　　きつと、夜中でも部屋に侵入してきたであろうということ。

更に言つてしまえば、多分、こういう状況で寝ているラウラは眼帯以外、産まれたままの姿であろう、という彼女の性格も。

部屋に備え付けてあつた時計を確認する。

朝の5時半ごろ。少なくとも、国外旅行慣れしていない一夏と篤は未だ寝ている時間帯であろう。

布団を下手に動かさないように、そろそろとベッドから這い出る。冷静に努めているつもりだが、あくまで表面上の話だ。心臓のほうは、高速で脈打ち始めていることぐらい簡単に分かる。

不意に、布団がぐいと引つ張られた。

海月が慌てて目を閉じ、ぴたりと身体を止める。いわゆる、狸寝入りのポーズである。

しかしラウラの起き抜けの音が聞こえることはなかった。どうやら単純に寝返りで布団を巻き込まれただけらしい。

条件反射的に閉じてしまった瞳を、海月はゆっくりと開く。

ラウラは布団で身体をすっぽり包み込み、顔だけを布団から出している状態だった。顔以外も表に出ているのならば目に毒だったかも

しれないが、とりあえずは助かったらしい。

着替えを持って、洗面所の方へ行く。他の2人は寝ているが、着替え途中に起きる可能性も0ではない。そして、そのまま洗面所で顔を洗って歯を磨く。

とりあえず、何もしないのは暇だ。

伝言を書いて、カフェテリアへと海月は足を運んだ。昨日散々待ちぼうけをした、あのカフェテリアへ。

寝起きのラウラは、少し暑苦しかった。

昨夜、同室の2人が眠ったことを確認した後、こっそりと海月のベッドに潜り込んだ。そして、抱きついて寝た。

思えば多少オーバーなアプローチだったかもしれないが、しかしその程度で海月が怒らないことも知っている。

目覚めて、自身が抱きついていたのは、掛け布団の山だった。

がばつと思いきり起き上がると、隣に人間は存在しない。いつの間にかスルリと抜け出されていたらしいことに、彼女は驚愕を覚えた。寝ている最中であろうと、辺りで気配がすれば目を覚ます。一応、自分はそういう風に訓練されていたはずだ。

それなのに気づかなかつたということは、彼の気配を消す術は達人域まで達しているということだ。と、彼女はそう結論付けたのだ。海月の気配を敏感に「これは味方である」と察知して起きなかつただけで、実際の海月が達人域の気配霧散能力を取得した、だなんてことは決していない。のだが、彼女にそんなことはわかるはずもない。

むしろ、彼がどきまぎしていたことも、彼女にとっては知るすべもない貴重な情報だった。

とりあえず、ラウラは布団を放り捨てて服を着る。IS学園の制服ではなく、今日は軍服。

代表候補生としての報告は、時間を詰めて本日1日の間に全て行われる。今の間に軍服を着て、それから軍人だと分かりにくいように上から服を羽織れば、外見もあまり問題は無い。

季節が夏であるために、暑苦しくはあったが。

そして洗面所へ向かおうとして、扉に挟んであるメモに気がついた。扉を開きメモを手取る。そもそも昨晩以降出かけていないため、メモは泊まっている誰かの書いたものだ。

『下のカフェテリアにいます、心配しないで下さい』と書いてある、その字の筆跡で、ラウラはメモを書いた人物が海月であることを容易に理解した。

現在は、およそ6時ごろ。昨夜に6人で朝食は7時からと決めたため、まだ時間はたっぷりある。

さしあたって彼女は、部屋で唯一眠る真耶を起こすべきか否かに頭を悩ませることにした。

千冬の朝は、非常に早い。

睡眠時間3時間であろうと、コーヒー1杯で機械のように動く。確かに、学園ではそれが崇めて大量のデスクワークを強いられている。しかも、生活がズボラでも肌は綺麗とあって、少しばかり真耶に涙目になられたこともある。

そんな彼女の起床時間は、昨晚最も遅くまで起きて仕事をこなしていたというのに、海月とほぼ同時刻だった。

ふむ、と一言呟き、ベッドから降りる。流石は師弟というべきだろうか、布団の乱れ具合はラウラと同じく酷いものだった。

隣の2人はまだ寝ている。すぐにたたき起こそうとしないのは、彼女にしては珍しい心遣いだった。

身支度を高速で終わらせると、そこで「もう一度眠っても、特に支障はなかったのではないだろうか」という考えが彼女の頭によぎる。実際、教官時代と違い、今回は客人なのだ。

情眠を貪る自分は似合わないな、と頭の中で二度寝を否定しつつ（実際は、再び寝巻きに着替えることが憂鬱だったという感情もあったが）、折角観光まで含めているのなら客人らしくしてみるかと、ホテル下のカフェテリアに出ることにした。

そして部屋を出たところで 丁度、隣の部屋から出てきた海月と遭遇した。

「あ、織斑先生。おはようございます」

「戸鉄か、早いな。どこに行くんだ？」

「カフェテリアですけど」

「なら、私も同行しよう。ちょうど、行こうと思っていた所だ」

そうして、2人は同時にカフェテリアへ行くこととなった。

「昨日の話は聞かせてもらったぞ、災難だったな」

「いえ、どうせ昨日の時点では特にすることありませんでしたし。それより織斑先生、何時間寝たんですか？」

「……」 ばつの悪そうな顔で黙った後、彼女が告げた時間は「4時

間」だった。

「身体、壊しちゃいますよ?」

一夏が相手であれば心配はするなと言いつ返せたのだが、どうも海月が相手では彼女は言い返すことができなかった。

その一夏が目覚めたのは、朝食の15分前だった。

しっかりと睡眠をとるのは悪いことではないのだが、少々遅い。ベッドから出ると、既に同室で寝ていた2人はどちらもない。慌てて、彼は私服を身に纏う。遅刻前のテンポアップには慣れているらしく、5分もすれば支度は終了した。

朝食は1階のレストランで。昨日のことを思い出しながら、約束していた場所へと向かう。

夏休みの時期で、客の数はそこそが多い。しかし、折角の旅行でたつぷり寝坊をしない客は少なく、まだレストランの席は所々空いていた。

そのためもあり、自分の約束していた一行が着いているテーブルも、すぐに発見する。

「お待た……せ?」

一夏は、そこで疑問に思うことがあった。

何故だろう。6人席の隣の4人席に、自分の見知った3人が、着席しているのだ。

「なあ、千冬姉」

「何だ」

「セシリア達、何でここにいるんだ？」

「本人達に聞け」

千冬の隣に座る海月が、思わず苦笑した。

セシリア・オルコットの朝は、それほど快適でもなかった。そこそこ高級なホテルであったため、ベッドが不快だったわけでもない。空調もしっかり効いていた。

寝相が極端に悪く、ベッドから転げ落ちただとか、そういった淑女らしからぬ行動をしてしまったということも特にない。

問題は、同室に泊まることとなった自分の友人　鳳鈴音とシャルロット・デュノアにあった。

元々、セシリアはタフというわけではない。急遽旅行を決め、予定外に友人もついて来た。その疲労感で、昨晚セシリアは、チェックイン後あつという間にベッドに潜り込んだ。予定であれば、今日は8時ごろまでぐっすりと眠っている予定、予定だったのだ。

6時半ごろ。彼女は、突如として目を覚ました。

まだまどろみの中という状況で、何故目覚めてしまったのか。最大の理由は、近くでやたらめったら大きな物音が聞こえたからだ。

まだ疲れが取れていないように感じる身体を浮かせ、彼女は起き上がった。

そして、物音の聞こえた隣のベッドを見る。

原因は、主に鈴音だった。

別に彼女の寝相が酷いだなどという噂を聞いた記憶はなかったが、惨状はあまりにも酷かった。自分がベッドから落ちるだけではなく、シャルロットの布団をわしづかんで思いつきり引っ張っていたのだ。

きつとシャルロットは抵抗したのであろう。だからこそ、

布団ごとベッドから落っこちて、鈴と頭をぶつけ合うという、この状況は完成した。

「アイタタタ……あ、シャルロット？」

「もう、酷いよ鈴。何故か肌寒いと思ったら、ずっと引っ張ってたなんて」

「いやーごめんね、まさか自分がベッドから転げ落ちてるとは、考えてなかったわ」

頭をさすりながら、2人は起き上がる。そして、すぐに隣のセシリアを見やった。

「なんだ、今日はゆっくり寝るって言ったのに、もう起きてるじゃない」

「今の音で目覚めたんですわ！」

セシリアは憤るも、ここから二度寝をしてしまったら最悪今日一日を無駄にしかねないことぐらひは、ちゃんと理解していた。

結局、予定より1時間半も早い時間に、彼女達は行動を開始することになったのである。

「さて、起きちゃったものは仕方ないとして、どうしよう？　せっかくだから予定を早めて、7時には朝食を済ませて観光にでも行くか？」

「そうね、予定を早めてどうなるってことはないし、それでいいんじゃない？　セシリアも、もう寝るつもりはないみたいだし」

「ですわね。朝早い方が観光地も空いているでしょうし、そうしましょ」

予定が決まれば、彼女達の動きは早い。てきぱきと準備を整え、6時45分には食事をとろうと部屋を出た。

そして、およそ5分後。レストランで食事をとる彼女達3人を海月が発見することとなる。

「というわけで、わたくしたちもこの機会にドイツの観光などしてみようと思いましたが」

なるほど、と一夏は納得した。

確かに、自分の知り合いが揃って滞在する国。それにセシリアからしてみればイグニツション・プラン参加国のひとつであるし、興味が湧いたとしてもおかしいことは何一つない。

勿論、ドイツ観光は口実で、実際の彼女達の目的は一夏であるわけだが、唐変木プラス朴念仁の一夏はそれえに気付いていない。他の全員気付いていることに気付かぬ一夏を筈が睨みつけるが、しかしその視線にも一夏は気付かなかった。

「しかし、偶然同じホテルに泊まることになるなんて、珍しいな」

「それ以前に、そもそも一夏たちは軍の所持する施設に泊まるって言うてなかったっけ？」

一夏が海月とラウラのほうを見つめる。勝手に話していい内容ではないということぐらいは、しっかり認識していたらしい。
とは言え、その視線でセシリア達はますます疑念を膨らませる。

「別に言っても問題ない、かな？」

「ふむ……まあ、この3人ならば問題ないだろう」

「分かった」

了解を得て、一夏が3人に細かく説明を始めた。

80 分岐点フランクフルト 1 (前書き)

「次話」としては久々の投稿になりますね。

79話のほうで説明してはいますが、話数を極端に伸ばさないために、順々に結合しながら投稿する形を採っています。

もしかしたら、見逃している話があるやもしれないので、あしからず。

詳しい説明は活動報告、79話、それと感想への返信で行っています。

それと、ですが、1話のほうから少しずつ、文章を通常の小説と同じスタイルに変更していつてます。

最新話まで変更が追い付いたらそれ以降はずっと通常スタイルとする予定です、ご了承ください。

80 分岐点フランクフルト 1

「さて、それじゃあこっからは別行動だな」

ホテル玄関口で、総勢9人は2つのグループに分かれる。

片方は海月とラウラ、即ちドイツ代表候補生組。こちらはこれより『シユヴァルツェ・ハーゼ隊』のいる基地へ向かい、代表候補生としての活動報告をすることになっている。

それと同時にラウラは隊への顔出しもする必要があるうえ、予想外な事件の発生に連動して活動可能時間も短くなっているため、今日一日は当初の予定以上にハードなスケジュールをこなす必要があるだろう。

もう片方は残りの7人。一夏、箒、セシリア、鈴音、シャルロットとその同伴と護衛を兼ねた千冬、真耶。

こちらは当初の目的通り観光を主としている。「本当は9月に来たかったのだがな」 即ち、ビールでも飲みたい、と千冬が朝海月に零しているので、千冬はもしかしたら夜中には酔いが回って出来上がっているかもしれない。

最も、一応とはいえ仕事で来ている以上、酔い潰れるほど飲みはしないであろうが。

セシリア一行は一夏についていく形となった。そもそも一夏を追い掛けてドイツまでやって来たのだし、今のところドイツ軍と積極的に関わる必要性も特にはない。

本人たちからしてみれば、探す手間をすっ飛ばして一夏と共に行動できるのだから、願ったり叶ったりだろう。

かくして、今はどちらのグループも車を　一夏達はタクシーを、
海月達は軍からの出迎えを　待っているのだが

「そっちは皆、大変そうだな」

海月が声を漏らす。はっきりと言ったのではなく「声を漏らす」が正しいのは、海月が吹き出しそうになるのを堪えているためだ。

対して一夏は、何やら気恥ずかしそうにしている。これでいつもの姿でIS学園にいたのであれば、いつの間にか盗撮された上で高額取引がされるのだろうか、2つの要因から現時点でその可能性は0に等しい。

一つ目は、勿論ここがIS学園ではないためであるが、もう片方は

「なあ、この変装っていうのは、どうにかならないのか？」

彼の見た目が、平常と比べて違いすぎているためだ。

今の一夏の姿。まず、身長はシークレットシューズで3センチほど上がっている。目にはサングラス（残念ながら、それほどマッチしていない）、髪は薄く茶色で染めてある（こちらも、似合っているか似合っていないかと聞かれれば8割は似合っていないと答える）。一夏の私服のセンスは決して悪くはないのだが、いつもと余りに掛け離れた姿であるために、どうしても不自然に映ってしまう。

「だって、他の皆はともかく一夏は、なあ」

「俺がどうしたって言うんだ？」

「いや、何でもない。おかしいなあ、決して素材は悪くないはずな

んだけれど……」

どこがツボに嵌まったのだろうか、「一般人の雰囲気醸し出す人間の変装」をした一夏その人こそが、今のところ海月が笑い出しそうになっている原因だった。

ちなみにだが、女性陣一行は帽子やサングラスが非常によく似合っている。下手をすればお忍びの映画俳優たちと勘違いされてもおかしくない華やかな雰囲気醸し出していた。

それはそれで、むしろ隠れられていないのではないかという疑問も出たのだが、とりあえず変装という目的自体は達成しているので問題ないだろう。

元々洒落っ気の強い鈴音や自然体で小洒落た恰好の似合うセシリアだけならばともかく、ラフな変装など似合わないと思われた筈でさえ、一夏と比べれば違和感は殆どないのだ。即ち、一夏に今の姿がどれほど似合っていないかを簡潔に示している。

こちらがここまで早くに出発するとは思っていなかったのだろう、記者団やマスコミがホテル前にいなかったことに、一夏は内心非常に救われていた。

「あ、ホラ、車来たよ」

シャルロットがロータリーの入口側を指差す。入ってきたのは、日本のタクシーを見慣れている人間たちからすれば、少し違った雰囲気を持つタクシーだった。

「日本と違って、ここでは個人タクシーばかりだぞ」

首を傾げていた千冬以外の日本人たちに、ラウラが教える。

「へえ、そうなんだ」

「ちなみにだが、街中でタクシーに乗ろうとするなら専用の乗り場へ行かないと駄目だぞ。それが電話で呼び付けるかだ。電話番号など知らないだろうから、基本は乗り場だな」

「普通に、街中を走っているタクシーを捕まえちゃ駄目なのか？」

一夏が尋ねると、今度は千冬が首を左右に振りながら答えた。

「それはここでは通用しない、というかそもそも停めること自体が問題行動だからな。……それと、ISが開発された影響と元々観光客が多いから日本語を話せる人間は多いが、勿論タクシー運転手の全てにそれを求めるのは筋違いということぐらい覚えておくんだぞ」

「大丈夫、そこはちゃんと分かってるよ。それにしても、国が違うとこんな所でも違いが出てくるんだな、やっぱり」

話していると、続けて車が2台、最初のものと同合わせて3台停まる。中から軍人が出てこないところを見ると、どうやら3台ともタクシーで間違いないようだ。

「それじゃ、気をつけて。財布はしっかり管理しろよ、特に一夏と篤さん」

「何故そこで私なのだ!？」

文句を垂れながら篤、以下7人は次々タクシーへ乗り込んで行く。数十秒後、ホテル玄関口にいるのはラウラと海月のみになった。

何か話そうと海月は話題を考えるが、真っ先に出てくるのは当然のように予定の話ばかりである。

勿論、それらの話は昨日の間に終わっていたため、話に詰まってしまった。

「　　そういえば」

口を開いたのは、ラウラだ。

ちょうど内容が見つからず悩んでいた海月は、渡りに船だと言わんばかりに即答する。

「何？」

「いや、昨日残念なことがあったから、気落ちしてはいないかと思っ
つてな」

「大丈夫、気落ちしてないわけじゃないけど、やたら引きずるような性格もしてないから」

「そうか、それならよかったが　　む、到着したらしいぞ」

ロータリーに、昨日乗ったものと同じ灰色の車が到着した。
中から出てきたのは、これまた昨日と同じイダだ。

「お待たせしました、昨日はすいません」

うなだれた様子のイダの、第一声はそれだった。

すいません、とは多分、昨日確保されたために約束を潰したヴェス
ペについてだろう。

「いえ、悪いのはイダさんじゃないですし、気にしてませんよ」

「そう仰っていただけると、ありがたいです。さて、行きましようか。海月さんは、場所は把握していますか？」

「はい、昨日ラウラと確認を取っています」

そうして軽く会話をして、3人は車に乗り込んでゆく。

よく見れば、周囲にも数台の車が停車していた。しかも、昨日前後にあった車と同じものらしい。

海月がドイツ軍の監視の徹底ぶりに驚くとほぼ同時に、車は基地に向けて出発した。

80 分岐点フランクフルト 1 (後書き)

そして、2つほど報告。

まず1つ目ですが、ツイッターを始めました。前々からアカウントは持っていました。それとは別に@kizinn|henzinnで取っています。

2つ目ですが、活動報告の方で「書きなぐられた一夏」を掲載中。プロットすら適当な書きなぐりなので掲載する気はありませんが、興味があったら見てバシバシ批判してください(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3683v/>

IS～インフィニット・ストラトス～ -くらげんdays-

2011年12月9日01時48分発行